

奇譚クラブ

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka, Japan

11



1972



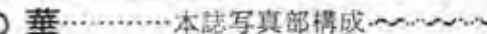
新しい風俗文献誌

雑誌 2805-11

11月号 ¥400

1972
11

カメラ・ハント楽我記……辻村隆
 女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三



柔肌に喰い込む麻縄	前田真知子
首縄横臥二態	前田真知子
典型的後手縛り	前田真知子
自由な肢のもたえ	前田真知子
麻縄と裸肌の明暗	前田真知子
厳しい縄目を味う	前田真知子
準備態勢OK	前田真知子
股間縛りの表情	前田真知子

・本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ゲニ
蒼打ちの態勢	関谷富佐子
浣腸の痛苦	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
湯をくびたに喘ぐ	左中河恵子
強欲つわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の窮り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
責めの心境	中河恵子
打我的末の悦虚	関谷富佐子
痛打の心の悦虚	座間明子
沖縄美人の緊縛	佐々木真弓
刺玉子の縛り	川路義子
狂変する雑女	川路義子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ゲニ
海老責の狂態	川路義子
ポリウムに挑戦	座間明子
鞭打の下に	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの略し	川路義子
処女縛りの完了	三浦純子
処女縛りとまどろ	中河恵子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
監視するSMの目	佐々木真弓

·編集部構成

[illegible]

これから、どうするの？	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛が悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エロの縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間明子
ポリウムを縛る	中河恵子
浮上した女体	金原奈加子
麗しの背面	佐々木真弓
高手小手本縛り	川路義子
責めの陶酔境	関谷富佐子
失神したマゾ女	関谷富佐子
上手縛り悶死	中河恵子
柱の彼方の天国	三浦純子
荒縄の海老責	梨田真知子
美と縛の女神	梨花悠紀子
はずれた狼檻	長井葉津子
可憐な置物	佐々木真弓
ながし目の天使	川路義子
妖蛇の肴になる	関谷富佐子
酒蛇の洗礼	前田真知子
奔弄されるままに	川路義子
海老縛りの妙味	長井葉津子
柱につながられた女	シラ・グー
痛さをこらえる異国	園谷富佐子
責の果の諦観	前田真知子
痛打の一瞬	佐々木真弓
ホステス裸人生	

女性モデル募集

選外佳作作品	佳作優秀作品	選作品第五席	選作品第四席	選作品第三席	選作品第二席	選作品第一席
五	一	二	三	五	十	十
千	萬	萬	萬	萬	萬	萬
円	円	円	円	円	円	円
10篇	15篇	10篇	5篇	3篇	1篇	1篇

勇敢な女性の出現を望む

[illegible]

一、入選決定作品は編集部にて慎重銓衡の上、
 に入選決定しましたものは速かに筆者に通知致
 します。入選作品に對しましては掲載の如何
 に拘らず、折り返しに賞金を贈呈致します。
 一、入選作品の著作権は当社に移行することを前
 以て御承知お願ひします。
 一、応募作品は、たとへば未発表の作品でも他社へ
 投稿済み作品を引用する部分があります。作品の中
 に他人の著作、書名などを明記して下さい。
 一、出処不明の作品は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用
 紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて
 三十枚以上、三百枚以下とします。
 一、きは一応事前にご照会願ひします。
 一、だけは、早切日は毎月十五日、入選作品は出来る
 だけ早く誌上に掲載致します。
 一、区別するため第一頁に一般の原稿、読者原稿と
 いふ連絡先ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所
 者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは
 絶対に致しません。原稿は原則として返戻は致
 しません。故、若しご入用でしたらコピーを
 一、とつて原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書
 箱第41号、晚出版株式會社編集部宛、必ず郵便
 送、第一号、郵便便にて下さい。直接の訪
 問並に持込みは固くお断り致します。

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国頼、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下さいれば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まない方がありましたら、その旨添記して下さいますようお願い。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はブレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下さいれば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
曙出版株式会社編集部宛

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
 晓出版株式会社編集部宛

〔塚本鉄三・撮影〕

光と影の陰翳

前田真知子



奇

譚

ク

ラ

ブ



十一月号目次

△昭和四十七年△

△第二十六卷△第十一号△通刊第二九七号△

本

文

- 写真「縄は女体を美しくする」△大塚啓子△道端 健一……(21)
- 性的発育障碍者の弁『告白的A感覚論』……佐渡 黄門……(22)
- ゴムの部「ゴムマニア」の告白文に寄せて……弾 六夫……(30)
- 屋の構想「のぞきと蝶ネクタイ異聞」……仁賀保 弘……(35)
- 体験記「のぞきと蝶ネクタイ異聞」……仁賀保 弘……(35)
- 自称マゾヒストの告白
- 『軟体動物』△鰐夫の海△……大島 嘉夫……(38)
- 告白『清閑寺みちの独り歩き』……前田真知子……(50)
- 単行本紹介「サド・マゾチズム」読後感……横 浜太郎……(62)
- 連載・時代S小説『紫蘭の門』⁽¹⁵⁾……風流極道軒……(66)
- 告白『愛と倒錯の記録』……早坂 郁子……(84)
- 告白「優雅な浣腸生活」……竹迫 誠也……(91)
- 三部作『不毛の愛』△青い空の涯に悲劇が△久留木 栄……(94)
- コレクションの推め「東西妊婦フォト考」……大原 茂……(108)
- 連載小説『大噴火』△第五十回△……千葉 青鬼……(110)
- 感想・論評・批判「ふるーい奇ク」……花田 一郎……(118)
- 文献渉獵「女相撲書誌雑考」(下)……雄松比良彦……(124)
- 告白 女性の尻にしか
れた男の……ささやかなMの体験……岩本 弘……(134)
- 那津子哀悼「淡月梨花のうた」……城 章夫……(142)

光と影の陰翳 (二葉)	前田真知子
猿ぐつわと縄 (二葉)	笠井奈保子
苦痛と羞恥の表情 (二葉)	
海女を縛る (四葉)	絹川 文代
裸になった海女 (四葉)	
プレイの序曲と終末 (二葉)	深田 菊子
開股責めへの道程 (二葉)	鈴木千鶴子
浣腸責めの幻想 (二葉)	富田由美子
稚妻妊婦と縛り (二葉)	江口 淑子
「責め」のワンカット (二葉)	長井葉津子
浣腸プレイのあと (二葉)	荒尾 慶子
剃毛プレイに羞らう (二葉)	大塚 啓子
縛られた表情種々相 (四葉)	福井 桃子
責場への途 (三葉)	

愛の海の渚にて	瞳 耀太郎
『花の潮騒』	
オレの失敗	三輪えつじ
愛しの夫に捧げて	大野 玲子
『玩具妻続唱』	
イメージ画「釣れた!」	小川 茂正
風流深田菊子責め夢譚	佐渡 黄門
編集子への書簡	乃美 対造
『再度の想いをこめて』	
『奇ク』こそ恋人	海老名一郎
奇ク九月号漫談	増益 栄喜
喜多知子さんを斬る	責苦与之助
△短信往来△	
小杉千恵様へ「プレイ懇望」	松本 一彦
井上則子様へ「暁の星」	泉 一郎

△SM夫婦通信△	
夫婦交換「プレイの提唱」	加治 進
△SM女通信△	
10月号を手にして	高村 浩子
ホーム・ポルノ	中村 洋
被虐歌「牝イヌ・メリー」	北川まりこ
サロン楽我記△第一〇一回△	辻村 隆
前田真知子さんを讃える	小池 明男
読後感「奇ク10月号展望」	久保 省太
妻にやさしいご指導を!	村井志摩雄
△夫婦プレイ通信△	
太郎のプレイフォト	阪東 太郎
SM雑誌ブームを懸念する	竹迫 誠也
編集部だより	編集部
鈴木千鶴子嬢と羞恥責	武田 幸夫
助手を募る (鈴木千鶴子を責めるために)	塚本 鉄三



連載・S大河小説『パロディ・花と蛇』(11)	山光 純
『カメラ』と『ペン』のルポルタージュ	
『筐底のネガに見たM女の生態』	塚本 鉄三
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」	鬼山 絢策
SMカメラ・ハント△鬼頭達世の巻△	
『浣腸志願』	辻村 隆
読者通信	編集部選
イメージギャラリー	
橋「春川ナミオ」(48)	「マイ・ベビードール」室井亜砂路(27)
待「春川ナミオ」(40)	「ホントにおいしい?」岡たかし(44)
備「須坂旭」(74)	「海底プレイの客」飯田ひろく(79)
志「須坂旭」(98)	「戦利品多数あり」岡たかし(103)
川「ナミオ」(138)	「星空のもとで」室井亜砂路(158)
(160)	「新妻の驚愕」岡たかし(158)
	「虹妖二」(163)
	「M度試験」春川ナミオ(200)
左近麻里子	

猿ぐつわと縄

△笠井奈保子▽





苦痛と羞恥の表情

＜笠井奈保子＞



海女を縛る



△絹川文代△





裸になった海女



△絹川文代△



プレイの序曲と終末

△深田菊子▽





開股責への道程

〈深田菊子〉



浣腸責めの幻想



△鈴木千鶴子▽

稚妻妊婦と縛り

△富田由美子▽



「責め」のワンカット

△江口淑子▽





浣腸プレイのあと

△長井葉津子▽

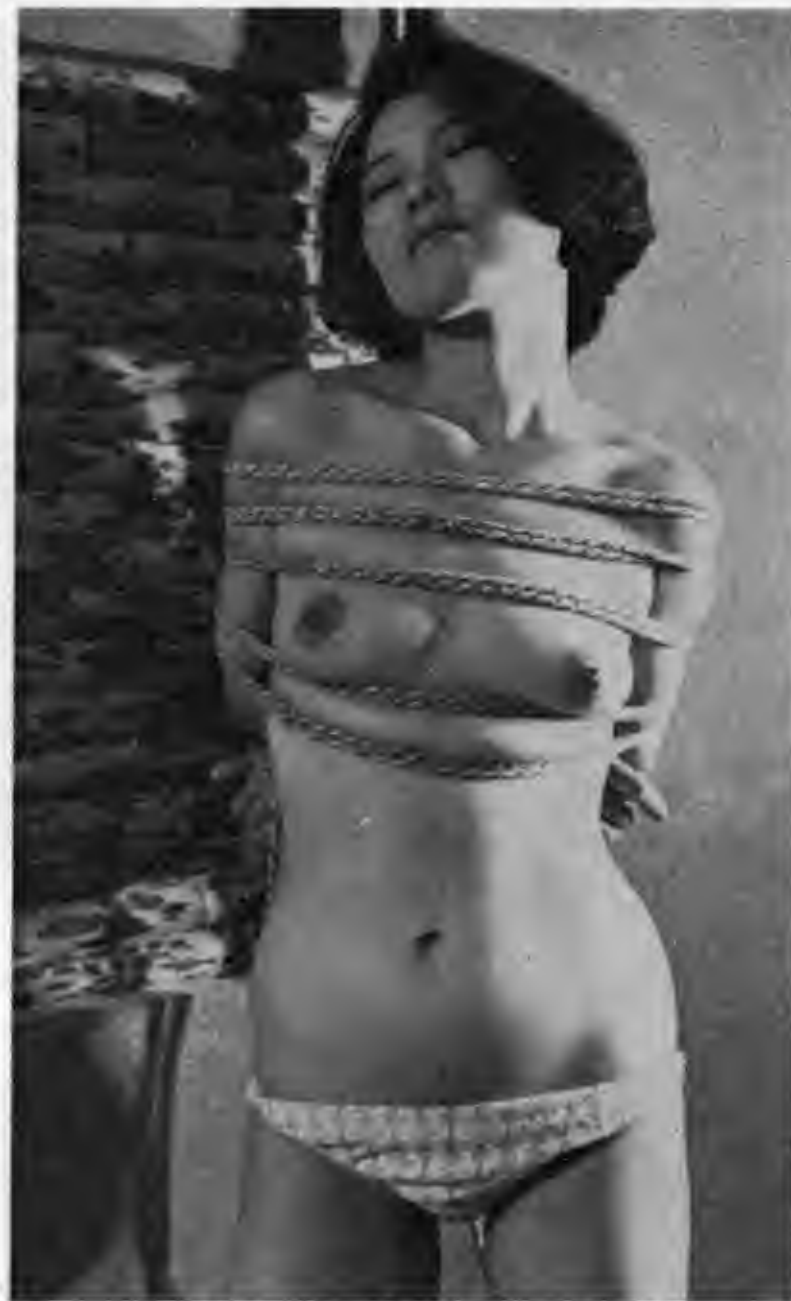


剃毛プレイに羞らう

〈荒尾慶子〉



縛られた表情種々相



大塚啓子





責場への途

＜福井桃子＞



奇

譚

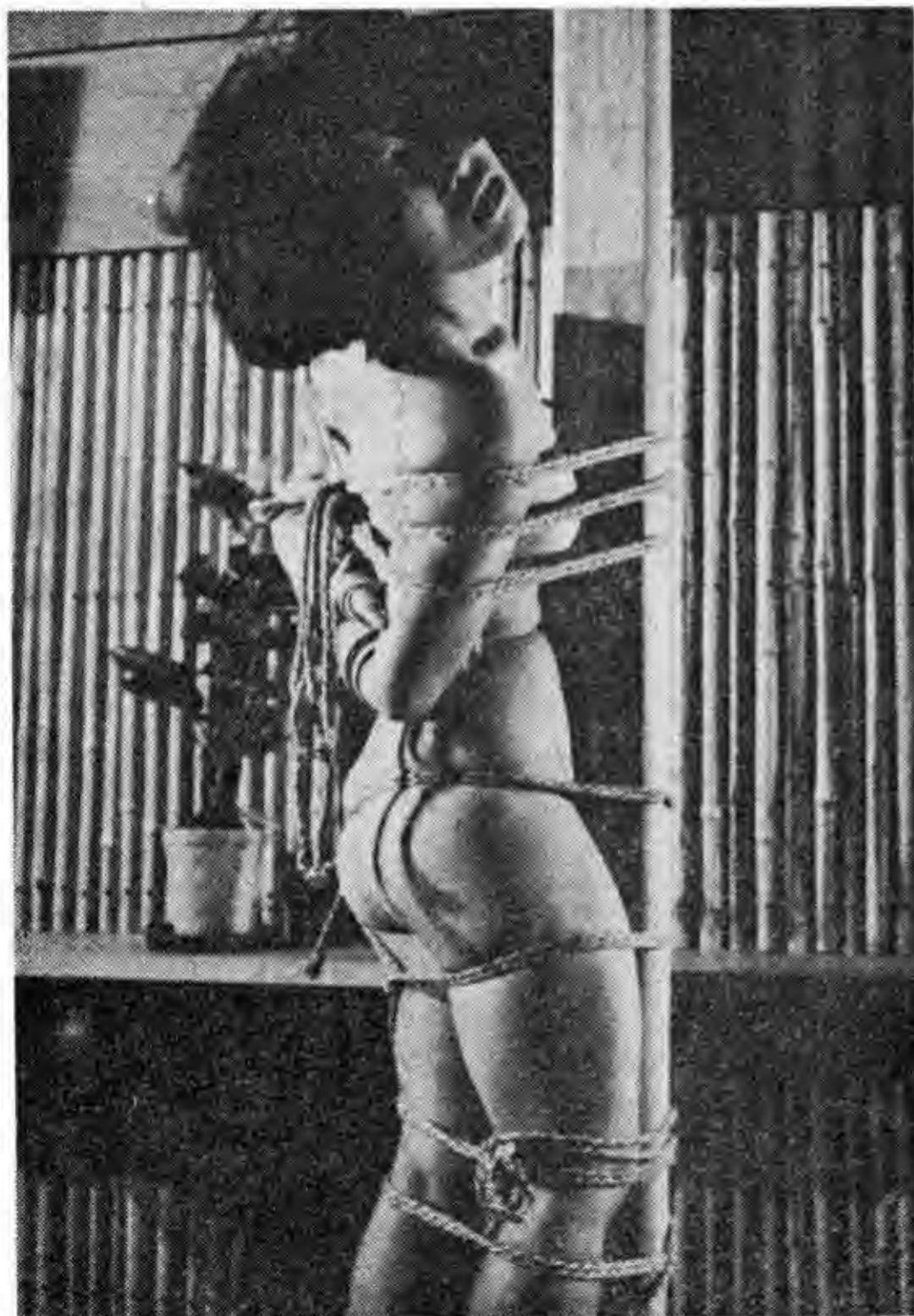
ク

ラ

ブ

1972年11月号

<第26巻第11号・通刊第297号>



縄は女体を美しくする

—— モデル……大塚啓子……

女性の裸体は、それ自体、芸術的な美しさを持っているものであるが、その美しい裸身に対して、△縄▽という小道具が介在して女体の自由を奪ってしまうと、そこに妖しい魅力がにじみ出てきて、一層美しさを増して

くるものである。女性は縛ってこそ、その本当の美しさを発揮するものではないかと、私は考えるのであるが、これは、いささか、我田引水であるかもしれない。

(道端 健一・記)

カット・黒田 縛



菊座、若氣、後座華、裏門、尻の穴、アヌス——という風に、肛門にも、いろいろな呼び名がある。

こうして挙げてみると、それぞれに独特の味わいがあるが、私は幼い時から、この人間の消化器官につながる末端部——あの女性の体の中でも、最も魅力的な臀部の奥深くに密かに息づく小さな翳りに対して、一種郷愁じみた愛着をいだきつづけてきたことを、ここに告白する。

それと共に、私なりに自分のこのような性的倒錯に対する自己分析を試みつつ、今後の

性的發育障礙者の弁

告白的A感覚論

佐 渡 黄 門

私自身の生きる方向性といったものを模索し獲得してゆく足がかりとしたいと思う。

学校の△校門▽と聞けば、すぐに△肛門▽を連想し、テレビでおなじみの水戸黄門さんは、もちろん水戸の肛門さんになる——というように、コウモンという発音を聞かされるたびに一瞬、ドキッとする感覚が、全身を、さながら電気のごとく通り抜けていくという一種肛門アレルギー的性癖を持つ。

それはしかし、あながち異常であるとは言えないと思う。所詮、正常——異常の判定規準といったものは、非常に曖昧模糊としたも

のでしかあり得ないし、結局のところ、程度の問題でしかないという観点から見れば、あらゆる倒錯現象は、あらゆる人間の心の中に可能性として、程度の差こそあれ、存在し得るということになる。

私はしかし、ここで性的倒錯の一般論を述べるつもりは毛頭なく、あくまでも、自分の幼時からの性癖について、体験的告白をまじえて自己分析をしてゆきたいと思うのみである。それは多分に主観的、一人よがりのなものになるだろうけれども、できる限り自分に對して正直でありたいと思っている。

私の身体の中に、肛門に対する関心が芽生えたのは、おそらく幼稚園に入る前の、たしか五つぐらいの時であったと思われる。

俗に、この時期はフロイトによって肛門期と名づけられ、この時期には、肛門に対して非常な関心を持ち、その他の時期に比して、もっとも肛門色情が敏感であって、無意識のうちに肛門オナニーにふけったりする——ということらしいが、私自身も、その頃、近所の幼な友達の女の子と、「お尻ゴッコ」などと称した遊びをした経験を持っている。

小学校入学前、その一つ年下の女の子が、関東の方へ引っ越してゆくまで、私たち二人は、よく、その「お尻ゴッコ」という遊びをやったものである。今から思えば、よく、あんな大胆な行為が出来たものだと思われるのだが、その他にも、いろいろと恥かしい行為を平気でしていたように思う。

その年頃の子供は、性的に未熟な段階にあるゆえ、それに伴うべき性的羞恥心といったものも、大人に比して希薄なのは当然のことであるが、それにしても、ずいぶん思いついた、心のわくわくする秘密めいた快楽に満ちた儀式ではあった。

——うつ伏せに寝かせた女の子のパンティを

下ろして、お尻をむき出しにし、その可憐な小さな双球の谷間に息づく菊花に、ビー玉をうずめたり、割箸を挿入したり……。

又ある時、こんなことがあった。

あれは確か、その女の子の一家が父親の転勤で関東方面へ引っ越していく一カ月ほど前のことであつたと思う。

私は母と共に銭湯へ行ったのだが、その女の子（裕子と言った）も母につれられて、きていて、私たちは無邪気に浅い湯舟の中で遊んでいた。

その時、私の手には、昆虫採集の標本作りに用いる注射器が握られていて、私は針を抜き取って水鉄砲がわりにして裕子めがけてピュッピュッと湯を飛ばして上機嫌であつた。

母親同士が世間話に夢中になっている間、私は裕子に、お尻ゴッコのことを持ち出し、彼女の「ウン」という承諾を得た。幸い風呂の客は私たち母子四人の他は二、三人しか、いなかったもので、私は裕子を人目につきにくい湯舟のかげに身を伏せさせ、いきなり、その注射器を、お尻の穴に挿入したのだ。

丁度、浣腸器と同じようにピストンを押し、数回それをくり返して、かなりの量のお湯を裕子の体内に送り込んだのであった。し

ばらくして母親たちが体を洗い終わり、湯舟につかって、いざ風呂から上がろうとする時突然、裕子が泣き出しそんな顔をして、母親に何かを、ささやき出した。

私は内心、裕子があのかことを言っているのではないかと、ドキドキしていたのだが、裕子の母親が、私たちより先に湯舟から上がりながら、私の母に首をかしげて言った。

「変やわ、この子ったら、急にウンコがしたいだなんて言い出すんやもん。おなかこわしたんと、ちがうやろか？」

まあ、いわゆるお医者さんゴッコというやつで、たいていの人が、淡いノスタルジャーとともに思いおこす、懐かしい記憶である。

やがて裕子一家が引っ越してゆき、私は小学生になった。しかしながら、私のこの肛門に対する興味は、一向に変わりなく、かつてのように肛門色情の対象を得ることが不可能になってからも、今度はその肛門色情が自身を対象とするようになった。

普通、この肛門期（五才から六才頃にかけて）なる時期は、男女の性的な成熟につれて次第に影が薄れてゆく傾向にあり、最終的には、この肛門色情的感覚は、V・P感覚に代表される正常なる性感覚に移行するのが、あ

たりまえなのである。稀には、そのまま残存したり、何らかの原因で再現したりする場合があるものであり、どうやら、私の場合は、完全に残存しているようである。

小学校時代から中学校の二年生頃までの私は、自分のアヌスに対して、一種攻撃的、同時にナルシズム的な肛門色情をいだいていたように思える。小学校の低学年においては私は毎日、トイレへ行くと共に、針金や割箸を持って入るようになり、排泄し終わってから、それを自らの肛門に挿入しては、一種の肛門オナニーにふけていた。

高学年になると、夜、一家の者が寝静まつてから、一人起き出して、スタンドの灯の下に手鏡を立てかけ、それに自分のアヌスを写し出して、自分の股間から窮屈な姿勢のままじっと見とれていたり、留守のおりは、秘密に買っておいたイチジク浣腸を自らのアヌスに施術したりして高ぶる欲情を抑えていた。

先日、亡くなられた日本でも有数の性心理学者、高橋鉄氏によると、このような肛門色情の究極の形態は、男娼であり、性的に未熟で大人になり切れない故に起こるとされ、大人として人生経験も豊かになれば、自然と興味が前の部分に移行すると言われているが、私

はこの見解は一般的に間違っているとは思わなければならない、私個人としては、それだけでは、どうも納得できかねる気持が残るのである。

——と言うのは、中学の二年の冬に、私にとっての一大転換期が、おとずれたことと関係しているのである。

私はその時、ある偶然、私の身に起こったことが原因して、幸か不幸か、男娼にならずにすんだのである。

私は、それまでの肛門オナニー的行為の故にか、痔疾を患ったのである。痔の苦しみを味わって以来、私は自らのアヌスに対する加虐的色情行為を極度に回避する様になった。

そのうち、いつしか私は自分のアヌスに対しては、もはや色情を感じなくなっていたのである。そして、そのかわりに、その色情は他人——特に、美少女の肛門に対する加虐的色情に変じていたのである。

この間、私の心の中に起こった一大変化ドラマは、今でも正確には、その原因がつかみかねるのだが、おそらく、その時、痔疾を患ってから、私の心に自分のアヌスに対する防衛本能が芽生え、その自己防衛の本能が反射的に他者のアヌスに対する攻撃性となったの

であろうと想像される。

そして、この頃から、私は一応、正常なる男性の資格としてのオナニーを覚えるようになった。けれども、そのオナニーに至る衝動内容が、他の正常なる男性とは違って、その衝動のもとなるものは、やはり肛門色情に關するものであったという点で、私の性的成熟は外見上はともかく、内面的には、やはり正常な欲望の枠からは離れていたのである。

その頃、中学二年の終わり頃から大学四年の今日に至るまで、私のマスターベーションにおける空想内容は、常に一貫して、肛門色情が主役であり、V感覚に対する興味は、あまり重要ではなかったのである。

空想の内容には、だいたい次のような一定したパターンがある。

まず美少女が一人、登場する——。

彼女の顔の特長は、まず目がパッチリとし鼻は、やや低いめで、唇は少しばかり厚めで全体的に丸顔でなければならぬ。

背は一五六センチくらいで、お尻は水蜜桃のようにプリツとしていて、やや大きいめでなければならず、どんなに美少女であっても臀部に魅力がない女性には、私にとっては、魅力が殆ど皆無となる。

そのような美少女が、私の前に、ともかく出現することから空想が始まり、私は結局、何とかして彼女を、くどき落として、今なら車でモーターへつれ込むことに成功するわけである。そして、それから、普通なら、私たちは、ごくあたりまえの男と女となって、裸同士で正常なセックスを開始するわけであるが、私の愛撫で、そろそろ受入態勢が整ってきた彼女の様子を見て突然、私の行為は今までは全く違ったものに変貌するのである。

そこで私は、彼女をうつ伏せにし、かくし持っていた縄で、後ろ手に、すばやく縛りあげる。驚いた彼女は、背中に馬乗りになった私をふり払うべく、首や腰、臀部をはげしく揺り動かして必死に抵抗を試みる。

私は容赦なく、彼女の頭を背後から持ち上げて往復ビンタを、くらわせる。息絶えだえになって、なお私に対する激しい非難罵倒の声をあげる可憐な口には、彼女自身の脱ぎ捨てたパンティを押し込んでやる。

ようやく抵抗が弱まると、今度は、足くびを縛り上げ、あまった縄をそのまま、ベッドの端に、つなぎとめる。

そこで私は、空間的、時間的に完全に彼女を支配する権限を有する身となるのである。

そして、それから後の私の行為は、要するにその美しい少女の魅力的なお尻に対して、なされるのである。

やや大きめの双丘の谷間に、ぽっと羞らい気味に可憐に咲いている菊花に対しての加虐行為——。これこそが最初からの私の願望であったことに、彼女が気づくには、もはや時すでに遅し——であるわけである。

その美しい菊花を、ゆっくりと時間をかけて、無残に摘み取るまでの間、私の指は酷なほどに、その蕾を苛め、その菊花の芳しい芳香に染まるのである。

彼女は、もはや殆ど抵抗することもなく、細い糸を引くような長い嗚咽の声を発しながら、私のなすがままに、その豊満な臀部を、まかせきっている。そして、最終的には、私は彼女の可憐な菊花に埋もれて、私自身の男性としての全存在を、一気にぶちまけて果てるのである。

もちろん、その前に、彼女のおなかの中をキレイにするために、その菊花に、イチジクの枝を挿入しなければならないことを、忘れてはならないのであるが……。

以上のような、私のマスターベーションの通りの空想内容は、単純に言えば、好ましく

思う女性に対して、Vではなく、Aを使用してセックスする——いわゆるアナルコイトスが主要な位置を占めるということである。そして、それとともに、アヌスへの加虐行為としての「灌腸」も重要な位置を占めているのである。

ここで私は、この「灌腸」というテーマについて、少しばかり私見を述べたいと思うのであるが、それは必然的に、「アナルコイトス」と密接な関連があるように思われる。

「灌腸」——今では「浣腸」と書き、要するに読んで字の如く、八腸を洗うVという意味であり、肛門から腸に薬を、つぎ込む療法ということである。

英語では「エネマ」フランス語では「ラヴァン」ギリシャ語に語源を発するドイツ語では「クリスチール」。ガラス製シリンダー、ゴム製エネマ器具、イルリガートル、そしてあのほのかな郷愁を呼び起こす、いちじく浣腸。とにかく、官庁、館長、干潮、艦長、間諜——という言葉が、すぐに、「浣腸」に結びつくほど、浣腸に関心を持ち、一種カンチョウアレギーともいうべき症状を呈している私には、この浣腸なるものが、いったい、どのような意味あいを持って、私の性的倒錯

に関連しているかを、考えてみる必要があるのである。

周知のように、十七・八世紀には、この流腸がヨーロッパ全土にわたって、一種の美容健康法として流行し、現在にも、それをモチーフとした絵画（主に石版画）が残っているのであるが、私には、どうも、美容健康法などということでは、すまされない、もっと奥深い理由——つまり多分に性的な意味あいを持っていたように思われる。

ある本で、私の見たその版画の構成は、西欧婦人特有の、あの大きく豊満な臀部を見せ、腹這いになった若い女性が、召使い女によって、なんとも巨大な金属製流腸器の先端を今にも突き立てられようとしている光景であり、その情景を、若い男がドア越しに覗いているといった図柄であった。

また、医者によって、まるで今のイチジク流腸をそのまま数十倍も大きくしたような巨大な流腸器を、自分のアヌスに挿し込まれ、恍惚とした表情——と見てとれる美女の図など。明らかに、そこには、単なる美容法などとは、まったく違った、肛門色情的な要素が多分に認められるのである。

私自身の考えでは、おそらく流腸器とは、

男性ペニスか、あるいは、それに類したものの象徴であろう。そして、それが普通は挿入されるべきでない場所に挿入され、スペルマのかわりに、グリセリン溶液や食塩水が、その奥深く、注入されるということは、何を物語っているのか——。

つまり、ここには、正常なV感覚といったものを拒否し、A感覚、あるいは、それとかわるところの、直腸感覚といったものの方に、より性的な優位性をおく思想があるのでないか。そして十七・八世紀のヨーロッパではこのA感覚なるものが、今よりも、はるかに一般的な意味あいを有し、少なくとも異常視されなかったのではないかと思われる。

A感覚こそは、暁に向かって飛翔する無限の可能性を秘めた、すばらしい感覚であり、V感覚などは、このA感覚から分離したものに過ぎない——ということ、かの有名なタルホ氏（注——稲垣足穂）が言っておられ、そのA感覚の絶対といったことを、力説しておられるが、確かに、A感覚には、永遠性といったものが感じられる。

それはつまり、アヌスにはヴァギナのような生殖の重荷が、つきまとわれないという点から、結局のところ、永遠に未完成であり、不

毛であるが故の可能ということであろうか。

そして、そのアヌスに対する加虐行為、ペニスの代用としての行為である流腸なるものは、正常なるV・P間の行為——完結されるべき生殖行為に対する完全化されざる未完の行為として、私の前にあるのである。

おそらく、私が女性のヴァギナとの交渉にあまり興味を持たないのは、それが、あまりにも完結された行為でありすぎ、それが終わると、一種の死を体験するからではないだろうか。そして、私の中には、なにかしら、生殖行為といったものに対する漠然とした嫌悪感があるように思うのである。

自分と似たものが、この世にわけもなく出現することに対する、一種名状しがたい不快感。これは裏をかえせば、私が自分自身を憎み、破壊本能に動かされていることを意味するだろう。

確かに、私が、女性のアヌスに心ひかれる理由の一つとして、そこは絶対的に安心であるということがあげられる。アヌスを通してスペルマを注入しても、グリセリンを注入しても、同じく、妊娠することは、あり得ないから……。しかしながら、そのような理由よりも、もっと大きな理由があるようである。

それは要するに、私の中に、美しい女性に対する、汚物愛好的性癖があるということに關係していることである。

私には、美しい女性のアヌスに対する加虐

性とともに、その汚れた肛門から、さらに奥深く進んだ所にある排泄物に対する、一種名状しがたい興味があったのである。

そして、私のその美しい女性の排泄物に対



僕のイメージ画集

『マイ・ベビードール』

室井亜砂路

する気持には、相反する二つの傾向があるようである。

その一つは、つまり、こんな美しい、つんとした女の体内にも、こんな汚い臭いものがつまっているのだ——という、嘲笑的、侮蔑的な攻撃破壊傾向であり、いま一つは、この美しい女性の体内から出た排泄物こそは、この女性の存在の原点であり、中心的な意味あいを持つものであり、自分は愛によって、この汚穢感を越え、この彼女の原点を愛さねばならない——といった、これはもはや、れっきとした汚物愛好的傾向である。

そして、この相反する二つの心理が、微妙に混じり合って、女性のアヌスを通してなされる、汚物を出現させる道具としての浣腸に対して、非常な関心——欲望へと、つながってゆくのだろう。

浣腸は、肛門色情への加虐行為だけではなく、汚物愛好的道具としての役割も持っているのである。また、浣腸は、される側にとっては、A感覚を呼びさますだけではなく、直腸を通して液体を注入される感覚といったものも、快感に容易に転化されると思われるしグリセリンを注入され、必死になって便意をこらえているときの感覚も、性的興奮につながる。

がる可能性があるように思う。

まあ、ともかく、今の私にとって、美しい女性の豊かな臀部には、可憐なイチジクか、あるいは、大きな二〇〇CCのガラス製浣腸器の先端をズブリと埋めなければならぬということは、一種悲劇的必然なのである。

以上でもって、浣腸に対する私個人の考察を終え、今度は、それと密接に関連した行為とみられるアナルコイトスについて、少しばかり、私見を述べてみたい。

アナルコイトス、アナルセックス、ペディラスト、肛門性交、肛交、鶏姦、裁尾——といろいろな言い方があるが、俗に言う釜掘り行為は、主として、男性同士の同性愛の時の行為として知られてきたようである。しかし現在においては男女間の間でも、かなり一般的になっているようである。

かの偉大なるサド侯爵の著書の中では、男が女の菊座に対して、しばしば、この行為をする場面が出てくるが、ともかくA感覚とは切っても切れない密接な行為であろう。あらゆる肛門色情的行為の行きつくところは、この肛門性交になると思われるくらいである。

ノーマンメイラーの「彼女の時の時」という小説には、この肛門性交が女性の性的エク

スタシーを導く重要な役割を果たす場面が暗示的に描写されているし、先日、ワイセツ容疑で手入れを受けた、雑誌「面白半分」の新編集長野坂昭如氏が、その雑誌にのせた伝荷風作の「四畳半襖の下張り」には、男が指を女の肛門に挿入することによって、オルガスムスがやってくるという場面が、描かれている。

タルホ的コスモロジーも、このアナルセックスが中核になっていて、彼の作品に出てくる、月なるものは、アヌスの象徴であり、それに向かって鉄砲をうったりする描写があるが、それは明らかに肛門性交の暗喩である。

それでは、この肛門性交への欲望が、私自身の中で、どのような意味あいをもって存続しつづけているのかを、できるかぎり正確に述べてみよう。

先ほど浣腸に対する私見においてもみられたように、この行為は、肛門サディズム的、また糞便愛好的傾向を有する浣腸と、殆ど同質のものであるが、道具ではなく、自らの肉体の一部を使用している行為であるという点で、新たな意味あいを帯びてくるように思われる。

私の中学生来からのオナニーの空想的内容

の最終的なものは、このアナルセックスであり、自分のペニスを好ましい女性のアヌスから直腸の奥深くに侵入させている空想をしながら、エクスタシー、クライマックスに達するというパターンは、だいたい一定しているものであった。その際、女性の直腸奥深くで糞便の塊につき当たるという空想をすると、私の興奮は極度に達するのである。

おそらく、私にとって、好ましい女性の糞便なるものは、どちらかというと、一種、愛のカタルシスとも言えるべき作用によって、糞便愛好にまで高められた、その愛の対象となっているのであろう。

実際、私には、愛する女性の糞便に、じかに触れてみたいという欲望の手段として、肛門性交にひかれているといった場面が、多分にあるようである。

愛する女性の中で、汚い部分といったものは存在しないのである。そして、大便こそは彼女の赤裸々な現存在形態の原点、中心なのである。それに触れることは、彼女の存在にじかにかかわることになるのである。

このごろの性書などには、このアナルセックスも取り上げられ、その体位や、挿入の時のタイミングなどといった、かなり具体的な

ことも書かれているが、結局のところ、ペニスとヴァギナでもって行なう性行為の補助的あるいは代償的行為としての意味をしか与えられていなかったようで、その部分に対する汚穢感などについて言及して、あまり行なわない方がいい、という趣旨がつけ加えてあるのは、私にとっては、はなはだ遺憾でもあり不満でもあるところである。

しかしながら、所詮、この肛門性交なるものが、人間の性行為の主流を占めるようになることは、考えられないことで、もし万一、そんなことになってみれば、大変なことが起こるだろうことは容易に想像がつく。

まず、肛門科の医院が、大繁昌するだろうし、痔の薬の売り上げ高が、急速に伸びあがるであろう。しかしながら、非常によい効果ももたらす可能性が、でてくるのが期待できるかも知れない。つまり、人口が減少するということであるが、まあ、こればかりは、どんな大学者にだって、予測困難なことではあるが。まあ、冗談はともかくとして、私にとって、この肛門性交なるものは、正直に告白すれば、未だに未経験なのであって、残念ながら、想像、空想の域を出ないものなのである。

こんなことを告白してしまえば、なんだ、まだ、未経験の若僧のくせして、よくも、まあ、「告白のA感覚論」などという題をつけただなど、思われることは必至であろうが、未経験なればこそ、あれこれと、思いをめぐらすのが世の常――。

それに、A感覚そのものが、完結性のない茫漠とした、無限の彼方へ飛翔する観念的抽象的概念である故、実際に美女のアヌスに触れたか、どうかは、あまり意味をなさないのであると、一応、いなおりの、弁解的に、この場合は、とりつくろっておきたい。

さて、これまで、随分とりとめのないことを、つらつらと臆面もなく書きつらねて来た感じであるので、ここらあたりで、私自身、私の、このような女性の肛門に対する加虐的性格について、どのように思っているかを、正直に述べ、一応この拙文の結びとしたい。

ほんとうのところ、私は、自分のような性癖について、秘かな羞恥とともに、自分な人間同志における人間的交わりから、完全に疎外された存在であると思いつづけてきたし、また、これからも、そのように思いつづけてゆくだろう。

実際、私のような性癖の人間が、女性との恋愛を成就させるには、大きな困難、障害につきあたることは必至であろうと思われる。

普通、男女間における恋愛は、両者の性器の完全な結合でもって成就されるわけであるが、私のような人間――、女性の直腸、アヌスのみが、恋愛の時間を超越した喜びと安住への入口として残された現存在形態にとっては、もはや、恋愛の成就是、極度に、その可能的範囲を縮小され、不可能に近いものとなっているのである。

しかしながら、私は決してあきらめることはない。なぜなら、所詮、各人は、各々の方法でもって救済されねばならないのだから。

私のような、真性の体質的な性的発育障害者、生来の肛門愛的性格者にとっては、正常な恋愛を経て、まともな結婚生活に入っていくといった人生のパターンを歩んでいくことは、おそらく不可能であろうが、私は私なりに、自分自身の力でもって、自分の人生を生きてゆかねばならないと思っている。

そのためにも、私は、自分のこのような性的倒錯傾向をも、優しく許容し、かつ満足させてくれるような一女性を獲得するための努力を、これからも惜しまないつもりである。



「ゴムマニア」の告白文によせて

告白の部屋の構想

弾

六 夫

KK誌七月号に「猿轡とゴム汚臭責めについて」を発表された青木順一様。

この数カ月、KK誌にゴム記事の掲載がなく、もしかしたら、ゴムマニヤは自分一人になったのではないかとさえ思いつめ孤独感に苛まれていた私にとって、正に旱天の

慈雨の如く、身体の間々にまでゴム記事の活字が吸い込まれる思いで拝読しました。

続いて、八月号には、我々ゴムマニヤの女王的存在である京都の梅川幸子様が「悩ましいゴムマント・プレイ」の手記を発表して下さい、久々に充実したKK誌を入手し、又々ゴムマニヤの活気が復活してきたのを、心から喜んでおります。

梅川幸子様のゴムマントに対する愛着、慈しみ、全く尊敬の他なく、その告白文は、宛ら私の眼前で繰り広げられるが如きゴムプレイの感があり、只々、昂奮、昂奮の連続で、特に心持ち反り気味のキューリ一本を用意して……の件り、ゴムマントがガサガサと前後に揺れているところを見ますと……等々、まさに圧巻です。

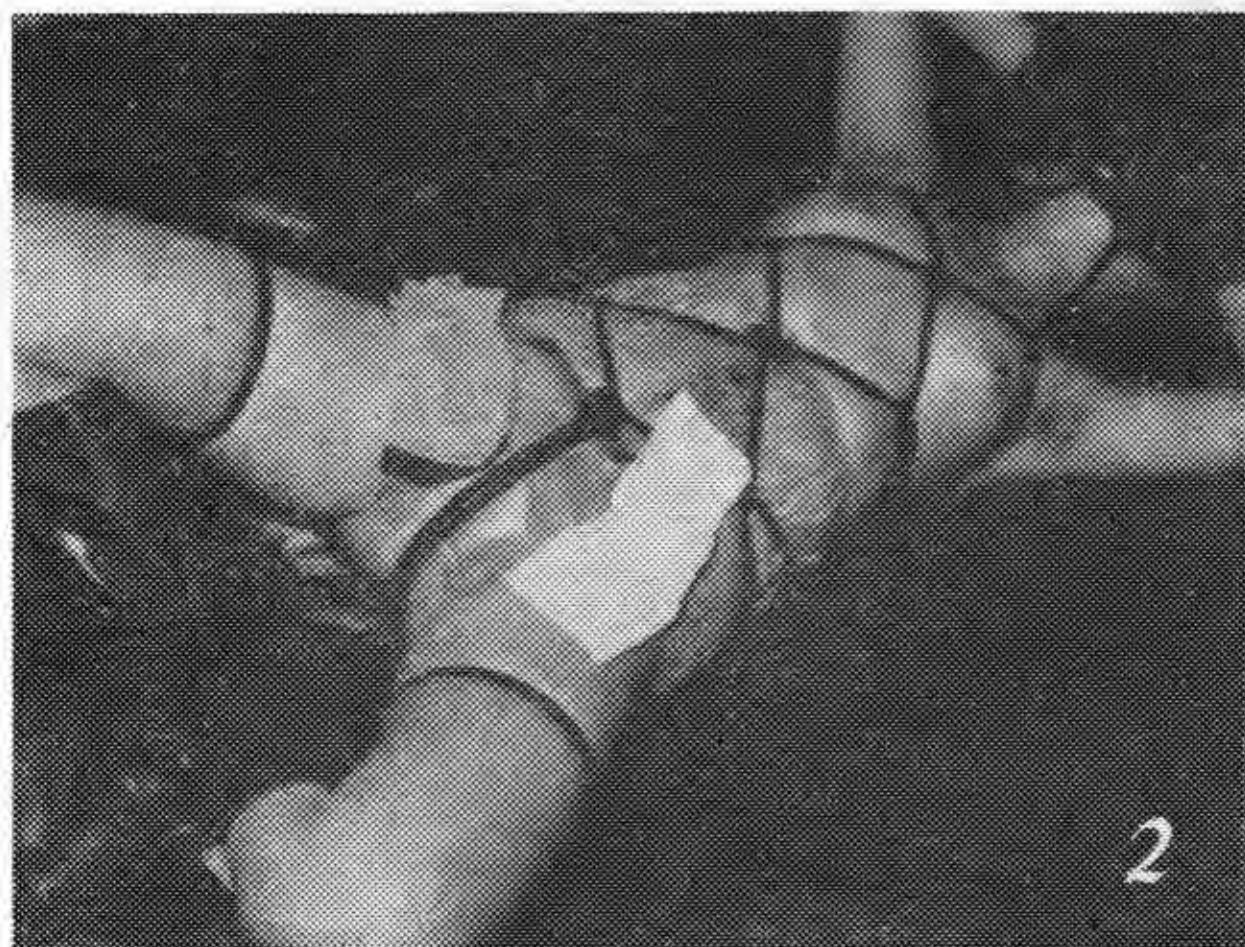
梅川様の優雅なゴムプレイの生活の一端を窺い知る事が出来、羨ましい限りです。只、飯場の土工とのゴムセックスは、梅川様が日頃、描いておられる願望をあらわしたフィクションではないでしょうか。

また、何時頃の読者通信か忘れましたが、「雨の降る晩八時、阪急の西院駅にいらっしやいませんか」という、女性ゴムファンに対しての呼びかけ文を読んだ私は、男性である事に、どれ程、悩んだ事でしょう。

神戸から高速で一時間とかからぬ西院。神戸が雨の時、もしかしたら、今頃、西院の駅で、梅川様のお使いの女性が、ピンクのゴム引きレインコートを着て、出迎えに来ている——と、思うだけで、矢も楯もたまらなくなつた事が幾度あつた事か。全く、憎い方です。

先日、アメリカより取り寄せたカタログにより、ゴムマントを注文し、航空便で送ってもらいましたが、西ドイツ製の黒色総ゴムマントで、男の私が着用しても、足首迄あり、肩にズッシリとくるゴムの量感、素肌にネチネチ当るゴム特有の感触。またウールゴムでもないのに、サラッとしたゴム質、匂いは生ゴムで誠に申し分のないゴムマントでした。

西欧諸国にも、多くのゴムマント・ファンがいる事を知り、大いに参考になりました。何時か機会があれば、是非このゴムマントを梅川様に、お見せしたいと思います。

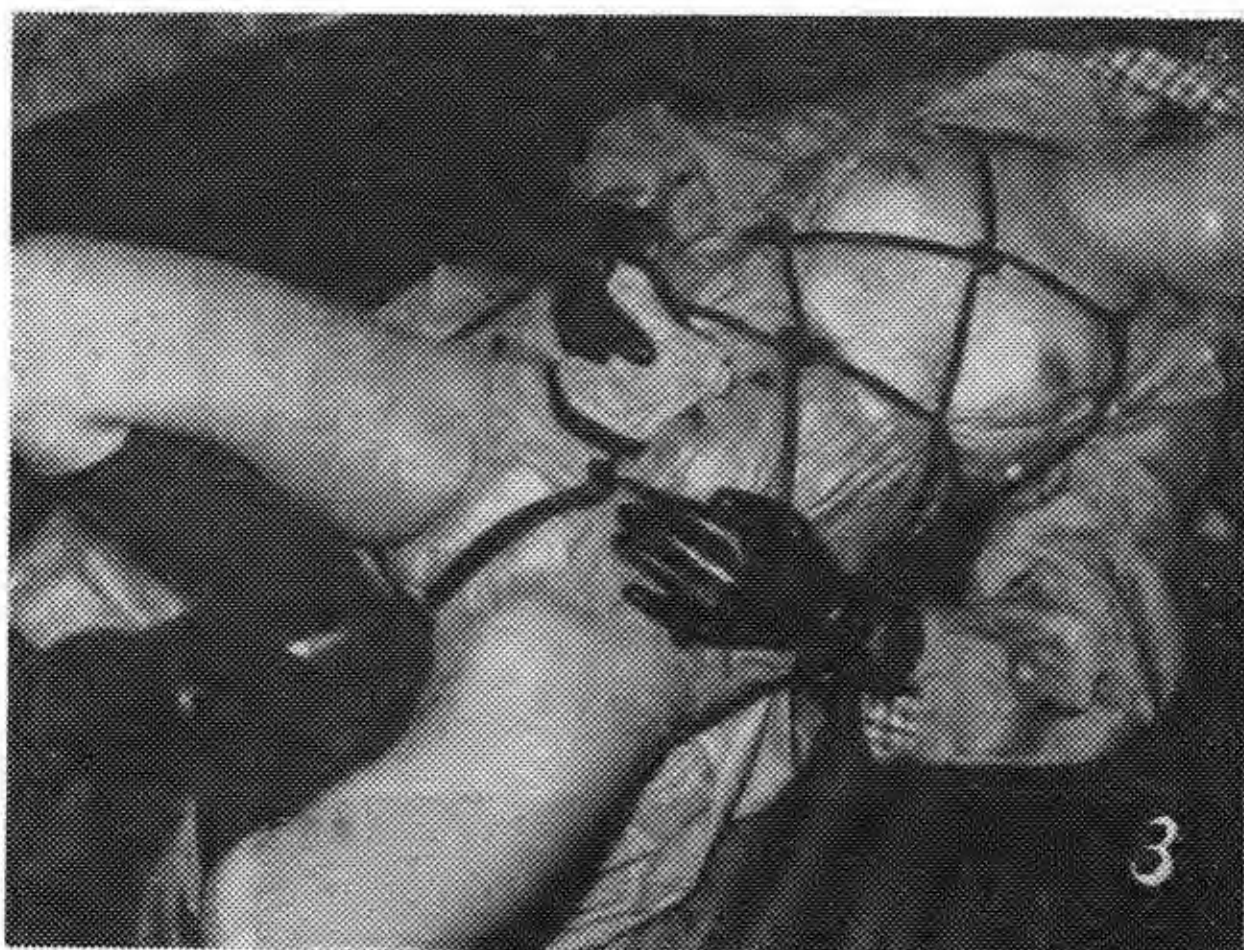


その他、「ゴムを愛撫する」というタイトルの8ミリカラー「ラバーメイト」（ゴムの嬢さん）という写真雑誌。また珊瑚色の総ゴムレインコート（雨の日、キラキラ輝いて

一段と貴女のゴムコートスタイルが目立ちます。というカタログ文に引かれて買い求めたもの）また生ゴムで、アメ色に光るラバーズーツ。

これは、どの様な技術によるものか、接着ではなく、熱処理による仕上げの様に、非常にスマートであり、さすがにゴムマニヤが多数いる外国の事と感心しております。

その他、アメリカ数社のゴム衣カタログの中には、黒色ゴムで全身を覆い空気を入れてその圧力でゴム衣の感触を、味わうゴム全身衣。デザインも可愛い光るゴムを素材にして作ったゴムネグリジエ、黒色ゴム靴下。また責め衣として、上半身を拘束するゴム衣等々、何時迄見ても飽きがきません。



それぞれの説明文を、辞書片手に読んでゆくのも楽しい限りで、これもまた、違う頭のゴムプレイだと思っています。

とに角、大変な刺激を受けた私。

そこで、これだけは是非、皆様に見て頂きたい——との願いで、最近、撮影した私のゴムプレイの写真です。

使用したゴム材料は、次の通りです。

黒色合羽地、ゴムシート。

玉虫色の羽二重ゴム引きレインコート。

アメゴムのアンネ兼用、オシメカバー。

ピンクのゴムサポーター。

真紅のゴムブーツ。(梅川幸子様より教えて頂き、急ぎ買い求めました)

自家製アンネ用、替ゴム。

長さ十米、直径八ミリの黒色ゴム管。

以上です。

さて、いよいよ、ゴムプレイについてですが、今回使用したモデルは、年令二十二才。色白で中肉中背、十人並みの容貌、スタイルのOLですが、別にゴムについて関心を持っているわけでもなく、SMに関しても、一切知識を持っておりません。

只、私の言う通りに、素直に動いていたというに過ぎません。いわば、私は彼女の肉体を借りてゴムの魅力を発揮したかったに過ぎません。従って、ゴムプレイを彼女に施すのも始めてですし、縄を掛けるのも始めてでした。カメラは、カラーのボラロイドカメラを使用しました。

先ず、『ゴムの匂い責め』と、『素肌にゴムを、じかに纏うゴムプレイ』から開始しました。(1)の写真——丁度、風呂から上がったところをつかまえて、フード付きの玉虫色のレインコートを羽織らせてみました。

「はてった身体に冷たいゴムが気持ちいい」

と、言わせたゴムプレイの出だしは上々のようでした。お湯であたたまった肌に、ゴムの冷やっとした感触が心地よかったのでしよう。真紅のゴムブーツをはかせ、ピンクのゴムサポーターをつけさせました。勿論、下に敷いたのは、黒色の合羽地のゴムシートで、ゴムの材料を総動員して、まとわせました。顔を掩っているのは、アメゴムのオシメカバーです。

この艶々しいゴムの質感と量感。初めての撮影としては、上手に出来たと自信をつけ、次のゴムプレイへと移って行きました。

何しろ、不慣れなポラロイドカメラ。一枚写しては一分待ち、サッと剥がす時の息づまるような緊張感。なにしろ、大変な神経の使いようでした。

次に、「顔は写さないで——」という彼女の願い通り、黒色ゴム手袋で自分の顔を覆い、その上から、ゴム管縛り。アンネ兼用のゴムオシメカバー着用の上、菱型縛りです。

何時もと違う特殊なムードのせいか、急にアンネになり、あわてましたが、丁度、着用させる為、出しておいた生ゴムアンネカバーで手当てをしての撮影が(2)の写真です。自家製替ゴムを、あしらってみました。

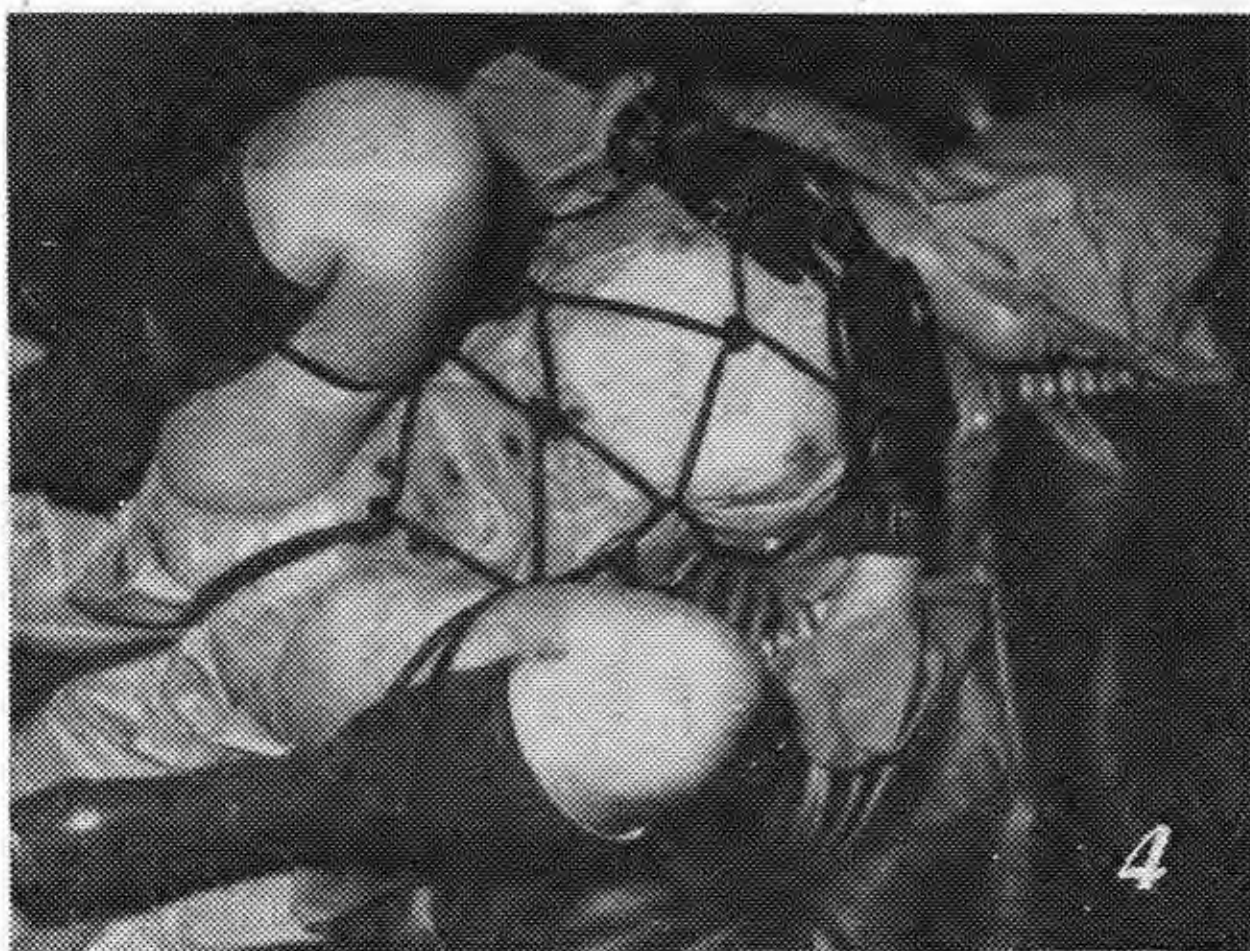
今度は、玉虫色羽二重ゴム引きレインコートを着せて、同じく菱型緊縛、股間縛りにしてみました。真白い若々しい肌に、じかにびったり喰い込む生ゴムの感触は、見ている私に、たまらない昂奮を呼び起こしました。

この頃から、室内の熱気と、お互いに昂奮している処からゴムの匂いが充満し、汗が額から、したりたり落ちて、カメラのファインダーも曇りがちでした。

(3)の写真——ゴム管縛りは意外と、むつかしく、余り強くゴム管を引き伸ばして縛りますと、ゴム特有の弾力で肌を絞めつけて苦し

く、また緩く縛りますと、全然、緊縛感がなく、快感どころか、むしろ不快な様子です。

(4)の写真は、(3)と同じ趣向ですが、股間縛りを強調するため、ブーツをはいた太股、脚



にもゴム管で縛りました。両股を思いきり開いた膝頭、太股の白さが、私の目に強く飛び込んできました。黒手袋と赤ブーツのコントラスト、それに真白い肌が、美しい対照を見せています。シミ一つない、きれいな肌の持主の女性だけに、このゴムプレイも、極めて楽しいものでした。

「私はゴムを纏ってゴム管緊縛を愛します」という気持を表現したつもりですが、如何でしょうか。容貌も色白で案外、可愛いOLなので、顔面も出せたら素晴らしいかなのですが、彼女はどうしてもイヤだということで、残念でしたがフールドで、かくしました。

丁度、アンネになった事を思い出して、ゴムブーツをアンネ替りにして見ては、と、思いつき、ゴムブーツを股間に当てて、ゴム管でガッチリと縛り上げ、後はゴム管を、滅多やたらと身体に巻きつけゴム引きレインコートを着せ、後手縛りにしたものが、写真(5)です。



触が、ガッチリと股間を押えた時は、何ともいえない恍惚境を味わったという事です。

今回、私が使ったモデルは、今迄、縛りの経験は全くなく、ましてや、ゴムを纏っての写真撮影等は全然なく、只、私の言いなりに動いていただけですので、撮影後その感想を聴いてみました。

「私はゴムは余り好きではなかったの。第一、匂いがくさいし肌にはベトベトまといついて気持ち悪いわ。私は以前、一時流行した羽二重ゴム引きレインコートを着ていた時あったけれど、夏の暑い日など、ムレて、くさくてベトベトしてイヤだったわ」

「今度のゴムプレイは、どうだった？」

「それが、おかしいのよ。丁度、お風呂上がりだったせいもあるかもしれないけれど、ゴムが当たった所だけになにか、ヒヤッとして、私の肌にゴムが馴染んで、吸いつくみたい。その上、ゴム管が私の身体をヒシヒシと縛りつけて、なんとな

く、身体がガッチリと固まった感じは、一寸口では言えないわ。あの、ブーツを股の間に当てられた時は、もう、メチャメチャにして——と、心の中で叫んでいたのよ」

やっぱり、彼女も昂奮していたのです。

「今度は、ホテルの一室か、モーターでムードを変えて、ゆっくり写真を撮ろう」

そう約束して、第一回のゴムプレイの撮影行は終わりました。

現在の私は、△ゴムの部屋▽を作りたいと思っています。壁に色とりどりのゴム布を張り、床はゴムのスポンジ張り。ゴムのエヤーマットの寝台。壁には自家製、内外国製のゴム下着、ゴムウェア等を掛け、その時の気分で、それらを身につけ、また相手にも着せかけ、日常の生活をしてみたいと思います。

梅川幸子様のように、誰憚かる事なく、ゴム下着やゴム衣を着けてみたいです。

いつか、必ず、こうした△ゴムの部屋▽を完成してゴムファンの皆様に開放したいと考えております。

梅川幸子様、貴女の△ゴムの館▽への道は遠いのでしょうか。

ゴムマニアの方々の投稿を鶴首して、お待ちしております。



< 体 験 記 >

のぞきと 蝶ネクタイ異聞

ひろし 弘
ほ 保
が 賀
に 仁

俺は今年で四十四才になる。

人生は長い様で短く、おそい様で早いものである。俺には、マゾやサド等という気のきいた趣味は持ち合わせていない。

ただ、強いていえば、ノゾキには異常な程の興味を持っている。——だが、こんな秋田の田舎では、ろくなノゾキの好材料なんてある筈がない——。

それで、必然的に、俺は四十代という働き盛りでありながら、此の頃はトント、アノ方の元気がないのである。

殊に守衛と云う職業柄、夜行性的な習慣になつてしまい、一般の人の様に、——夜楽しむ——というわけに行かない。だからといって、農家ばかりという寒村に居ては、真昼間からセックスを楽しむという事は、とても出来る相談ではない。

妻というものが居りながら、ソノ方は、いつも、すれ違いといった有様である。だから大体は自慰でガマンしなければならぬ。四十の坂を越して妻子もありながら、自慰に耽るというのは、余りカッコよいことではないが、これも仕方がない。

奇譚クラブを通じて様々の知識を得、色々と人生勉強をさせてもらったが、これは中々すばらしい事だと思っている。それで、俺も自分の事を書いてみたいと考え、この文章を投書する気になったのである。

俺は三十五の年に、事情があつて、フラリ

と暫く家を出た事がある。今でいう蒸発というヤツであるが、その時の俺は、別にそんな大それた考えが、あつてやった事ではない。

ただ、なんとなく、こんな田舎に居るのがつくづく嫌になり、ここ以外だったら、どんな所でも、ここに居るよりは、マシだろう。

いや、きつと素晴らしい人生が待っている、と、そんな氣持が、なんとなくして、フラリと家を出てしまったのだ。

妻を捨て、子を捨てて、旅から旅へと、文字通りアテもない渡り鳥の生活であつた。

長野を皮切りに、東京——千葉——北海道——静岡——と、あてどもなく、波に浮かぶ浮草の生活であつた。その罰か、今も妻や子供には頭が上がりぬのが真実である。

今になって願つてみると、ずい分と無駄な事をしたものだと思うが、若気の至りというヤツで、今更どうしようもない。

その放浪生活で体験した面白い話が沢山あるが、その中の一つを書いてみよう。

その当時、東京の墨田区の石原町という所に、御谷湯みこくゆという大衆浴場があつた。

いつもの調子で公園の芝生に寝ころんで、捨ててあつた新聞をひろげて見て、その広告欄に出ていたのが「男求む」というヤツである。文房具店で買った用紙に、その場で簡単な履歴書というモンを書いて持参し、即決で

入ったのが、この風呂屋さんだった。

幸いに主人夫婦が福島県出身ときて居り、三人居た女中も皆、同県人だった。

俺は秋田だが、東京に居れば東北人のよしみで、同県人並みに取り扱ってくれた。

その頃の風呂屋の設備といったら、今と違って至ってお粗末だった。石炭とか重油とかいった高カロリー燃料は、とても高嶺の花で燃料といっても、薪もいい方で、主に木ビキと呼ぶ製材所で木を切った時に出来る木の粉が主な燃料だった。

それを各浴場主が、自分の地域に顔をきかせて、二軒か三軒の製材所と契約を結び、我々使用人が毎日、運びに行くのである。ダンブなんて気のきいたものは使わせて貰えないから、一回毎にスコップではねて、木杵を組んだ馬鹿デカイ杵の中に一杯になるまで、積み込まねばならない。

これが又、大変な重労働で、一日に三回も往復すると、いい加減くたくたになって、喋る事も、おっくうになって来たものだ。当時の俺は三十を少し出たばかりだったから、まあ何とかやって居た。

そんな重労働の割に給料も安かったし、勤務時間も住込みだったせいもあって、極めて長時間だった。こんな難儀をするんだったら土工現場の方が、まだ楽で、しかもお金になった。

だが、この風呂屋稼業には、他の仕事にはない余ロクがあった。それは申すまでもなく女のハダカをフンダンに拝む事が出来るという事だった。アレがなかったら、誰があんな所に居るものか——と思うのは、あながち俺だけではあるまい。

仕事キツくて、給料が安い。そのかわりノゾキの余ロクがある。だから、非常に人の出入りが激しかった。その点では、東北の人間には向いた仕事かも知れない。根気よく辛抱する者が多かった。

俺の様な新入りの仕事といったら主に燃料運搬が多かった。日中は先ず、殆どいつてよかった。たまに人員に欠員があった時など、炊き方に回った。

俺は、この炊き方に憧れて居た。薪を燃やしながら、ノゾキは自由だったからだ。

だが、自分でやってみて、この炊き方という役も中々大変な仕事だと気づいた。炊き始めの火加減、いや火加減というより、薪の配置、カギの使い方、(カギというのは、火を平均に万遍なく燃やすための、ならし棒)それに、閉店近くなつての留め湯の炊き方など中々どうして、むずかしいものだ。一人前の炊き方になるのは、やはり最低三年ぐらひはかかるのだそうだ。

その点、俺なんか、風呂屋になる気持なんか、てんでないから、只、火をつけて燃やし

ているのが精一杯で、その日その日を楽しく無事に過ごしていれば、それで満足だった。

明日は明日の風が吹く。また気が向けば、別の仕事に移ってもよいのだ。即ち、本当に腰掛けのつもりだった。だから、お客さんから、熱くて入れない——とか、ぬるくて風邪をひく——と、ブザーが鳴って、たまりかねた主人や女中が、注意しにきても、その時だけで、後はノゾキに専念していたものだ。

炊き口からのノゾキは、自分の背位の高さにある直径5センチ程の丸いガラス窓があるのを利用するのである。正に、俺にとっては仕事よりも、この方が大切である。勿論、この窓は男湯の方にもあるが、野郎の方は全然用無しである。誰が風呂を炊いても使用するのは、女湯だけだ。

一日に何十人となく現われる女のハダカ。女高生から老人まで——。いろとりどりの白い肌、浅黒い肌、青白い肌、しまった肌、たるんだ肌。男を知らぬオボコ娘、豊満な未亡人、熟れきった人妻、あだっばい芸者、ぬめぬめした肌の二号さん、太鼓腹の妊婦など、女といっても十人十色だ。

これが、また面白い。見られているとも知らずに派手にひろげた太股のツケ根のタワシの様な黒い茂み。やっとうブ毛の生えた小高い丘の小娘。浴槽で平泳ぎする女。立った女の海草の様に水面になびく春草……。などな

ど毎日が楽しくて、しょうがない。

うしろに主人や女中が来た事も気付かないで、ノゾキに熱中していて、あとでバツの悪い悪い事。だが、これも余ロクの一つとあれば、俺も男の端くれ、仕方がない。男冥利につきるの一言。この時だけは楽しくて、たまらないのだ。

やがて、このノゾキの楽しみも、おひらきになる留湯。そのあとでお茶。そして、浴槽の掃除。これが、また大変な重労働だ。

こんな毎日を暮して居るうちに、流石の俺も身体が、もてなくなってきた。女の裸体を眺めて喜び、そして興奮し、毎日毎夜の様にハダカと黒い茂みを連想して自慰する。長時間勤務と睡眠不足で、くたくたというのに、毎晩のノゾキと来ては、本当に、たまったものではなかった。いくら丈夫な身体を誇った俺でも、顎を出したくなかった。

こんな時、ひょっこり入社して来たのが、千葉県生まれの新チャン事、山本新一という若者だった。俺なんかと違って、見るからにハンサムで、Gパンが、ぴったりと良く似合うスタイルも、顔に似て素晴しかった。

何か話す時、キラキラと光る金の義歯が何とも美しいと、男の俺が思った位だから、三人の女中の憧れの的になるのも、そう長い時間は、かからなかった。

仕事の方は一向に、はかどらず、要領がい

いの一点張りだったが、それでも、心から憎めない男だった。悪気ない男だった。

この新チャンが来て六日目の晩だった。

留湯のあと、最後の掃除を終わり、それぞれ自分の部屋に戻った。就寝前の事だ。新チャンが、寝仕度をしながら変な事を言った。「お前等、蝶ネクタイって知ってるか？」

みんな（みんなといっても男は四人だが）が人を小馬鹿にしていると思った。俺自身も、そう思った。いくら田舎者の俺だって蝶ネクタイ位知らなくて、どうする——と思った。

でも、それが、普通の襟元につける蝶ネクタイではなかったのだ。いわば、例の——女性を喜ばす道具としての品物であった。おわかりかな？

つまり、男性のシンボルの先端の下側に位置するウスイ皮の線に、焼火箸の様なもので穴を開けておき、その穴に馬の毛を一〇センチ位の長さで絵書きに用いる小筆先位の太さにして結びつけるのである。出来た品物の形が、丁度『蝶ネクタイ』の格好になるので、そう呼ばれるのだそうだ。

この装置をしてから女に接すると、如何なる不感症の女も、畳に爪を立てて泣き叫ぶというのだから、その霊頭もあらたかである。

始めは、ウソかホラと思って聞いていた俺たちも、やがて、新チャンがシンボルに取りつけた見事な『蝶ネクタイ』を見せてくれる

に及んで、暫し、呆然と見とれたものだ。

世の中には、頭のいいヤツも居るものだ。ホトホト感心したものである。

この新チャンは秋子、時子、広子という三人の福島生まれの女中を毎晩の様に交互に自分の部屋に引き入れていた事を後で知った。

やがて女中同志の恋の鞘当てから、いさかいが絶えず、好青年新チャンも、一月ばかりで姿を消したのは惜しかったと思う。

馬の毛は水、又は湯に入れるとシャッキリとして、その感触はヒゲの濃い男性とキスをした数多くの女性の体験が物語る所である。

ノゾキ専門の俺なんか、半年近くも居ながら、三人の女中の手を握った事もないのに、プレイボーイの新チャンは住み込み三日目にもう女中を部屋へ連れ込んだという事だ。蝶ネクタイの事といい、やはり、それだけの努力は、してるんだなあ——と感じ入った。

あれから、かれこれ十年。十年一昔というが、今の俺は、あの頃と比べて実行力のなさをかこっている。

毎晩、毎晩、セックスの事を念頭に置きながら、何等対策もなく、日に日に衰退の一途を辿るシンボルに、一抹の不安と焦りを覚えていた。

十代、二十代、そして三十代のあの馬力を再現出来たらと思う。

——（おわり）——

カット・岡 たちし



△1▽

年甲斐もなく、といわれてもしかたないことだが、私は、このところマキという少女に身も魂も奪われてしまっているような毎日を送っている。

私はほどなく五十才を迎える年輩だが、マキは自称十八才。水商売勤めの関係で年令を偽っていることも考えられるので、ほんとうは、それ以下かも知れない。いい年をしたオヤジと、身元素性のあやしい少女。さすがに

気がとがめることも多いのである。

三十六才で妻に死別して以来、やもめを通して、先祖伝来の旧庄屋の屋敷を守り、わたわら、旧街道に面したところに、洋品、雑貨、日用品、薬品などを並べた、ささやかな店を開いているのだが、田舎町での信望は衰えずかつては、町会議員を一期つとめたこともあり、自治会の仕事も絶え間なく持ちこまれる有様であった。

「男の一人暮らしでは、身のまわりにも不自由でしょう」と、これまで、幾度か結婚話を持

△自称マゾヒストの告白▽

(鰥 夫 の 海)

軟 体 動 物

大 おお
島 しま
嘉 よし
夫 お

ってきってくれる知人もあったが、私は頑かたなに断わりつづけてきた。

とはいってもものの、私とて木石ではない。寂しさに耐えかねての秘かな女遊びもしたし、いけないこととは思いつつ、女店員の未亡人に手をつけたこともあるが、女は待っていたように結婚を迫り、私が拒むと訴訟沙汰にするといつて威嚇した。そして私から多額の慰籍料をふんだくるまでは、しつこく関係を迫るという貪欲さであった。

狭い田舎町では噂が伝わるのは早い。

自業自得なのだが、知人は第一に、こんな私のかんばしくない前歴をふまえて、案じてくれるらしいが、地道で、不器量で、病氣一つせずに、せつせと働く女を、私にふさわしいものと考えているようなのである。

「糟糠の妻」——なんといやな言葉であろうか。その意味の示す忌むべき感覚を、実は死んだ妻に、いやというほど経験していた。

私は生気を失って、当時勤めていた会社でも一向にうだつが上がらなかった。男の生気を内からゆすり上げてくるような女の魅力こそ、生き甲斐なのだということを、つくづく思い知らされたものなのである。

つばきを吐きかけたいような、謙譲さ、忠実さ。私にとっては、残り少ない生涯を、有る方がいい程度の女よりも、むしろ無い方がいいのだ。私が再婚を拒む理由は、実にこれなのである。

マキを屋敷に住わせたのも、私のこんな人生観の反映であろう。マキは、近くのパイパス道路ぞいにあるスナック喫茶とスタンドバーを兼ねている『青紀』のウェイトレスである。

山陽道の東口にあたる、山の迫った古い田舎町が、ここ数年のうちに、俄に変化を見せ

てきたのは、パイパスが開通したことが大きく影響している。次々とガソリンスタンド、モーターが並びだし、農地に住宅が建ち、山を削った宅地が続々と造成されるという、花が咲きそろったような風景を呈して、古い街道筋の家並みとは、あまりにも激しい新旧の対照を示してきた。

『青紀』も、新しく建てられた四階建てビルの一角に開店した店である。

ドライバー客相手に、都会的な感じと、豪華な設備をそなえ、支配人以下従業員も、ほとんど阪神地方からきている。マキもその例に洩れず、他の五、六人いるウェイトレスと同様に神戸あたりからきた女であった。

酒量は多くないが、日中はどんなに多忙でもコーヒ―は五、六杯飲む私は、毎朝、自分の店を開く前と、閉店後の二回は『青紀』にでかけるのが日課であった。

若いころ、神戸の船会社に勤めていたことのある私にとっては、長年こんな田舎にくすぶり続けると、なにより、こんな都会の空気をそっくり運んできたようなムードの店は、青春の思い出を懐かしく甦えらせてくれるように感じられたのであった。

マキとは、いつかなじみになった。

短いカット髪を赤く染め、アイラインを引き、緑のアイシャドウで彩られた眼もとは多少つり上がり気味で、丸顔であるが顎が少し張った感じが、私の氣にいった。

大柄ではないが、ミニスカートからつき出した肉づきのよい足は白かったし、ドライバー客にも憚りない冗談をいう。時には伝法な口調を使うことが殊に私の氣を引いた。

仲間のウェイトレスの話では、マキは神戸の港のあたりでは顔のきくズベ公であったとか。マキの眼や顔形から、どことなく、きつい感じがするのが初めは少し気になったが、いまではかえって私のような孤独な中年男にとっては、そぞろに感情をかき立てるものがあった。

「おじさんは奥さんを亡くして、ずっと一人だってね。毎晩ここで、ブランドーを一杯飲んで、あんな広い家で一人で寝るなんて、寂しくはないの？」

マキの話は、いつも私をからかい気味になり、その挙句には、きまって相当にきわどい話になる。

「男が、よくそんなことに耐えられるのね。女も抱けないなんて——。このごろじゃ、女だって男を抱くわ。あたいたち、神戸では、

ナミオM画廊 『移動軽便橋』 春川 ナミオ



よく男を公園へつれこんだりしたわ。男だつて、女みたいに泣くよ。それが面白くっていつもやったもんよ。おじさんも、一度、女に抱かれてみたら？」

冗談であるから聞くものの、マキの話は、大胆で露骨である。それでいて、私はマキの

話を身に泌みる思いで持ち帰って、^{ひとりね}独寝のまどろみの間に、あの若くて^{はすば}蓮葉な女のことばを反芻すると、あらぬ光景が想像されてきて寝つけぬこともある。

いまから考えると、その時すでに、私はマキに対して、しよせんかなわぬのを知りつつ

ある種の強い感情を抱きはじめていたことは否めない。

マキのどこがよいのか。それには、私がかつて読んだ谷崎潤一郎の『痴癪老人日記』の中の老主人公の述懐を断片的に覚えていて、それを引用すると奇妙な共感がある。

「……顔ニ一種ノ残酷性が現レテイル女ガイルガ、ソナナノハ何ヨリ好キダ」

「……ソナナ女ヲ見ルト顔ダケデナク性質モ残酷デアアルカノヨウニ思イ、マタソウデアアルコトヲ希望スル」

「……フランス映画『悪魔ノヨウナ女』ノ、シモーヌ・シニョレノ顔……。近ゴロ評判ノ炎加世子ノ顔……」

まさしく、マキの顔に、この老主人公の感じる『残酷性』にふさわしい要素を発見していたらしい。それがマキの、あのつり上がり気味の眼や、ぼつてりと厚くて大きい唇。そして、張り気味の顎形からくるらしいこともわかっていた。

かつて観た映画の中で八炎加世子Vの強烈な官能を伴うサディスタックな女の魅力について、私もまったく共感する。いまマキの顔の上に、炎加世子の顔をダブルせるとき、マキの脂粉を凝らした顔と、炎加世子の素顔

の野性味とは、表面的には著しい相違があったにせよ、その本質から滲み出るような残酷性には、不思議な一致があった。

妻を失った私は△炎加世子▽のような女、映画『太陽の墓場』で、彼女の演じるひたむきで残酷なズベ公のような女に、異様な官能を覚えたものである。

マキは、まさに私の△炎加世子▽の復活であつた。

△2▽

店は普通りで、物を並べた三和土^{たつき}に続いて店の間と呼ばれる座敷がある。その上がり口にある古風な帳場に坐つて、私が朝刊を読んでいるとマキが出てきた。

赤い髪に、白地に黒色の太いストライプの入った派手なセーターを着て、グレイの短いスカートをはいている。私は、その服装のけばけばしさに圧倒される思いで、表通りの通行人の眼が気になる。

「おじさん、お店へ出かけるよ」

マキは、私のそばにしゃがみこんで話しかける。スカートが短いので、白い腿が奥まで見える。

「今夜は早いのかい？」

「いいや、遅番^{おそばん}よ」

「それなら、裏木戸をあけておくから、内側の木栓だけ外しておくれ」

「でも、あたい、今夜は泊ってくるかもしれへんよ」

「泊るって！ 店にか？」

私は奇妙に、うろたえる。

「店じゃないよ。その時の都合で、どこになるかわからないよ」

マキは、そういつて顔を寄せてきて小声で「おじさん、気になるんだろ」とささやく。

私は店員さえいなくなったら、そのとき、声高に怒鳴っていただろう。マキにふるいついて、その行為を未然にとどめたいという衝動にかられたのだが、辛うじて表面だけは、おだやかに装った。

「若いのだから、遊ぶのはいいが、体に気をつけることだな」

私は父親のような言葉が口をついて出ることに、われながら忌々しかった。マキとの年令の隔りが、ひどく自覚されたことが情けない。

「わかってるよ。でも、おじさんは、ほんとうは、あたいに……してて、妬^やいてるのところがうのかい」

マキは再び耳もとでささやいた。ことばが小声で途切れたところは、はっきり聞こえなかったが私は不覚にも、心の中をマキに凶星を指されたような感じがして、みるみる顔に血の色がさしはじめるのが、わかった。

マキのしゃがみこんだスカートの間に、こぼれる白い腿。

「ね、おじさんさえよけりゃ……」

私は、うっかり顔をたてに振りそうになるのを慌てて中止した。

マキは勝ち誇ったように、赤い舌をペロリと出して立ち上がる。

「小遣い上げるから早く戻ってくるのだよ」

私は一万円札を四つ折りにして、マキに手渡した。こんなときの照れかくしのためばかりでなく、私の苦しむ顔を見て、いたずらっぽく楽しむマキに、あまり心配させないでくれという哀願めいた気持が強く働いて、こんなことになる。このところ、商売女のようにマキから誘われるのも一度でない。

マキが三和土に降りて入り口から姿を消すまで、私は顔を新聞から上げ得なかった。そんな私の態度をパートタイムで来ている農家の主婦だという五十すぎの店員が、いぶかしげに眺めていることも、もとより承知のうえ

なのだ。

しばらくはマキの高価な香水の香りが去らなかつた。私はマキの内腿の白さが狂わしく眼にちらついた。いつもの例で、私はマキの挑発とも見える態度に乗らなかつたことを後悔した。

もともと、あらゆる世間の非難を覚悟してあえてマキを下宿させたのは、包まざりえば私には下心があつたのである。

前々から不自由な住み込み生活を嫌つていたマキの訴えを聞かされてはいた。町の不良たちとも交際しているという噂が事実なら彼女には自由のきくアパート暮らしが必要であるらしいことも憶測された。

そして、下宿の話は初めはマキから頼みこまれたという形になったが、結局は私がマキを強いて引きとつたというのが、真実であつた。私は町中の非難を覚悟の上で、その若くて、けばけばしく、炎加世子の顔をもつマキを、目をつむる思いで、同居させてしまったのである。

マキを離れの客間に入れて三月近く経つても、私はまだ一度も宿料を請求しなかつた。

彼女も、そんなことは、おくびにも出さない、ずうずうしさなのが、それはかえって彼

女にふさわしかった。そのくせ、いつかはマキを、と、いくども思い立ちながら、未遂におわるときの恥かしさを思うと、ふみ切れないのだ。

マキにも自然と私の態度から、心の悶情が響いているはずであらう。わざとらしい挑発をすることも、そのためらしい。私はやはり恐ろしさが先に立つのである。中年男の世間体を憚る気持が田舎町に住んでいると、思いがけぬほど根深いのである。

祖父以前に建てられ、庭を含めて、しつこい塗りの土塀で囲んだ離れの十畳は、父の代に改造したもので、給ひのき造りの内装で、広い床の間や違い棚、古風な書院窓、四畳の控えの間のついた客用の間であつた。

そこへマキを住まわせるため、私方の家具運び入れたのである。マキが所かまわず散らかすだけでなく、時には男友だちを連れてきて、ゴーゴー遊びや、歌、踊り、はては睡眠薬遊びをして奇妙な嬌声を上げること、しばしばである。だが、私にとって、そんなことが、私の胸に根強くわだかまっている踏ん切りのつかない気持を、かえって惜しみなくも蹂躪してゆくように思えて、自虐めいたよろこびをさえ感じだしてきたのである。

醜く、愚劣な連想が次々と起こる。

私が、マキに挑む。背から腕を巻きつけてあの充実したズベ公の肉体を、両腕一杯に感じる——その想像には実感があつた。そのあと、私がかつて見た春画のうちの最もむごたらしい型で、方法でマキを……。

だが、若いズベ公の腕力に屈して、力つきで、腕を解かれて、突かれて崩れ、女に背に回られて腕を首にかけられてレスリングで絞められる——私は、自分自身の苦悶の過程を詳細に意識の上に辿ってゆく——と、そんな場面を描いた小説を思いだす。

☆

「まだそれを——お前さん、いつているのかい」

お西は、あきれたように藤兵衛の顔を穴の明くほど見入るのだった。

「わしは……お西さん……お前の肌いれずみに刺青いれずみをするんだ。わしの命を打ち込んで見せる……わしは、お前の肌いれずみに刺青を……」

うわ言だ。悪夢の中にさまよっている藤兵衛だ。お西の肌に魅せられて、お西を追ひ廻している藤兵衛だ。

「そうかえ。それほど、お前さんはあたしの肌いれずみに刺青して見たいのかえ。それほど、あた

しの肌は美しいのかしら？」
妖しく笑うお酉……。▽

☆

いつか読んだ、『砂絵呪縛』という小説の「藤兵衛殺し」の一章を私は当時のA紙夕刊の連載小説で読んで、激しい興奮を覚えたことを昨日のことにように、まざまざと甦らせた。柳の木の下のだばたで、女が男の首を絞めて殺している挿絵とともに、スクラップにして、いまだに残している。

お酉の家で、すっ裸になったお酉の肌に雪女郎の図を刺青しようとして以来、老刺青師は裸のお酉の体に魅せられて夢遊病者となつて付け廻す。そして、ある夜、お酉を犯そうとして争いの果てに絞殺されてしまう醜悪な場面であった。

私は押し入れの中からスクラップブックを探し出して帳場に持ちこんで、その箇所を読みかえすたびに、色あせた古新聞のところにどころ、しみや虫喰い穴のある紙片が、いかに新鮮で強烈な香りをもっていることかと思つた。

☆

「へどうするのさ？ 汚っねえ」
噛みつくように叫んだ。

藤兵衛が背後から、武者ぶりついたのである。

「ま、マ……」

藤兵衛は咽喉がかわいて、口がきけない。全身を走りまわる痙攣とめまいと、切迫してくる呼吸とで、お酉に抱きついてうねっている。

「エエ、馬鹿野郎ッ」▽

☆

私は、こんな凄烈な強姦描写に耐えられない。まるで私が藤兵衛であるかのような気持ちなのだ。

☆

へとたんに背後に廻って藤兵衛の体を抱き止めたお酉。帯に挟んだ白手拭を藤兵衛の頸に巻きつけて、ぐっと絞め上げる。

絞められて膝を折って沈んでゆく藤兵衛。自分の体の重味で、だんだん頸が絞まって行くのだ……。▽

☆

私は、ほんとうに、自分が白手拭で首をくくられているような気がした。そして、背後から絞めているのは、まさしくマキなのである。

☆

「藤兵衛の両腕には、お酉の体に抱きついた時の感じが甦えってきた……。絞められているときに、額にかかっていたお酉の激しい息づかい……。▽

☆

こんな、女に絞められている最中の藤兵衛の心理描写もある。私は頭に上った血が、激しくこめかみで脈打っている音を聞いた。その息は、あたかも藤兵衛のそのように、息がかすれて、つまって苦しかった。

店の仕事の手付かない。昼食もとらない私に、店員がいぶかったが、私は気分がすぐれぬといって居間に、こもってしまった。

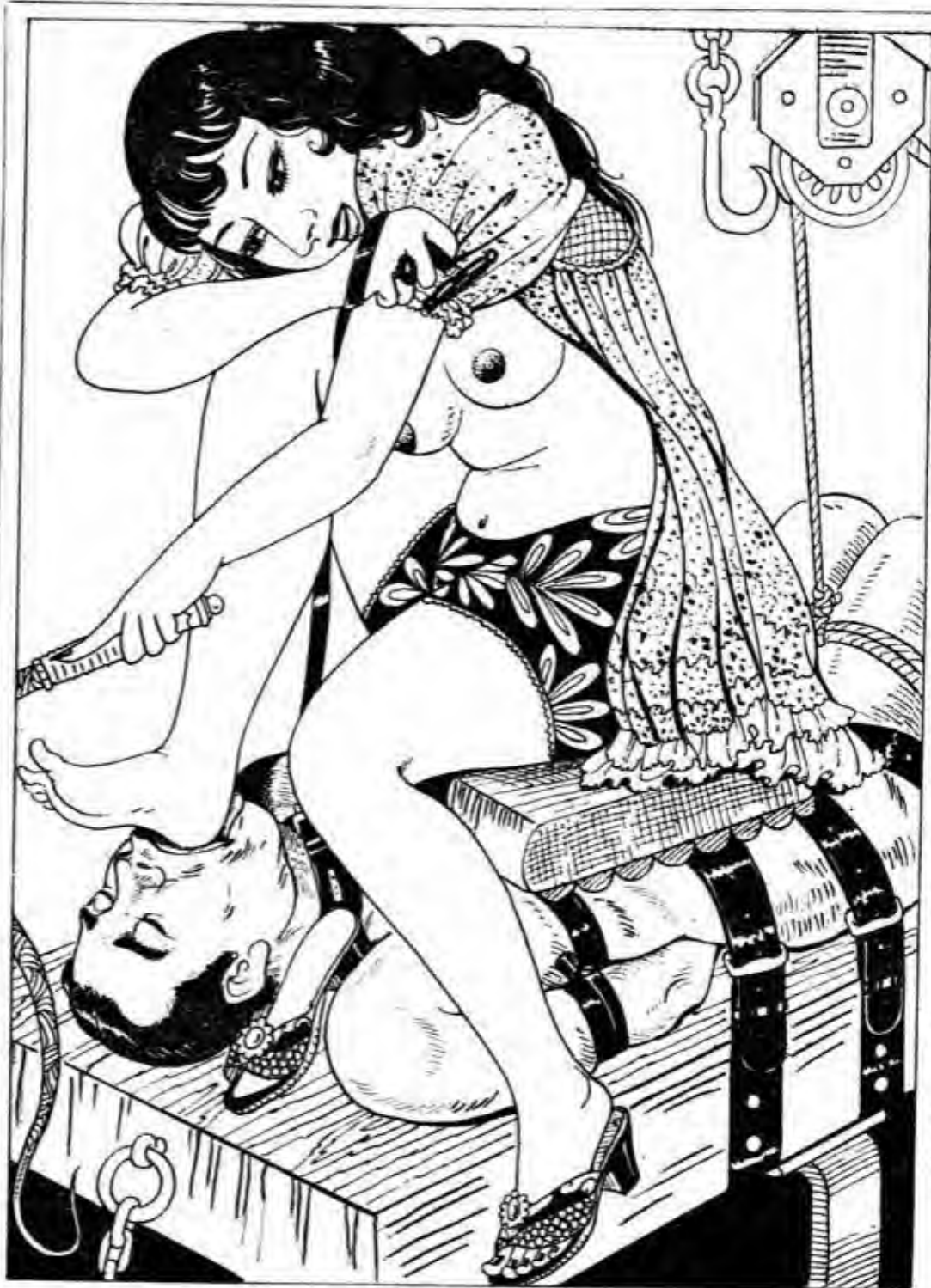
私はマキのいない離れに忍びこんだ。

マキの素姓をあばいてやる。あいつには、きつと私の望む血が流れているに違いない。その確証を一つでも……。という気持ちが興奮を呼ぶのである。

私はふるえの止まらない右手には、秘蔵の絵の数枚を持っていた。もしなに一つも確証の見付からないときは、その絵をマキが見るように置いておくつもりなのである。

妻に死別してから、あたかも男盛りの血を抑えにおさえた拳句は、かえって陰惨な血が、

……イミージギャラリ……『ホントにおいしい?』……岡 たかし……



人知れず狂わしくたぎりたつありさまであった。そんなところに集めた絵、写真を私は秘かに居間の押入れに残していた。

その中には、私自身の描いたものも多数あった。学生時代に美術を趣味にしていた私は

鉛筆画や木炭のデッサンを少し習った。自分の空想を眼で見るためには、他人の作品では飽きたりず、自由に思ったままのポーズのとれる自作画を描いた。

他見の心配のないこともあって、私はその

ころの陰惨な気持のままに、考えつく限りの男女の淫虐行為を、精密なペン画や、鉛筆画の輪郭に彩色する方法で描いていた。

画材やポーズの発想には事欠かなかった。雑誌の口絵やグラビアの映画雑誌のこれと思う情景から、厚地の上質タイプ用紙を用いてむつかしいポーズの原形を敷き写す。それをデフォルメして好きなポーズに直して彩色する。私の悶々の情を、そっくり、いや、それ以上に表現した残酷画は、かつて一度、私が関係した未亡人に一部を見せた以外に他見を許さなかったものである。

それをあえてマキに見せつけて、その反応を確かめる気になったのは、私が燃えつきようとする蠟燭のひとときわ燃え盛る炎のような男の残りの生を、マキに賭けようとする気持であった。

タンス、机、三面鏡がある。それらは皆、私と亡き妻との若き日の思い出が付着しているのだ。敷き放しの夜具は、私の家の客間のものである。

私はそれらをマキのような悪い女に与えることによって、私の心の中にまだ根づくよこびりついている権威とか、規範とかいったかびの生えたものを思い切り冒瀆させたかった

のである。

転がった枕のあたりには、口紅のついた外国タバコの吸いがらの山、雑誌類、グラス。

私は手あたり次第、スーツケースの中や、タンスの中を、さぐった。恥かしいことだという気持は、みじんも湧かなかった。マキの素姓を表わすものは、なに一つ現われない、もどかしさばかりが気を、いらだてる。

乱れた掛けふとんを払った。シーツの上に今朝マキが脱ぎすて、丸められたパジャマがあった。その中に原色の下着がくるめられてあった。

私は、その一つを手にとった。そして黒いブラジャーを両手で顔に押し当てた。ビキニ水着、ブリーフのように細い幅のパンティもある。私はマキの体臭のしみついた部分に口を押し当てた。今夜は外泊するというマキに激しく嫉妬した。

私は小さな丸木舟の上に横たわって、せわしく、ゆるく波濤に揺られながら島かげ一つ見あたらず大洋の上に、漂っているような境地である。よるべなし、無頼、絶望。しかし私は、その時、わが身の間違った部分だけが救いなのであった。

3

はしたない行為をしたことに対するうしろめたさは、時が経つにつれて起こってきた。そのあと、私は興奮がさめると、疲れて早くから熟睡していた。

ふと物音に目ざめた。午前二時過ぎであった。花冷えの季節で冷気が身に沁みだした。外は風が吹いていた。

夢だったかと思ひ直して、ふたたび夜具をひっかけた時、明らかに、男女の声と物音を離れの方から聞いた。

マキが帰ってきたのだ——男もいっしょにだ。私は起き上がって廊下に出た。

海棠の茂みごしに、マキの部屋に灯がついていた。酒を飲んできたらしく、乱れた声調のマキと若い男の声が洩れる。

私は庭に降りて泉水をめぐって庭石のかげにひそんだ。その場所からは、声だけで内部の様子が、わからなかった。廊下へ上がってマキの部屋の隣の控えの間に忍びこんだ。ドスの利いた男の声の間に、甲高いマキの声が交わっている。

私は部屋にあった灰皿の中から、燃え残りのマッチの軸木をとって、ふすまの合わせ目に

に差しこじり、一センチに満たないほどの隙間を作った。

男は、かねてからマキとの関係を噂されている長次という二十五、六才のヤクザであった。角刈りの頭や浅黒いもみ上げの濃い精悍な横顔が見えた。駅前のパチンコ店の前に、いつもうろついている男で、その店の用心棒だということである。パチンコ店の女店員と同棲しているとのだが、マキとも関係している男である。

長次は、しつこくマキに迫っている様子である。それをマキが拒む風なのだが、狭い隙間を通ってくる声は、くぐもって、はっきりしない。

「いやだッ。いや、いやだッ」

マキの声だ。

「てめえ、いやでも……」

声が高まって互いに、もみあう音。

私は必死の思いで眼を隙間におし当てる。狭い視野の中に、逞しい男の背部が、映った。その背中、腕、尻、両足には青黒色のうろこのように縦横無尽に彩った雲竜と花の刺青が鮮烈に浮かんでいた。

マキの股にも刺青があった——。

はね上げた足の左ももの内がわから上に向

かつて、赤いバラが彫られているのを、はつきりと見た。

私は両足をがたがたふるわせ、深夜の冷気が両足からはい上る感じがまったくない。

そして、マキの瞬間の姿を、この眼に灼きつけようと、ふたたび隙間に顔を押しあてていた。

「おじさん。あたい、ゆうべは帰ってきたのだけど、おじさんはよく眠ってたから、声をかけなかったわ」

翌朝というより、昼前になって、やっと起きてきたマキは、赤いガウンを羽織って、なに食わぬ顔で私にいった。

私は、帳簿に眼を移したきり、ふり返りもできない気持であつた。心では嫉妬の渦巻がつづいていた。

「お店が忙しくって、ずっと気が抜けなかったので疲れたのよ。だから、非番の日は、ゆっくりしようと思うの」

昨夜の取り乱したマキからは、考えられぬような態度である。私は昨夜のことが夢の中の出来事ではなかったのかと思ひ返すほど、マキの白々しい嘘が、いかにも真実らしく聞こえてきた。

「ねえ、マスターからもらったスコッチがあるのよ。あたいの部屋へこない？」

私は昨日、離れに忍びこんだことと、マキと長次の情事を覗いたことが、重たらく、心にのしかかっていた。

「お客があるので店を離れられないんだ」「それなら、今日は昼から臨時休業ね」

午後から突然、半日休業を申し渡された店員は、びっくりした様子だったが、農家の主婦なので、畑の世話ができると喜んで帰って行った。

マキのいる時間に離れへ入ったのはマキの引越以来、恐らく初めてのことだろう。

卓を挟んでマキと向かい合っているのは重苦しかった。マキに、なにかも見透かされていそうな不安がつきまとった。

ウイスキーを飲んで、紅潮したマキの太い腕が、ガウンから、のぞいているのが眼に痛かった。

「おじさん、いけない人ね」

マキが私に眼を注いでいった。

「あたいの留守中にこの部屋に入ったのね。そして、なにをしたのさ」

卓を回って私の側に、にじり寄ってきた。

「いえないの？ あたいの下着は、あれでちゃんと、場所も重ねる順も、あたいが毎日する通りに置いてあるんだ。おじさんが触ったってこと、すぐわかるんだ。いやらしいッ」

私は顔を伏せたままであつた。

「それに、この絵、なによッ。こんな変態の絵をあたいに見せて、どういう気なのよッ」

三十枚以上あろう。自作画を和綴じして表紙をつけた冊子がマキの手に握られていた。

「けさ、鏡を見たら、鏡台の裏から、こんなものが出てきたのよ。おじさんだろうか？」

マキは、つめよった。私は観念して眼を閉じた。ぶるぶる手がふるえる。その手を、やにわにマキが取った。

「……ね、あの絵見たよ。おじさん、あんな絵のような女がいいのね。思った通りだわ。

奥さんを亡くしてから、やもめ暮しで、あんな気になったんだろう？ あたいに、あの絵

のような女になって欲しいんだろう？……だったら、あたいが、おじさんを、あの絵の男

のように痛い目に合わせて上げてもいいよ」

マキは冊子の中ほどのページを開いた。プロレスの絵であつた。リングぎわで寝技

の複雑な型で絡まったレスラー二人は、よく見ると女性と男性であつた。女子プロレスの

写真から一方を男性にした趣好なのだ。

若い女レスラーは、黒いビキニ水着に白皮のブーツで断髪を乱して、逞しい男レスラーを、組み伏せていた。空手打ちをうけて、額から血を噴いた男は、女の腋の下に首を挟まれていた。袈裟固めで攻めかかる女の下で、男は必死にブリッジして苦痛の表情をあらわに見せている。

「レスリングね。あたい、レスリングは強いんだ。おじさん、一度、あたいとやってみない？」

ウイスキーの酔いが、次第に私の自制心を解いた。

「マキ、この絵のようにしてくれるか？」

「いいわ、あたいとレスリングしようよ。あたいが勝ったら十萬円の賞金をもらうよ」

マキはガウンを脱いだ。見事に充実して、起伏に富んだ白い肢体に喰いこむばかりに、黒のブラジャーと赤いパンティのマキに、着物を脱いだ私は、マキには恥かしいような古風な六尺褌を締めていた。マキは一瞬、嘲笑のまなざしを見せて、それを見ながら

「でも、いいわ。男っぽくて……」

マキは絵の通りに、私の首を腋の下に挟んで両腕でのけ反って、絞めつけてきた。

豊満な乳房はブラジャーをはみ出して、私の口をふさいだ。強烈な袈裟固めだ。

「どうだッ、どうだッ、参ったかッ」

私は畳を両足で蹴って、もがく。

「まだだ。もっと、もっと、絞めてくれい」

「よしッ、どうだッ、どうだッ……」

絞められたまま、私はマキに上半身を持ち上げられて、ひときわ、ぐっ、ぐっ、ぐっ、と、肉のきしみの音を立てるほど、絞められる。ゆすり、うねり、ゆすり合うのだ。

「うーう、うーう……」

苦しまぎれに振り上げた私の片足が、マキの片足にかかり、二つの体を寄せて、腿と腿で巻き合わせた。「地獄責め」だ。

首絞めの私と、股裂きのマキとの二人の同時の地獄責めの苦痛が、上と下で相剋する。

そして、裸身を固く腕で巻き合って、マキと私は燃焼を完全に一つにしていた。

この世のものとも思われぬ数瞬が続いた。すべての鬱積は、けし飛び、私の抑えきつ

たものは、十数年の耐えに抗して激しい瀬となつてマキの体に……

十分以上も、二人の寝ながらの正固めの地獄責めが続いた。

私は、マキとの狂気のような嵐を経て、も

う、彼女なしにはいられぬ毎日になった。

だが、マキの外泊は止まない。時々男をつれこむ。長次ばかりでなくて、土地の非行少年であることもある。

私はマキから、その夜のことを予告されると、料金として一萬円をゆすられる。私にはその金も惜しくはなかった。

多情というのか、あの若さでマキは、三日に一度は、他の男に抱かれることによって、生きかえると平気でいうのである。それを、あえて私に見せつけて小遣いをせびる。

嫉妬にかられた私は、マキをなじっては、逆にマキの折檻にさらされるといったことをくり返す。それが、私の初老の衰えはじめた男心を激しく、かき廻す作用をする。

だから私は、もはやマキを放せない。

「あたいは、居たい間だけ居てやる。でも、いやになったら出て行くよ」

私がマキに結婚を申しこんだとき、彼女はこう答えた。

「だからよ。あたいを長く置きたいなら、あたいの機嫌を悪くしないことさ。そのために毎月、十萬円いただくからね」

マキの言葉に横柄な男言葉が混じるようになっていたのも、マキと私の奇妙な生活が深

ナミオM画廊

『個室への招待』

春川 ナミオ



「でも、結婚はしないよ。おじさんみたいな
もうすぐジジイになりそうな男といっしょに
なったら損だ。そのかわり、いいこと、教え

てあげようか？」

マキは私に直径二十センチほどの素焼きの
盃を買わせる。

結 縁

親分 広川マキ 十八才

子分 吉原藤雄 五十才

右の兩名、本日をもて結縁せる上は、本家に同宿する期間、子分は親分に一命をさし出すべく、その節たえ不具不能にされても、異存なきこと。

以上

ヤクザの作法を真似て、私とマキは冗談にこんなものを作って床の間に飾っていた。

私から月々多額の小遣いをせしめるマキはもはや『青紀』に勤める必要はないのだが、なかなか、やめてくれない。

マキを家に置いて独占したい気持ちにかられるが、彼女はやはり、華やかな店にいて、気ままに男と遊べるのがいいのだ。気がかりにはなっても、しょせん、つなぎ止められる女ではないのである。私は諦めてマキの不倫を許す。そのため、かえって私の衰えを防ぐ役目をしているといった按配なのである。

マキの部屋には二メートル四方もある大きな鏡を壁にはめこんだ。ポラロイド・カメラや枕もとに置いたためのカラーのポータブルテレビも買った。問屋筋に照会してマキのために、イタリヤ製の水着やフランス製の下着も入手した。テレビで放映される女子プロレスを二人して観ながら、画面に映る場面通りを

マキにやらせた。

水着は、そのためのものである。技に身が入って、下半身を攻められた私は、危うく落命させられるようなこともあった。

「おじさんは、あたいに、いつか捨てられるのだから、あたいがいなくても忘れないように、好きな女に、ここまで愛されたという印を体に打ってあげたいわ」

ある夜、マキは私の体に刺青^{いれずみ}することを、強制した。初めは、他人の目につかぬ腋の下に、といったが、それだったら、いっそのこと、下腹部に刻むのがいいと、いい出した。よほどのことでない限り、他見の恐れがないことを悟って、私は刺青を承知した。

マキは床の上で私を後手に縛り上げて、安全力ミソリを使った。そのあとにマジックインキで、ハマキ乃命Vの四字をたてに書いた上を、小町針七、八本の束に、墨汁を含めてジク、ジクと刺して行った。

頭の中まで、しみ渡る痛みで私は悶えた。私は両足を、腹ばったGパン一枚のマキに押えられて刺青された。しかし、愛するマキに手ずから刺青されるなら本望であった。三時間以上かけて、文字と桃の実を刺青された。みみず腫れになって筆太に浮かび上がった

情痴の印は、快い冒瀆であった。

男のふくらみは、やがて、ふたたび茂みに戻って、地肌の刺青を覆うであろう。

「痛かった？ あたいは、仲間の女の子に、いくらも刺青しているから、割りにうまく彫って上げられたわ。これで、おじさんは完全にあたいの男になったって印よ。いい」

私は感極まった。刺青の痛みの消えぬままマキに女のように押えこまれた。

「捨てないでくれ……」

「捨ててあげる。そしたら、こんな刺青された男は、どの女も寄ってくれないわ。捨てられても、捨てられても、あたいのことを思って、追い廻してくるのよ。でも、あたいに相手にされない。あたいは、長次の情婦^{おんな}になるからね」

「捨てないでくれッ」

「だめ、捨ててあげる」

「捨てるなら、いっそ殺してくれ」

「そうね、殺して上げる方が、いいかもしれないわね」

マキは枕もとの冊子を見る。

それは邦枝完二作『お伝情史』の中からアレンジしたお伝絵である。

青蚊帳^{かや}の中で浴衣の、もろ肌ぬいで背中の

御殿女中の絵の刺青を出して、後藤吉蔵に馬のりになって刃物で咽喉を刺している瞬間を私が描いたのであった。

刺されて血を流しつつ、お伝の胸に両腕を巻きつけて両足をつっぱって尻をもち上げて苦痛の男の空しい最期のいきみは、男女の歓喜を同時に行っているのである。

「こうやってるときに、惚れた女に殺されたら、男は本望なんだね。カマキリの雄の気持なんだね。その気持、わかるわ」

「やってくれるか？」

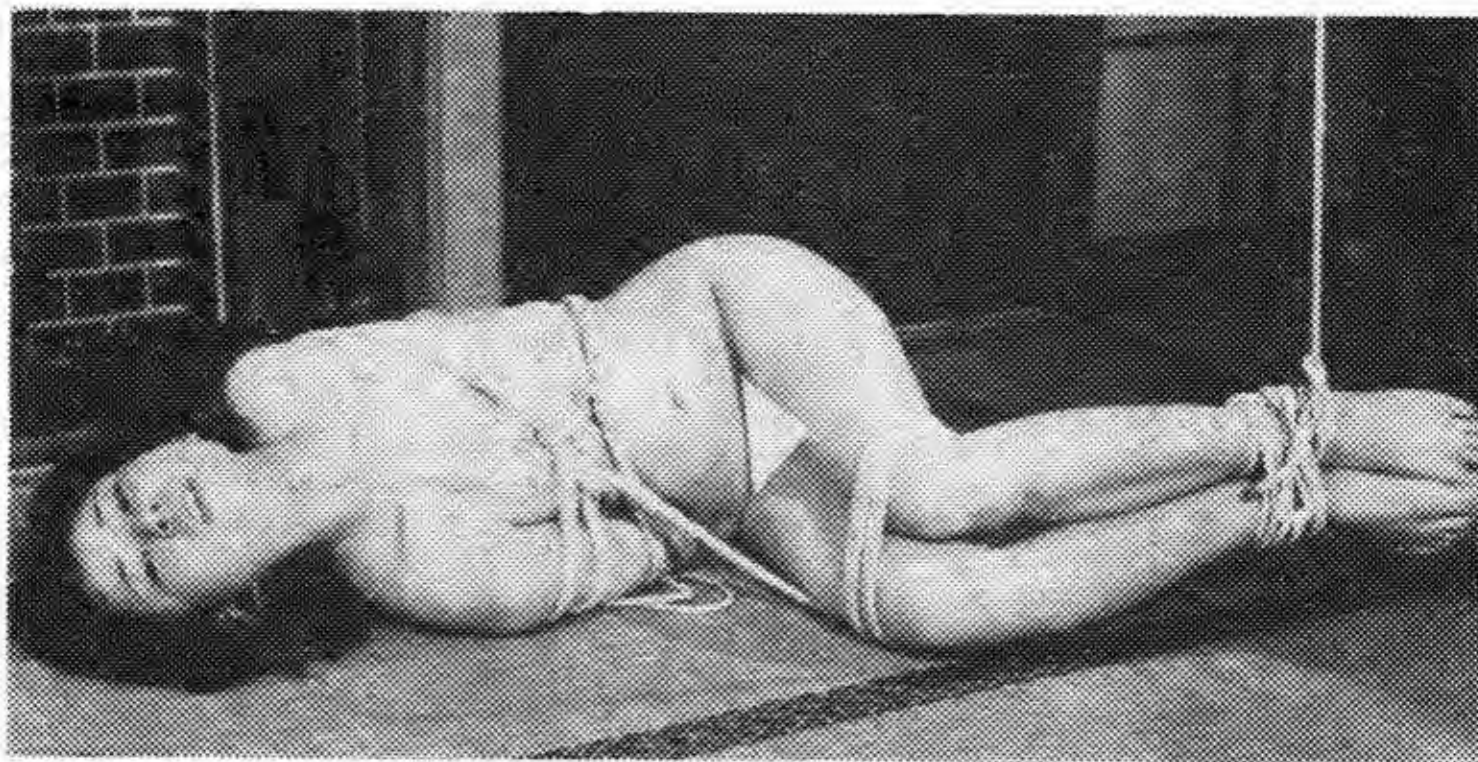
「してあげる。いい時を見計らって、二人の最高にイカスところで、ほんとうにやって上げるから、待ってるのよ」

私とマキの気持は、刺青以来、いっそう深まった。私自身、よもやと思われる刺青をさめている以上、もはや、マキを手放しはしないと決心した。毒食わば皿まで——である。

すべて、このところ、この古い屋敷の生活は常に波に漂う気持である。行き先不明の小舟に乗っている思いがする。だから、波の間に間に漂えばこそ、遠いあかりが懐かしい。

いまの私にとって、マキは、まさに暗い海の上に、切れた雲間に輝く星のようなものなのだ。

(完)



△ 告

白 ∇

清閑寺みちの独り歩き

前田 真知子

私は自分の毎日の仕事として、机に向かってペンを握っているので、文章を書くということ自体は、ほとんど苦にならない。

書きたいと思うことが、頭のなかに浮かんできたら、割合、すらすらとペンが走ってゆく。上手な文章を書こうとか、あるいは、自分の書くものが、よい文章などとは、決して思ったこともない。ただ、書きたいということが、胸のなかに、いっぱいになってきたとき、私のペンは、ひとりで走りだす。

だから、奇ク編集部から、早く書いて下さい。早く書きなさい、と言われたって、自

分で書く気が起こらないことには、いくら、机に向かっていてもペンは進まない。——貴女の文章だったら、なんでもいいから、とにかく書いて下さい——なんて言われると、なお更、書けなくなってしまう。

八月号に『夢遠き日頃』という告白みたいな文章（もっとも、この題名は編集部のデスクでつけて下さったのだけど）を書かせてもらったが、九月号、十月号と、やかましく言われながら、とうとう、書けないで、さぼってしまった。

私なんかが、別に書かなくなっちゃって、他に

いくらでも、沢山、上手に書く方がいられるのだし……といった気持が、一日伸ばしになっ
ていて、そして、いつとはなしに、ペンを
とるのが、おっくうになってしまった。

それに、私のことは、九月号で塚本鉄三
さんが、『霖雨余情』で適確な文章で、抉るよ
うに詳しく書いておられるので、私としては
そのことについては、出る幕ではないと思っ
ていた。読者の方のなかには、私の拙い文章
なんかよりも、やはりなんといっても、ベテ
ランの方のレポートを読みたいという希望を
持っておられる方も多いようである。

そんなわけで、私はS Mプレイといったこ
とについて、書ける自信は持っていない。た
だ、私が東京から、わざわざ京都まで足を伸
ばして訪れた八清閑寺Vというお寺が、余り
にも、私が平常から憧れていた雰囲気とびっ
たりだったので、そのことについて、少しば
かり書いてみたいと思う。

清閑寺というお寺に関しては、古典なんか
に時折、出てくる『歌の中山』について知っ
ていたので、どんなところか、一度、行って
みたいと常々考えていた。それが、今度、奇
クの緊縛モデルのお仕事で、八責められるV
ことになって、京都を訪れる機会を持ったの



で、それでは是非、『清閑寺V』を、というこ
とで、地図を見て道順なんかを研究しておい
たのだった。

タクシーで五条坂を登り、突き当たりの駐
車場のあるところで車を降りた。左の石段を
下れば三年坂、真直ぐ行けば清水寺である。
ウィークデーだし、お天気も、はっきりし

なかったので案外、人通りはまばらだった。

有名な清水の舞台を左手に見ながら、音羽
の滝に出た。三筋流れている滝の向こうでは
修学旅行の高校生たちが、ひしゃくで滝の水
を汲もうとして並んでいる。

音羽の滝の前を通って、細い木下闇の道が
右手にずっと続いている。昨夜の雨で山道は



濡れそぼち、昼なお暗き、という表現がぴったりするような密林の中を行く道である。

こんな所へ来る、物好きな観光客は、いないのだろう。歩いているのは私一人つきりである。ハイヒールでは、とても歩けそうにもない、ひどいぬかるみの坂道である。

道の脇を湧き水が激しい音を立てて流れている。道端の脇に小さな祠があるところでちよっと一服する。両側から迫ってくる樹々が、こんもりと茂っていて、太陽の光も透さない。じっと立っているだけで、樹の間を洩れる風が肌に、ひんやりと快い。

樹々の立ちこめた所が、こんなに薄暗いものだとは思わなかった。道はあるのだが、樹の根や岩が出ていて、とても歩きにくい。東京のような都会では考えられないような別天地の静けさである。

蟬の声だけが、あたりの静寂を一層、感じさせるように、耳にしみわたってくる。

腰をおろそうにも、どこもかしこも濡れているようで、じめじめしていて、気味がわるい。樹立の向こうの真暗な奥には妖しいお化けでもいそうで、たった一人、こんな山道に迷い込んだ自分が迂闊だったように思えた。

一本の大きい樹が道にまでコブのように逞しい根を張っていて、繁茂した広い葉ずえからは、水滴をポタポタと落としている。

私は、その太い幹を見て、密室の中で柱に立ち縛りされたときのことを、ふと、思い出していた。今、ここで、自分が素裸で、この幹に縛られたら、どうだろうか、と考えると急に、かっとなが熱くなってきた。

音羽山の山道の、こんなところで、たった一人でいる自分なのに、沢山の人々に取り囲まれているような気がして、まごまごした。

あのときは、まだ緊縛しはじめだった。

「柱に宙に浮かして縛ってもいいですか？」そう尋ねられたとき、私はなんとなく、心の中で浮き浮きして、「はい」と元気よく答えていた。バスタオルを腰に巻いていたが、いつでもはずして、すぐ飛び出せるように心構えしていた。

何故、こんなに縛られたいのか、責められるのが好きなのか、自分でも、よくわからないのだけれど、とにかく、この白い肌を、縄によって拘束され、そして、無理にカメラの前に晒されることに對して、言うに言われないうれしさのようなものがあつた。

それが、私の氣持を浮き浮きさせ、そして動作を、きびきびと敏捷にさせていた。

やる氣充分の弾んだような私の返事に、カメラを操作される方も、打てば響くように反應されて、「よしきたッ」と、柱の方へ向けてカメラ3台の砲列を並べてから、私の背後に近寄ってきた。

いつものことながら、この一瞬、私は全身に、ぞくり——とする戦慄が走って、腕の内側や内股のところに、思わずトリ肌が立つ。

大きな期待が、胸いっぱいにくらんでくる瞬間、腰を掩っているバスタオルを、男性の手で荒々しく、ひんめくってほしい——と思つたけれど、それを待てなくて、自らの手でタオルを腰からはずして、パラリと足もとに落としていた。

両腕を背後にねじ曲げられて、手首に縄が掛かつてきた。痛さ……というものは少しもなく、肌に喰い込む縄目の快さだけが、ジ

ーンと肌から肉を通して骨にまで、しみ込んでくる。もっと、手首を首筋近くまで上げてほしい——と思つて、自分でも、揃えて括られた手首を出来るだけ挙げようとする。

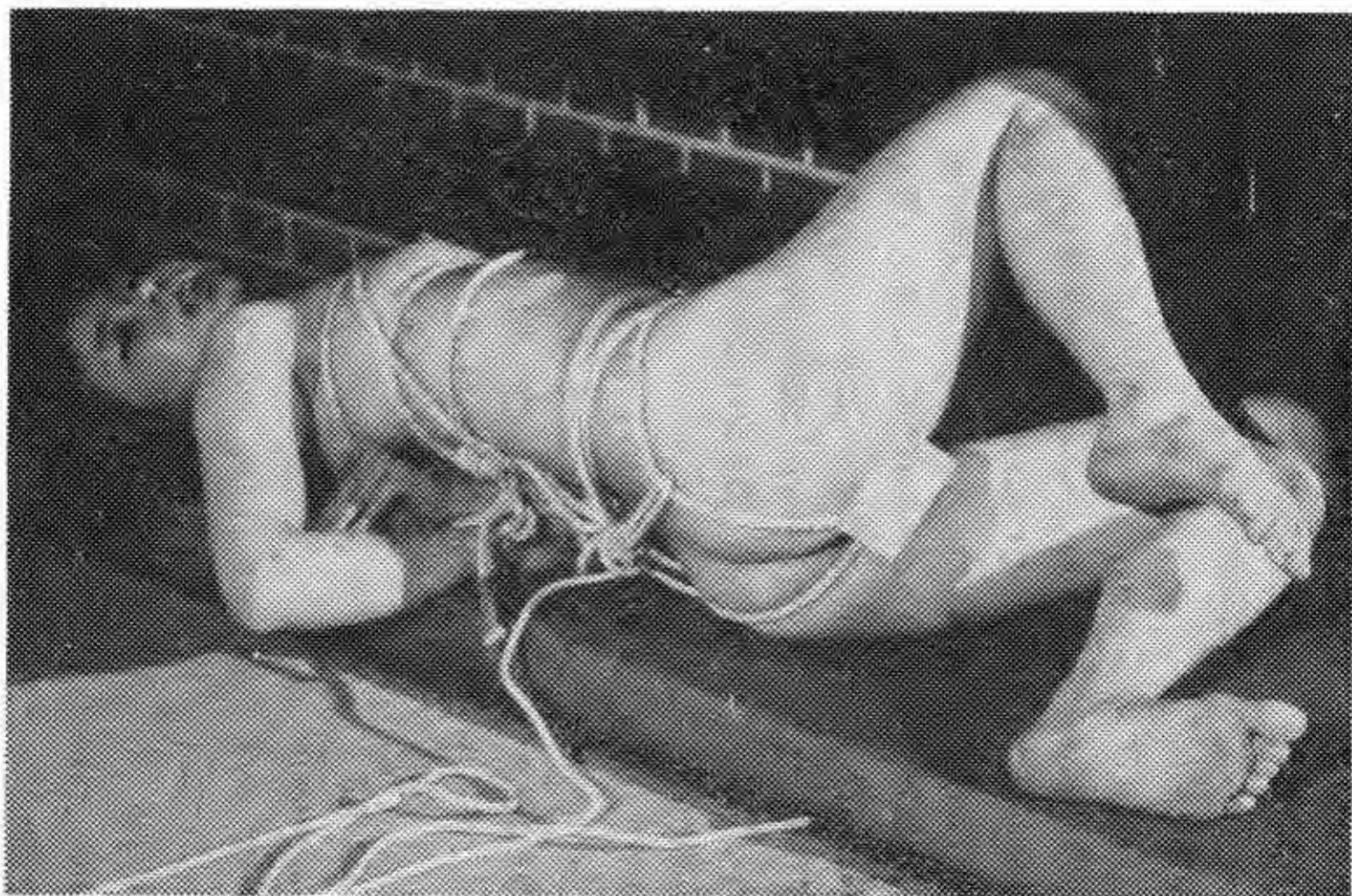
柱の前にスツールを置いてその上に二枚の座布団を重ね私に立って乗るように言われる。両手の自由のきかない不安定さで、よろよろと、よろめくところを、胸と柱と一緒に縄を掛けてゆく。

続いて太股、膝頭、脛——と、柱と私の身体とは、仲よく縄で結ばれてしまった。

緊縛感はあるても痛さは感じない。それよりも、前へ倒れてゆきそうになる不安定感を縄で強く縛ってもらふことによって、心の安定を求めることが出来るのだつた。

こういう縛られ方をされた経験を持つ方だったら、よくわかられると思うのだが、柱





に胸から脛に縛りつけられたとき、自分の上半身が前に倒れて行ってしまいそうで、恐ろしく感じるものである。なにしろ、両手が後で縛られているので、前へ倒れることについては、全くの無防備だからだ。

自分の頭が、前のめりに倒れてゆくという恐怖は、足の下に敷いてある二枚の座布団を引き抜かれたときに再び起こった。

私は足の拇指をピンと伸ばしてスツールの背に届かせ、必死になって体重を支えようと努力した。全身に凄い緊縛感を受けると同時に、柱の表面をズ、ズと滑って、足の爪先が、やっとスツールに達して、ほっとした途端、スツールが取り除かれてしまった。

私の爪先の必死の努力を、あざ笑うかのように、鏡台用の椅子は、ころりと転がされ、私は完全に柱縛りのまま、宙に浮いた。

私の体重の重さで縄が伸び、ずるずると下がったけれど懸命に探る私の足の爪先は床には届かない。縄は胸に、太股に、膝頭にと、喰い込んで相当な締めまりぐあいだ。

正面向かって、あえぐ、そんな私に向かって、据えてあるカメラが、一斉にシャッターを切ってストロボの閃光を走らせた。

目に強烈な光が入って、一瞬、目つぶしを喰ったように、あたりが何も見えなくなってしまう。探る爪先に床はない。思いきり足を伸ばして、爪先をピンと、はねる。

緊張した、そして充実した、楽しくて仕方のない、ひとときである。

「辛抱できますか？」

いたわりの言葉が耳に入るが、まだまだ、もっと、もっと、写真を撮ってほしいのだ。写真さえ撮ってくれるのだったら、このように正面の全身の何もかも晒していて、恥かしいのだけれど、いくらでも辛抱はする。

だから、もっと、いくらでも、素裸で柱に縛られている私の写真を撮って——、と、その心のなかで叫んでいた。

でも、身体の緊張をゆるめた途端、ずるっと下がって、足の爪先が床についた。

またしても、四方から閃光が走った。

私は、もっともつと、縛られていたかったけれど、爪先が床についてしまっただけは、被写体としての価値がなくなったのか、それを機会に縄は解かれてしまった。

樹立の中での、私の回想は、通りかかった一組のアベックの足音で破られてしまった。

密林のトンネルは、そこから少し歩いて途切れてしまった。抜け出たところに、八清閑寺みちVと書いた木札の道標があった。

私は左側が山、右側が深い溪谷になっている道を歩いて行った。さっきのアベックは、そこで引き返して行ったので、再び私は一人っきりになった。重苦しく曇った空からは、今にも雨が降りそうだったが、さっきの樹立のなかのことを思えば、やはり夜が明けたようにあかるい。

右側の深い谷は、鳥辺山と呼ばれる昔の墓地なのであろう。茂った木立の彼方に、点々として墓石が見える。

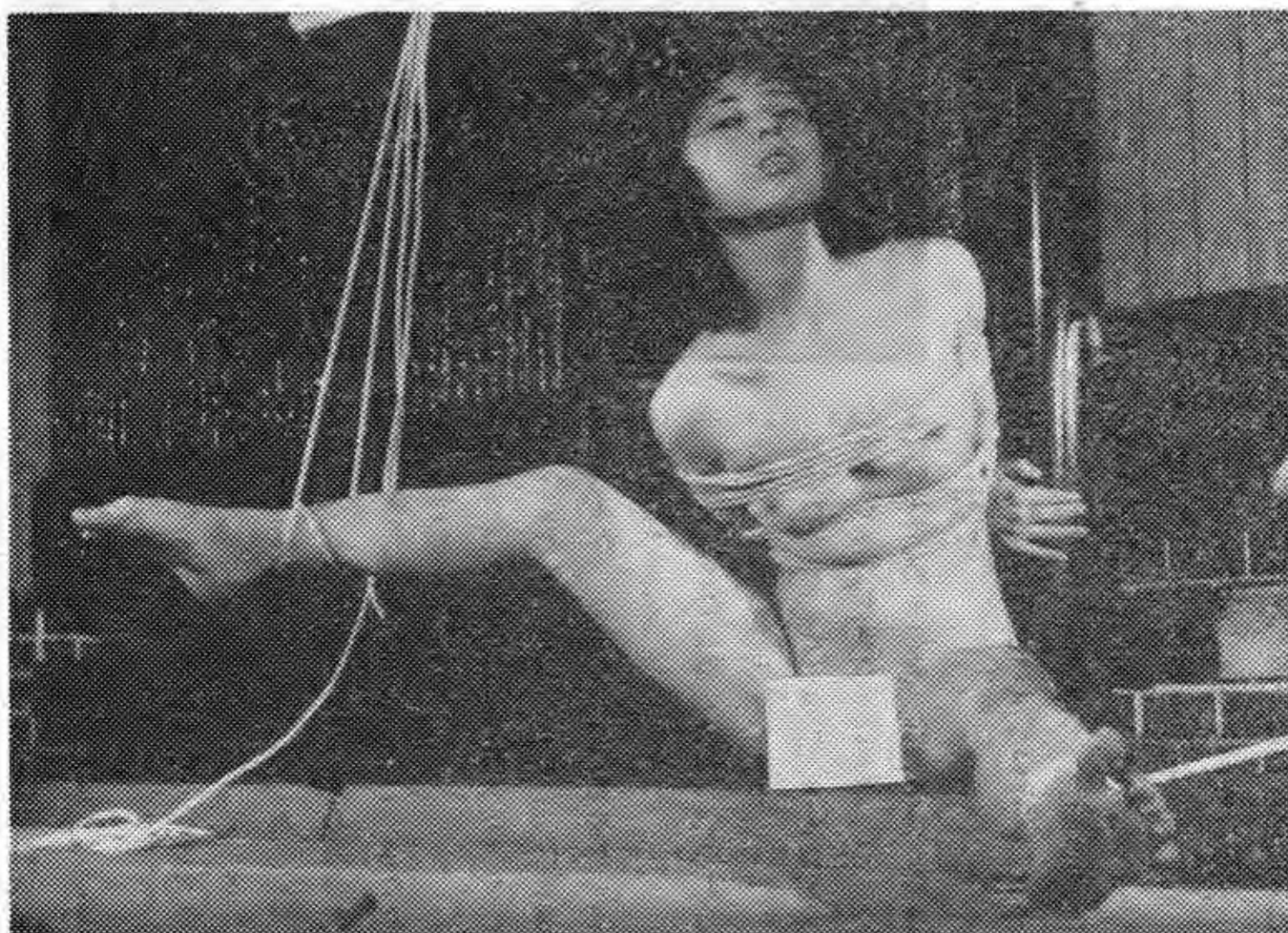
兼好法師の徒然草に、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙たちさらでのみ住み果つるならひならば、いかにものあはれもなからむ」と言われているように、平安時代から風葬の地として知られている所なのだ。

そんな思いに耽りながら私はしばらく山道

を歩いていて、思いがけない光景に出くわした。ゴーゴーという騒音に、何事かと、足早やに音のする方へ行ってみたら、それは五条バイパスの高速道路が、何百メートルの崖下を走っているのがあった。

しかし、やがて道は左へそれて、再び静かな山道にさしかかった。三叉路のところに、「右、大津へ」「左、清水寺」と彫り込んだ石の道しるべが立っていて、その背後には、「歌の中山、清閑寺」と彫った高さ二メートルほどの石碑が立っていた。向かいあって、地藏尊の祠があり、その脇に、「六条天皇陵、高倉天皇陵——参道」の道標があった。

このあたりは、通る人

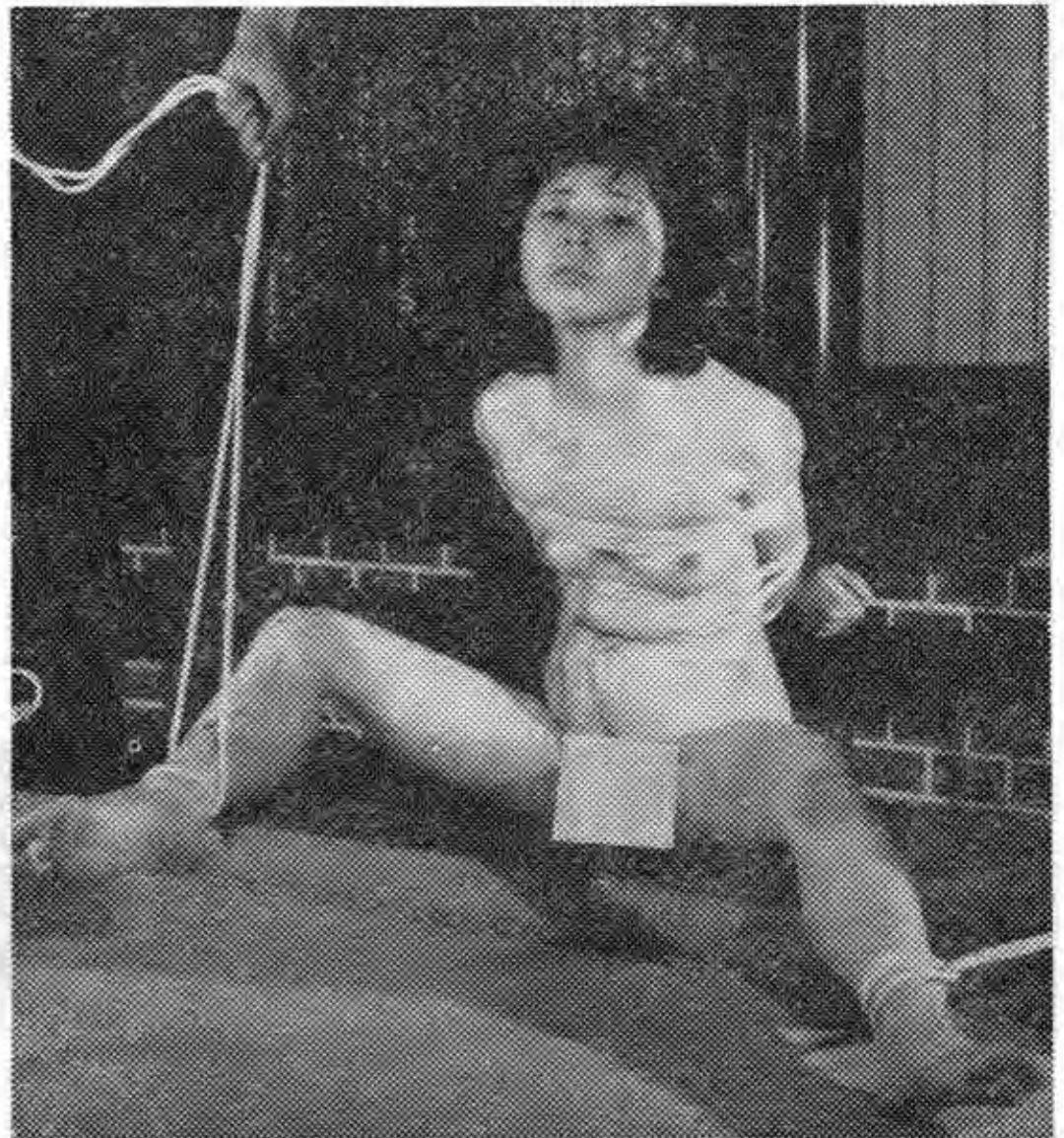


とてない淋しいところであるが、この道標に従って山道に入ると人一人がやっと通れるくらいの坂道で、両側は鬱蒼とした林。その林のなかの小径を辿ってゆくと、高倉天皇陵の前に出た。

高倉天皇といえば、平家物語で有名な「大原御幸」の主人公、清盛の娘、建礼門院徳子を中宮とされた帝である。

御陵の前から、真すぐ伸びている苔むした石段が、両側から迫る樹々に押し包まれるようにして、静まりかえっている。不思議に人には逢わない。蟬の音が降るようにするだけであって、人の気配がないのは、かえって気味が悪いくらいだ。

私はその石段を一步一步、踏みしめるようにしてのぼっていった。石段をのぼりきったところに門があつて、「清閑寺」という立札が立っている。門の脇に寺の由緒を書いた案内板があるのだが、風雨にさらされていて、文字を判読することが出来ない。



観光客が集まらないだけあって、まことにさびれ果てた寺である。しかし、私は、この倒れかけた門が、いたく気に入った。お芝居のセットのように、表側だけしかない、この古びた門が、懐古趣味の私に、いかにも気に入ったのだ。

小さな門をくぐって寺内に入ると右手に二

つの宝篋印塔がある。ほうきよういんとう一つは高倉天皇との悲恋に泣いた小督局の墓だと言われている。

みすばらしい本堂だけが、いかにも荒れ果てたという格好で建っているだけで、夏草が生い茂っていて人の気配はない。本堂の前に立ててある木の札の説明も、風雨にさらされて、さだかに判読できない程である。

私は夏草を踏み分けて裏へ回ろうとして、思わず、ぎょっとした。仕事着姿の老人が、うずくまって草を抜いていたからである。

「あう、このお寺の方は、いられないのですか？ 集印帖に判を……」

私の口から、とっさに、そんな言葉が出ていた。粗末な身なりながら、上品な顔立ちのその老人は草を抜く手を止めて立ち上がり、

「このお寺には、なにもございません。観光客が訪ねてくることもありませんし、住職だって、今日は不在なんです。せめてパンフレットぐらいあればいいのですが……」

私は東京から、わざわざ訪ねてきたのだ、と言いたかったけれど、そんなことを言えば

キザなのでやめた。本堂の表へ来たとき、「この説明書きも読めませんわね」

馴々しく私についてきた、その老人に、思わず私は、そんな不満を洩らしていた。

「本寺の建立は延暦二年、紹継法師の開基でありまして、一条天皇の時に再建されたときには、法華三昧堂や宝塔が立ち並んでいましたが、応仁の乱で焼け、今は本堂だけが残っているのであります。本堂には本尊の十一面千手観音が安置されていまして……」

印もパンフレットも、記念になるもの、土産物とて何一つないお寺なのでというわけか、たった一人の私に対して、その老人は、とうとうと寺の由緒を説明しだした。

国文学に素養のある私でも、その説明を全部、記憶しておくことは出来なかった。

平家物語ゆかりの高倉天皇の御陵、それに小督の局の墓と、語りながら、余り広くない寺内を案内してくれたが荒れ果てた寺の様子は、いたく私の心を動かした。はるばる訪ねてきて、よかったという気がした。



扇の要石かなめのある前庭からは京都の街が一望に眺めることが出来た。扇のように末ひろがり、あたかも、節の穴からのぞくように扇形に市中が見えるのだ。狭い視野から眺める街は、どの部分なのか、地理不案内の私にはさっぱりわからない。

立っている場所からは急な崖になっていて

高所恐怖症の人だったら、目がくらくらして落ち込んでゆきそうになるほどの高さであった。風が強くて、私の髪の毛が、吹きちぎれるように、耳のそばで、はたはたと鳴る。

礼を言って帰ろうとする私を、門のところまで送ってくれて、西郷隆盛と僧月照が密議をこらした所だと言って、郭公亭と呼ぶ建物

のことも説明してくれたが、私には興味は持てなかった。

門をくぐり、石段を下りて再び、昼なお暗い山道に戻って行く。このあたりが古典によく出てくる「歌の中山」という小径みちなのであろう。栗田口から逢坂山を越えて大津へ出る昔の東海道、今の国道一号線とは別に、この歌の中山も、京から大津へ出る裏道として、きっと昔の人は利用したことだろう。

今では人一人通らない淋しい山道である。そして、音羽山の真下には、山を切り拓いてバイパスが通り、夥しい車の群れが轟音をとどろかせて

疾駆しているのだ。

帰途は、源義朝の愛人常盤御前が平家の追手を逃がれて牛若、乙若、今若の三人の幼い子を抱えて、その安泰を祈ったという子安の塔の前を通過して、再び清水寺へと戻った。

東大谷廟の前まで来たときは、さすがに長い夏の日も、ようやく暮れなずんできた。私はタクシーを拾って宿舎へと向かった。

全身に快い疲労が残っていて、私はうつらうつらとしていた。

自分は、一体、京都の街を見たくて、東京から、わざわざ訪ねてきたのだろうか。それとも、それは単に口実だけであって、本当は縛られて写真を撮られたくって、責められたくって、来たのだろうか――。

そんなことを、今更らしく、ふっと胸のな



かに浮かびあがらせていた。

一度は訪れてみたいと考えていた清閑寺へ行くことが出来て、私の心のなかは満足感に溢れていた。それと、もう一つ、願った通りの縛り方、責められ方をされて、この方の満足感も大きかった。

今の私の、この心の充足感は一プラス一は2というものではなく、一プラス一は5にも6にも値するほどの価値があるように思えて嬉しかった。どちらか一つだけであつたら、これほど、心が楽しくなろう筈がない。

この二つの事柄のなかに、何の関連性もないのに、私の心のなかで一体となったとき、始めて相乗効果を発揮して、このようにまで私を夢中にさせてしまうのだろう。

私は、燃えあがる自分の気持を抑えきれなくて、思わず自分の乳房を両手でかかえて、抱きしめるように、しなくてはならなかった。思い出しただけで、全身がきゅっと締めつけられるような気持になるのだ。

あれは、もう、撮影が大分、進んでからのことであつた。何度も、何度も、縛ったり解かれたりして、私の二の腕や乳房の上下、それに太股などに、赤く血のにじんだ縄のあとが幾筋も出来、そして幾分、疲れ気味になっ

た頃だった。

疲れた——といっても、それは、だるいような、しびれたような、一種けだるい快感であった。赤と黒の二色に塗りわけられた調度を背景にして、新しく縛り直された私が、引き据えられたときであった。

判決を下す裁判官の真前に、引きずり出された囚人のように、私は全裸のまま、そこへ、うずくまって、縄尻を持たれていた。

左右と正面に、三台のカメラが青白いレンズで、じっと、そんな私を見つめている。S Mプレイ——という甘いムードではなくて、冷徹な機械的なメカニズムで、私の生態を把握しようという狙いのように見えた。

縛られて自由のきかない私の裸身のすみずみまでも、ばっちりフィルムに収めようとする作業のように見受けられた。

明るいライトが正面から私に集中されていて、あたりは薄暗いの、私の姿だけが何のさえぎるものもなく、照らし出されているのであった。そして、一たびカメラが作動したら、上下左右から四つの光源が閃光を放つのである。

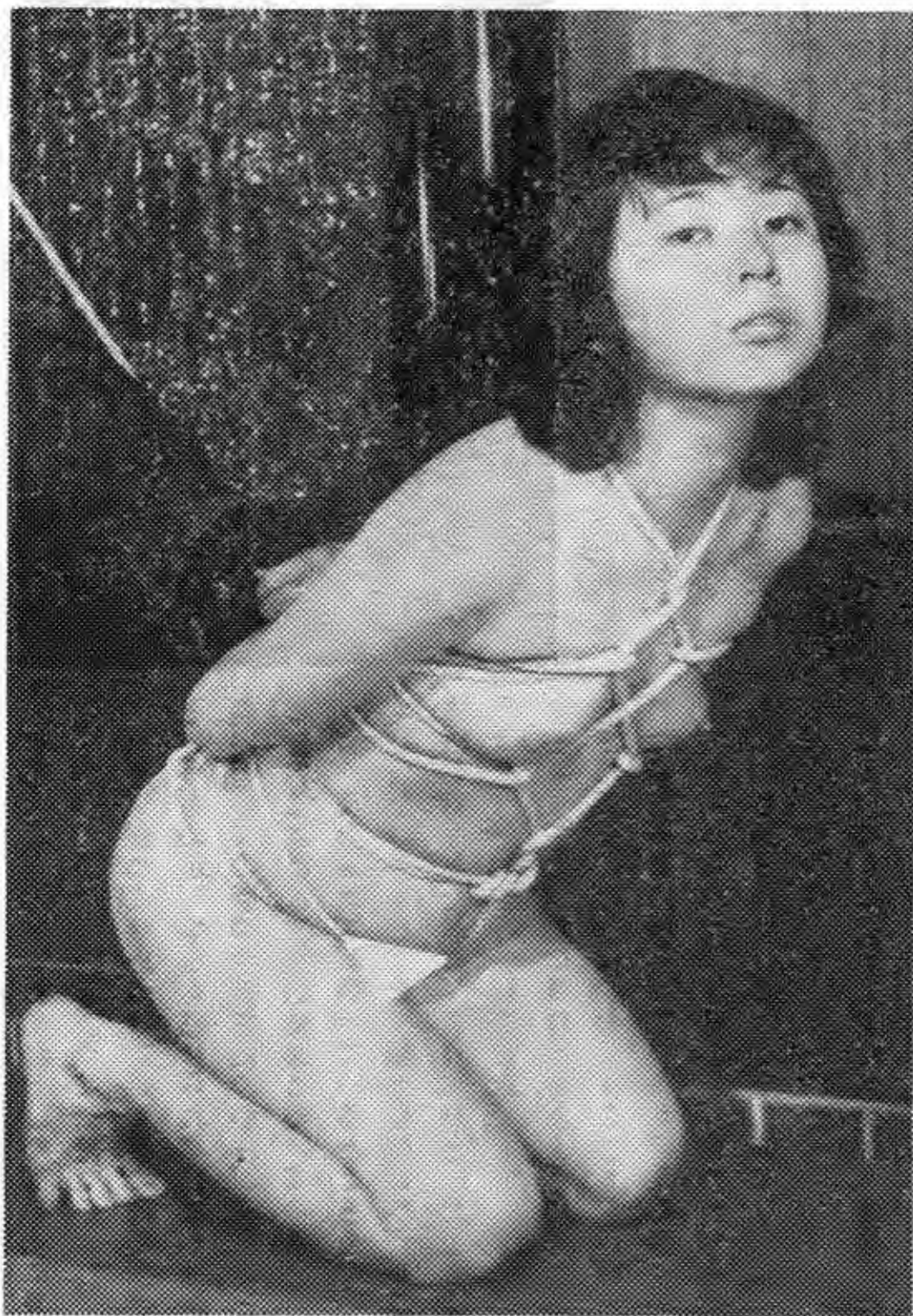
髪の毛をワシづかみにされて顔を上へ向かされた。女にとって、髪を掴まれることは決

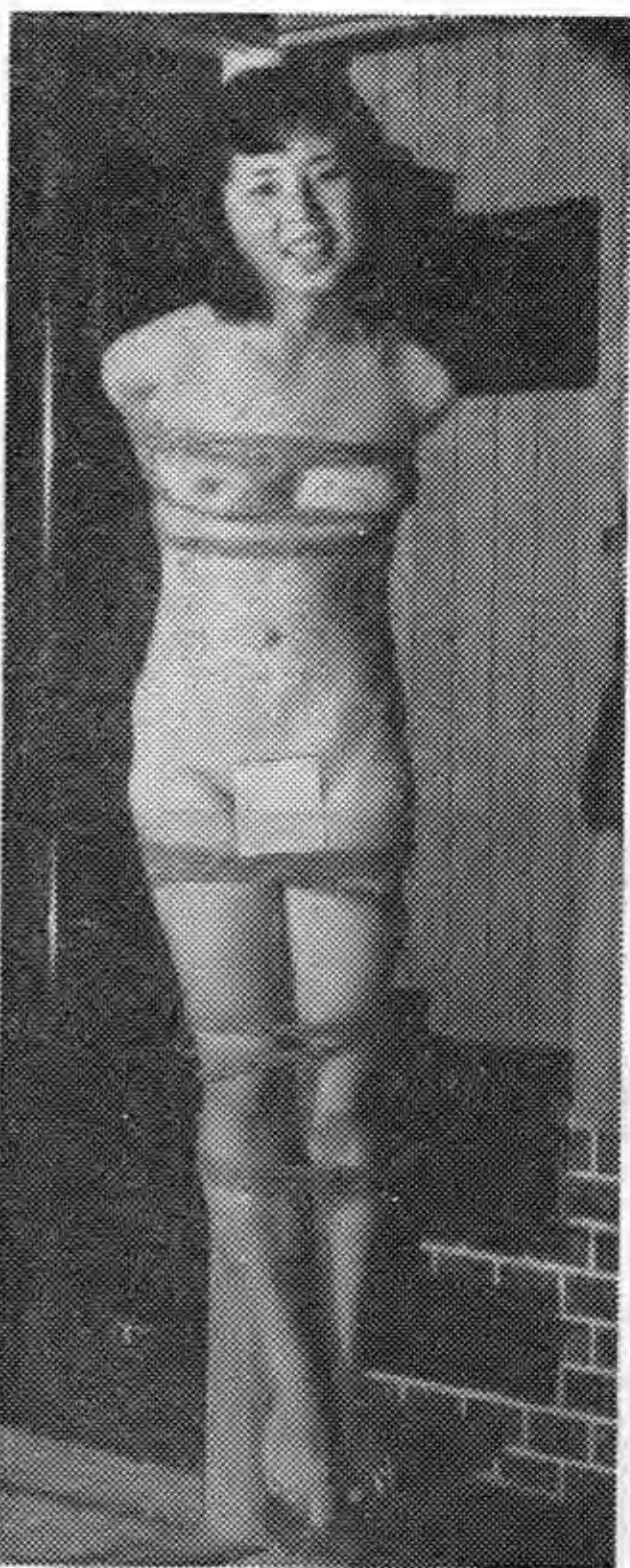
して好ましいことではない。(これは男性とて同じことだと思いうけれど)でも、このときの私は、そうしたみじめな格好にされるということで、髪を掴まれるという不快感は少しもなかった。両脚をピンと伸ばして、全身の安定を、はかっていた。

髪を掴まれて、引き寄せられたので、必然

的に、私は、うしろへ倒れてしまうから、それを防ごうとしたのであるが、そんなポーズで一枚、写真を撮られてしまった。

「キミは、こうされるのが好きなんだろう」
そう言われて、右足に縄を掛けられて、引っぱられた。そう大して強い力でもなかったのに、なんとしたことだろう。私は、自分自





身から、その縄に引かれるようにして、脚をひろげていった。

再び、閃光が私の全身を襲った。

もっと、もっと、身体の中心部まで、正面のカメラで写してほしい……。いらだたしいような焦慮が一つの快感となって、私の身体を、かっかっ……と燃えあがらせていた。

左右のカメラが退いたかと思うと、正面のカメラが、ぐっと私に接近してきた。

私は顔を赤らめて、その正面のカメラのレンズに、自分のすべてを晒しきっていた。

右脚は足首が頭上より高くなるまで引きあげられていて、残った左足は、自分の意志で思いきり反対側へ伸ばしきっていた。

思わず足の指に力が入って、ピンと拇指をそらしているのが、自分でもよくわかった。

じつとりと、汗のにじみ出る息づまるような一瞬。一発、二発、三発……と、間を置いて閃光が走った。

緊張が緩むと、私は、もう、泣きだしたいような気持で、ぐったりと全身の力を抜いて縄尻を持つ人の膝の上へ、もたれかかっていた。まわりにあるものは、何も見えず、目の前にチカチカと紫色の光の点滅が、あたたかも遠い漁火いさりびのように見えるだけだった。

身体には、なにもつけていないのに、寒くもなく、熱くもなく……というよりも、自分の肉体そのものの存在さえもが、意識されな

い状態であった。ふわふわとした雲の上に身を浮かべて漂っているような気持であった。

肌を、きつく締めつけている筈の縄の痛さというものが、少しも感じられないばかりか痛い筈の二の腕や手首あたりから、ジーンとしびれるような快感が全身に響いてくる。

カメラのレンズが狙っているところを、早く隠したい——と、そう願う心が、かえって太股の背面あたりに、じりじりとした虫の這うような感触を呼び起こした。

右に、左に、私の身体は弄ぶように、ころがされ、そのたびに、かくすこともない縛られた姿を写真に撮られていった。足の裏にレンズが向けられたのを知ると、思わず知らずあたかも操られているような気持になって、お尻のあたりが、ぞくりとした。

私の、抑えに抑えてきた気持が、爆発的に昂進してきたのは、このときであった。

足の裏を狙っているレンズを、自分の身体を中心に向けるべく、両足を思いっきり大きく左右に開いていた。

丁度、開ききった両足の間にカメラを挟み込むように近づいてきて、私の目からは見えない至近距離で、何度も、何度も、シャッターが切られ、閃光が、きらめいていた。



——もう何枚、撮られたのだろうか。
私は、自分とは、かわりのない遠い所で行なわれている出来事のように、うっとりとしたリラックスした気持ちで、時のたつのを待っていた。

他から加えられる力に対しては、どのよう
にでも、その意志のままに動くのに、自分か

ら、自分の意志では動けないといった、一種
虚脱した状態であった。
「疲れたでしょう。ひと休みするとしましょ
うか？」

私の身体をいたわって休憩しようと言われ
たのであろうが、こうした状態のままで、撮
影を中止されるということは、私としては、

大変恥かしいことであった。もう少し、なん
とか、サマになるポーズのところで休んでほ
しかった。

「私だったら、いいんです。このまま続けて
下さっても、構いませんわ」

やっと、そう言って、私は張りつめていた
全身の力を抜いて、ぐったりと身体を投げだ
してしまった。

床に寝ころがったままで、下から見あげる
風景というものは、立っている人、三脚につ
けられたカメラ、縄の巻かれた柱、鴨居にク
リップでとめられたストロボ——というぐあ
いに、全く奇妙なものである。

視点を変えると、このように、同じ風景で
も、新鮮に感ずるものであろうか。

私は、自分の身体のすべてを見られてしま
った男性の前に、羞らいながら小さくなって
かしくまっていた。身の置きどころのないと
いった恥かしさが、いつまでも私の身体から
去らなかつた。

「お客さん、着きましたよ」

タクシーの運転手に、そう言われて、私は
車のなかでの瞑想から、さめていた。

——（おわり）——

—＜単行本紹介＞—

『サド・マゾチズム』

読 後 感

— 横 浜 太 郎 —



カット・あらいかず

先日、都内のホテルの売店でペーパー・バックを立ち読みしていたら、ポルノが数冊、書架に置いてあった。

そのなかに、SADOMASOCHISM By KOBERT WOODS という表紙が目に入った。思わず、手に取ってみると、サブタイトルに、A Case History Study of the Pair of Love. となっており、普通のポルノとは少々趣きが違うので早速、買い求めた。

その日は、ガールフレンドとデートの約束をしていたのだが、待ち合わせの時刻よりも十五分程、早く着いた為に手に入れることができた訳である。何事も心掛けが良いと万事うまく行くなと思うながら、ロビーのソファに腰を下ろして読み始めた。

しかし一頁目も読み終わらないうちに彼女が現われてしまった。折角の楽しみを奪われたような気分になるのだから、その道の好事家は勝手なものである。残念ながら、彼女には、まだ手ほどきを施してはいないからだ。

彼女は食事もしたいが、最近やたらと盛んなボーリングもしたいと言う。そこで一見、紳士を装った小生は、それならば最近のボーリング場は非常に混んでいて、普通ならば二時間程、待たされるから、比較的、待ち時間

の少ないボーリング場を探し、そこで予約をしてから、食事をしようと提案し、すぐに実行に移した。

待ち合わせたホテルから比較的、近い、青山、新宿、三田——と廻ったが、いずれのボーリング場も、二時間以上、待たねば駄目とのことで、車の向きを彼女の家になづくようにと、西に向けた。

勿論、これはボーリングが終わってから、都内を横切って彼女の家まで送り届けるのが面倒なのと、一刻も早く手に入れた本を読みたいからに他ならない。

ともかく、彼女を家に送り届け、家に着くと、ビールを飲む用意を済ませると、早速、件の本を取り出した。

○

先ず表紙から紹介すると、ベッドに両腕を縛りつけられた女性は、黒のブラジャーとビキニパンツだけしか身につけていない。しかし、このブラジャーは皮か何かで出来ている様子で、乳首の部分が小さく丸型に切り取られていて、そこから乳頭がのぞいている。

ベッドの横に立っているのは、男性か女性か、判別し難い人物である。左手には革製のムチを握り、その手を高くふり上げている。

着ているものは、体にピッタリとフィットしたダンサーのシャツとタイツの様なものでその上から、やはりビキニパンツの様なものをはいている。顔は快傑〇〇の様な目隠しをしていて、眼球部分だけ、くり抜いてある。右手はベッドに縛りつけられた女性の髪の毛をつかんでいる。といった紫色の地に墨の線画である。

表紙の説明は、以上ぐらいにして、次に本文の内容を紹介しよう。

この本は、四つの事例と、それに先立つイントロダクションから成っている。

イントロといっても、五頁足らずの短いものである。ここに、「サドマゾチズム」の定義らしきものがあるので、簡単に説明しておこう。

「サドマゾチズム」という用語は、通常はセックスの特殊な形態を指摘するのに用いられる。その特殊な形態とは、苦痛を与えたり、あるいは、受けたりすることによって、性的興奮、もっと莫然と言うと、△満足▽を得ることである――。

非常に簡単でありながら、当を得ている。そのすぐ後に、辻村流発想いや体験による説明があるので、ついでのことながら、再び

引用しておこう。

――すぐれて創作的なレベル以外にあってはサディスティックな人物を、マゾヒスティックな人物と区別し、又全く別であるということを我々の研究は指摘しているのではないし又それは賢明ではない。片方が苦痛を受けることによって、片方は苦痛を与えているのであって、目的と結果のようなものである――

以下、長々と、その説明が続くが、要約すると、サディストと科学的、医学的に定義づけられる人は、それと同程度マゾヒストの要素を持っているのである。又、マゾヒストはそれと全く逆である。すなわち、サドとマゾは表裏一体の関係にある。

と、いうような、もっともらしいイントロがあり、ケーススタディには熟練したインタビュアーが必要であったこと、それを文章あるいはレポートにするのに苦労したことなどが、くどくどと述べてある。

事例1 CASE NUMBER ONE

シャーリー 28才

- ブロンド
- 5フィート3インチ
- プロポーションは比較的良

● 中産階級の出身

● インタービュアーと、めったに視線を合わせない。

● インタービュアーの間、タバコを次々と火をつけていた。

● 足を椅子に妙な具合にからませていた。

シャーリーは、3人兄弟の2番目であり、

兄と弟がいた。両親は彼女が男でないのを残念がり、彼女にだけ冷たく当たった。

着るものは、兄のお下がりばかりだったし弟がいたずらをして彼女のせいにされた。

ある時、弟が、オモチャを自分でこわして泣いていると、母親がシャーリーがこわしたとして、激しく彼女を折檻した。

またある時、隣のロディとガレッジで、お医者さんゴッコをしていたら、父親に見つかってしまった。その時は、ロディの……をさわっていたし、ロディはシャーリーのプッシーをさわっていた。

そこを父親に見られたのだから、大変である。父親はシャーリーを部屋に引きずって行き、彼女の衣服をビリビリと破き、無茶苦茶に彼女を叩きのめした。そして、鏡の前に彼女を立たせて、自分自身の裸を見るように強

女を立たせて、自分自身の裸を見るように強

制した。そして、再びベッドの上に彼女を引き倒し、彼女のお尻をベルトで叩いた。

しかし、シャーリーは、最初のうちは苦痛しか感じなかったが、そのうちに変な感じを持つようになった。それが、彼女が感じた、最初のマゾの気分である。

それから、当分の間、彼女をムチ打ったベルトは、ダイニングキッチンに掛けられシャーリーが失敗をする毎に、父と母の両方から、そのベルトで、お尻を打たれることになった。

シャーリーが高校に入ると、それも、ようやく、なくなった。

高校時代の最初は、父と母からイジメられていたが、学校では何となくオドオドとしていたが、ある時、学校で一番の人気者であるジョー（ジョーはフットボールの代表選手で学校中の女の子の人気の的であった）から、デートの申し込みを受けた。

勿論、彼女はOKしたが、はたして彼が来るかどうか心配であった。しかし、約束に違わず彼が家に迎えに来て、彼の車でドライブイン・シアター（映画館）へ行き、そこでペッティングを知ってから以降は、彼女のオドオドした態度はどこかへ行き、急に女性ら

しく華やかになり、それと同時に、美しくなった。

その後、しばらくジョーとのカーセックスのことを事細かに詳述してある。（中略）

卒業と同時に、ジョーとシャーリーは結婚する。ジョーはパートタイムをやり、シャーリーもレストランのウェイトレスのアルバイトをして生計を立てる。

そうこうするうちに、ジョーの収入もだんだん多くなり、子供を作ることにした。しかし、毎月毎月、彼女の定期便は訪れる。医者へ行って検査してもらったと、彼女は子供を持たない体であるとの宣言を受ける。しかし、そのことをジョーには言えない。

そして、その日以来、シャーリーはアルコールの味を知るようになり、ジョーが仕事に出ている間、街のバーで飲むようになった。

ある日、バーで中年の男と知り合い、その男のアパートへ行く。

そこで、またマティニーを飲み、彼とセックスをする。しかし、彼はそれだけでは満足せず、裸の彼女をベッドにうつ伏せにするとベルトを打ち下ろした。

二度、三度、四度……十数度。

そしているうちに、彼女は幼少の頃、父親

に、お医者さんゴッコのお仕置にベルトで打たれたのと同じ感覚を思い出し、彼がベルトを打ち下ろす毎に快楽を得るようになった。

その日の夜、ジョーには裸を見られないように（何故ならベルトの跡を見られる恐れがあるのだ）ベッドに入ると、いつも以上に燃え立ち、ジョーを激しく求めた。ジョーはシャーリーの浮気には全く気がつかなかった。

そしてそれが二年程、続いた。

週に2回乃至3回、バーで知り合った男のアパートで、ベルトで鞭打たれて快楽を得、そして、その夜は、必ずジョーの体を求めるのだった。昼間、ベルトの鞭を受けた夜は、ジョーとのセックスが一段と愉しいものになった。

しかし、バーニー（中年の浮気の相手）は仕事の関係で転勤して行ってしまった。シャーリーは別の男が必要になった。

それも彼女を鞭で打ち、激しくイタブル男でなければならぬのだ。シャーリーはバーを転々と回り、彼女の目になう男を探し歩いた。これはと思う男と知り合い、彼のアパートへ行だったが、彼はただ普通のセックスをするだけで、彼女が求める鞭を用いることはなかった。

しかし何人目かに、遂にそのような好みの男に、めぐり逢った。ルイという元プロレスラーである。ルイは決してハンサムではなかったが、魅力的であり、体格も大きく強かった。ルイは、シャーリイをアパートへ連れて行った。

アパートへ入った途端、ルイはシャーリイを奴隷の様に扱った。

まず、衣服を脱ぐように命令した。その口調が、あまりにも王侯の様な風格をしていたので、シャーリイは思わず、彼のいうままにセーターを取り、ブラジャーをはずし、スカートを落とし、パンティを脱いだ。

彼女の裸を見たルイは、「まあまあ、いい体をしているな」などと、つぶやきながら、ベッドを指で示し、そこにうつぶせに寝るよう命令した。パーニーと違っているのは、彼女にパンティを口にふくむように言いつけたことである。

今、脱いだばかりのパンティを、口の中に入れるのには、シャーリイも多少とまどったが、彼に言われるままに、口の中に入れてしまった。

ルイは壁にかけてあった鞭を手にした。今迄経験したベルトではなく、本物の鞭であっ

た。そう思っただけで、シャーリイは早くも彼女自身が濡れてきてしまうのだった。

ルイは、最初のうちは、力を抜いて彼女のお尻を鞭で打っていたのだが、シャーリイの快楽の表情を見て、腕にだんだん力が入り、そのうち、力いっぱい、しかも所かまわず鞭をふるいだした。

シャーリイは、彼の振り下ろす鞭の勢いが強ければ強い程、愉悅の表情を示した。口の中にパンティが入っているの、ただうめくだけであったが、そのうめき声には苦痛の感じは無く、それは快楽のうめきであった。

気が遠くなる程、鞭打たれ、そして快楽を味わったシャーリイは、その夜は一層ジョーとのセックスで燃えたのである。

しかし、夫であるジョーは妻のシャーリイの好みは全く分からず、シャーリイとしてはルイの鞭が必要であり、当分、昼間のルイとの交渉を持たねばならないのである。

以上で告白を終えたシャーリイは、最後に「ルイは私の愛人であり、私は週に少なくとも3乃至4回は彼と逢い、そして家に帰ってジョーと激しく燃えてセックスをしている。

私は自分がしていることのモラルについては何とも判らないし、もし判ったとしても、そ

れは全く違いのないことである。何故なら、私は今の通りのことを実行するからだ。私自身、我慢することが出来ないし、そうする必要がある。しかし、ジョーが、このことを知らないでいてくれることを望む」と、述べている。

これを読んで小生は、カメラ・ハントで辻村氏が何回か書かれた川路夫人や関谷夫人、それに夫婦でプレイを楽しんでいる渡部夫妻等の気持が、ある程度、理解できた。

サディストで独身の小生としては、このシャーリイの様な女性が現われることを望んでいるが、なかなか、思うようにはいかないものである。

このシャーリイの気持を男性に置き換えて考えてみて、自分の妻以外の女性と外で激しいSMプレイをして、シャーリイの場合のように数回のファックをした後、帰宅して自分の妻と一層激しい、しかし、ノーマルなSM抜きのセックスに満足できるのだろうか。これは小生が独身であるから分からないが、辻村氏に一度、聞いてみたい問題である。

×

×

×

×

×

×

カット・岡 たちし



女谷流やじろべえ

小石川にある安房東条十萬石領田下野の中屋敷は、今日もうららかな秋の陽ざしをうけて菊の花が一面に咲き匂^{よわい}っていた。

「菊は、よく千年の齡を保つと申します。お

連載・時代S小説

紫 蘭 の 門

(15)

谷神死せず、是を玄牝と謂ふ
玄牝の門、是を天地の根と謂ふ
綿綿として存するが若く
用之不動——「老子道經成衆」

見事な丹精でござりまするな」

元禄屋の驚のような眸が、一面に咲き匂った美濃菊を見渡す。主人の領田が「元禄屋にも花の美しさが、わかるのか」と言った時、

「花は花でも、元禄屋殿の花は、三角の花園ではござらぬかの」

よこから、口をはさんだのは、昌平坂学問所の林大学頭有文であった。

昌平坂学問所といえ、五代將軍綱吉公が

上野忍ヶ岡にあった林家の私塾を、湯島に移されて以来、朱子学をもって幕府に仕え、別して当十一代の家齊公が、まだ若年のみぎりに執政であった老中松平定信侯が、これを官学、つまり幕府お抱えの学問と正式に決定、昌平坂学問所と名づけられた、日本最高の学府であった。その学府の学長にふさわしく林大学頭有文は、時流に遅れてはならじと当世流行の茶筌風に結った鬘とおなじく、口のはうもいたって如才なかった。

風 流 極 道 軒

「元禄屋敷。いまの日本、つまりじゃな、六十余州をうごかしておらるる貴殿じゃ。みどものような、名ばかり、いたずらに高うて、台所は火の車という男とは違う。さぞかし多くの傾城傾国の美女を泣かせ、翻られたことでござろうが……しかし」

林大学頭、チラッと領田の顔を窺って、「この女ばかりは、みどもたちの手に負えぬと申そうか。ともかく……」

長廊下を曲がると、菊の香りにかわって、じめじめした、かびくさい匂いが鼻につく。「むこうから『縛られ屋』と自称し、責め折檻して欲しいと願っているのですからな」

ふと、その一つを覗きこんだ元禄屋は、「領田様。フッフッフ、この女は、いかがでござりましたか」

美和であった。

中屋敷中の男女に翻られてから、すでに五

前号まで——豊太閤の埋蔵金の謎を秘める五夜のロザリオを探し求める元禄屋はある日、老中領田下野の中屋敷に招かれる。そこには、『縛られ屋・朱房のお銀』と名乗る美女が、逆剝一家の女谷流緊縛術をうけて喘いでいた。

日たつ。足枷をはめられ、両手には南蛮鎖が架せられているが、さすがに浅黄木綿の囚衣を着けることを許されていた。人の足音に気づいたのか、脅えたように奥の壁に身をよせて、こちらを眺める姿が、いたいたしい。

「家臣どもにくれてやってな、余はまだ賞味しておらぬわ。菊にまさる百薬の長と言われるものも、まだ吸うてはおらぬ。現在、身を浄めさせておるところよ。湯浴みをさせ、珍味佳肴を与えてな」

「それはお楽しみなこと。して夫のほうはいかががなされました、確か衣笠内記とか」

「女房が、このように命令に従うてくれるので、大切に扱うておる。持つべきものは、よき女房じゃ」

「まさしく。美和という女、いにしえの山内一豊侯の妻以上の働きといえまするな」

林大学頭が、たかだかと笑った。

山内一豊——織田信長の臣。安土城での馬揃えに際して、天下の名馬を、妻のへそくりであがない、主君の目にとまり、土佐二十二万石の大名となった男。その妻が稀代の良妻とよばれるならば、夫を始め一族の生命を救うために、心ならずも裸身をさらして囃りものになっている美和は、確かに林のいうとお

り、六十余州に並ぶもののない理想の妻、良妻の鑑と言わねばなるまい。

「今日は、そちには用はない。ゆっくり休むがよろうぞ」

美和に声をかけた領田は、牢と牢との間をぬけて、奥にたちはだかっている扉のすみを押して、中へ元禄屋を案内する。

拷問道具が所きらわず、ちらばっているなかをぬけると、これはまた、十二畳ほどの豪華な部屋があった。

「奇妙な部屋でござりまするな。地下に、しかも拷問蔵と隣り合わせとは」

「フッフッフ、病膏肓に入る。最近つくらせたものよ」

「美しい女囚とみれば殿がここで、じきじきに、お取り調べをなさりまするか」

「女囚とばかりは限らぬ。美しい女であれば誰でも……な。御政務多忙のおり、このくらの楽しみがないと老中職はつとまらぬて」

領田、正面の脇息によると、たかだかと笑って見せ、ポンポンと手を拍った。

襖がひらいて先ず姿をみせたのは、昌平坂学問所の助教三杉才次郎と、東条藩の軽輩であったが、馬竿筒を献じた功績で百五十石取りの侍となった下林。うやうやしく、あたま

をさげた。

つづいて――

半四郎格子に朱珍の帯、深川崩しの鬘も仇っぽい、アッと、息をのませるような美しい女が、逆剝の美女衛門たちを、あたかも五人の小者を従えるように入ってくると、三つ指をついて、潤んだ眸を、元禄屋に挙げ、

「朱房のお銀と、もうします。縛られ屋」

を稼業といたしておりますゆえ、どうぞ、ご存分に、この妾をお責め下さいませ」

うわ目づかいに見上げた、その顔、その所作が、キリリッと、きまる。

(まるで市村屋の舞台のようだな)と元禄屋は、盃を唇に、はこびながら、ふと思った。

為永種彦の脚本で、いま評判の「鎖格子女之拷問」で女主人公のお琴を演じている沢村田之助を思いうかべたからである。

だが、いま目の前にいる朱房のお銀という女と、市村屋の舞台とは、根本から違う。

いくら女形として、天下に名をひびかせているといっても田之助は、所詮、男。それにひきかえ、このお銀は、老中領田下野や林大頭が、わざわざ天下の豪商元禄屋を招いたのも、さもありなんと、うなずけるほどの美形であった。その美しい女が、

「神妙にいたしますゆえ、どうか思いつくままに、この妾をお黽り下さいませ」

というのである。しかも、うしろに小者のように控えているのは、ほかならぬ逆剝の美女衛門と、その子分たちではないか。

「これで皆さま、お揃いになったわけでございまするな」

最後に、のっそりと姿をみせたのは、北町奉行所の与力、元禄屋とは昵懇の工頭監物。

ニヤリッと笑うと、

「お銀。まずは裸になることだな。責め場の女は裸でなくちゃあサマにならねえ」

おどろいたことに、工頭にそう言われてもこの女、別に驚いたふうも見せなかった。

「ハイ。これは妾としたことが、ご無礼でござりました。お白洲にひき出されました女がきものをつけておりましては、お取り調べのお役人さまに対して失礼でござりました」

と立ちあがり、朱珍の帯に手をかけて、

「どなたさまか、お手伝い下さりませ……」と艶っぽい眸をめぐらせていたが、と、それが、三杉の上でとまった。

「私が……でござりまするか」

まだ若い三杉才次郎がドギマギするのを、やさしく微笑んだ、お銀の顔は、三杉ならず

ともゾクッゾクッとするほどの美しさ。

「光榮至極！」と立ち上がった三杉の手に、どっしりと重い帯が手わたされる。

帯揚げ、伊達じめ、腰紐と、目もあやな小物類が、つぎつぎに乱れ箱にかさねられ、半四郎格子の桐生銘仙の襟が、中腰になったお銀の背をすべると、あとは袖したのあいだ江戸紫の長襦袢姿。きりりつと結ばれた真紅の細紐が、花蠟燭の焰に、ひときわ映えた。

「三杉さま。この紐をとって下さいまし」

そおと立ち上がったお銀が、右手を花結びの細紐にあてていう。

「承、承知いたしました！」

これからスッ裸にされて黽られるはずのお銀よりも、あきらかに三杉のほうに興奮してしまっていた。ふるえる指先で、花結びの結び目をとくと、真紅の蛇のように細紐が、下半身を這って青畳の上で、とぐろを巻く。

ほんのりと漂ってきた女体の匂いが三杉の鼻をくすぐり、胸を妖しく、ときめかせる。

「これもですのよ。三杉さま」

つづいて江戸紫の奥にある真岡もめんの肌襦袢の紐を差ししめされて、ボオッと顔を赤くそめるところ、昌平坂学問所の助教であるこの三杉、見かけよりも、かなり初心な男と

みえて、どうやらその紐をときおわると、手持ちぶさたにボンヤリと立っているばかり。手出しひとつしようとしな。

そのそばで、腰を下ろし、右膝を立てたお銀は、

「工頭さま。おいつけに従いまして、朱房のお銀、裸身をさらしまする」

右手でサアッと左の袖を長襦袢と肌襦袢もろとも押し下げ、燦めくような背中の左半分をあらわにしたお銀は、つぎに左手で右肩にかかっている江戸紫を、はねあげた。

パアッと、まるで純白と紫の二色の花びらのように、長襦袢と肌襦袢が舞い散り（アッ！）と、かすかな吐息を洩らしたお銀が、双の乳房を両手で交叉して、うづくまる。

餅肌というのであろうか、練絹のようなとこののであろうか、弾力性のある乳白色の肌が、花蠟燭の光のなか、噂にきく異国の金剛石という宝石のように、きらめきわたる。

「いかがでござる、元禄屋どの。美しい肌でござろうかの」

林大学頭の問いに、軽くうなずいた元禄屋は、その肌の輝きが、日本橋の本宅に捕えてある久我雅子のこはく色の肌と、二月ほど前に、さんざん玩具にした怪盗徳夜叉の情婦小

紫のお景の肌を、あわせてふたつにしたような輝きをもっていることを知る。

「雅子を一責めしてやらねばなるまい。貴子もな……それに、お景のやつ。絶品の女じやったが……」

元禄屋の心のうごきをよそに、

「縛られ屋、お銀。裸になりましたございます。どうか御心のままに、お縛りなされますよう」

お銀が、かすかに眸をあげると正面の領田に向かって申し出た。

領田の眼が、美女衛門に、そそがれる。

承知しましたと立ち上がった美女衛門は、

「このような女じゃ、遠慮は、いるまい。初手から女谷流やじろべえでいくぞ、槍助！」

手にするは、松の繊維で作った鶴飼い縄。滅法、水に強いが、そのかわり荒々しい毛羽が縄面を、おおっている。

「お銀、吠え面かくなよ」

「ホッホッホ……この、お銀姐さん。なまじのことでは哭きませぬ」

お銀、逆剥一家に対すると、急に伝法な口調になる。

「たいそうな口をきくじゃあないかい。フッフッ。この台に、乗ってみな。背中をの

せるのよ。天井を向いてさ」

棒助と架助が、もち出してきたのは、戸板状の台。中心に四尺ほどの棒が、つき出していたが、その棒の上には、二尺に一尺の戸がうちつけられている。

その一本の棒で支えられた四尺も高い板の上に仰向けになれ、と牢助がいうのである。

「ちょっと無理だよ、一人じゃあ」

乳房を抱きかかえていうお銀に、

「ええい、手間とらせる阿魔だぜ。じゃあ、ここに仰向けになんな」

槍助の指さすまま、青畳の上に右膝をつき

そのまま、うつぶせたお銀は、次の瞬間、くるりとして裸身を一回転させた。普通なら乱れるはずの紅地友禪の湯文字の裾が、ぴったりと足首ちかくまでを覆ったままなのは、さすが「縛られ屋」のみごとな早業といえよう。

「両膝で、おさえやがったな。それにしてもうめえものよ。いい身だしなみだぜ」

いまに、その紅地友禪の奥のおくまで、さらけ出してやるとばかり槍助が、その湯文字と白足袋のあいだの、わずかにのぞいている足首の部分に鶴飼い縄を喰いこませる。

つづいて、もう一方の足首、両手首。縄は四本。長さは、いずれも二尋半――。

イメージギャラリー

『海底プレイの客』

飯田ひろくに



両乳房をおおったままで、手首に縄を縛りつけられる、お銀を見下ろしていた元禄屋はその美しい横顔に、チラッと深い憂愁の影が

刷かれるのを見逃がさなかった。

（この女、影がある……「縛られ屋」などとあばずれ女のふりをしているが心根は純情の

ようじゃ。こいつは面白うなってきたわい）

ただ単に、縛られ鞭打たれるのを喜ぶ女なのかと思っていた元禄屋にとって、これは新しい発見であり、やっとお銀の裸身と、これからの展開に興味が持てた。

（なんでもまた八百八町に例のない「女縛られ屋」などを稼業にしたのか、この女……）

元禄屋の驚のような目が、髪も髭も、なかば乱れてしまった深川崩しの黒髪のしたで、かすかに息づいている潤んだ眸を見つめる。

「さあ、乗っけるぜ」

下半身を架助がかかえ、胴を棒助と牢助、頭を槍助がもつと、どっこいしょと抱えあげ黒塗りの板の上に置く。

二尺に一尺の板である。

肩の下の部分から尻の上半分が、かろうじて、のっかった不安定な状態で、お銀が、

「お、おっこちるじゃあないの。危いわ」

「じたばたするねえ。一本の指でささえられたやじろべえが、おっこちねえように、お前さんも決して落ちちゃあしねえさ」

槍助の言葉の終わらぬうちに、四人がサツと手足にからまっている四本の鵜飼い縄に手をのばすと、一気に、ピンと張りつめる。

この時、四人の呼吸が少しでも乱れたなら

ば、お銀は落っこちてしまっていただろう。

四尺高い板の上で「大」の字にされてしま
い、お銀の乳房が、始めて男たちの視線をあ
びる。むっちりとした豊かでおおきな、まるで
白鳩の夫婦が巣ごもりでもしているような乳
房であった。その頂に紅珊瑚の珠のような乳
首が色づいている。

「よいな。一、二、三っ！」

かけ声もろとも四人が、ピーンと、はりつ
めていた縄を、グイッと下へ、戸板状の台座
の四隅にある鉤に、ひっかけると、ギューッ
と、ひきしぼる。

「ウツ、ウ、ウツ、痛ッ。いたいじゃあない
のさ」

思わず、お銀が悲鳴をあげた。

や・じ・ろ・べ・えには、指をあてる中心がある。

いまお銀は、背骨のなかほどを、その中心
にして、両足と両腕を大きく開いて大弓のよ
うに反りかえらされてしまったのである。

へ・そを上にして、半月のように深い弧を描
いた、お銀の裸身――。

お白粉気のまったく健康な女体であつ
た。ホクロはおろか、しみ一つなかった。腋
の下と、もうどうしようもなく紅地友禅の湯
文字からのぞいている内股のあたりが、そこ

はかとなない女の妖しい色香を、ただよわせて
いる。

「親分、この匂いは、いったい何でしょう」

ぴくぴくと団子鼻を、うごめかしたのは棒
助であった。

棒助とて、名にしおう逆剝一家。女にかけ
ては一癖も二癖も手練の持主。その棒助が
まだ嗅いだことのない香りだという。

「どれ、どれ……」

美女衛門が腰をかがめて、お銀の眉をひそ
めさせたが、なにやら、げんげんな顔をする。
彼にも、また理解できない香りのようだ。

「フッフッフ……美女衛門殿。その匂いはの
黒水仙じゃ」

「黒水仙……水仙は、黄色か白にきまってお
りますよ」

からかわれていると思ったのだろう、美女
衛門が怒ったように言うのを、林大学頭、得
意気に、

「ところが、ちがう。交配と申してな、品種
を改良することによって橙色でも黒でも紅色
でも、つくることができるのよ。現に小石川
の百草園でも黒水仙の花が春さきに咲いてお
る」

「ヒヤアッ、それはおったまげた。そのでん

でいくと、黒い桜もできるし、黒い梅の花も
咲くってもんで」

「とすると、女の花園ってえやつも、黒じゃ
あなくて、紅くも金色にもなるってわけで。
ヘッヘッヘッ」

牢助たちが、びっくりするのを、林は、
「お手前がたは、異人の女を御覧になったこ
とがないので、ご存知あるまいがの」

ゆっくりと立ち上がった大学頭は、紅地友
禅の布に手をかけると、お銀の反応をたのし
むように一寸刻みに、たくりあげ始める。

「異人の女は、黄金色に、まるで秋の稲穂の
ように、かがやいておる。なかには、紅色の
ものもあるのじゃて」

これは、嘘である。林大学頭とて、異国の
女を、まだ見たことはなく、たしかめたこと
の、あるはずがなかった。ただ、毎年、江戸
に上ってくる長崎出島のオランダ人の一行か
ら、通詞を通して酒席で聞いたことを、うけ
うりしたまでである。

そんなことを知ろうはずのない美女衛門た
ちは、いかにも感心したように頷いている。

と、逆さになっているお銀の顔が揺れて、
「早くお責めなさいな。このままでは背骨が
痛むだけですよ」

朱い唇から、甘ったるい燃えるような息を吐き出す。

「フッフッフ、責めておるではないか。ほれこのように」

林が、持ちあげた紅地友禅の布を、ひらひらさせながら言うのに、お銀は、

「くすぐったいだけではござりませぬか。極悪の罪を犯した女囚のように拷問にかけてくださりませ……」

「よおし。槍助、行け。やじろべえの極意」挑発された棒助が怒鳴る。

「合点だ！」

天井を見上げた架助が、氷柱つららのように垂れている棒のひとつを、ひっぱると、その棒がするすると、おりてくる。径一寸五分ほどの棒のさきは、巨大な釣針を思わせるように鉤型になっており、純白の布が幾重にも巻かれてあった。

「お銀、泣くなよ。いくら、これまでに何十人の男に縛られ責められたか知らないが、この女谷流にかかって哭きわめかなかった女はいない。クッククッククック……」

棒助が、狙いを定めて、その大きな釣針に力をかけたとたん、

「ウ、ウッ！」肺腑から、こみあげてくる熱

いものを押し殺したような、お銀の呻き。

たしかにお銀にとって、これは始めての経験であった。縛られ屋稼業を始めて一年有余のあいだ、大名、富豪、大地主たちに招かれて、一夜十兩で、裸身を存分に鬻らせてきたものの、こんな大掛かりな責めは、いまだかつて受けたことがなかった。

「あとにのこるような傷だけはつけっこなしだよ。商、商売に、さしつかえるからね」

お銀、口では気丈なことを言ったものの、これからどうされるのか、不安になった。

「準備できたな。それ、行け！」

槍助の号令とともに、架助が、戸板ほどもある台座の仕掛けを操作する。

ゴトン……と、音がして、お銀を載せた板を下から支えている棒が動く。ゴトン、ゴトンと鈍い音につづいて、大弓のように、のけぞっているお銀の裸身が廻り始める。

そのはずみに、元結がきれて、深川崩しの髷がサアッと黒い滝のようにながれ、そのなかほどで、鮎色のべっ甲の櫛が、花蠟燭の光をうけて、なまめかしく輝く。

「アッ、う、うごくじゃあないの。揺れる、揺れる……目、目が廻っちゃうよう」

回転の速度が次第に早くなった。

が、どんなに速くなっても、上から垂れている棒と、その尖端の釣針は、一点で、しっかりと、お銀を引っ掛けたまま、離れようとはしない。

くるくるくると、裸身が、まわる。

「アウ、ひ、ひどいわよ。こ、こんなの。止めて、とめてよ、ほんとに。もう、妾、こんなのに弱いよう。や、やめて。ア、アウ」大弓のように反っているだけでも苦しいのに、その上、回転させられては、なみの女であれば、数呼吸も、もつまい。

それを、しっかりと臉をとざしてお銀は、耐える。

悲鳴が、しだいに低くなり「ヒイッ！」という声にかわったとき、領田が合図した。

失神させては何の面白味もない。

「ひ、ひどいじゃあないの。……こ、こんなことってあるのかい！」

回転は、とまった。だが、四尺高い黒塗りの板からは解放される様子もない。

「フッフッフ……ひどいのは、これからさ」槍助が右乳房をグイッと、ねじり上げる。

「まったく見事な乳房」

左乳房に棒助が、かぶりつく。

「こいつは、邪魔じゃあないのかい。もうこ

うなった以上は、目ざわりもいいとこだ」

架助が、紅地友禅の湯文字には、ふつりあいな白綸子の紐の結び目に手をのばす。

とたん――

「ダメ！ 舌を噛みます！」

お銀の声には、まるで真剣で勝負するような烈しさがあつた。

元禄屋がニコツとする。

何ごとも、真剣勝負の好きな男である。

「な、なんだって。もう、何の役にもたたないんだぜ。お銀」

架助が、さらに迫ろうとするのを林大学頭が、とめた。

「架助さん。その紐にだけは、触れてはならぬ。それが、掟。縛られ屋、お銀」の、言

わばたった一つの泣き所ですよ」

「林さまァ！ おっしゃらないで……朱房のお銀、この白綸子の紐だけは、死んでも守りとおすと女の意地、いのちかけた女の意気地でござりまする……」

しらけた顔の架助の横から、獄門の牢助がふかぶかと「八」の字に、ひらかれて垂れ下がっている太腿に、豆本多の髷を、すり寄せて、フウツと、いきを吸いこむ。

「黒水仙の匂いってのは、いいですねえ！」

そういった次の瞬間には、

「アウ！ 架、架助さん。アッ、アッ！」

もう、のけぞりようもない、お銀の裸身である。ただ、右に左に、黒髪が揺れ、鮎色にかがやいていたべっ甲の櫛が、コトツと音をたてて、畳におちた。

「架助さん、どきなされ」

いままで、お銀のさかさになった顔すれすれのところで、酒をのんだり、言いたい放題のことを言っていた林大学頭が立ち上がると架助に代って、お銀の「八」の字の真正面に陣取る。

「茶筌のまげというのはのう、こういうときに役に立ちますのじゃ。老中殿も、元禄屋殿も、よく御覧じろ」

茶筌とは、裏千家であれ、表千家であれ、武者小路千家、三斎流、唐軒流、石州流、遠州流と、いずれの流派……いや、これは言葉が、すべった。茶筌は、茶筌。で、茶筌髷とは、髪を頭の百会（ひやくえ）の上で、たばねて組緒でしめつけ、あと三寸、人によっては五寸も七寸も、一尺ちかく、同じ組緒で、棒のようにまきつけて、そのさきを、バラバラにして、いわゆる茶筌のかたちにした髷で、とっと早く言えば、五夜のロザリオを後世

に残した豊太閤の主君である、織田右府信長公の頭を思い出していただければよい。

ところで、林大学頭の茶筌の髷は、ことさらにながく、組緒の部分だけでも一尺ちかくもあるだろう。

その髷を、異国で金剛石とよばれる宝石もこのようであろうかと思われる朱房のお銀の燦めく太腿に近寄せた。

「参るぞ、お銀どの！」
と……。

鈍い、やるせないような声があたりに、ひびき始めたのである。

「ウ、ウ、ウウツ！」

茶筌髷の尖端のはおけた部分が、おどろくべき責め具に変わった。お銀は、縛られ屋――自分は、あくまでも縛られ屋である」という自我の根柢をこえた、女の業とも言うべき、おぞましい被虐の嵐のまえに、恍惚として屈服するほかはなかった。

「あ、あ、あなたァ！ 伊、伊平次。アッ！ あ、あなたァ！」

朱房のお銀

縛られ屋・朱房のお銀――

イメージギャラリー 『縄しばり準備』 須坂 旭



つい、二年ほどまえまで、幸福な家庭の女房であった。

神田は明神下で人入れ稼業を営む阿弥陀の仁兵衛の長女に生まれて何不自由なく育ち、十九の春に、浅草は弁天町にすむ朱房の伊平次と、好いて好かれて夫婦となった。

岡っ引きとして評判この上ない夫と二人で人もうらやむ暮しであり、浅草、柳原、御徒土町界隈、江戸八百八町とまでは言わないまでも、両国橋から不忍池にかけて、あれが朱房の伊平次と女房のお銀さまだと、あちこちの長屋の連中から、もてはやされ、

朱房の伊平次、よい男

もっといいのが女房のお銀

朱房のお銀は、お江戸一

などと、若い衆たちが、ひやかし半分に口ずさんで、家のまえをとおりすぎたものであった。

ところが三年前、北町の名奉行として評判の高かった遠山左衛門尉景元（巷談で、いわゆる遠山の金さん）が寺社奉行に転じ、後任の北町奉行として牧野駿河守成綱が就任するに及んで事情は一変した。

いままでの「疑わしきは罰せず」の基本方針が、「疑わしきは捕える」に変わり、与力同心、岡っ引きを、白洲に集めて牧野から厳重に申し渡されてしまったのである。そして伊平次の直属する与力・生仏の与惣平さまとよばれる加藤与惣平が左遷され、黒尻善内という、胸に一物も二物もある鬼与力が、やってきたのだった。

しかも黒尻善内は伊平次を、とくによびよせ、このたび、新しく触れ出された奢侈禁止令の徹底した取り締まりをおこなうにあたってその中心となるよう下命したのである。

その奢侈禁止のお触れというのが、またひどいもので、女髪結、私娼の禁止はともかく

博奕もダメ。役者絵、女絵、絵草紙もダメ。こどもの玩具も百文以上のものは禁止。金銀細工、べっ甲の櫛まで使ってはならないという。

内心、不満であったものの、岡っ引きという立場は、まったく弱いもので、伊平次としても、手心を加えはしたものの取締まらざるを得なかったのだが、一年ばかりたった一昨年の六月の六日、お銀の幸福な生活が、たった一晚のうちに、まるで砂で築かれた家のようにガタガタと崩れおちてしまったのである。

それは、むしむしする宵であった。

見廻りから帰った伊平次と楽しく夕飯をおえたあと、つくろいものをして、さきに蒲団に入って、やすんでいた夫のかたわらにお銀が、そおっと入っていったのが、夜も四つを過ぎていた頃であつたらうか。

「お銀。すまねえが、稽古台になってくれねえか」

待っていたように伊平次がいう。

「あいよ。お前さんのためなら、なんでもするよ」

稽古台とは、捕縄術の稽古台のことであった。岡っ引きである以上は、二尋半の早縄と五尋半の本縄——紺地・二本の捕り縄に生命

をかける。竹内流捕縄術を習得している伊平次は、腕がにぶらないために、時々お銀を相手に稽古をするのが常であつた。

「お前さん。このままでいいかい。それともこれも脱いじまおうか」

これは、お銀の誘いでもあつた。悪徳無道な岡っ引きや与力・同心ならいざ知らず、まっとうな岡っ引きなら、裸にむきあげた女に縄をかけることは、まずない。伝馬町の拷問蔵だって、正式には囚衣の上からでなければ拷問できない掟になっている。

それを知りながら、お銀が井筒格子の寝巻の伊達巻に手をやったのは、寝巻の上から縛られるよりも、素肌をキリキリと縛りあげられるときのほうがジーンと骨身にこたえるものがあり、いかにも夫の伊平次のものになつてしまったのだわという、女房としての満足感にひたることのできるのが一つと、もう一つは、裸にかけるときのほうが、夫の縄捌き、より慎重であり熱心であることが、この頃になって、わかつてきたからであつた。

（この人でも、やっぱり寝巻の上からよりも裸のほうに興味があるのだわ）

浮いた噂一つ、たてない申し分のない夫でも……と、おかしくもあり、それほど自分一

人を愛してくれる夫に、できるだけのことはしてさしあげなくっちゃあ——という妻としての、いじらしい気持もあつた。

ともかく、あれやこれやの気持が重なった上で、要は、愛する夫のためならと、お銀が伊達巻をどうとするのを、珍しく夫が「今夜はいいよ。明日の朝が早えから」と制して敷蒲団の上に正座したお銀の背後に回る。

「いやだあ、女のあたしに恥をかかせてエ」甘えるようにすねて襟元を、かき合す。

「怒ったのかい。おい、お銀」

と、あとは、いかにも朱房の伊平次とよばれるほどのことはある素早い縄捌き。

手首に、二の腕に、そして胸乳に、ピシ、ピシッと縄目が、きまってくる。

乳房の上下に縄が走る——まったくそれは走るという形容がピッタリの、みごとさであつたが、その瞬間の何ともいえないゾクゾクとする感覚は、お銀にとって得難い醍醐味になっていた。

縄掛けは、愛撫に似ている——

ズルズルズルズルと、いたずらに時間を長くかけて肝心の所を押えていない縄掛けは、女をただ、いらいらさせるばかり。

短いけれど、キリリンと、征服感を感じさ

せ、しかも肝心要の急所をピタッと縄掛けする緊縛は、女体を存分に燃え上がらせることであろう。

短くて冗漫な縄掛けが、下。

短くてもキリリッとしているのが中。

そのうえに――

女は、いつでも誰でも、上を求める。

とまれ、お銀夫婦は、まだ若い。伊平次の腕前も竹内流捕縄術は上。三十前後の若者にしてみれば申し分のない縄掛けであつたし、お銀もまた十分に稽古台の役を果たすと、やがて夫の逞しい双腕のなかで、こちよいい寝息をたてはじめた。

どのくらいの時間が、たったであろう。

台所の奇妙な物音に気づいたのは、お銀のほうが早かった。

「あんた……」

軽いいびきをかいている伊平次を揺りおこす。伊平次が、目をさますや、脱兎のように跳ねおきて、神棚の朱房の十手に手を伸ばす――と、その一瞬、

「こなくそ！」

野卑きわまる掛け声とともに、横に払われた長脇差がきらめいて、伊平次がクル、クルッと二回転すると血沫をあげてぶっ倒れた。

「あ、あ、あんたあ！」

かけようとする、お銀の両手が、逆手にとられたかと思うと、よこから足払いをかけられて、よろよろと、ひざまずく。

「伊平次。そのおりは世話をかけたな」

置行燈にかけられていた羽織がとられ、ニユッとあらわれた浪人者の頬に走る刀傷。

「権四郎、山形権四郎だな」

左脚の腿の付根をふかぶかと斬りさかれ、畳の上を這いずり廻る伊平次に縄をかけていたもう一人の浪人者が、

「金城だ。金城文作、フッフッフ、覚えておるか、伊平次」

この二人、それに目の前でお銀を縛りあげている栄次、仙吉、駒七の三人、あわせてこの五人組は、柳原土手に巣喰う夜鷹たちを仕切る無頼の一味であつた。無頼といつても見逃がしておきさえすれば至って暖想のいい男たちであり、吉原遊廓の公娼を買うほどの銭のない男たちにとって、夜鷹はやはり必要な存在であると思つていた伊平次は、さほど嚴重な警戒の目を、この土手にむけなかった。が、奉行が代り、上役の与力が黒尻になるとともに事情が変わつた。北町奉行として功績をあげることに急な牧野駿河は、黒尻たちに

私娼は一人たりとも許すなと厳命。まるで太平洋戦争直後の東京の、パンパン狩りのような非人道的な光景が江戸の街々で繰りひろげられたのである。伊平治も、その取締まりにあたらざるを得なかった一人であつた。

夜鷹たちという金づるを一挙に失つた山形たち五人組は、土手を通る町人二人を殺し、伊平次の手で御用となり八丈島に流された。立身出世に急な政治家の犠牲になつた、かわいそうな連中――といえないこともなかつたが、刑は五年の遠島刑。あれから、まだ一年もたつてはいない。

「島を破つたな、権四郎……」

「あたりきよ。あんな島に、そういつまでも居られるわけはねえやな」

山形は、簞笥やら戸棚やらを、ひっぺがして目ぼしいものを物色している駒七たちを心地よさそうに眺めていたが、その眼が、お銀の乱れた襟もとから、むっちり、なかば、とび出している、乳房に注がれたのは当然であつた。

金城とても同じ思いであつた。

ピタッと意見の合った二人は、敷ぶとんを柱にしぱりつけた伊平次のほうに押しやって流れでる血が部屋の半分にこないように、せ

きとめると、大菊小菊をあしらった秩父銘仙の掛蒲団を畳にひろげ、

「お銀。どうじゃ、相談にのらんか」

と、ぶるぶると震えているお銀のそばに山形は、かがみこむと、

「恨みかさなる伊平次だ。みてみな」

あごに手をやって夫を眺めさせる。刹那、

「あ、あんたあ！ や、やめて下さいよう」

お銀が叫んだのも当然、金城が、夫の右腕を肩の付根から斬り捨てようと刀を振りあげているではないか！

「相談というのは、フッフッフッ、お前が俺たちの言いなりになると言えば、伊平次の右腕は、そのままにしておいてやらあ。イヤだというなら、右腕を斬り捨てる。鼻を、そぎおとす。その上で眼ん玉を、くり抜いてやってもいいぜ。さあ、どうだ、お銀！」

翡翠のかんざしや二朱銀、小粒など、目ぼしいものを風呂敷包みにつつんだ駒七たちも淫らな顔つきで、やおらニタニタと、お銀のまわりを、とりかこむ。

「け、けだもの！」

お銀は、両足で畳を蹴ると、ずるずると壁ぎわに後退した。

まったく、けだもの。いや、犬畜生にも、

おとる、あさましい山形の申し出であった。

「けだもの！ とるものを取ったら、とっとと出てお行き。簞笥の中でも、戸棚の中でもないでもくれてやるからさ！ はやく、出てお行きたらア」

火を吐くような、お銀の叫び――。

が、それとても、山形の「いいのかい、お銀さん。可愛い亭主の伊平次さんが、片眼片腕、片脚で、ふた目と見られねえなりになっても」という猫撫で声と、金城が、大上段から振りおろした刀の閃きのまえには、はかなく消えた。

金城の刀が、きらめいた刹那！

「や、やめてえ！ や、やめ、やめてよう！ やめてったらあ！ やめるのよう。け、けだもの！」

怒りの声が、ながく尾をひいたあと、しばしの静寂が、あたりをつつんだ。

宵の口から、むしむししていたのが、とうとう雨になったらしく、それも大粒の雨が、しきりに屋根をたたいている音が、聞こえてきた。

その静寂に耐えきれなくなったように、お銀が、かすかに身動きして眸をあげた。

夫は、無事であった。まだ、右腕は肩につ

いていた。ホオッとするお銀の耳に、その夫の声が、ひびいている。

「お銀、こいつらは気違い犬だ。狂犬だ。負けるんじゃない！」

「こ、この野郎！」

金城の刀が、よこなぐりに伊平次の右肩に喰いこみ、グシュッ……という鈍いひびきとともに伊平次の腕の付根が、ほんの皮一枚のこして、ダラリッと、ぶらさがる。

「あ、あんたあ！ あんたったらあ！」

渾身の力を振って躍りあがり、夫にかけよろうとしたお銀の足は、栄次が、ヒョイッとさしのべた長脇差の鞘にとられて、秩父銘仙の掛蒲団のうえで、よこしまに倒れる。

ハッとおき上ろうとする首領を、仙吉と駒七の脇差の鞘が、グイッ、グイッと、斜めに交差して押えこんだ。

「お銀、どうする！ 大人しくいうことをきけばよし、さもなくば、今度は、伊平次の右眼をえぐりとるぜ。どうじゃ！」

「だ、だれが、お前たちなんかの！ 妾は、死んでも朱房の伊平次の女房。な、なんで、お前たちなんかの！」

必死で叫んだものの、お銀、縛られた身を駒七たちに抱きおこされて、正面の夫を一目

みると、フラフラッとなって、前屈みに倒れこんでしまった。

蘇芳のような血糊のなかに左脚がなげ出され、右腕は、付根からもうすこしではなれようとしている。鮮血があとからあとからほとばしり出て、このまま放置しておくとお血多量で死はまぬがれまい。右腕がだりりと下ったために関節が外れて、縛られていた縄が、ゆるんでしまっていたが、もう、伊平次には反抗する力はおろか、残っている左腕を動かす体力ひとつ、ないようにおもわれた。

その伊平次に、手当をしてやるどころか、さらに、左眼をえぐりだすというのである。

「外道……畜生、人非人……」

失神しそうになるのを、やっと押えながらお銀が呻く。

「な、なんということ……」

五臓六腑をかきむしるような悲痛なその呻きも、金城たちにとっては、復讐の快感をよりたかめるための効果をもたらずにすぎないかのようであった。

「お銀。ひとこと、いやあいんだ。妾は山形さまに抱かれます。赤裸になつて思うがままに翻られますと。そうすりゃあ、大事な大事な伊平次の手当てもしてやろうじゃあな

いか。ええ、どうする」

山形につづいて栄次が、肩口を抱えおこして、涙にぬれてゐる頬を指先でつつき、

「はやくしねえと、伊平次親分は死んじまうぜ。いいのかい、それでも。自分の貞操を守りたいばかりに亭主を見殺しにして、それで女がたつとでもいうのかい」

栄次たちに較べると仙吉は、いちばん手がはやかた。横ずわりになつてゐるものだから、どうしてもあらわになつた燦めくように白い太腿に手を伸ばす。

「はやくしねえか、この阿魔！ 金城さん、かまやあしません、右眼でも左眼でも、えぐり出してやってくだせえ」

ピクッ、ピクッと、お銀の躰が、悪寒にでも、とりつかれたように震えた。

「よおし、三つかぞえて、返事がなけりやあ右の眼を、えぐるとするか。よいか、お銀。一、……二……」

はりつめた空気のなかで、お銀の見せた表情は、凄愴の一語につきた。

伊平次の妻である身。それが、伊平次を救うために、眼の前で、よその男たちに身をゆだねて翻られる——、翻られなければ、五人の男たちのもてあそびものにならなければ、

夫の生命はない！

夫の生命か、妻の貞操か——二者択一を迫られたお銀は、後者を捨てる決心をした。

悲壮なばかりの顔をあげたお銀は、金城が「三！」と数えるのと、ほとんど同時に、

「お、お待ち！ ど、どうともするが、よいよ。そのかわり、夫の手当てをしたいから、この縄を解いて頂戴！」

「ダメだな。お前の縄をといてみる、朱房のお銀と異名をとるほどのお前だ。キンタマ蹴りあげられねえともかぎらねえ。手当ては、駒七たちがしてやらあ」

最後に残された、万に一つの機会を狙ったお銀の計画も、これで潰れた。

くやしそうに唇をかみしめていたお銀であったが、「どうするお銀！」という山形の怒声に、

「は、はじめて頂戴。はやく……あの人の手当てを始めてよう！」

「お、お銀。い、いけねえ。そ、そいつばかりはいけねえ……や、やめろ！」

やっとそれだけ叫んだ伊平次は、はりつめていた気持がゆるんだように、血糊のなかにぶっ倒れた。それを抱きおこして、駒七たちが手当てを始めたのをみつめていたお銀は、



イメージギャラリー

『戦利品多数あり』

岡

たかし

「こ、ここではイヤだよ。と、となりの部屋で、ね。あ、あの人の見てるところでは金輪際、いやだから、ねえ！」

「フッフッフ……そうはいかねえ。俺たちであ、伊平次に復讐するためにやってきたんだ

ぜ。眼の前でお前を慰めなきゃあ、気がすまねえんだよ。つべこべぬかすと、ほんとに両眼とも、えぐり出すぞ」

金城が、残忍な本性をむきだしにして叫ぶと、井筒格子の寝巻の襟に手をかけて、グイ

ッと背中の方へへと、ひきさげた。

「アッ、アッ！ そ、そんなに急ぐんじゃあないったら。アレッ！ あ、あんだあ！」

「なにが、あんだ、アーだ。この場におよんではじたばたするねえ！」

縄目からとび出した輝くばかりの乳房を、

グイグイとねじまげ、押しひらき、こじりつける金城に呼応して、山形が正絹の伊達巻を、といて手もとにたぐりよせ、寝巻の裾を、はねあげた。

「アレッ！ ひ、ひどいじゃあないのさ！」

「じたばたするねえ！」

紅地友禅の湯文字ひとつにされたお銀を押し倒した金城が、醜くゆがんだ唇で、お銀の唇を、しゃにむに覆った。

と――

「ヒャア！ こ、この阿魔！」

すつとぶようにお銀の躰からはなれて、顔を押えた掌の指のあいだから、かすかに赤い血が糸をひく。

「金城さん、やられなすったね。俺は心配してたんだ、なみたいてえの女じゃあねえと」

そういった栄次は、片手をあげて仙吉、駒七をよび、

「スッ裸にひんむいて大の字に縛りつけっち

やえ！」

と吼えたと、まっさきにお銀めがけてとびついていった。

いくらお銀が気丈だとはいえ、三人も四人もの無頼の男たちにとびかかれては、禿鷹に襲われる白鳩に同じ――。

何度か悲鳴をあげているうちに、いったん縄を解かれて押えつけられ、右手は簞笥の金具に、左手は、壁の大釘にそれぞれ縄でしばりつけられ、右足は同じように簞笥の金具、左足は、茶簞笥の取手にと、手足を「大」の字に、ひらかされてしまったのである。

その上に、右に左にはげしく振られる顔を押しこまれて、駒七が、ニヤリッと笑ってひきずり出した煮しめたようなフンドシを、朱い唇のおくへと押しこまれては、

「ア、アウウ！」

これが最後の抵抗の叫び。あとは、もう何をされようとお銀の身をまもるものは何ひとつなかった。

あらかじめこうなることを予想してくじをひいてきたらしく、金城が、まずお銀に、にじり寄る。いま、噛まれた唇の傷はたいしたことにはなかったようだが、怒りに顔を真赤にそめて、まだ固まらぬ傷口を舐めながら、紅

地友禪の湯文字の裾を左と右に大きくはねあげる。と、それをみていた仙吉が、

「いい匂いじゃあねえか、駒七。岡っ引きの女房にしとくのはもってえねえ」

ゴクリッと唾をのみこんで、

「金城の旦那。こいつも、もう邪魔でござんしょう」

と湯文字の紐――それは白綸子の紐であつたが――に手をかけようとした。

と、血糊のなかから、やっとな身をおこした伊平次が、

「お、お銀！ そ、その白綸子の紐は……」

幽鬼のような声をあげたが、栄次に横っ腹を蹴りあげられて、そのまま、ドウツと、うつぶせると、あとは身動きひとつしなくなつた。が、お銀は、夫の声をはつきりと耳にした。伊平次のいった白綸子の紐とは、晴れて夫婦となつた初夜、お銀が身につけていた湯文字についていた紐であり、それが気に入つたのか伊平次は、すべての湯文字に白綸子の紐をつけさせていた。いわば、それは、夫婦の象徴ともいふべきものであり、夫婦のかたい契りをあらわすものでもあつた。

その紐を他の男に解かせるんじゃないやあねえと――夫は言いたかつたのであろう。

お銀とても、その結び目は、生命かけて、どれほど守り抜きたかつたことであらう。

が、紅地友禪を情容赦なく金城がはねあげたように、栄次の指にも遠慮はなかつた。

必死で腰をくねらせるのを、むしろ、楽しみながら、解きおわると、

「まったく佳い匂いのする女だぜ、フッフッフ……」

湯文字に顔をうずめていたが、やがて、ポイツと片隅に、ほうり投げる。

こうして、一糸もまとっていない豊満きわまりないお銀の肉体に、一刻、一刻と、それは、それは、眼をおおうばかりの復讐の私刑が加えられたのであつた。

くじに従つて四番目の仙吉などは、

「アア、これでスウツとした。いつ獄門台にかけられてもいいようなコンコロモチだ」

といい、なおも、そのあたりにある徳利やら、ほうきのさきやら、はては、置火鉢のなかから火箸をとりあげて、執拗な私刑を続けたのであつた。

いつのまにか、外は、土砂振りの雨となつていた。

伊平次とお銀夫婦にとって拭おうとしても拭い去ることのできない六月六日の夜があげ

て、山形たち五人組が、高笑いしながら引きあげていったのは、七つ頃であつたらうか。

もしも、正午すぎ、与力の黒尻善内が、この凌辱の家に所用で立ち寄りなかつたとしたならば、二人はそのままことされていたかも知れなかつた。

「お前さん。もうダメ、これでお別れよ」

数日後、お銀は、真剣な表情で伊平次にいった。夫のみにてゐるまえで五人もの男にもてあそばれた以上、もう女房としての資格はない。お銀は、そう思いつめていたのである。

が、伊平次は、

「俺が悪い。悪いのは俺だ。お銀、どうかこの俺を見捨てないでくれ！」

あの夜を境として、別人のように気弱くなつてしまつた夫に懇願されると、

「あ、あんたア！」

と、お銀は、病床の夫にしがみついて泣き崩れるほかはなかつた。

隠いま、妾がでていったら、誰が、この夫を看病する……。

お上に、慈悲はなかつた。十手取縄は即刻おとりあげになり、年二十両あまりの手当てもなくなつた。また人情というものも紙風船のようなもので、いままで、歌にまでしてい

た二人のそばから、五人十人と知友が消えていき、その日の生活にも、ことかき始めた。

人入れ稼業の家に生まれて育つたお銀は、仕立てものも苦手であり、こどもたちに読みかきを教えることも得意ではなかつた。

二人が生きていくためにと深川の料理屋につとめにでたものの、僅かのお手当てでは到底、夫の薬代をまかなうことはできない。

三カ月ほどたつた八月の末――

その小料理屋にふらりと現われた黒尻が、一夜、十両になるのだが――と、とびつくような話をもつてきたのである。

十両といえば大金――それを一夜でという以上、なみのことではなからう。が、医者への支払いに困つていたお銀は、清水寺の舞台からとびおりるつもりで黒尻の話にのつた。

黒尻には、生命を救われたという恩もあつたし、一糸まとわぬ恥かしい姿を見られてしまつてゐるというひげ目もあつた。

――場所は本所四丁目。

当世「通りもの」番付で関脇をはる蔵前の豪商・三河屋魚宇の邸。

魚宇をはじめとする九人のお大尽や幕府の要人たちに、酌をしてまわり、盃をさされて酔わされ、あぐくのはては、半裸にされたお

銀の軀に、黒尻の紺地の本縄が、蛇のようにからまりついたのであつた。

その縄は、夫の伊平次のように、キリリツとしたものではなく、ズルズルといたずらに手間だけかけた縄掛けであつたが、ともかくも十両の約束が、意外にもお祝儀がはずまれて、十五両という大金となつて翌朝お銀の懐にはいった。十五両あれば、高価な薬、栄養のある食べものを、夫のために、十分、買うことができた。

黒尻からの誘いが二度になり三度となり、朝帰りをして何もうねね夫にすまぬと思ひながらも、傷がもとで五体が麻痺し、いつ回復するかかわからぬ夫のために、「縛られ屋」を稼業とするに至つたのであつた。

白綸子の紐だけは、これからさき、どんなことがあつても、二度と、よその男たちには解かせぬ――と、かたく心に誓つて。

黒水仙の匂い

それから一年半――

縛られ屋稼業は、繁昌した。世のなかにはこうも、女を縛つて喜ぶ男がいるものかと、あきれるくらいの数であつた。

与力の黒尻にいわせると、女を縛る趣味をもたぬ男は、貧乏ひまなしで子たくさん——の連中か、男として精力に欠けているやつだという。男性的機能のあふれているものは、誰しも女をいじめつけたがり、その最上の手段として、縄を用いるのが普通の状態でありそれに金でもたまってくる、輪をかけて女体緊縛を好むようになるという。

「第一、江戸城の大奥じゃあ、縄がなくちゃあ夜もあけぬというし、老中、お奉行、諸大名、みな、やっておいでなさる。ただ、それが拙者たちの耳には入らないだけの話さ」

黒尻は、さも当然のことのようにいつてのけたが、たしかにそうに違いないと、お銀はまだ健康であったころの夫との夜を思い出し胸乳のあたりを、キュッと、ちぢめる。

それにしても、何百人の男たちのお縄をうけたことであろう、五十何人目かまでは数えていたが、あとは、もう数えるのをやめてしまった。多分、その三、四倍の数にはなるであらう。

その間——

お銀は一度も、夫・伊平次に縛られたときのように燃えあがったことがなかった。

お銀の心と体を徹底してときほぐし、法悦

の呻きをあげさせたものは一人もない！

それがいま！

女谷流やじろべえ——四尺高い台の上で、林大学頭の茶笥責めをうけながらお銀は、ともすれば、チョロ、チョロと焰の舌のように燃えあがってくる。疼きに気づいていた。

茶笥責めだけならば、こうまでうろたえもしなかったであろうが、美女衛門たち五人の男たちの責めは、寸分の狂いもなく、お銀の被虐感を執念深く攻撃してくる。

架助と棒助の手にある孔雀の羽が、両脇腹から乳首、白鳩が巣ごもりできそうな奥深い乳房の谷のあたりを絶間なくくすぐり、牢助と槍助が、大きくひらかれた太腿から膝、ふくらはぎ、足の指のまたにまで、責め手を這わせてくる。

その上、親分の美女衛門——

さかさにのけぞっているお銀の小桜色にそまった咽喉もとから肩、鼻へと、ひぐまのように毛むくじらの顎を、すりつけてくる。

六人の男に同時に廻られるという経験は過去にも何回あった。が、このように、六人揃って、ぴったりと呼吸をあわせた廻り方をされたことはない。

「アッ、アッ！」という悲鳴が、次第に高くせわしなくなってくる。ときどき、うっすらと開かれる眸のおくにも妖しい疼きのかげがきらめく。

正面の領田が、ゆっくりと盃を元禄屋に返したとき、——

「お銀……どうだ！」

美女衛門の声に、花蠟燭が、ひときわおおきくゆらぐ。

美女衛門の狙ったのは、悲鳴をあげているお銀の、形のよい唇であった。ちよっと、小鼻を両側から押して、朱い唇をひらかせる。

——ゴボツ、ゴボツ、ゴボツ……

やるせない音とともに、はげしくお銀はせきこんだ。が、さすがに「縛られ屋」としての意識が働くのか、その咬歯は決して、責めてくる相手を、傷つけるようなことはなかった。

（こ、これはいったい、ど、どうしたこととお銀。いけない！ あの人のお縄を想い出したりしてはいけないわ、お銀！）

ともすれば桃色の靨のなかにひきずりこまれそうになり、お銀はハッと自分を制した。

（伊、伊平次さん。アッ！ 妾、耐えます、耐えてみせます。ア、アレッ、お、お銀、な

なによ、このくらい、のことで。しっかりおし。しっかりするのよ！

どうしようもなく乱れようとする自分に何度もあるがう人妻の、いじましいほどの女心が、馥郁と匂う太腿や、大きく波打つ脇腹にあらわれて、ゴクンと誰かが、生唾をのみこむ。

「なるほどの元禄屋。そちのいうとおり、一人の女を飼いなすには、五人の男が必要じゃて」

領田は盃を唇にはこんだが、その眼は、まんじりともせず朱房のお銀の、責めに悶える肉体の変化を追っていた。

「領田さま。修身齊家治國平天下とひとくち

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下さい。電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

に、林大学頭さまたちは、昌平坂學問所に集まってくる六十余州選り抜きの俊秀に講義なされておられますが、はたして、どうですか

「それは、なんのことじゃ。余には、ちっとも……」

「ハッハッハ……おわかりにはなりますまいて」

元禄屋、ときに破天荒のことをいい出す男である。

いままさに、責める六人の男の暴虐の嵐のまえに、異国で金剛石とよばれる宝石のような肌を輝かせ、無法な責めに、豊頬を歪めて朱い唇を虐げられながら、明らかに恍惚の表情をうかべて、のたうっている朱房のお銀をチラッとみやり、

「修身はよいとして、齊家は、乱世のもと、破天下のもとでございましょうぞ」

いぶかしげに、眉をひそめた老中領田下野は、

「そなたのいうこと、あとで、ゆっくりと、孔孟、四書五經の教典に照らして考えおくといたそう」

「フッフッフ、孔孟だけの世のなかでは、もはや、ござりますまい……」

悠然と、美酒を唇に含んだ元禄屋は、あとをつづけようとはしなかった。

そのとき、林大学頭の茶筌が這い出てきて、フウウッ！と両肩で、大きな呼吸をすると、

「ま、まったく、凄じばかりでござる。ともかく、この黒水仙の匂いは、絶妙！」

左手で茶筌の組緒をなであげ、それを自分の鼻にもっていつてのち、領田の鼻先に、パァッと押しひらく。

「まさしく、百薬の長が、これよのう」

と、たちあがった領田は、自ら、部屋のすみの戸棚をあけると、金時絵の角盃を取り出し、

「ひさかたぶりに保養でもいたすか。菊はよく千年の齢をたち、フッフッフ、玄牝は佳く万年の寿をもちます」

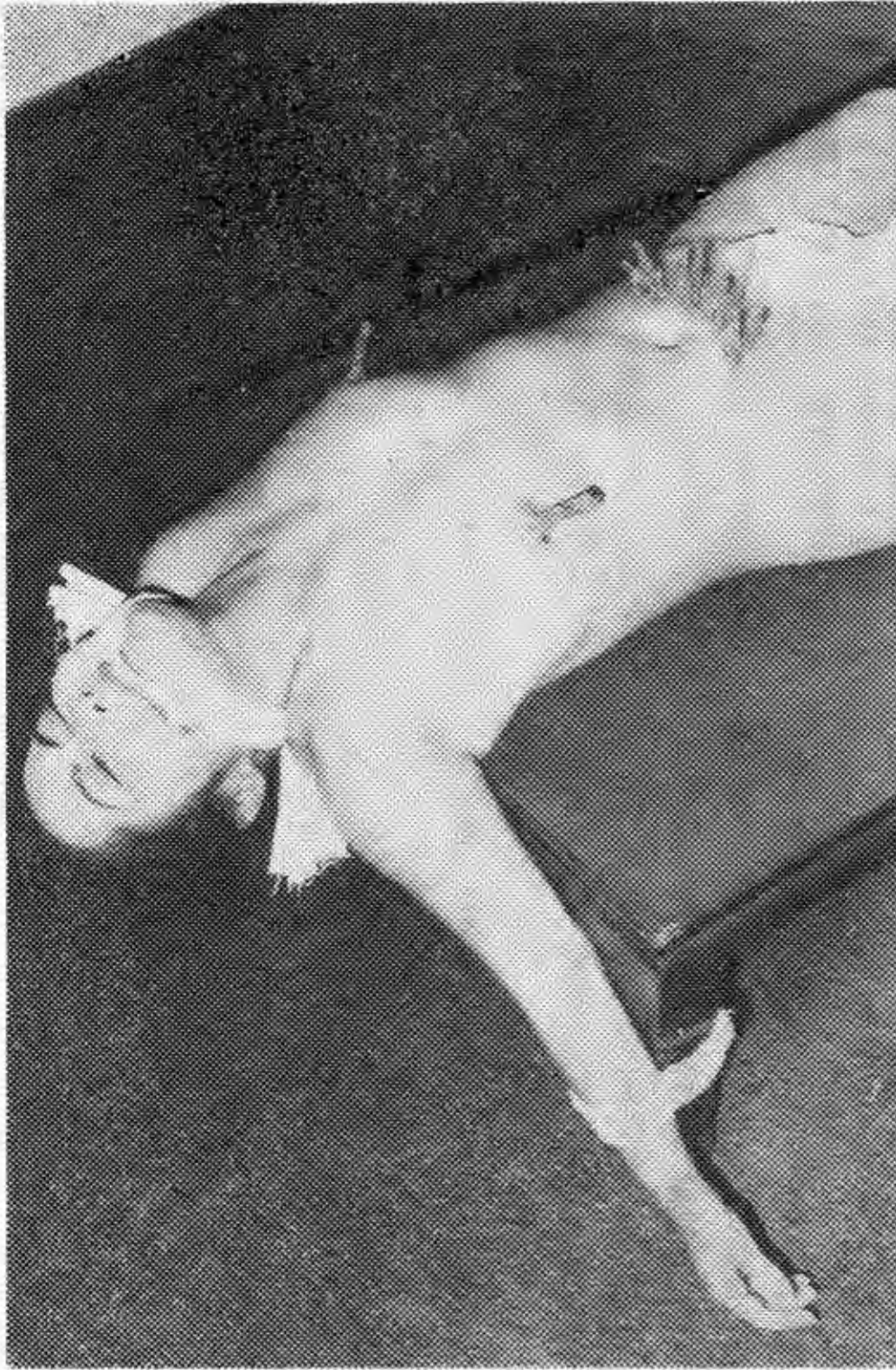
領田の手には、象牙の匙があった。

その匙が使われるとき、朱房のお銀は、これまで味わったことのない、いや、女のなかで、万人に一人、味わうことができるかできないかという陶酔のなかに、われ知らずおちこんでしまうであろう。

<告白>

愛と倒錯の記録

早坂郁子



早坂信治の妻の、郁子でございます。

私の、縛られた、あられもない恥ずかしい写真が、夫の手によって「奇ク」の誌上に発表されまして、たくさんの方の同好ファンの方達のお目にとまりましたことを、恥ずかしく存じております。

その上、私達夫婦の間で秘められた、交質的な奇行の数々が夫によって告白された今、愛する夫のすすめ、文筆にうとい私が、過去を想い出しながら、始めてペンを採りました。まことに恥ずかしいような、筆運びではございますが、私達と同じ趣味をお持ちの方達なら、私の気持も分かって戴けると存じまして、とりとめのないことでも、書き綴ってみる気になったのでございます。

普通、結婚をしまして、十五年近くもたった夫婦といえ、何から何まで、夫は妻のこ

と、妻は夫のことを知りつくし、まことに単調なものと思われれます。

しかし、私の場合、二十才で、夫と知り合い、火のように激しく燃え上がる恋に耐えきれず、夫との結婚を両親にうちあけたのですが、農家の古い、因習的な父親は「お前の婿は俺がきめる」の一言、いくら私が頼んでも許して戴けませんでした。あまつさえ、遠い親戚に預けられそうに、なったのでございます。

日毎、激しく燃え上がる恋情に、耐えきれなくなった私達は、しめし合わせ、都会の片隅の小さなアパートに、逃がれるように身を隠しました。

夫と一緒にいることだけが、倅せな私にとって、誰に遠慮や気兼ねすることもなく、煩わされることもなく、唯ひたすらに、夫の愛を信じ、その力強い愛に支えられ、最愛の夫と二人きりで過ごせる毎日に、本当の女の倅せを、掴んだ気がいたしておりました。

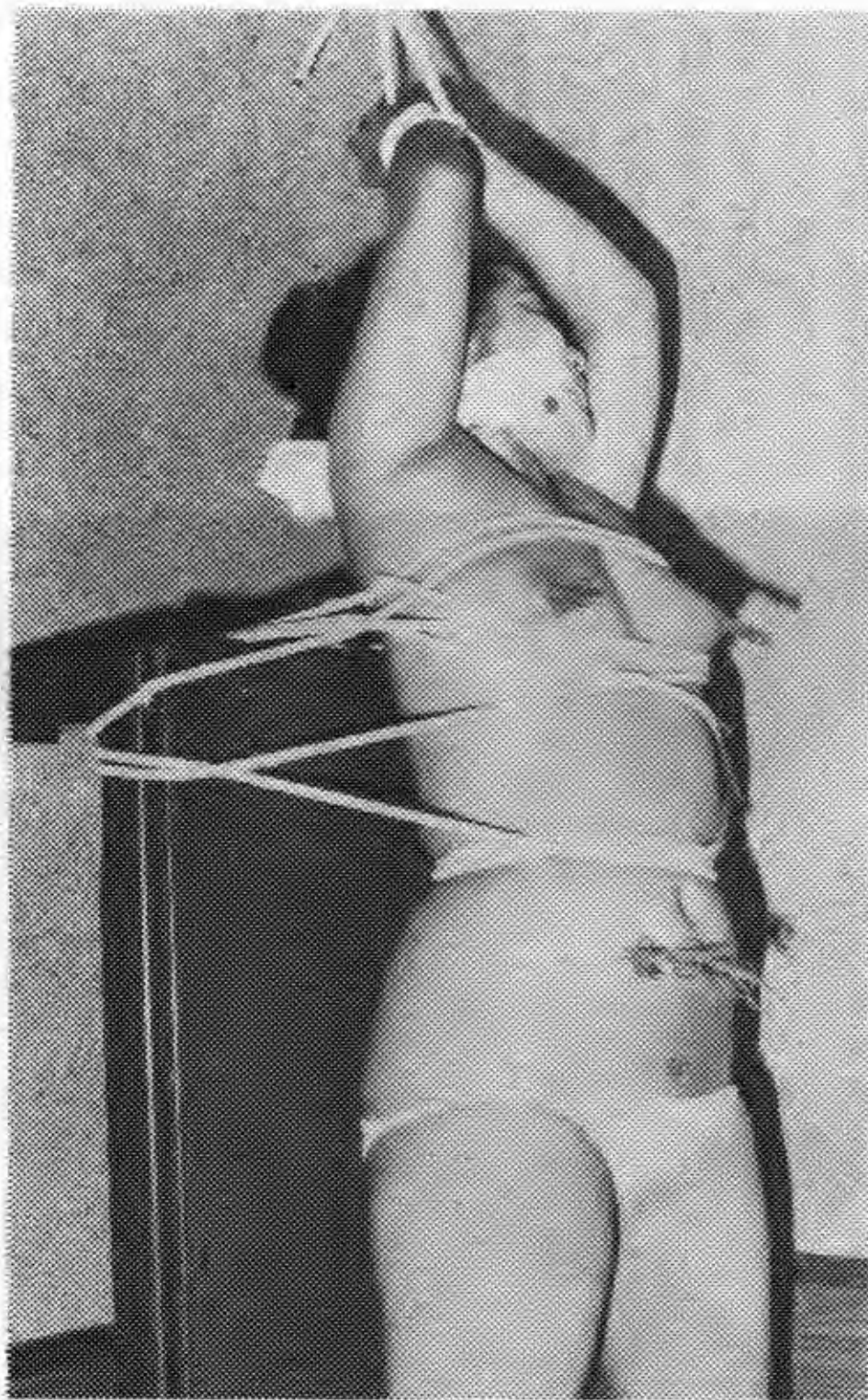
その当時、夢のような、二人きりの甘い生活の中で、夜毎、夫婦の営みを求める夫が、時おり、まるで私の身をなぶるように嗜好する、恥ずかしい行為は、その頃の、結ばれて間もない、性知識に全くうとい私には、夫が

変質者ではないだろうか、想像さえ感じながら、恥ずかしさと困惑に、うろたえるばかりでございました。

しかし、日常におきましては、とても私には、やさしくしてくれる夫の心遣いを見るにつけ、いつしか夫の求める恥ずかしい行為にも「これが夫婦生活だ」と、自分自身に言っ

ようになったのでございます。

私を、愛したばかりに家業を捨て、私達の生活のために、慣れない日傭仕事を続け、汗と埃にまみれて働く夫に、感謝しながら、少しでも報いてあげようと心掛け、夜毎に求められる激しい営みや、変質的な恥ずかしい行為にも、黙って、夫のほしいままにさせていた私の体が、いつしか五感に、しびれるような陶酔を覚え、狂おしい愛撫に乱れ、はした



ない声を挙げ、恍惚の中を、さ迷うようになりました。

苦勞をかける夫に、満足して戴こうと、求められるままになっていた私の軀に、性の快感が芽ばえ、夫の強い激しい愛撫で、湧き上がる絶頂感に、いつしか喘ぐ私の心を見透かすかのように、次第に大胆になってきた、夫の変質的な恥ずかしい行為が、剃毛、浣腸、異物挿入、人肌キャンパスと、まるで私の軀を苛めるかのように、性の欲びに開花した私を、嗜好し続けたのです。

いつしか私自身も、夫の嗜虐的にも似た羞恥行為を、激しい営みの愛戯と考え、甘い陶醉に、ひそかに心を、燃やすようになったのでございます。

その頃の、貧しくても楽しい生活の中で、熱心に「奇ク」を読みふける夫に、私もいつしか興味をそそられ、夜、夫が寝ついたあと「奇ク」を読み始め、娘時代には想像も出来なかった、嗜虐プレーや、緊縛図に驚き、耽美と倒錯の世界に、欲びを求める人達の、意外と多いことを知りました。

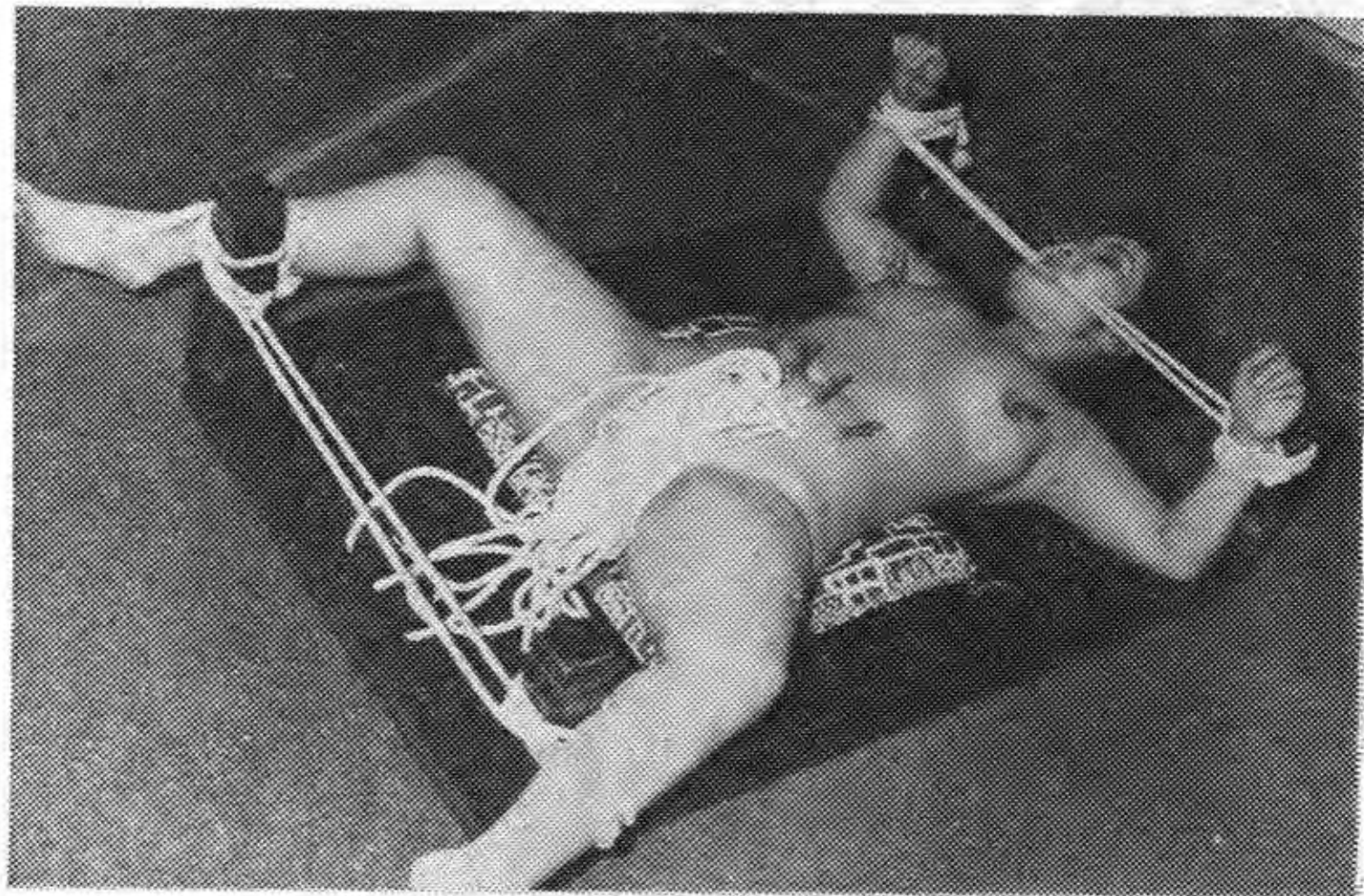
丁度、私達が一緒に暮らすようになってから七、八カ月程、経った頃でございました。いつものように帰宅した夫の手に、何処で買

い求めてきたのか、真白いロープの束が握られていました。

夕食のあと、いつになく真剣な顔で私を見つめ、つきつめたように「今夜、お前の軀を縛って楽しむからね」いつもの、やさしい口調の中にも、私にももの言わせぬ、強い顔つきで、い出したのです。

夫の目を、掠めるように「奇ク」を読み、その倒錯の世界に欲びを求める人達や、また夫がそれに興味を持っていることは知っていましたが、今それが、自分に向けて果たされようとされ、私もあの、誌上の緊縛図のように縛られ、なぶられるかと思うと、思わず一瞬、顔がこわばり、軀が熱くほてるのが感じられました。

これまでの、夫の嗜虐的な恥ずかしい行為も、そのあとの激しい営みと、身も心も、とろけるような甘い愛撫で、全てを忘れ果ていたのでございますが





夫のこの急な申し出には、あの緊縛図の苦痛に歪んだ表情が私の目に浮かび、何をされるかわからない不安と困惑に、何とか拒否しよう、懇願しましたが、夫の思いつめた表情と、たつての願いには、とうとう負けてしまい、私は黙って、両腕を背中に回し、始めて夫から、いましめを受けたのでございます。

肌を刺すようなロープの痛みに、眉をしかめる私を、やさしく「痛くないか」と、何度

も尋ねながら、上気した面持ちで、私の軀を縛る夫の姿は、丹精かけて手掛ける、人形師を思わせ、こうした趣味を持つ夫に愛されるには、私も合わせてあげるのが賢明と考え、夫が人形師ならば、私は夫の思いのままの生きた人形になろうと、心にはっきりと、きめたのでございました。

それ以来、ロープを手になると、貧しさも忘れ、見違えるように活気と、歓びに溢れた

夫によって、さまざまに縛られ、身をさいなまれ、むき出しにされた痴態を晒し、一層激しい責めを願う女となっておりました。

それから三年ばかり、貧しくとも、二人きりの楽しい生活の中で、嗜虐に、なにものにも勝る歓びを感じる夫と、被虐の苦痛に、しびれるような甘い陶酔に酔い、恍惚の境地に誘われ、歓喜に喘ぐ私。愛し合う二人の絆に一層の密度を加える、この密やかな秘め事がかもし出す愛情が、周囲の人達には、仲の良、甘い夫婦と見えたのでございましょう。夫の実家も、私の頑固な父親も、やっと私達の結婚を、許してくれたのです。

晴れて、早坂信治の妻となった私は、妻と呼ばれる安定した台座の上で、より温い、夫の愛情を一身にうけ、その夫の愛に、もっと熱愛されたいと願う心が、素直に夫の趣味に従わせ、いっしか被虐願望の女と育てられ、夫によって、次々と考え出される、羞恥に満ちた責めに調教され、巧妙な責めに導かれ、飼育されてまいりました。

はつきりと、夫の性向欲望に、似通ってしまった私には、夫と争うこともなく、倦怠期も知らず、倅せな生活を、保ってくださることができたのでございます。

夫と二人で無計画に親の元を飛び出したあの頃、若しも夫に、このような趣味がなく唯一時の感情で、いかに激しく愛し合っていたても、恐らく私達は、あの貧しい生活に押し潰され、愛情も、ずたずたに寸断されていたことと存じます。

私達の部屋に、当時のからの「奇ク」が、うず高くつまれているのを見るにつけ、それがまるで私達夫婦生活の歴史を物語っているかのようにございます。

嗜虐に心を馳せる夫と、被虐の欲びに溺れる私。こんな夫婦の間にも、いつしか透き間風が吹き込むように、マンネリの風が、忍び込んでいたのでございましょう。月に三度ばかりの楽しいプレーが二度となり、月に一度と、あれほど激しく求め合い、歓喜の中で渦巻いた欲びにも、新鮮



度を失いかけたことに、気がついたのでございます。

女の私が、そう思うのですから、男性たる夫は、なおさらのこと、マンネリに悩んでいたのをごさいます。私に黙って「奇ク」

忘れもしません。三月号の、「奇ク」を、買い求めた日のこととございました。

その夜、寝室に入ってきた夫が、「これを見てご覧」と、差し出した「奇クサロン欄」に、まぎれもない私の恥ずかしい裸の緊縛フォトが、載っているではありませんか。私は思わず、心臓の止まるような驚きに胸中の血が一度に頭に昇り、激しいショックが私の軀を震わせました。

「何故、私に黙って、こんな恥ずかしい写真を発表したの」怒りと昂ぶる興奮に、涙ぐみながら夫に詰めよりました。夫は一瞬、私の激しい抗議に、顔を強ばらせ困惑した表情を示しましたが、すぐ表情を戻し、いつもの口調で「郁子に承諾を求めても、恐らく断わると思って、黙って発表したんだ。しかし結婚以来、俺が他の女性に迷ったこともなく、俺達夫婦が、これまでに倦怠期も知らないで、円満に生活でき、これからも、より楽しい夫婦生活を求め、お前を、もっともっと愛し続けたいと願う俺の気持が、こうさせたんだ」

普通の人から見れば、自分の妻の恥ずかしい写真を晒すという、まるで気違い沙汰と思われる、夫の行為ですが、考えてみますと、過去、あれほど活気に溢れ、嗜虐に欲情を燃やし続けていた夫が、ここ二、三年、楽しいはずのプレーに、しばしば惰性的な感じが見られ、気力に欠けた態度が、見受けられたようでした。

結婚以来、愛する夫の行為を、私は私なりに努力して、円満な家庭を保ち、夫の気に入られる妻になろうと、どんな恥ずかしい、苦しい責めにも、耐えてきた結果が、被虐に欲びを覚え、いささかでも、夫に飲ばれるマゾ女となってしまう私は、これすべて、夫の愛情を唯、一途に信頼し、頑張ったからでございます。

その夫が、マンネリに悩み、随分と考えたのでございましょう。新しい刺激を求めようとして、このような行為で表わし、その理由に「郁子を、もっと愛したいから」と、いわれれば、この世に、夫に愛されるために生まれてきたような私には、何も申すことはありませんでした。

二人の生活に、嗜虐を取り入れ、貧しさも嗜虐で忘れ、嗜虐の欲びに、夫婦の不和も知

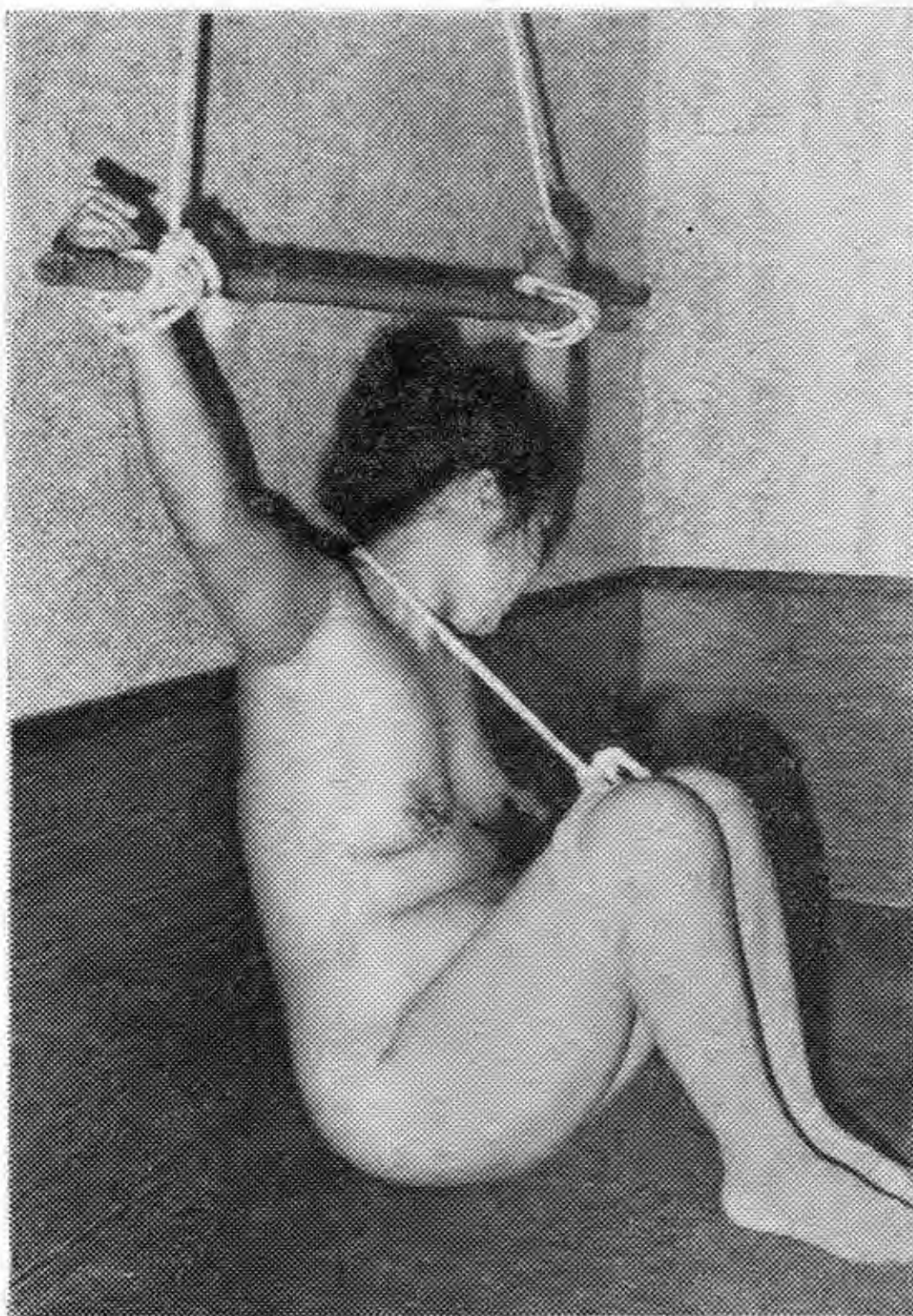
らず、やさしく私の手をとって、倅せな女の道へ連れだってくれた夫も、すでに四十才。嗜虐の活性炭となる刺激が欲しかったのでございましょう。さかんに弁解する夫に、いつしか私の気持も平静に戻り、許す気になっておりました。

私達の、ひそやかな秘密が夫によって、す

べて、あからさまになってからと言うものはまるで奇跡のように蘇った夫の、活気に溢れた嗜虐に、責めさいなまれ、プレーを重ねる度に嗜虐度を強める夫によって、被虐の甘い苦痛に官能を操られ、渴きを知らぬ陶醉に、私も再び溺れているのでございます。

更に、私の被虐願望を高めようとするかの





ように、夫は私を殊更、猥らな格好に緊縛して、私の躰を責めながら、私の耳元に口を寄せて、しきりに交換プレーを促すのです。

始めのうちは、尽きるところを知らない夫の嗜虐心に、不安を感じ、交換プレーを促す夫の声にも、唯、黙って首を横に振り続けていた私も、度重なる激しい責めに対して、官

能を揺り動かされ、次第に昂ぶる歓喜に、大きく喘ぐのでした。

そんな私の心を見すかすかのように、躰の奥深く滑り込んだ秘具を巧みに操作して、私の反応を窺うのでした。その激しい動きが、私の五体を貫き、こらえようのない欲情が、私を絶頂感に追いあげ、恍惚と陶酔の間を、

幾度となく往来させるのでした。

そんな悦楽の境をさまよう私の耳元で、交換プレーを促す夫の声が、快楽の余韻を残す私の鼓膜に伝ってくるとき、まるで催眠術にかかったように、私は夫の求めに頷いているのでした。私にしても△交換プレー▽という未知の興味が、みだらな妄想となって、網膜の中に浮かんでくるのでした。

今までは、自分なりに、被虐願望の女として成長したつもりでございましたが、同好夫婦の方達からみれば、まだまだ未熟者の私でございませう。

しかし、奇クへの『夫婦プレイの実態を發表』を機会に、復活した夫の嗜虐の欲びと、交換プレーに意欲を燃やす夫のことを思うと今の私には、夫と一緒にならば、どんなに嗜虐に満ちた苦しい責めであろうとも、羞かしい責めであろうとも、飲んでお受けし、夫の気持ちにそいたいと思っていますのでございます。

倅せな今、夫と二人きりの楽しい生活の中に、切りはなすことのできない夫婦のSMプレー。こんな生活が、いつまでも続くことを願って、私の手記を終わらせて戴きます。

——（おわり）——



〔告 白〕

優雅な浣腸生活

—— 竹 迫 誠 也 ——

奇クでは竹迫誠也というペンネームで数回掲載して貰っているが、すでにお気づきの通り無類の浣腸愛好者なのである。

丸紅(株)という商社に勤務し社内では少なくとも部課長からも将来をしく望まれている若手新鋭社員の一人と自負している。

酒、煙草もたしなまず、マージャン、競馬というカケゴトには全く関心がなく、せめてゴルフが趣味位で仕事一途の優等生。然し反面、浣腸という秘かなプレイを唯一のストレス解消のよすがにしているのも否めない。

家庭に帰れば二十五才の美人(同僚間の専らの評判)妻に、二才の長女があり、家庭的にめぐまれている。とはいふものの、一方、既に浣腸で結ばれている武子(26才)とは五年にわたる浣腸づきあいでも内港区に私の責任で彼女の世話をしている。しかし、彼女の日常は三菱電機のベテランタイピストとして鳴らしており、彼女の独身主義は社内での七不思議の一つといわれている。

彼女との、ただれた愛欲と、心身共に砕けた様とする浣腸プレイは毎週水曜と土曜に決めている。水曜は夜だけのあわただしい浣腸プレイだが、土曜日はどちらも勤めが午前中なので昼から夜の十一時頃まで十時間余をかけ

で、たっぷり彼女のアヌス責めに専念する。

小生は学生時代(一ツ橋大卒)なんとなく女性に浣腸を試みたいと思い、数人交渉を持った女性に試みたが、いずれも失敗。なかには、「変態!」とののしられ、それっきりの仲になった事もあり、女性に生理的に浣腸を嫌っている事を痛感させられた。ただ、その中で成功した女性が武子なのだ。

「ワタシ、もう結婚出来ない体なの。だってワタシ、浣腸なくしては人を愛せないから。そうさせた貴男がニクイわ。でも、ワタシの浣腸の喜びを知っているのは世界広しといえど、貴方だけですもの。だから、たとえ一生陰の女でもいいの。浣腸だけは、してネ」

と、ただれた浣腸プレイの後、武子によく私に嘆願する事がある。いまでもこそ、武子是我的浣腸なくては生きられぬ女性になってしまったが、当初は、そうではなかった。

数回、体の交渉を持ったあと、今日こそは私のかねてからの秘めた願望であった八女性に浣腸したいVという行為を実現しようと思ひ、ホテルへ行く前に、薬局で大人用いちじく浣腸を買い、懷中にしのばせて、彼女と何くわぬ顔でホテルの門をくぐった。

彼女に浣腸したら、また怒って絶交され

はしないか、という危惧を持ったが、しかしもう何回となく彼女と体の交渉を持った関係上、彼女の性格から、そう無げに怒りはしないだろうと、自分勝手に解釈しながら、彼女の入浴中に、いちじく浣腸の封を切って、いつでも注入できるように用意して布団の丁度彼女の腰あたりがくるところの下に、いちじく二個をしのばせた。

「ああ、いい気持ですこと」

裸身に胸あたりから、バスタオルをまきつけて上気した面持ちで風呂から出て、武子は布団の上に横たわった。

東洋女子大生では真面目な方らしい。ふっくらとした胸の盛り上がり、小梅のようにコロコロと今にも転がり落ちそうな乳首。女性では珍しいデルタの繁茂ぶりは、奥の秘密の門を完全におおいつくしている。武子の体の熟し具合は、その当時が最高であった。

私はズボンを脱ぐのもどかしく、彼女を後向きにすると、「あら、いやだワ、最初から、こんな格好では」と、顔をねじ上げるようにして、私をなじった。

「ねえ、お願い。最初は、いつもの方法で愛して。こんな格好でなら、あとでも、出来るじゃないの」

と、うらめしそうに、私を見上げたが、私には別のコンタンがあった。

腰のそばの布団の下にかくしている、いちじく浣腸を彼女にさとられぬよう、その時期を待った。なにしろ、風呂上がりの上気した女体を眼の前にしているのである。豊かな白桃のような双臀が、切なくうごめいている。

彼女に気どられないように、布団の下からそろそろと、いちじくを取り出し、あやしくおののいて震えている双つの小山の中心で、静かに眠っている菊薔に、一気に注入した。

この瞬間を、何年間、待った事だろうか。

何回か行なって、その都度、失敗の連続であった浣腸が、やっと成功したのだ。

その時の感激は、いまでも忘れない。続いて二個目も一気に注入した。幸い、彼女は浣腸された事に気がつかないようだ。正に、奇襲成功とは、このことだろう。

この感激が余りに大きかったせいか、私の男の精も、それと相前後して相果てた。浣腸とセックスの同時進行は、始めてであり、より以上に空想し、気を配ったせいか、いつになく、グツタリとなってしまう。

と、間もなく、「アラ、変だワ、なにか、おなかのヘンが……」と彼女が言い出した。

「どうした？ おかしいナ、少しもんでやろうか」と、双尻の盛り上がった所を、ワザと手のひらで強く押すようにもんでみると、「いやッ、そうしたら駄目。アレッ、大変、トイレに行きたくなってきたワ」

いちじくを二個まで浣腸された事に、まだ気づいていないらしい。

「駄目だよ、トイレへ行っちゃ、折角のムードがぶちこわしじゃないか」

「だって、本当なんですもの。アラ、いやだわ、許して。トイレへ行かせて……」

「一寸の辛抱じゃないか」

私はあくまでも、とぼけていた。

数分、いや五、六分も耐えたであろうか。も早や限界が来たとみえて、トイレへ走って行った。

以上が、彼女との浣腸づきあいの始めである。あれから既に五年の星霜を経た。

当初、いちじくを使っていたが、一年位経つと、いちじくでは物足りなくなりグリセリンを使用。浣腸器も三〇CCから五〇CC、百CC、いまでは二百CC硝子浣腸器（台東区本郷三丁目（株）トップ発売）を用い、エネマ、イルリガートル（千CC）、カテーテル、腔開孔器、そのほか、アヌス責め用の各

種器具を縦横に駆使している。

浣腸液もグリセリンは勿論、食塩、食酢、ドナンといった刺げきの強いものから、時には単なるプレイとして、コーラ、サイダー、ビール、酒を使う事もあり、水道にホースをつないだ水道浣腸をやる場合もある。

三菱電機での彼女の給料は毎月、手取り八万二千元、それに私の方から毎月、四万円を渡している。彼女のアパートは、バス・トイレ付（部屋代三万千元）なので、浣腸プレイ

には非常に好都合だ。

土曜日に行く長時間の浣腸プレイは、まず二百CC浣腸器を使つての浣腸プレイから始まる。お互いに全裸なので、たとえ濡れても汚れても気にならない。まず、百%グリセリンを浣腸し、そのあと、すべりをよくするため、アヌスのまわりにポマードをべったりと塗り、径四乃至五センチ位のソーセージ（上野アメヤ横丁にて一本二百円で売っている）をアヌスに半分程没入すると栓となって排便

されない。

約二十分程耐えさせると、彼女のひたいから、じつとりと、あぶら汗が流れ、顔面紅潮し、うめき声のみが出て、息もたえだえ、ぐったりと横たえ、時々腹部がヒクヒクとうごめき、浣腸プレイの最後の断末魔を告げる。

頃やよしと、トイレにてソーセージを抜くと、いままで押しに押されてきた便が、濁音と共に一挙に排出される。このように、初めは腹を空にしてジワジワとアヌスを責めてゆく。すなわち、アヒルの口の形をした腔開孔器を彼女のアヌスに没入させ、ネジにて徐々にアヌスを抜けてゆく。

大体、最大限にまでアヌスを抜げると、七センチ位に抜げられ、アヌスのなかのピンク色した部分が、はっきりと外からのぞける。

今度は十五号のカテーテルで抜がったアヌスから腸のなかへ、時間をかけると、二十センチ位はカテーテルが腸内に挿し込まれる。

外から出ているカテーテルの口を、水道口につなぎ蛇口をひねると、水が腸の奥深く、しかも勢いよく注入され、イルリガートルの作用より、はるかに短時間で大量の水を注入できる。以上が彼女とのアヌス責めの一応のパターンである。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

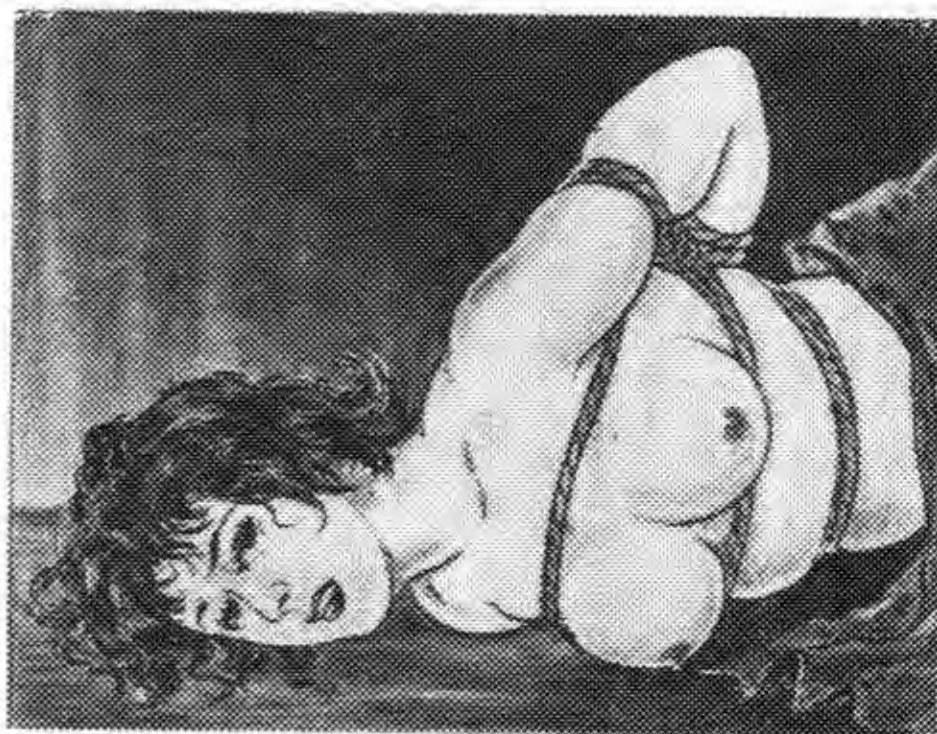
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するたと「告白懸賞」とお書き下さい。



(一)

「珍しく休みがとれたので、山に行きたい。
つきあえよ」

夏休みの登校日の午後だった。生徒を帰して、学校で図書の整理をしている則子のところに、大介から思いがけない電話が、かかってきた。

「驚かさないでよ。いま、すぐなの」

~~~~~ 三部作・縄のある人生模様 ~~~~~

不

毛

の

愛

——「第三部」青い空の涯に悲劇が……。——

久 留 木 栄

「そうだ。ぐずぐずしていると、休みをとり消されそうなんだ。登山口のバス停で待っている」

電話はそれだけで切れた。否も底もない。

言いたいことだけ言ってしまうと、すぐに切る。得手勝手な人だと、腹を立てても、則子は結局、行くに決まっていた。

登山といっても、そう高い山ではない。だから、別に用意する必要もないが、タイトスカートではと思い、家に帰り、黒のスラックスに着替えた。上着は半袖シャツにした。グレイがかった緑を選んだ。

家を出ようとすると、母のケサノが、「少しは落ち着いたら、どうなのよ。子供みたいに、みっともない」と叱った。

叱られるのが当然と思う。学校から帰るや否や、坐る間もなく、バタバタと走り回るのだから。だが則子はチットモ気にならず、小さな化粧道具をハンドバッグに、しのばせることを忘れなかった。

「今夜は、また少し遅くなるかもしれないわよ」

「泊まってくるのかね」



「かもね」

「いい加減にしなさいよ。まだまだ独身なんだから……」

「わかってるわ」

そういつて家を出た。

ケサノが心配するのも、よくわかる。自分で自分が不安なのだから、母が不安なのは、よくわかる。いっそ全部、打ち明けてみようかと思うのだけど……母と向かい合うと、とても、そんなことはできなかった。髪のアタりに、めっきり白髪がふえ、年ごとに老い込んで行く老教師を見ていると、則子は胸が、つまった。自分もやがては、この母のようになるのかしら？ 大介は自分の愛に、こたえてくれるのかしら？ と、思いは千々に乱れる。

だが、気持は浮き浮きしていた。ついで、一度も自ら誘ったことのない大介が誘ってくれたのだ。

則子は家を出ると、まっしぐらに近くのバス停に向かい、登山口行きのバスに乗った。そのバスのもどかしいこと。途中の停留所に止まるたびに、いらいらし、もしや大介が乗り込むのではないかと、昇降口を上がって行く人の顔を見つめた。しかし誰一人として知

っている人はなく、則子は無関係な人の顔がかくも憎らしいものかと、錯覚したくらいだった。

バスの中は暑かった。子供らも多かった。その発刺とした目の輝きの中に「いまは夏休み」という言葉を則子は読み取り、私は、やはり教師だなと思ったりした。則子は自分自身に、落ち着け、落ち着け、と言いつ聞かしていたが、やっぱり落ち着けないとも思った。

## (二)

その大介は、登山口のバス停の前のベンチに坐って、ねむりこけていた。橙色のヤッケに黒いズボン、大きなナップザックにカメラを持ち、ベンチに腰かけたまま、目を閉じ、ゆらゆら上体を動かしながら、軽いイビキをかいていた。

「いい気なものネ！」

と則子は足音をしのげながら、近づくと鼻の頭を、ぎゅっとねずんだ。

「ハフ、ハフ、ハアック」

と半ば、くさみをするような悲鳴をあげ、大介は、とびあがった。その動作がおかしう、則子は声をあげて笑った。

「君か！ 驚かすな」

「あら、それは、こっちの言いたいセリフよ。いったい、どういう心境の変化なの。急に呼び出したりするものだから、散々心配して、かけつけたら、イビキなんか、かいてるんだもの」

「ごめんよ。とにかく、むしろ君に会いたくなったんだ。こんなことなんて、ぼくも初めてだ。だから、うまく言えないんだ」

「そう。それは、それは。いつも滅茶滅茶に料理されるので、きょうはまた、どんな風の吹き回しで、どんな料理にされるのかと思つて、心配してたのよ」

「心配？ 料理？ ハ、ハハ、ハ、ハ。えらくまた、きらわれたものだ。だが、来てくれたのだから、文句は言うまい」

大介は、のっそりと立ち上がり、大またで近づいてきて、則子の手を、にぎった。

「さ、いこうか」

その一言で二人は、それが全く自然であるように肩を組み、山に向かって歩き出した。

「山が好きなの」

「別に」

「どうして山に行きたくなったの」

「とにかく人のいない自然の中に二人きりが入ってみたかったのさ。オレはオレ自身がわ

からなくなってきた。自然の中で、真夜中、降るような星を眺めたら、オレ自身心が、洗われるかもしれない。そう思ったんだ」

「ロマンチックね」

「冷やかすな。オレは真剣なんだ。ともかく最近、仕事をしていても、君のことが念頭から離れないんだ。仕事、仕事、仕事。それだけが人生だったのだが。君に溺れるとはね」

「……」

「君は、うれしいんだろう」

「そりゃ、うれしいワ。だって、真剣に愛されて不幸と思う女性って、いるかしら。私だって血は赤いのよ」

「わかってる。人より、うんと情熱的で積極的で、献身的だって……。それは確かに、うれしいこと、有難いことだが、それに溺れてはいけない。オレはオレ自身に、けじめをつけたと思ったのさ」

「私が別れてっていったとき、あなたはホテルに連れて行って縛りあげたワね」

「ああ、確かに、そうしたよ」

「じゃあ、きょうは私がリードして、いいかしら」

「いいよ。君が、ぼくを縛りあげたければそ

れでもいいよ」

「いやよ。そんなの。でも主導権は持てみたいの」

「主導権か。好きなようにするさ」

「じゃ、約束してくれる」

「子供じゃあるまいし。とにかく、君のいうとおりにするよ」

「まあ、うれしい」

則子は、とたんに大介の首に、ぶら下がるようにしてキスした。二人は立ち止まり、道路の真ん中で仁王立ちになって、熱くて長い口づけをした。

それが、この日の愛の序曲だった。

二人は山頂の北側にある林の中の小さな広場に行った。その草原に大介が持ってきた毛布をしいて横になった。背の低いグミの木やサカキが草原を囲んで天然のとりでになっていた。その外側を、ぐるりと杉木立で囲まれており、寝ると周囲から隔離されたようになり、木の間から見える青空が、まぶしかった。もう夕方近いのであるうか。風が涼しくなり草の葉ずれの音が、さわやかだった。

「静かに休みましょうよ」

まず則子は、そう提案した。

石を枕にねると、大地のかおりが鼻をついて、俗界から解放された気分になった。

「あれから私、時々、洗濯や食事の準備に押しかけて行くようになったでしょ。こんな生活が、一般の夫婦生活かな、などと思ったのよ。あなたと、夫婦生活が持てるなどと思わなかっただけに、そこに新たな幸せがあるような気がしたの」

「そんな幸せなんかは、仮の姿だよ。いつ、どこに転動になるか、わからない。いつ事故にあうか、わからない。いつ、人に殺されるかわからない——ボクの仕事は、そんな仕事なんだよ。だから……」

「だから私は瞬間を楽しみたかったの。別の言葉でいえば、瞬間瞬間の生き甲斐を、確かめたかったの。あなたは、普通の人じゃない……ということは、わかるの。家には夜勤で居ないのではなく、あなたのは事件を求めて居ないのでしょ。火事があればあったで、出かけ、泥棒がつかまったといえ、また遅くなる。暴力団への手入れといえ、午前さま、という、ぐあいでしょ。でも、それだけに、たまに、あなたの家に行き、あなたの顔をみたときは、たまらないの」

「君が、たまらないように、ボクもたまらな



いのだ。君の好意は、ありがたい。衣食住が便利なもの、けっこう。女に不自由しないのは、なおよい。だが、君の気持は重たい。だから、もう逢うまいと思う。だが、一日逢わないと、寂しくて町中を、さまよい歩く。これではサマにならない」

「それは、お互いでしょ。あなたに逢えなかった日、細い田舎道を泣きながら歩いたこともあるのよ。たまに、あなたに逢ったとき、忽ち縛り上げられてしまう。あなたって、そんなとき、何を考えているのかしら。残酷な人って、うらみたくなる」

「うらまれても仕方がない。だが、夢中なんだ。夢中になると縛りたくなるのは、やはり最初の縛りが、あまりに劇的でありすぎたから……」

「そうかしら……」

そこまで語るともなく語りながら、ふと二人は口を、つぐんだ。しゃべれば、しゃべるほど、むなしさ。

二人は、じっと青空に見入った。

青空は、しだいに色を濃くしていた。ようやく日が沈み、暮れ始めたらしい。山頂にも暮色が漂い、周囲の森林が黒々と影を見せはじめた。

「抱いて」

則子に、そういわれて大介は、この日、始めて則子を抱いた。全体が一回り小さくて、大介よりも二倍、三倍も弾力のある体が腕の中で丸くなり、妖精のように顔が白く、夕やみの中に浮かんでいた。

「先輩が、君のことに気づいたらいいんだ。仲人になるから結婚しないか、とすすめられた。それで、ここ、一週間、考えづめに考えた挙句、初めて結婚したいと思ったのだ。君は賛成してくれるだろうか」

「結婚ですって。まさか！ でも、それ、ほんと？ ほんとう！ ほんとうなら、うれしいワ。それだけで、うれしい」

そういうと則子は大介に、かじりついた。

「結婚は愛の墓場という。ボクたちにとっては、それは墓場以上かもしれないよ。君にはまだ新聞記者という職業が、わかっていないようだ。だから、失望と絶望が来るのではないかと、そればかり心配していた。それにぼくは子供ができない。そういう手術を受けたのだ。その理由は、ボクみたいな不幸な血筋を残したくないと思ったのだ。母は浮気もなかった。父は、どんな人か全く知らない。死ぬまで母は、それを私に言っはくれな

った。調べるのは商売だけに調べたのだが、手がかりがなく、わからなかった。ぼくに、女を縛るクセがあるのだから、父か母のどちらかにも、そういう癖があったのではなからうか。つぎつぎに変わる母の愛人をみながらぼくは最初、男を恨んだ。憎んだ。そして最後に母を憎んだ。母が死んでも母を許すことはできなかった。だから君を愛していても、女の性質というものが憎くなることもある。君を縛ってみて、それがわかった。愛すると思えば思うだけ、ひどく縛りたい。そんな性格は、ぼくの生いたちからある。そんなぼくだから、とても、君と結婚する資格はないと思っていた。だから結婚しても、子供のない「不毛の愛」なのだと、ぼくは思っている。ぼくは、ぼく一代。それも、すべて仕事に。いまの仕事が、どんな展開をみせるかわからないが、体をはって仕事をしたいと思う。そのことは君を妻にしても変わらない。奥さん第一ではない。仕事オンリーの生活だけに、とても君を幸せにする自信はない。それでも結婚してくれるだろうか」

「そりゃ、もちろんOKだワ。私だってバカではありません。幸せな温室みたいな家庭の中にだけ育ってはきたのですが、運命に耐え

……イメージギャラリー……『SM界よりの使者?』……志羽利也……



られないくらいに弱くはないつもりです。自らの運命ぐらいは、自らで開拓したいと思っています。それに男にしても、石部金吉のような人はイヤです。わたしの好きな人は、決断力があって男らしい人。そう思っていました。縛られて惚れた、といったら、おかしいかもしれません——でも正直いって、あれ

から離れられなくなってしまっ……」  
「そうか。そんなつもりで縛ったのではないが。それに君はマゾヒストではないようだし、それはどうでもよい。じゃ、こんど社にあがったら、先輩にOKでしたといっておう。お父さんやお母さんには、ぼくには親族がないので、先輩に頼んで、編集長か部長

かを仲人に立てて正式に話をしてもらおう」  
「ほんと。うれしい」

則子は、思わず大介の唇を求めた。大介も同じ思いだった。長いキッスのあとで、則子は言った。

「きょうは私のいうとおりする、といったいたの覚えてる」

「ああ、覚えているよ」

「この山の上で、私を縛って。裸にして縛って欲しいの」

「縛ると、主客転倒するぜ」

「いいのよ、それで」

「蚊が、くうぜ」

「蚊ぐらい何でもないじゃないの。私は私の幸せが逃げ出さないように、ナワで閉じ込めてもらいたいよ」

「よっしゃ、わかった」

「縄はあるの」

「二、三本はね。寝袋といっしょに用意しておいた。山歩きの常識だと思っでネ」

「わあ、すてき」

則子は子供のように、はしゃいだ。日が、とっぷりくれたので、大介は小さな懐中電灯を直径三十センチほどの岩の上に置いた。そして、その光を頼りにサックから寝袋を出し



た。同時にサックの中から縄だの、飯盒だの米だの野菜だのと出して、広場の隅に置いた。その間に則子は、ひっそりと上衣を取り、スラックスをぬぎ、ブラジャーとパンティだけの姿となって、うずくまっていた。そのうしろ姿を見て大介は、そっと背中から抱き、ブラジャーを、はずしてやった。

それから両手を背中に回し、綿ロープで手首を縛った。そして、一気呵成に胸に縄をかけ、菱縄にした。ついでパンティをとり、毛布の上にねせて、手足をいっしょに縛りあわせ、寝袋の中に押し込んだ。それから自分も裸になって、いっしょに寝袋の中にもぐり込み、袋の口をしめて、抱きあった。

山歩きが好きだった大介は、睡眠が一番大切だと、寝袋だけは特大のものを作らせていた。一人なら、ゆっくり入れ、二人でも何とかなるくらいのもを準備していた。それが役立ったのだ。懐中電灯の、ほの明るい光を頼りに見ると、則子は気のせい、か、体をこちこちにしていた。不自由な恰好で、乳房は必要以上に堅かった。

寒気が迫ってくるのと、毛布をしいた草のしとねとはいえ、山膚は寝台にしては堅かった。則子は縄による痛みと、大介の重味と、

快感を処理しかねて、悲鳴を洩らしていた。

懐中電灯の灯が消えた。

ともかく、こうして時は過ぎ、寝袋の中は暖く、汗が出るようになってきた。則子の咽は、さらに高まり、やがて軽い悲鳴を残して途絶えた。

山の静かさが、すべてを捕えた。大介は、足のロープだけ、ほどき、則子の体を楽にしてやりながら、そのままの姿で寝た。

### (三)

山の朝は爽快だった。朝焼けが、すばらしかった。隣の峯の彼方から白い光は、かすかながら、その矢を雲に射かけ、巻層雲が先ず頬を染めた。

それから巻積雲、積雲、層積雲と、わずかだが空を泳いでいた白雲は、紅い魂を誇らしげに、みせびらかせ、目覚めた大介たちにほほえみかけた。

山の峯は紺青の空と真紅の雲の中に、紫色のすがたを現わし、しだいに朝の詩を奏ではじめた。

大介は則子の縄を解き、二人で寝袋から、おどり出て、小高い丘に行き、太陽に向かって万歳をした。思い切り手足をのびし、快哉

を叫んだ。そのあとで大介は素速くカメラをセットし、カメラの前に二人で立ち、同じ動作をくりかえした。自動にしたシャッターがきれ、素晴らしい写真を何枚も、うつした。

「日の出か。正月ではないが、ぼくらの記念すべき初日の出だ。ぼくらの旅立ちのうただよ」

「うまく、とれているかしら」

「自信はあるよ。まかせとき」

そういいながら、大介は則子を岩の上に追いつけ、さまざまポーズをつけさせながら写真をとった。そして、しばらくヌードをとり続けたあとで、再び則子を縛りあげ、縛られたヌードをとり続けた。かれこれ一時間以上、持ってきていたフィルム、白黒十二本のうち八本と、カラー十本のうち、七本までを消費した。そのあくなきエネルギーに、則子は目をむく思いだった。

それが終わると、さすがに縄から解放してくれた。二人は着物をまとい、飯盒炊爨の用意にかかった。

熱い湯気の立ったミソ汁が先ずでき、ついで御飯がふいた。持参のキャベツとフだけのオミオツケだったが、味は格別だった。

「こんな写真を、お母さんに見せたら、殺さ

れるだろうネ」

といいながら、大介は則子に、素裸、後ろ手の写真を一枚みせた。

「バカ！ そんなことをしたら死ぬッ」

と則子は、すねてみせた。しかし、万更でもなさそうな光が目奥に宿っていた。

大介は、その写真を、わざと細かく破りながら、おいしそうにメシをたべた。そんなしぐさの一つ一つが、則子には秒読みで感動を記録するオリンピックの入場式のように思われてならなかった。

(四)

やがて二人は、跡片づけをして山頂を立ち去った。途中、小さな神社があり、二人はそこに参拝した。それから大介は社務所に電話を借りに行った。

「何するの」

「社電さ。先輩がいたら、さっそくOKと話そうと思ってネ」

「まあ！ いくら何でも」

「善は急げというだろう。実はボクたちは休みでも、毎朝、電話することになっているんだよ」

そういって大介は朗かに笑った。

だが、相手が出たとたんに、大介の顔は、けわしいものになった。相手は先輩の追川デスクだった。

「あ、デスク。池田ですが、いま山頂からです。予定どおり、OKでした」

と、はじめは、さすがに大介の声は、はずんでいた。

「ああ、大ちゃんか。それはおめでとう。ところでデートの途中、申し訳ないが、そこから飛行場まで、すっとなでくれないか。実はいまさっきから君の電話を待っていたんだ。

飛行場にボナンザがいる。塔乗手続きは、こちらで、とっておく。外海で遊覧船と漁船が衝突、両者とも転覆したというのだ。その取材を空から頼むよ。そこから車で、すっとなせば、飛行場まで四十分だろう。帰ってきたら、新しい君の結婚式の話題になるぜ！」

デスクの声も、はずんでいた。

「で、その状況は」

「いま言ったのが、サツに入った第一報さ。空からだから、原因とか何かはわからないと思うが、全体の状況は、つかめるだろう。無線で逐一、報告してくればいいんだ。飛行場には、こちらから、写真の野村を回しておく。頼んだぞ」

電話は切れた。

否も応もなかった。大介は急ぎ足で則子の傍に帰るなり、手短かに状況を説明した。すでに則子は、何か異常を察知していた。

「わかったわ。例のとおり例のごとし、というヤツね」

則子は大介の口まねをした。

「そうだ。さっそく車を手配しなければ」

と大介は再び電話にとってかえし、連絡をすると、則子の手をとって足速に石段を降り始めた。約八十段ほど降りたところに広場があり、そこにハイヤーが来て待っているのが途中から分かった。二人は小走りになった。息を切って、かけ降り、車に乗り込むと大介は直ぐ「飛行場へ」と命じた。

「オレは新聞記者だ。事件で現場へかけつけなきゃならん。できるだけ急いで、飛行場へ行ってくれ。ボナンザだから西口から入って」

とも、いった。

「殺人ですか、事故ですか」

運転手の目が光った。

「事故だ。百人ぐらいは、やられているらしい」

「OK」



と運転手は、気持よく承知した。

大介の気迫に押され、車の中には緊張感がみなぎっていた。その緊張を、やわらげるように大介は則子に言った。

「則ちゃん。これ部屋のカギだ。先に行って待っていてくれよ。五時間もすれば、帰ってこれるだろうと思うから」

と大介はポケットから表戸のカギを出して渡そうとした。

「合いかギなら、もっていますワ」

「そうだったかな。忘れていた。じゃあ、このフィルムと寝袋を頼むよ。いくら好きなキミの写真でも、こんなフィルムを持って飛行機に乗るわけには、いかないだろう」

「それもそうね」

「それから机の中にメモ帳がある。式の日どりが決まったら、あいさつすべき社の人の名前などが書いてあるから、退屈だったら、それでも見ていてくれ。そのうえに暇があったら君のいい写真でも見ていてくれればいい。あれは、ベッドの下の手文庫の中だよ。そのカギは、これだ。これがないと、あかないから。これであけて、ひとり楽しんでいてくれたら、ぼくが帰ってきてから、また一いじめするのに都合がいいから」

大介は、つとめて明るく笑った。

則子は、そんな大介を逞しい男として信頼の目で見た。

そうこうするうちに車は飛行場についた。

西口は裏手である。表玄関には空港ビルが立ち、ボーイング747、727が並んで、いかにも、この地方の代表的空港の偉容を、そなえていた。しかし西口には小型機が、ひっそりと控えていた。

「やあ、大ちゃん。ついてるな！」

と、待ちかまえていた写真部の野村作郎がとんできた。背が高く、目が細く、気さくな笑顔を、たたえていた。

「また、作ちゃんとだな。お手やわらかに頼みますよ。操縦屋さんは岩ちゃんなのか」

「そうだ。いつものコンビだよ。張り切っている」

と作郎は手をあげた。

自動車から降り、二人のやりとりを見ている則子に、

「じゃ、行ってくるぞ。カメラは本ちゃんがいるから、君あずかってくれ」

とバックごと則子に渡しながら、大介は気軽に手をあげた。

「恋人か！ デートからの出勤とは、うらや

ましい。岩ちゃん、あてられるなよ」

という野村の声をあとに、二人は飛行機の中に消え、プロペラが激しく動き出した。

赤と黄の単葉のボナンザは、ゆっくりと走り出し、誘導路から滑走路に出ると、快音を残し、まっしぐらに北の方に、とび立って行った。

則子は、それを放心したように見ていた。目まぐるしい、あわただしい、変化の多いといえば、これ以上ない一日だったと則子は思った。

飛行機は画用紙大からハガキ大になり、キッテ大となり、やがて、けし粒のようになつて消えた。

「行っちゃったワ」

と則子は思わず、つぶやいて目をつぶり、大介の無事を祈った。

そして、そそくさと乗ってきた車に戻り、一応、自宅に帰ろうと考えたが、寝袋を持ってきたことを思い出し、大介のマンションに向かった。思えば則子が大介を見たのは、これが最後だったのだ。

(五)

飛行場西口のバス停から大介の家の、ある

ところまで、ざっと二十分のコースだった。ここでハイヤーを帰し、寝袋とカメラをしまふと則子は一応、家に帰ることにした。下着とストラックスを着替えたいと思ったのだ。二十分ほどバスを待ち、家近くのマーケットについたときは、別れてもう四、五十分は、たっていた。

『あと五時間もしたら、帰ってくるわ。そしてたら』

則子は先ず食事と風呂の準備をしてあげたと思った。それには買物である。

大介は魚より肉が好き、ニワトリよりブタがよいと言った。その大介のために則子は先ずブタのヒレ肉二百グラムを買った。それからトーフを一丁、キャベツ、春菊、ネギなどを買い、吸い物にするか、シチュウにするか考えてみた。ヒレ肉のテキに吸い物では、さまにならない。スープを別にすれば、トーフをいためて中国風のカレー煮にするてはないかとも思った。マーホートーフという料理を学校に行っている頃、母が作ってくれたことがあったが、あれは、どうすればよかったのか。そんなことを考えていると、やけに買い物を楽しかった。

則子は買った品物を手さげに入れ、母のケ

サノに元気な姿を見せるのも親孝行かもしれない、などと考えながら家の門をくぐった。

買い物始めてから、ざっと二十分。大介にわかれてから一時間以上も、たっていた。

「只今——おかあさん。ハイ、おみやげのブドウよ。ネオマスが美しかったの」

と二袋、買ったうちの一袋を持って台所に顔を出すと、母はタオルで手をふきふき、

「言い訳かね。珍しいネ、もう何時だと思うの。朝ご飯は」

「たべたワ」

「御発展のようね。山にでも行ったの。ストラックスに赤土がついているワよ」

「まあ、ほんと」

「うそよ。ほら、すぐばれる。兄や姉とちがって、この子は浮気者だから。——ほら、何とかいった、あの人。学校に来た新聞記者に

気があるとってたじゃないの」

「それが、どうしたのよ」

「おや、レジスタンスかい。ま、お安くないワねえ」

「いや、お母さん。そんな言い方って、きらいだワ」

ケサノに散々毒づかれはしたものの、それでも則子は、そういうな感じではなかったの

だ。むしろうれしく、なにか母を裏切っているようで、心の一部では苦しく、何と云うて

よいか、チグハグな感じだった。

母はブドウを受けとり、それを洗桶に移しながら、

「新聞記者というのは忙しいんでしょ」と、とぼける。

「忙しいの何のって。きょうも事件があったのよ」

「事件！」

「ええ、舟と舟が衝突したんですって。それで飛行機で取材に行ったの」

「へえ、飛行機で。そんな大きな事件があったの。そういえばテレビで何とかいっていたわねえ。正午のニュースでも見てみたら。実況やってないかしら」

「ほんと？」

そういって則子は、居間に行ってテレビをつけた。つくまでに幾分、時間があつたので

茶を入れ、水屋をあけると板チョコが入っていた。それを、かじっていると、実況が始ま

っていて、画面に現場の写真が出た。

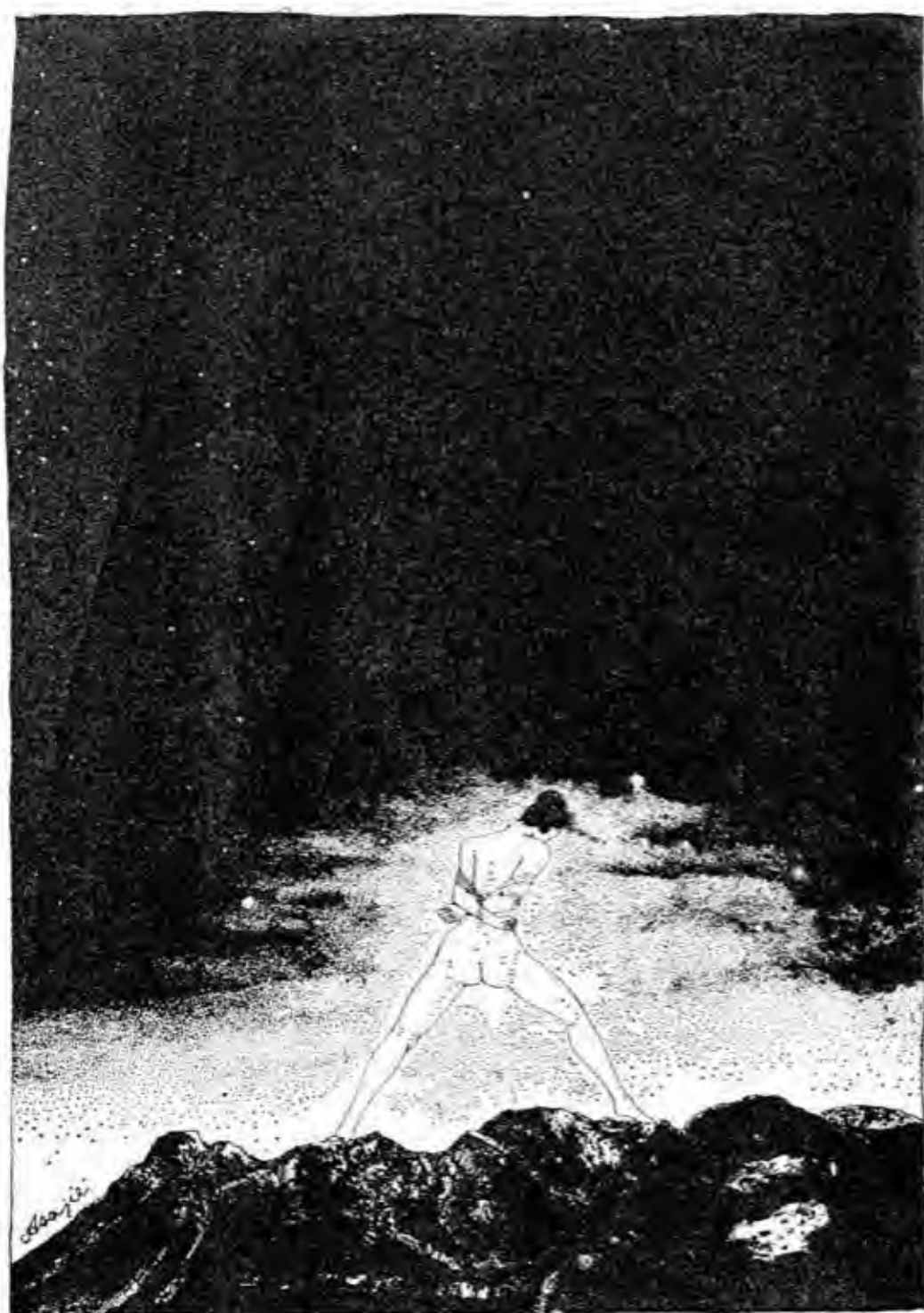
テレビは百二十人余りが死亡、または行方不明になったと伝え、その現場からの中継が微に入り細にわたっていた。



則子は大介が不意に画面に現われるのではないかと目を、こらした。あの中に入って活躍していると思うと胸が熱くなり、飛行機の音が聞こえてくるようでもあった。

一機、不意の事故で墜落したというスポットを出した。

「ただ今、はいったニュースを、申しあげます。沖合いで衝突、沈没した遊覧船の事故現場を、低空で取材していた新聞社の飛行機が



僕のイメージ画集

『星空のもとで』

室井 亜砂路

一機、墜落したようです。まだくわしいことは、わかっていませんが、救援活動にかけつけた巡視船、いかるす号が目撃、目下そのような飛行機がいたが、新聞社に確認しています。この取材のため、日刊四社のほか、テレビ社、共同通信社も飛行機をチャーターしており、どの社の飛行機かわかっていません」

アナウンサーの、そういう声が、全く突然則子の耳にとび込んできた。その途端、則子は急に大介の顔を思い浮かべた。キューンと胸をしめつけられるような感じがして、意識が遠くなるのを覚えた。しかし、それはすぐまた、けたたましい電話の音で破られた。そのベルを聞いただけで、則子には新聞社からだという予感がした。

とび上がるようにして則子は電話にとりついた。

「迎さんの御宅でしょうか。迎則子さんは、いらっしゃいませんか」

というカン高い声がした。

「ハイ、私が則子ですが」

と答えると、

「私はデスクの追川ですが、至急、来社願えませんでしょうか。あるいはテレビで御存知かもしれませんが、急に池田君と連絡がとれ

なくなつたものですから……」

と、せき込んだ話しぶりだった。

「ハ、ハイ」

といったまま則子は全身から力がぬけ、電話機を思わず、とり落としてしまった。

電話は畳の上どころがり、しきりに「モシモシ、モシモシ」と金属的な音を、くり返していた。則子は、その受話機を、怖いもののように眺めていたが、やっとの思いで、とり直し、

「さっそく、かけつけます」

と答えた。そして受話機をかけたものの、とても立ち上がる気力はなく、ワツと泣きくずれた。母がびっくりしてかけつけてきた。

「どうしたの、則子」

「池田さんが死んだらしいの……」

「え、死んだ。どういうことなの」

「……」

「ね、それ、どういう意味なの」

母も驚いたらしかった。

「会社から、そういつてきたのよ。さっき別れたばかりだよ。結婚を正式に申し込むんだといってくれたばかりだったのに……」

と則子は、さらに泣き声をあげた。

「そう」

といったものの、母も呆然と立ちすくんでいた。

ケサノにすれば、つきあいをしていたと知ってはいたが、そんなにまで深くとは思ってもしなかった。だがいま、それを知らされ、その人が死んだと知らされると急に娘が、ふびんになった。とっさに則子の肩を抱きかかえ、しばらく、そのままの形で、そっと則子の泣くに、まかせていた。

運悪く、父の泰三は学生と旅行をして留守であった。夏休みに入ると、よく出かける父の教師としての唯一の楽しみだっただけに、こんどの出発のときケサノは胸さわぎを感じたが、それを告げることができなかった。その不吉な予感が、父ではなく、則子の身の上に起ころうとは——ケサノは自分が泣きたいくらいだった。

# (六)

しばらく泣き続けていた則子は、やっと気をとりなおし、母にくわしく大介とのデートのことを語った。

縛られたこと以外のデートの話である。

最初の図書館取材の出合い。教え子の交通事故。それから、炭鉱事故のあい間の逢い引

き。それがきっかけで下宿に行くようになったこと。昨夜の登山。愛を打ちあけられ、先輩に頼んで、近く仲人を立ててもらいに来る予定だったことまで、順序を追って要領よく語った。母ケサノは、あいつちを打ちながら話を聞いていたが、いつしか、その目からも大つぶの涙が、こぼれていた。

いっしょに新聞社に行くという母親の申し出を断わって、則子がハイヤーで新聞社に着いたのは、それから約三十分後だった。受付で、社会部の追川デスクというと、顔の四角い小柄な男が降りてきた。

「迎さんですね」

と、その男は則子の姓を確認した。

「迎則子ですが……」

という、男は

「どうも」

と頭を下げた。予期したことだったが、そうされると急に、改めて、こみあげてくるものがあつた。

「ぼくは社会部の田所といいます。デスクは手はずされないので迎えにきました。さあとにかく上にあがって下さい」

と、その男は先に立って暗い廊下を進み、階段をのぼって行った。編集局は三階にあり



入口に応接ボックスが並んでいた。その中の一番、大きいボックスに通されると、そこに二人の男が立っていた。

田所が、

「部長、迎さんです」

と、その一人に紹介した。

「山田です。あなたのことは、きのう追川から聞いたばかりでした。さぞ、びっくりしたことでしょう。いま、やっと遭難の確認がとれたばかりのところですよ。あいつは親、兄弟がいず、寂しがっていましたから、きのうも追川と、これで安心だ」と話し合っていたところですよ。何と申しあげてよいか——ともかく別室に、いっしょに遭難した野村君との遺影を祭って、社会部一同で、きょうは、お通夜をすることになっています。ただ一人の親近者いや彼の奥さんとして、まいって下さい」

紹介された男。褐色のツイードの、よく似合う英国型紳士が、深々と頭を下げた。

「ハイ、……ありがとうございます」

そういつて則子は頭を下げたものの、どうすることもなく、ただハンカチで目頭を押えすめられるままにソファに腰かけた。

山田部長は田所記者から紙ばさみを取りよせると坦々と遭難の模様を語ってくれた。

「追川君から池田君へ連絡が行ったのが、十時過ぎだったと思います。山からの電話で、あなたも、いっしょだったそうですね。それから飛行場に行き、実際に飛び立ったのが十時三十二分になっています。十分ぐらいで遭難現場に着いたとみえて、無電でくわしく状況を報告してきました。それをもとに田所君と追川デスクが原稿に仕立て、夕刊早版からルポを紙面にのせることができました。これがその紙面で、写真は途中、投下したものを使いました」

則子が部長から貰った新聞紙をあけて見ると、田所記者が一面の頭を指さした。そこには「本社機にて池田大介記者」というクレジットが入って、大介の文章が、のっていた。「衝突現場は小さな白波が立っていた。穏かな青く澄んだ海。それが突然の修羅場になるうとは、誰か予想したであろう。午前九時過ぎ、沖の島観光の遊覧船千歳丸Ⅱ九九トン、鳥越武夫船長（五七）百二十五人乗り組みⅡと竹島海運所属、底曳き漁船第七大鳳丸Ⅱ一六五トン、矢田弘船長（四九）二十七人乗り組みⅡが衝突。船はいずれも大破、沈没。四十八人が死亡、九十一人が行方不明になるという、ことし最大の海難事故が発生した」

そういう文句が容赦なく則子の目にとび込んで来た。その耳に山田部長の話がつづく。「その取材中、かれこれ三十分近くたったでしようか。一たん社の上に帰ってきて、写した写真のフィルムを落としたあと、再び現場にとんで行きました。そのあと十一時十五分突然、彼の声が、と絶えてしまったのです。いくら、こちらから呼びかけても応答がなく無電で話していた追川デスクは、何か金属的な音がしたといっているのです、あるいはそれが遭難したときの音かもしれません。海上保安部から問い合わせがあったのが十一時半ごろで、最初は、お宅は飛行機で取材に出てないかというだけ。ついで機種、名前を聞かれはば間違いなろうということになったわけです。保安部の話では、巡視船にかかる目の前で海中に突っ込んだといっています。その飛行機は、最初、上空をとんでいたが、しだいに低空を飛ぶようになり、再三、急降下爆撃のような飛行をし、船すれすれに、とんで状況を確かめており、窓から身を乗り出すようにして、カメラマンと記者が仕事をしていたということです。何度目かの急降下のあと、エンジンの調子がおかしくなったのか、異状に音が高く、そのまま海に突っ込んだそう

です。操縦者の岩本さんは会社では一番、飛行経験の豊かなベテランで、戦前の生き残りの航空兵でした。慎重な人で、一万時間を越える飛行で、一度も事故らしいできごと一つおこさなかったという、素晴らしい人でしたが……。ともかく、われわれも、いまだに信ぜられないくらいで、なお、くわしく調査を、お願いしているわけです。いっしょに亡くなった野村君とは大の仲良しで、これまでも再三、航空取材に同行しています。よく肩を並べて呑みに行く遊び仲間でもあり、さきの国体の時も活躍したベテランの写真班でした。死ぬのなら二人いっしょだと、よく冗談を言っていました。それが実現するとは……。

則子は、その説明を聞きながら、どうしてよりによって恋人の飛行機だけが落ちたのかと……事故の無情と、現実の非情さを、しみじみと味わっていた。

## (七)

遺体の引き揚げに立ち合い、社葬を終え、友人と相談し、両親に話して、池田大介の持ち物を処分し、則子が本当に自分を取り戻したのは、それから二週間を過ぎていた。

生前の大介の要望や、追川や山田部長の努

力もあって、則子は大介の新妻と同格で遇せられたのが、せめてもの慰めだった。

航空保険金もあり、会社の慰労金など、思わぬ高額の金が則子のもとに入ってはきたがそれだけに、よけい則子の気持は晴れなかった。げっそりと、やつれ、部屋に閉じこもって、大介の書いた原稿や写真を見ることが多かった。そのため、母親が心配して、そっと居間をのぞきに来るほどだった。

そんな則子が、始めて笑顔を見せたのは、かれこれ一カ月たってからだった。

「やっと落ち着いたようネ」

「くよくよしても、大ちゃんは帰ってこないんですものネ」

と、どうやら則子は、母と冗談まじりに話すことができるまでになった。

大介が残したもののといえば何もなかった。

最少限に整理されたスクラップと取材メモ帳それに、人には見せられない写真だけであった。それ以外のものは全部、整理した。その方がいいという父や友人のすすめに従ったためでもあった。だから遺品として残されたものはニコンカメラ一式だけだった。それだけは則子は手離したくなかった。

それに、もう一つ、誰にも見せられない、

見られたくないメモ帳が見つかった。

「きょうも、また縛ってしまった。ハジを知るがよい」

「優しくしてやりたい。だが、優しくしてやれない。そんな心が寂しい。さもしい」

そんな、自分だけに分かる片言隻句がメモ帳にのっていたので、則子は誰にもわからないように、例の写真といっしょに自分の本箱の中の手文庫の中に、小さな鍵のかかる箱を入れ、その中に宝物でも隠すようにしまいこんでしまった。

則子が余りに元気がないため、母や妹が監視に来ていたので、じっくり見ることはできなかったが、一カ月たち、則子が元気になると、その目もゆるんだので深夜ベッドの中でゆっくり眺めることができた。

写真は豊富だった。とくに山頂のカラー写真、すばらしかった。朝の太陽をバックにして、二人がいっしょに、とびあがったヌードは、文句の言いようのない青春の金字塔だった。それにくらべると、後ろ手の縛り写真は恋愛の一里塚といってもよかった。

後ろ手の痛みよりも、いまとっては甘美な追憶だけがのこり、それが大介と結ぶ愛の絆となっていた。大介が縛ったというだけで



きびしい縄目は深くて強い愛の縄目に変わっていた。

写真を見ただけで体が、うずいた。大介の熱い息吹が感ぜられた。誰もいない部屋で、

### 毎月確実に入手されるために 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 四〇〇円(送32円) |
| 三月分 | 3冊  | 一二〇〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二四〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四八〇〇円(送共)  |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上のお申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎のお申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

ただ一人、目をつぶるだけで大介は枕もとに現われ、必ず則子をつ縛りあげた。大介の傍を少しでも離れようとすると、行かせまいとして、さらに嚴重に縄をかける。そして、ぬけ

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

られるかね、オレから離れられるかね」と、叫ぶのだ。そして則子が「平気」というと、途端に寂しそうな顔になり「オレはバカだ」と落胆し、悩み、そして怒り、さらに則子にためつける。不毛の愛といったが、それにふさわしいパターンが展開する。

則子は日とともに元気になって行ったが、大介の夜の訪問は日のたつにつれ激しくなっていた。

則子は、暗をにらみながら、いっそ、死んでしまいたいと願いながら、昼になると、快活に見せかける自分が、しだいに憎らしくなり、大介の屈折した人生観が、そのまま、則子の中に移り住んだように思われてならなかった。

クオ・ボ・デイス(主よ、どこに行きたまう)

則子は、そんな心境だった。

ひとりで、大介といっしょに行った山に登り、後を追って行きたいと思うことも多かった。

それでも則子は、死なずに元気に生きていた。

# コレクシヨンの推め

## 東西妊婦フォト考

大 原 茂

(写真は木戸悦子)



総べてのコレクターは、物品蒐集の熱意と根気が必要だと思います。

金額の多少に拘らず、少額でも、良い蒐集品を手にする事が多々有ります。

私の「妊婦マニヤ」としての最初のコレクシヨンのフォトは、浅草の書店で入手した、

デンマークのグラビヤ誌で、店頭販売品では有りませんでした。

店主と永年の客としての交際でブラック・ルートからの流れ品を手に入れたのです。私は特にグラマラスな姿態のフォトを好んで買い漁り、外国誌を常時購入の対象にして、高

価な新刊を数十冊もコレクトしていました。奇巧のSM物も、当時はグラビヤが沢山掲載されていたから、私のコレクトの仲間入りして居り、現在では八百円より千五百円の古書価値に成っています。

その日も、店主に招かれ、店のカウンターの奥で観賞させて貰ったのが、此のグラビヤ誌でした。内容は『モノクロ・フォト』に、解説付きで二十才前後のブロード女性の妊娠初期の医師の診察風景から、豊満で美しい妊婦の肉体的変化を、各アングルから鮮明に写し出されていました。

妊娠の各月によって徐々に変化する乳房と腹部の模様を、出産に至るまで採録し、ストリー風<sup>スリ</sup>に解説した内容でした。

SとMには関係の無いフォト誌でしたが、何故か、モデル女性の美しさと、膨隆した妊娠腹の見事に、しばし呆然と眺め、足元の力がスーと抜ける様な快感に襲われた事を、今でもよく覚えて居ります。

男が女に心を奪われる二つのタイプは、清純可憐な乙女か、妖艶にして華麗な美女ということになります。

このグラビヤ誌の女性は前者の方で、可憐な微笑を湛え肌理細やかな肌をあらわにして突出した腹部を惜しげもなく晒している様はエンゼルか、ヴィナスのポーズでした。女性生理の不可思議さを感じさせる絶品でした。



只、此のフォトは（秘）物で、無修整の為公開を許されぬのが残念です。

その他、内外のポルノグラフィー等、二百点程コレクトしてありますが、私本来の趣味でもなく宝の持ち腐れで、今では茶色に変色したまま簞笥の底に眠って居ます。何方かに差し上げたい位です。大部分は貸金の質に取ったフォトが多いのです。

やはり私は、妊娠して、膨大な腹を晒し、羞恥と悦虐のプレイに埋没した勇敢な女性の嬌然とした陶酔図のみにしか刺激を受けません。その他を強いて挙げれば、グラマーで、巨大なバストの持主か、肥満体の女性です。「スレンダー」のツイギー女性には興味あり

ません。

奇クに登場された美しい婦人のフォトは、田中、増田夫人を始めとして、最新の福井桃子さん迄、二百枚以上もコレクトしました。蒐集出来なかったのは、児玉夫人と「奇クサロン」発表の分譲の無い阪東夫人、佐野みさ子さん等の方々のフォトのみです。三拝九拝しても、私のコレクションの仲間入りさせたい程、マニヤとしての勝手な希みを抱いております。

五月号に福井桃子さんの「九カ月の妊婦の告白」という待望の一文が載って居りますが六四頁掲載のフォトが、私の願望のアップボーズです。福井さんの見事に膨らんだ妊娠腹

とプレイに酔った美態には痺れました。

更に西洋では、幸運の鼻と言われる「アップ・ターン・ノーズ（上向鼻）」の幸を私共ファンにも分かち与えて下さる福井さんに対して衷心から感謝しています。

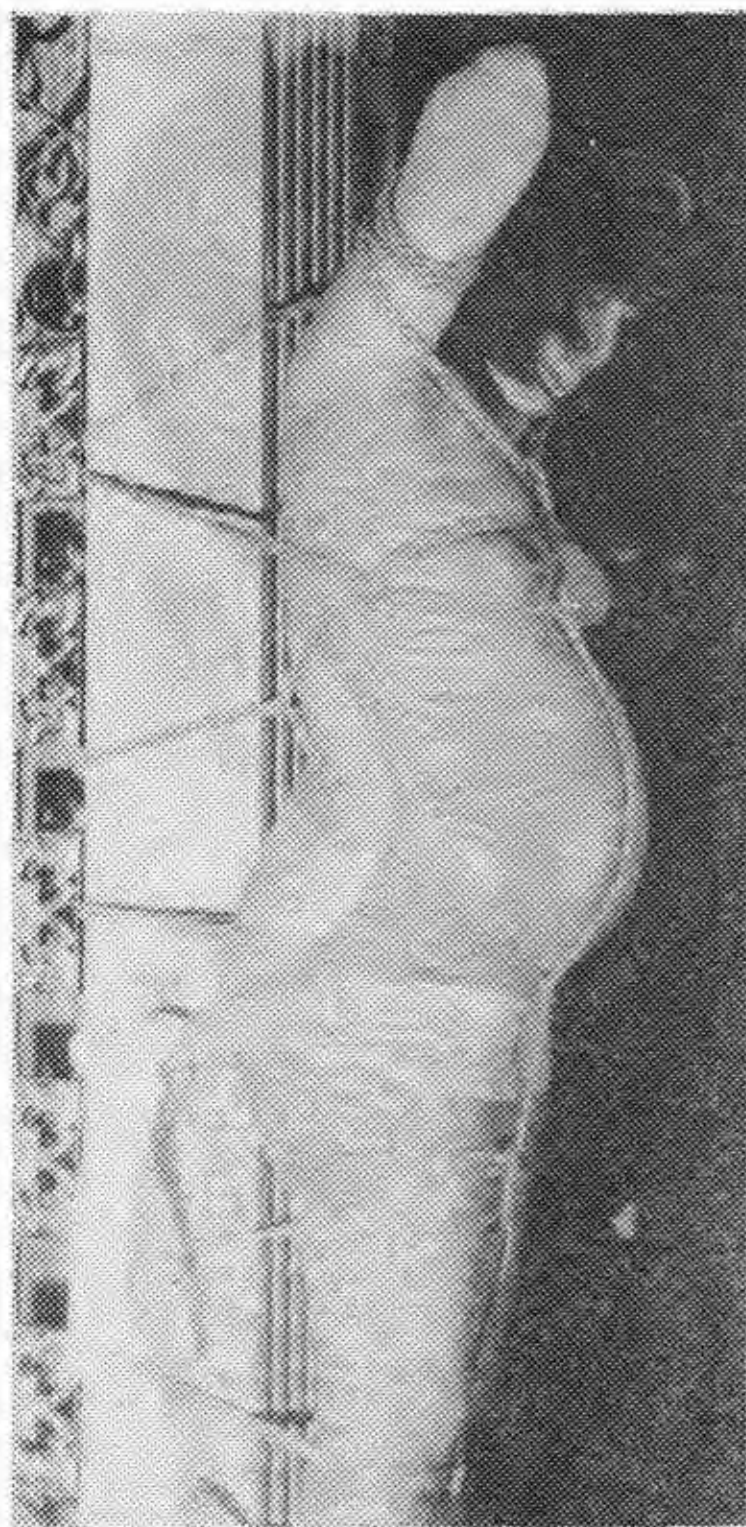
次に最近、手に入れました「妊婦フォト」を紹介します。それはアメリカの「プレイボーイ」誌の七〇年九月号に掲載された「パロディ・ポスター」の特集です。

内容はカルカチュア化されたポスターで、一九六七年度ミス・アメリカのタイトルのタスキを掛けた美女が、張りさけんばかりに膨大な妊娠腹を、ビキニ水着から晒し、茶目っ気たっぷりのウイंकをしているといったボーズです。

臨月腹の「ミス・アメリカ」とは、如何にもウイットに富んだアメリカ人らしい企画で思わず微笑んでしまいました。

同じ特集に、今度はカラーで、女性GIらしく、制服に身を包んだ美女が、腹の前面が突き破れんばかりに膨隆した妊娠腹を晒している所を側面から撮ったフォトで、ヤンキー娘らしく、陽気な笑みを浮かべ、胸に両手を当てたポーズでした。

日本でも、こうしたブラック・ユーモアが通じる国になりたいと思います。前者は週刊誌大で、後者は手札大のフォトでした。古本屋で二百円で買いました。





第五十回

## 乳畜洗滌

かつて神に召された美しい修道女アン・ブラウンは、畜馬E―一四三号としか呼ばれなくなった。純白の法衣に注意深く守護されていた秘宝なのに、今は赤裸の身を一頭の牽き馬として曝している。

アメリカ娘のF―五五四号とペアで、有明の乗物を曳かされることに決まってから（第29回参照）この二頭に加えられた特別な調教は、激しいなどといえる段のものではなかつ

た。それは凄惨な拷問だった。苦悩に満ちあふれた労刑だった。根こそぎエネルギーを、しぼり取ってしまうような重労働だった。

だからこそ、僅か一カ月で一応のレベルに到達したのであろう。その効果は、まことに目を瞠るようなものであった。

二頭の肉体は、あたかも一つになったように動く。もともと同じような体型だったのが同じ管理を受け、同じ調教を施されることによつて、一層、似通った姿になった。もちろん贅肉を削がれて、一グラムでも無駄な部分が叩き出されてしまった故もあろう。

怠惰と美食にゆるんでいた裸身は、サラブレットの駿馬を髣髴とさせるような、強い、しなやかさを文字通り体現して、彼女たちの生まれつきの肉体美を、いやが上にも磨きあげるようになった。

美畜のペアが仕上がったという報告を持ちかまえていた星エミー司令は、早速、下見にやってきました。準後の格式は一品の上臈を含む五人の雇従を従えることになるが、武官でもある星は形式ばることを嫌って、いつも戦車で独自行することが多い。しかし、最高司令官



の車だから、さすがに豪華なものであった。健脚を揃えた二匹の美しいインド娘の曳く戦車は金張りで輝くばかり。燃えるような緋色の戦斗服に、同色のマントを羽織っている。緋色は準后にあたる金位を示す色である。

例によって、ペットにしてしまったアマトル・アミーンを連れている。乳畜に変工された彼女には、かつてイラン王族であったことも、又、シェイク・アル・ゼバルとしてサディステイックな生活を、ほしいままにしていたことも、夢のような過去に、とび去ってしまった。打って変わった現在の境遇の惨めさは、サド女であるが故に、ひとしおであった。

彼女は今、直立する事を禁じられている。足輪を腿のつけ根に嵌めた鉄帯に熔接されては、膝で歩くしかない。だから、その膝を痛めないように、ゴム製の膝当てを、つけてもらった。ガッチリした首輪には、さらに、もう一つの首枷が装着されて、俯向くことが出来なくなっている。丁度、鞭打ち症の治療を受けているような恰好だった。その首枷から長さ四〇センチばかりのパイプが延びて、その先に長さ一五センチの鎖が二本、とりつけられている。双の手首に予め装着してある鉄

輪に、とりつけると、一五センチの許容範囲をもった手拘束が完成する。パイプは、先程の首枷に直角に熔接してあるから、身長の方向への動きは殆ど不可能である。この意味は乳畜の手は、身体を四つん這いに支えて歩くためにだけあるのであって、それ以外の用途には使わせないということであった。こうなっては哀れな乳畜は、手を持ちながら顔に触れることすら出来ない。用を足したあとを拭うことも出来ぬ。食事のときだって、床に置かれたエサを、横に寝て、首を無理矢理ネジ曲げて喰べるしか方法はないのだった。

膝と拘束された手で這うのだから、ストロークは普通に歩く場合の半分しかない。つまり、それだけ忙しく手足を動かさなければ主人について行かれないのである。それが乳畜に酷い運動量を課することになるのは、いうまでもない。

可哀そうなアマトルは、戦車の後に繋がれて、丁度ダックスフントが馬のあとを追うように、激しいステップを繰り返していた。インド娘の畜馬は、股にはさんだ長柄を揺らさないように、それでいて腿を水平にまであげて進むことが要求されている。厳しい調教は

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて、五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。日本人至上主義によって最も差別されるのは白人娘だった。イラン王族のアマトルも乳を搾りとられる乳畜でしかなかった。又、かつてアマトルの奴隷だった篤信の修道女アンブラウン、その他ヨーロッパの、あるいはアメリカの誇り高い白人娘は、その教養を踏みにじられ、そのすぐれた体型とスポーツで鍛えられた運動神経だけを買われて、多く役畜(轡畜・軍用畜)用に向けられ、激しい調教を施される。

このように相反する機能を、二つながら、まとめるレベルまで美畜を仕上げていた。

今は、ゆっくりと跑を踏むように駆けていくというのに、曳かれていくアマトルの方はもう息も絶え絶えに喘いでいる。白い餅肌は噴き出す汗に濡れて、陶器のように光っていた。切なく上下する胸に、巨大な乳房がブラ下がり、重そうに揺れる。ホルモンと搾乳によって、乳量も五百リットル以上になり、乳質もよくなった。それだけ乳房は異様に大きくなり、殆ど床に届きそうにさえ見えた。

牛や羊などでは、乳房が後足の間にあるのだが、この国の乳畜では前足（人間的に言えば腕）の間にある。もともと人間を四つ足に凝っているのだから当たり前の話であるが、この国の観念に立つて考えると、完全に畜化されたと見做すべき、これら乳畜の乳房が胸についていると云って奇妙に思えるのだから不思議である。

ともあれ、戦車について行くことで苦闘しているアマトルにとって、わずかに幸いだといえることは、その苦しみは乳のはる痛みを忘れさせているという事実だった。上位の苦痛は、下位の苦痛を忘れさせる効果がある。畜舎に繋がれていると、気の狂いそうになる疼きも、今はそれどころではなくなってしまう。若し、つまずいて倒れでもしたら、と思うとゾツと気が遠くなるような気がする。鼻綱が、鼻梁を千切りとってしまいかも知れない。そんな恐怖が、アマトルをして必死に駆けさせていた。そして筋肉を酷使する、こうした運動が、虚栄にくずれかけていた彼女の肉体を、驚くほど健康に造り変えてしまったのも、皮肉といえば皮肉だった。

アマトルの忍苦が臨界点に達したと思われ

る頃、戦車は漸く調教所に着いた。訓練連隊の管轄になっていたので、連隊長である伊藤香織が自ら出迎えていた。

「ご苦労さまでした」

インド娘の轡に接続した手綱を、たまたま



当番に当たっていた若紫騎兵小隊の見習士官お馴染みのジャンヌに渡しながら、伊藤連隊長に声をかけた。

「調教資料を、ご覧いただけますか」

E—一四三号、F—五五四号のペアに関する分厚いデータが提出された。無造作に頁をめくりながら、

「すぐ見たいものですね」

「承知しました。調教グラウンドで待機させております」

「では、まいりましょう。あ、そうそう、このブタを洗ってやっていただけますか」

乳畜その他のペットは、足が短くて白豚のようだというところから、「ブタ」と略称されている。そのアマトルの鼻綱を受け取ったのは今度は望月二等兵だった。

元映画女優だった望月レイ子も、訓練連隊に配属されて一カ月余り。見ちがえる程、兵隊らしくなってきた。キビキビとした動作でアマトルを追い立てて行く。

この国で「兵隊らしく」なったということ、は、秩序に対して敏感に反応することであり、規律に忠実であることは言うまでもないが、鉄のクラス（畜位、物位）に対して苛責なく



責めることに耐え得る非情さを身につけたことをも意味する。彼女たちはカボであり、又ホワイト・ブラックでなければならぬ。

調教中の畜位女囚は全部、スタンションのついた畜舎（ステイブル）に繋いでおくのだが、乳畜の場合、別の部屋になっているのは前に述べた通りである。（第34回参照）乳畜舎にはそれにふさわしい設備が調っている。

望月二等兵はアマトルの鼻綱を一旦、解いて乳畜舎の一隅にある乳畜自動洗滌装置の鎖に、つけかえた。床から出ている金具に首パイプを固定し、膝当ても夫々床にロックされる。この三点を押えただけで乳畜は、もう微動すら、できない。

アマトルの封止された咽喉から、言葉にならない呻き声が、もれた。この拘束が何を意味するかを、彼女は身にしみて知っていたからである。

前方からスルスルと伸びてきた細いパイプが容赦なくアマトルの口に押し込まれた。同時に後ろから伸びるパイプが太股の間をガッチリと押えつける。このパイプには三つの嘴管が縦に並んでいて、下から順に、細いの、太いの、長いのに——に特長づけられている。共に注入・排水の両機能を持ち、洗滌した老

廢物を水と一緒に流し去ってしまう。

アマトルの悲鳴が一層、切なげになった頃、前面からのパイプは、三十センチ程も突きささって、殆ど胃底に達していた。一方、アヌスを拡大した嘴管は、そのまま、下降結腸に侵入して、双方から胴体を串刺しにしたようになった。その証拠に、今までクネクネと苦悶していた白い肉体は、金しばりにあった様に、ピタリと動きを停めてしまっている。小刻みに四肢が慄え、苦吟が更に激しく、大きな乳房が、絶望的な息づかいに揺れている。

内臓洗滌が終わると、乳畜はさすがに疲れて、グッタリとなってしまった。普通なら床に倒れて伸びてしまうのだが、三点で固定されているので、姿勢は少しも変わって見えない。

「洗う」という、ただ一言のなかに、このように惨烈な責めが含まれているのだから、アマトルの悲鳴も、うなずけるといふものである。

しかし、そのまま休息は許されなかった。望月レイ子がスイッチを入れると、シェーンという音がして、鼻鎖が、ゆっくりではあるが、断乎とした力で曳かれて行った。

細長い溝状のタンクに、乳畜は力づくで曳き込まれる。洗剤を含んだ水は渦を巻いて、溝は次第に深く、乳畜は膝立ちとなってヨロヨロ進まなければならない。しかし、それでも頭を水面に出してはいられなくなる。中央部では、タンクの深さが一・五メートル以上にもなるから、泳がない限り、顔は水の中に没してしまふ。ところが、こんな装具では泳ぐことはおろか、浮かぶことすら、できぬ。勢い乳畜は息をつめて、つとめて急いで前へ進む他はない。二メートルばかり行くと、溝は再び、ゆるやかなスロープで上りになり、したがって水深が浅くなるのである。

そのあと、例によって熱、冷、交互に高圧ワッシャーの噴射に耐えなければならぬ。（第29回参照）水圧による打撃で赤く充血した皮膚が、もとに戻るのには、かなりの時間がかかる。しかし毎日、同じように叩かれるので、皮膚は丈夫になり、ひきしまつて、かえって輝きを増してゆく。

アマトルは、確かに美しくなった。

## 試 運 転

「まあ、ほんとに見違えるようだわ」

調教グラウンドの片隅に佇立して、星の来るのを待っていた二頭的美畜は、星にこのような感嘆の声をあげさせた。

二頭は完全な装具に飾られている。

黄金の鎖で編んだ兜型の面繋（おもがい）がツルツルの坊主頭を包んで、外れないように轡と連結している。美畜が頭を動かす度毎に、髪の毛のように細い鎖の巾が、衣ずれならぬ爽やかな金属音を奏するのであった。

鍛え抜いた裸身は、いささかのゆるみもなく、白磁のように、なめらかな肌は、磨きあげられて一層、艶やかに見えた。

そして、豊かな曲線を描く腰部に、ここだけは激しく喰い込んだ腰帶、馬具でいえば軛にあたるのだが、この国の裸女輓馬の場合は轡を股に、はさむ関係でウエスト革具が採用されている。それで、剥き出しの鼠蹊部を下から突きあげるように金属パイプの轡が吊られるわけである。

星が乗ってきた馬車より、更に大きく、更に華麗な車体は、いうまでもなく有明の乗用である。二輪の間から突き出した長い轡の先が、U字型にわかれ、それぞれ美女の両腿にピッタリと固定される。それは、鳥の頭部をかたどった金色の留め金具で飾られていた。

美畜の後手は完全にロックされ、曳き綱を握らされていた。これは轡をシッカリと吊って牽引力を増すためのものである。

もう一つ、この金ピカ装具をひきたてるアクセサリーを忘れてはなるまい。贅肉がとれたとはいっても、ここだけは恰好よく、ふくれ上がった美事な双の乳房の、ホンノリと紅い乳首に吊り下げられた純金の鈴二個が、それである。美畜が足並みを揃えて駆けるときそれはリンリンという妙な音とともに、何ともいえない快いリズム感をあたえる効果があった。

「跑足を踏ませてみてくれませんか」

しばらく、みとれていた星は、やっと気がついたというように伊藤連隊長に言った。

「承知いたしました」

伊藤香織が手で合図をすると、はるか離れたところで、それを待っていた若紫騎兵小隊長の小川晶子が、自分の軍馬仕様の美畜に、ヒラリと飛び乗った。上体を水平に、腕で車輪を支えた逞しい裸女は、小柄な小川晶子の体重を楽々と脊に支えて、走るように走ってくる。もと、スエーデンの王室の家に生まれ陸上選手で活躍し、大いに欧州社交界に話題

をまいた彼女も今は一介の家畜でしかない。

身分いやしい日本娘、小川晶子の持ちものとして仕え、馬となって駆けるだけの日常だった。あまりに変わり果てた身の因果を、悲しんでいる余裕もない程、騎兵訓練は厳しかった。しかも、隊長の乗用であるが故に、他よりも一層、多く、一層、早く走らなければならぬ。紅涙を流し、膏汗を絞って、これに耐えた。持ち前の体力に加えて、ここにも調教の効果は素晴しく顕われ、天晴れ駿馬と評されるようになったのも、漸く最近のことであった。

小川小隊長は、星の前に馬を進めて、その脊中の上で、開股の作礼をした上で、美しい輓馬、E—一四三とF—五五四の二頭立て馬車の左側に立つと、その側に繋がれていたアン・ブラウンの轡についた手綱をとった。

「ハイヨー」

小川小隊長の、やや甲高い掛け声がひびくと、三頭の白人娘は、息を合わせたように地を蹴ったものである。

有明の馬車だから、誰も乗るわけにゆかないので、こうした責め方が採用されているのである。



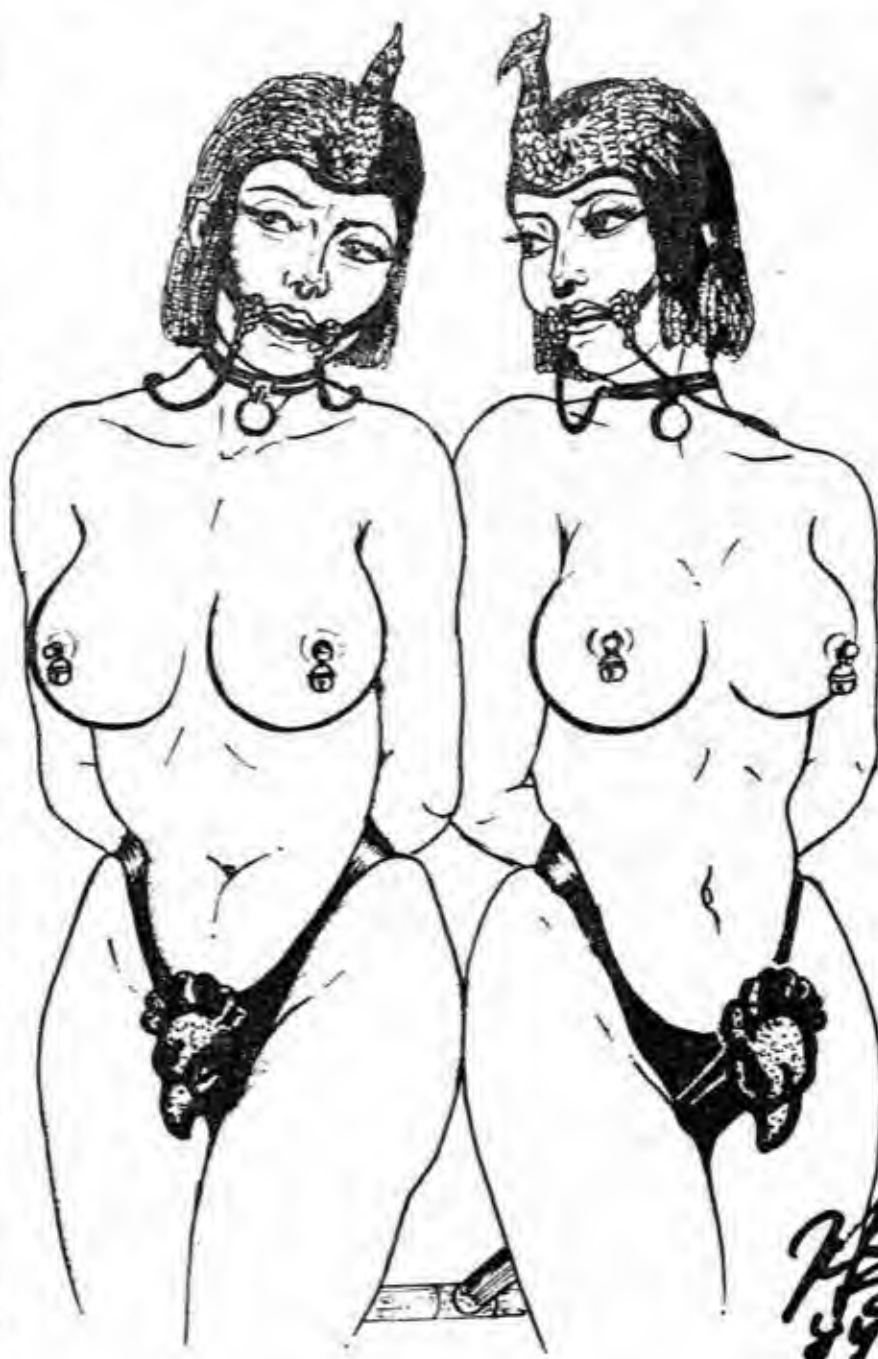
小川少尉に手綱をとられた二頭立ては、シャンシャンと鈴を鳴らせながら、跑を踏みはじめた。四つの乳房が、ブルンブルンと揺れて、その度毎に鈴が躍る。

凄惨な調教の成果が、かくも美しいフォームに実ろうとは、まことに信じ難い程の光景だった。二頭は一分の隙もないステップを踏む。その都度、上脛を水平にまで、あげる。その脚線が、また良く揃うのである。

意地悪く轡を股下に吊らされて、いるのだから、馴れないと、どうしてもガニ又になってしまうのだが

この二頭は全く、そんな風に見せないのである。ゲンコツのような形をした轡の頭がすぐ前にあるので、膝を水平にまであげれば理論上は、どうしても股を開かざるを得ないのだけれど、弧を画く膝の流れが、きわめてスムーズだから、ひとつも不恰好にならないわけである。

もっとも驚くべきことは、これだけ大きく



ステップを踏んでいるというのに、轡が殆ど上下しないことである。したがって車体の方は、なめらかに、全くといっていい程、振動が少ない。

広いグラウンドを跑足で二周すると美畜の白い裸身は、うっすりと紅味が増し、やや汗ばんだ肌はシットリした潤いをみせてきた。

喰い入るように見つめていた星が、急に

「早駈けッ」  
と号令をかけた。  
三頭の家畜は、びくつと慄えた。

いくら日本語を知らないといっても、毎日使われる調教用語が何を意味するか解るようになるのは、そんなに困難なことではない。本物の牛馬だって、調教によっては人語を、ある程度、理解するようになるという。まして、ここにいる畜馬は数奇な運命を呪いながら皆夫々に華やかな過去を想い出としている、知識にあふれ、教養高く世の男性にかしづかれ、もてはやされた誇り高き美女ばかりである。そのような女たちが今はもう、人間としての尊厳すら塵芥のように踏みにじられ、日毎夜毎に、畜生の暮しを強いられている。如何に畜生としか扱われないといっても、頭脳は尚、昔のままである。教養も忘れ去ることが出来ない。極限状態に置かれ、恐怖に戦く美畜たちは、自然に、必要

な日本語を理解するようになってしまふものだ。

小川少尉の足の合図で、彼女の乗馬は狂ったように走り出した。それに負けじというように二頭の鞍馬もダッシュし始める。

調教グラウンドには、一面に人工芝が張りつめてある。その人工芝を、ひきちぎりそうな勢いで六つの足が激しく躍り上がっていた。四個の車輪が、これに前後して、もつれあっていた。

「おそいッ。もっと早く」

丁度、一巡して来たところで又、星がハッパをかけた。

一群が、グッと速度を増した。それは力余ってというよりは、すでに出し尽したかにみえる能力を、更に絶望的にまで高めようとする、やぶれかぶれの姿だった。実際のところ早駆けではグラウンドを一周するのが、やっとのことなのである。しかし、命令は絶対である。倒れるまでも、畜馬は走らなければならぬ。

三人の白人女の顔には、もはや余裕というものは見られない。必死の<sup>まなざし</sup>を、キリキリと吊りあげ、泡を噴くように歯噛みしながら、

地面を蹴る。

けたたましく鳴る鈴の音。ここだけはブルン、ブルンと震える六つの乳房。美畜の哀れは、この豊かな乳房の振動に表現されつくしていた。

どんなに激しい調教を受けてきたからといって、人間の能力には限界がある。

二周目を終わる頃には、三頭とも、もう惨めな状態になっていた。

「ピシッ」

今度は掛け声ではなかった。星の手から電氣鞭がとんだ。ちょっと触れただけでも、はげしい電撃が全身を襲うのである。

「オーッ」

女とは思えない、太い、獣じみた喉声をあげて、再び死に物狂いの力を振りしぼったのは小川少尉の白人馬だった。プリプリと丸いその臀部に鞭が炸裂したからである。

それにつれて、小川晶子の持った手綱が、二頭的美畜を強引に、ひっぱることになる。

E—一四三号も、F—五五四号も、ともにたまげると悲鳴を洩らせながら、ともすると萎えようとする筋力を振りしぼって、更に速度を加えるのであった。

何といっても練度の若いF—五五四号のネルギーが最初に燃えつきってしまったのは、当然といえば、当然かも知れない。ところが二頭建ての場合、一方がダウンすると、コントロールがガタガタに、くずれてしまう。左右の鞍が極端に上下しはじめ、それにつれて曳いている車輪まで振動を起こす。それが又鞍を左右に、ひき廻そうとする。前後、左右上下に激動する鞍は、むき出しの肌にジカに触れているのだ。これだけでも、鞍畜は疼痛で、忽ち運動力を鈍らせてしまう。

この点で、むしろ早く参ってしまった方が得だったかも知れない。F—一四三号、つまり、アン・ブラウンの方が鞍の突き上げを、さけようとして、かえって、つまずいてしまったからである。

星の前に、ひき出された二人は、もう氣息奄々とした有様であった。

「何です。マスターご乗用の光栄を授かった畜馬が、こんな調子では……。もっと、もっと、しっかり調教しなくっちゃ」

「も、もうし訳ございません」  
すっかりあわてたのは伊藤連隊長で、星の前にかけ寄って、不動の姿勢をとる。無理と



わかっていても一応は、あやまらなければならぬ。

二頭は、最初の優美さは何処へやら、汗みどろになって、ゼイゼイと、切迫した呼吸をくり返しながら、ともすればガクガクと、くずおれようとする四肢を、寄り添って辛うじて支えていたのである。切なげに起伏する胸の動きにつれて、弾力ある乳房がふるえ、その先についた鈴がリンリンと音をたてつづけているのも、今度は美畜のみじめさを示す、よすがとも、なってしまった。

腰の軛が外され、漸く轡から解放されると二頭は見栄も、張りもなくして、倒れるように人工芝の上に、くずおれてしまう。

「バカッ！ こんなことでへこたれて、どうすんのよ」

星に代って、伊藤連隊長が鞭をふるった。

二頭は悲鳴をあげて芝の上を転がりまわった。しかし、後手に固くロックされていては容易に起き上がることも出来ぬ。

轡の間から泡が噴き出してきて、先ずF—五五四号が気絶してしまった。

「ウー、ウー」

ふと、星 恵美子が下をみると、いつの間にかきたのか、さつき望月レイ子に身体の内

を洗って貰った乳畜、かつてのアマトル・アミンが、星の裸に胴体を、すりつけるようにしながら、しまりに地面をかいていた。

——なるほど。

星には、すぐ事情が呑み込めたのである。アマトルはサジステインであった。かつてシェイク・アル・ゼバルの館で女奴隷たちを相手に、大いにサド的生活を、ほしきままにしていたのが、天と地ほどの環境の激変は、ここに来てアマトルを責められる乳畜と交えてしまい。アマトルに買われて、その嗜虐のエジキになっていたイギリス僧、アン・ブラウンも又、輓畜として調教を受ける羽目となっていた。

しかし、鞭うたれているアン・ブラウンのあられもない肢体を見せつけられて、再び、アマトルの血は煮えたぎってきたのである。

アマトルは自分が鞭を振るっているように錯覚し、目を血走らせながら呻いた。

「そうそう。この馬は昔、このブタの持ち物だったのね」

目を細めながら、思い出したように星が言った。そして伊藤大佐に、

「大佐、もうよろしいでしょう。それより、もっと面白いことをいたしましょう。どうか

その、F—一四三号を立たせてみてくださいませんか」

「かしこまりました。オイ、立てっ」

轡を、はげしく曳かれて、美畜は悲しい鼻声を立てながら、辛うじて立ち上がった。

アン・ブラウンの目の前に、乳畜を曳いて行った星は、英語で

「このブタめに覚えがあるでしょう」

たちまち、アンは恐怖の叫び声をあげた。おそろしい責め手の顔を想い出したのである。身体中の毛穴が鳥肌立つのが、ありありと目立つ。

「そんなに、こわがらなくてもいいのよ。それより、パニッシュメントは許してあげるから、かつてのご主人を一廻り引きずってごらん」

アンの瞳の奥に、暗い炎がついたようだ。被虐者が加虐者に立場を変える瞬間、いつもこういう目をするものだ。

立場をかえたアマトルは、アンの後手に鼻綱を結いつけられ、哀れな叫びをあげながら引っぱられて行く。

あれ程、疲れ果てていたアンなのに、復讐の快感に酔いしれたのか、その疲れさえ忘れ果てたかのように駆けはじめた。(未完)

—《感想・論評・批判》—

ふるーい奇ク

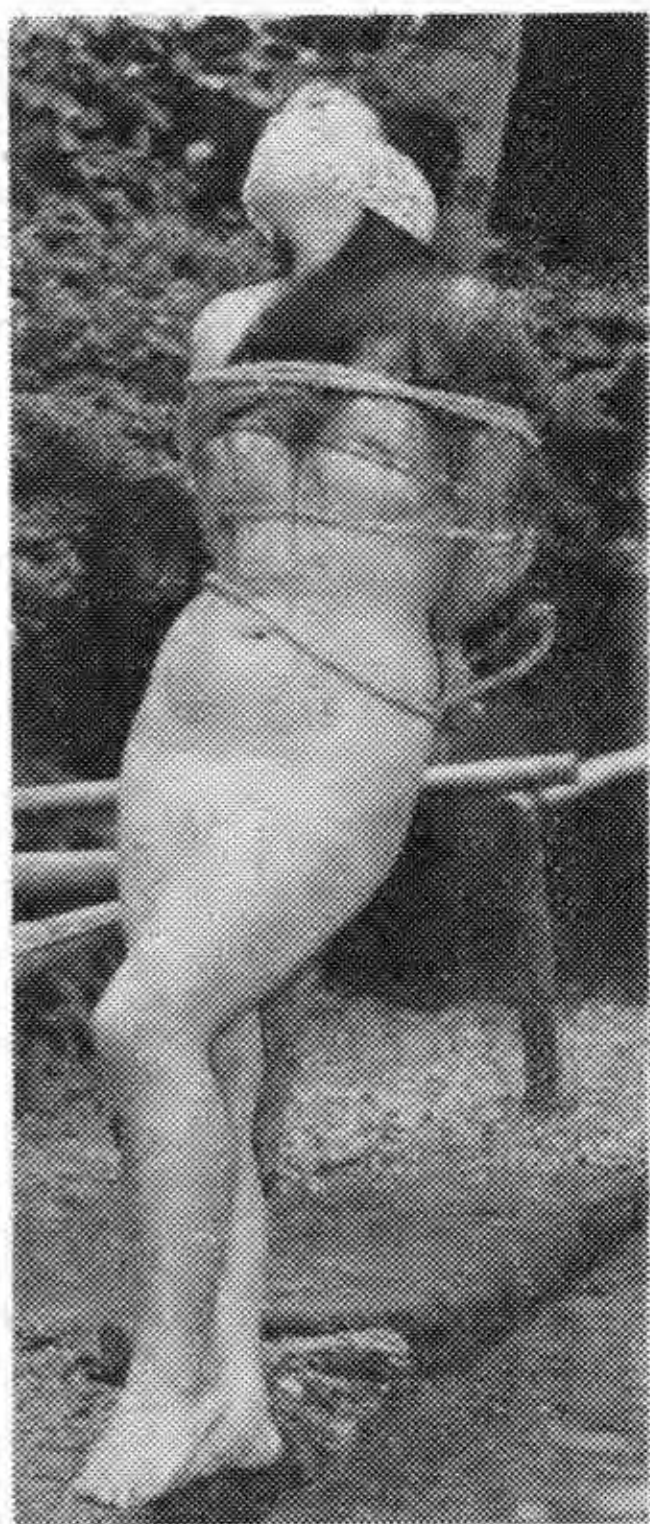
花 田 一 郎

写真・大塚啓子

関東平野の某地への旅が終わり、私は上野駅へ夜の七時過ぎに着いた。蒸し暑い日であった。神田駅へ廻り、タクシーを拾って神保町へ行く。ダメ。商店街は、殆ど閉店していた。

こりずに翌日また、神保町へ行く。せまい古本屋の天井に、ビニール袋入りの奇クが、たくさん釣り下げられている。私は、ふと昭和三十五年の七月ころの奇クに執心した。中味は、ほぼ見当がつく。

今年の九月号の奇クサロンに「神田の古書店で」という一文があり、「昭和三十五年頃の奇クは、店頭にさらしてあり」自由に見られるように紹介してあるが、これは誤り。三



十五年ものは、もう大分前からビニール袋入り、三千円が相場になっている。私は千円札を三枚、支払った。

一方、私は昭和三十五年五月の新聞の縮刷版を大分前から、さがしている。絶対に、みつからない。つまり、タイム・マシンに乗って十二年前に飛ぼうと思ったら、雑誌、書籍の氾濫する現代、奇クを買う以外に方法がない。いかに奇クが珍重されているか、想像がつく。

三、四百円だせば、現在もっと美麗なカラー雑誌が安直に入手できる。それなのに、うす汚れた奇クが、なぜ三千円もするのか？ 三千円、払って自分のものとしなければ、



そのビニール袋を破る権利を古本屋は、ゆずらない。私は街角で、その袋を破った。破る前から、絹川文代と大塚啓子が、ふんだんに登場していることは知っていた。しかし、梨花悠紀子が登場しているかどうかは、確信がなかった。確実に梨花悠紀子ものが欲しかったら、私は昭和三十七年ころのものを買えばよかった。確かにマゾ・タレントとしての梨花悠紀子は、前二者をしのぐものがあった。だが私は昭和三十五年ものを買った。そしてビニール袋を破った。梨花悠紀子は、まだ登場していなかった。

絹川文代と大塚啓子は予想通り誌面を飾っていた。私は大塚啓子の写真が欲しかったのである。

私は絹川文代と大塚啓子との相対的な位置を知らない。想像は、はずれているかもしれないが、絹川が姉さん格で、大塚が妹格ではなかったろうか。少なくとも

も両者を、めぐる人たちには、そう映じていたのではないか。

絹川は、縄目という「植木鉢」に、個性、演劇という花を育てた。これに対して、大塚は泥のように、心理的に凌辱されつづけたポーズをとらされた。フランス映画が肉体女優を売りこむとき、その半裸のスタイル写真を



無数に街角に、ばらまいた。雨が降って、その写真は泥だらけになり、人びとが、それを踏みながら歩いた——そこまで計算していたのである。大塚啓子のポーズは、その泥だらけの写真を思い出させる。縛り手は、そこらの中華料理店の女中か、なぞのように、大塚啓子の股間を、心安く縛り、彼女も、その方針に飼育されていった。おむつカバーの上から、むごいくらい、きつく股間を縛られた大塚啓子の、当時としては、ずいぶん思い切った坐り姿の、あの表情を私は忘れていない。

あの長い黒髪も、補助縄として上半身からみつき、女ごころを責め立てていた。

そういう大塚啓子は、たえられないくらいの、いじらしさというか郷愁を感じさせる。ビニール袋から取り出した古い誌面では、彼女は、おむつカバーは、はかされていなかったが、やはり股間を細引で、きつく締められて、シーツの上に、ころがされていた。絹川文代が、「千両」に値する流し目を読者に送ったり、縄目とコミックの巧みな融合に成功

したりしているのと、対照的である。実は、この「対照」が、ひとつの心理的な責め道具として、彼女を誌面でもう一度いたぶりつけたように思う。大塚啓子の真髓は、ここにある。

私は彼女の写真を眺め、シートの上に、いも虫のように、ころがされた裸身に、空想の鞭を雨あられのように降らせながら、ビールをのんだ。

「夫婦になれなかったなあ」という感慨を肴にしてのビールくらい、うまいビールが、この世にあらうか。股間を締められていない写真も、なつかしく美しかった。惚れた女にはどんな縄目も、よく似合う。

テレビなどの鞭打ちのシーンは必ずしも正確ではない。私は最近、鞭打ちの精密な描写があるのに気づいた。受刑者を大塚啓子に置きかえて紹介してみよう。

『革鞭を手にした刑事は、

「しっかりしてろよ」と低くいうと、振りあげることもせず、ただ、ねらいをつけるようにして、最初の一撃を加える。

最初の瞬間、啓子は黙っており、その表情が変わることすらないが、みると身体じゅうを痛みのけいれんが走り、叫び声ならぬ金切

声をあげる。

二撃目が加えられる。

刑事は脇に立ち、革鞭が身体を横切るように打つ。五つ打つごとに、彼はゆっくりと反対側へ移り、半分だけ、休ませる。啓子の髪の毛は額に、へばりつき首がふくれあがる。五—一〇撃されると、まだ前の鞭の痕が一面にある身体は、早くも赤紫色になり、青くなる。皮膚は一鞭、食らうごとに破れていく。

「旦那さま！」金切声と泣き声にまじって聞こえる。

「旦那さま！ お慈悲です。旦那さま！」

——中略するが、彼女のうわごと、泣きわめき、奇妙な首のつき出し、嘔吐。

ついで、ひとことも口がきけず、うめき、しわがれ声——

長い鞭打ちのあと、手足をほどいてもらい助けられて起きあがる。打たれた箇所は皮下出血のため、青紫色に出血している。歯の根が合わず、顔は黄色く濡れ、目は、とろんとしている。滴剤をもらうと、彼女はけいれんしながら、コップに噛みつく……』

歯がガチガチとするだけで、果たしてコップの水が、のめるかどうか。

『』の部分はチェホフ「サハリン島」(原卓也訳)に、少しばかり手を加えたものである。これが本当の鞭打ちである。

この一文は大塚啓子の目にふれないであらう





うが、『』の部分だけでも見せてやりたいと思う。オールド・ファンの鞭は、きびしいほど彼女は喜ぶであろう。

私の想像について、もう少し書くと、少なくとも当時は、奇クのモデルと、愛読者が相愛の結果、順調にゴール・インしたケースは多くなかったのではないか。サド・マゾ趣味に対する世間の目という被害者意識もあったろう。また、有名人に気おくれするという、庶民の心情も強く作用したであろう。絹川文

代も大塚啓子も有名人である——その結果、自分を写した、ぼう大な責め写真を焼き捨てて、不本意ながら、別世界に入ってしまったモデルもあったのではないかと思う。

こういうことを書いて、誤解されると困るが、私は大塚啓子に会ったこともないし、文通したこともない。ただ「花田一郎」という署名入りの文章を、彼女は記憶していてくれると思う。

こしらえごとの多かった昔の奇クの本文に

くらべ、カメラ・ハントを中心とした奇クの最近号には、ズシリとした充実感を覚えるし思い切ったポーズの指図に応じるモデル層も厚くなったことを、ひしひしと感じる。

しかし、山麓から、モデルという高根の花をねだり、はては「振られ男の弁」などという文章が巻末にのっていたりする。要は、ねだるのではなく愛してやることなのである。モデルも人間である。

一人のモデルに数十人の立派な求婚者というパターンが描かれ、モデルにとって嬉しい需給関係が昔から確立されていたら、奇クの編集も有形無形にどんなに楽であつたらう。

古い奇クが三千円するという、若い読者にとつての謎も氷解したのである。古い読者にとり、再会のためなら、三千円という代金は、実に安いものである。今年の九月号の、「霖雨余情」の前田真知子の「脚挙げ開股」に惚れた、「振られ男」氏のように、奇クを「買っては捨て」てはならない。九月号は大事に秘蔵すべきだと思う。少なくとも古本屋で一万円するのはわかり切っている。

ながながと書き綴った下心として、大塚啓子の写真が、二枚くらい添えられたら無上の幸福という希望を抱きながら、ペンをおく。





#### 四、昭和（三十年以降）

週刊誌のグラビアなども、まとめて後述するが、もっとも注目すべきものを代表で一つ

えらぶと、

○（秋場所グラマア）金星、銀星、夢の星「土曜漫画」昭和三十三年九月十九日号土曜通信社（一九五八）

浅草・ロック座の児井しのぶと高見緋紗子の両ストリップ嬢をモデルに、一応、型にかなった黒の褌と下がりをつけさせ、四股、チリチヨウズ、仕切り、右四つ、下手投げ、送り出しはたきこみ、上手出し投げの各技をモノクロでとったもので、褌のしめ方が正格である唯一つの女相撲写真となっている。モデルのよ

文献渉獵

## 女相撲書誌雑考

（下）

雄松比良彦（文と絵）

いことと、作法極まり技も大体、型にかなっていて、他の同類ものの様にアチャラカのムチャクチャでない点、珍しいものであろう。これはその後の同誌に、オリンピックの頃、縮小して再掲された。下手投げの極まりを、うしろから撮った一枚は、当時、評判になったものである。

○性風俗Ⅲ 社会篇 講座日本風俗史別巻三 雄山閣 昭和三十四年（一九五九）

「芸能にあらわれた女相撲」として、各地の雨乞い風俗。「性的見世物」として興行女相撲。「歴史公論」諸篇、「嬉遊笑覧」、「東土産」、「江戸繁昌記」、平井蒼太著作、西



鶴、近松などを引用。

○ 異本好色一代男 御莊金吾作 松沢書店 昭和三十四年（一九五九）

「旅情を慰める四十八手、女相撲と相撲をとること」の節に女相撲の見物や交渉を好色的に描いている。点景として女相撲を用いたり女力士の出でくる作品は調べつくせるものではないが、目にふれたものだけにしておく。

○ 鳶魚江戸ばなし 三田村鳶魚著 青蛙房 昭和三十五年（一九六〇） 二十巻

実は明治以来、「江戸読本」「日本及日本人」などに連載されたもので、一応、昭和十六—十八年頃、大東出版社によって、まとめられている。従って序列として、ここにおくのは不都合だが、内容茫大で、定形にまとめられたのは青蛙房版であるから、やむをえずここに入れた。しばしば引用される重要文献江戸研究の大御所のものとして信用出来る。

女相撲についても諸家考証の原典になっているものである。その大流行は明和年間であると明言されているほか、例の伝説的な田沼の女相撲も実際にあった事だとしている。

稲垣史生氏は、江戸風俗研究の立場から、これら鳶魚老の著作を分類整理し、項目別にととのえ、更に他書よりも増補して、同じ青

蛙房から刊行されている。「江戸生活事典」

（昭和三十四年）「江戸武家事典」（三十三年）「江戸編年事典」（四十一年）「武家編年事典」（四十三年）等で、それぞれに女相撲の略史や田沼意知の女中相撲のことなど出ている。これらの事典は、きわめて有用なもので、稲垣氏の労作として後世にのこるものであろうと考えられる。「江戸ばなし」としては「俠客と角力」の巻や「お大名ばなし」等。

○ 「伝説と奇談」第十三集 大相撲昔話 日本文化出版社 昭和三十五年（一九六〇）  
雄略采女相撲を描いた伊藤晴雨氏の画をのせている。風俗は超時代的の茫洋たるもので俵の大きな初期土俵、腰にゆるくまいた巾広の褌といった具合は、いかにも上古の伝説らしい。晴雨氏と女相撲のとり合わせは、おもしろいものであろう。

○ 相撲今むかし 和歌森太郎著 河出書房新社 昭和三十八年（一九六三）

御存知、和歌森先生のおもしろい相撲紹介本だが、女相撲については、雄略采女相撲にふれ、大正期の高玉組合のショックリの写真宮武外骨老？の女相撲絵馬の写真をのせてある。この絵馬も、かなり有名なもので、昔

の一奇抜と滑稽」誌であったかに広告されたものであろう。後述する土俵四股平氏の文のカットにも使われている。なお和歌森氏は別の著「相撲のおもしろさ」には「……富田常雄氏が「女性の柔道」についてのべておられた。これに対して相撲となるといかな相撲好きといえども「女性の相撲」には眉をひそめざるを得ない。こっけいな感じもする。せいぜい場末の門前町での見世物としてあるだけで、とても心ある公衆の前にさらされるものではない」と記されている。全くそうかもしれない。「女斗美愛好」は少数者のものであってよろしい。昨今のシバリブームの様になってしまつては味気ないことかもしれぬ。

○ 采女（うねめ） 門脇禎二著 中公新書七十三（中央公論社） 昭和四十年（一九六五）

女相撲書誌に入れるのは、いささか拡大しすぎかもしれないが「日本書紀」の茫大な研究書目中「采女相撲」にふれているものは数多いけれども、我々としては天皇の前で裸になつて禪をしめ、取組み合ったというこの時代の特異な境遇の女たちについて、何程かの知識を得るのも悪くない。序章に一言のみ、采女相撲にふれているが、それは采女のみじめ

な立場の一例証ということである。なお、項は起こさなかったが「折口信夫全集」の采女論のところにも、采女相撲について特殊な考証がある。

○ 女相撲むかしばなし 池田雅雄著 雑誌「相撲」第十六巻第六号 ベースボール・マガジン社 昭和四十二年（一九六七）

「相撲意外史」第十三として、上記にあげて来たような諸史、諸文献についてのべられている他、氏の実見記も二つ上っている。氏の著名な相撲史研究の一端として、女相撲史の方も今後、更に整備して頂きたいものである。大相撲関係雑誌では、先年辰野隆博士らによる座談会の中に女の相撲について話し合われたものがあるが、誌号を失念した。

○ 江戸時代大相撲（新版）古河三樹著 雄山閣 昭和四十三年（一九六八）

巻末に特に「女相撲」の項を設け、かなりくわしく諸書を引いてのべてある。女相撲の通史文献と

して一番あたらしいので注目してよいもの。一般的相撲文献としても、重要なものである。相撲文献目録もついている。

○ 史実「江戸」五巻本 樋口清之著 芳賀書店 昭和四十三年（一九六八）

第四巻に女相撲、女と盲の相撲。女と盲に



歴代相撲風俗戯画  
節会相撲の末期の取組

については文政九年三月上野山下興行、文化十年の興行、女相撲については明治二十年頃、東京佐竹原の興行、二十三年十一月、回向院の興行、それが二十七日禁止、等出ており、盲と女の引札の図、大女三人図など。

○ カラー版「大奥絵巻」 高岩肇著 日本文芸社 昭和四十三年（一九六八）

「鼠小僧と奥女中」に麻布長坂の南部信濃守上屋敷で末女中たちの女相撲。これも取組中禪がとけてしまつて皆大笑いしたという下げがついている。木俣清史氏の挿画一枚。

○ 徳川大奥秘話全集 ポケット劇場第一 高柳金芳解説 新風出版社 昭和四十三年（一九六八）

大流行をとった東映映画「徳川女系図」の女相撲場面について、関係資料は後に一括してのべるが、本書は、そのダイジェスト及びスチール写真集。福島朗画の江戸風女相撲図一枚。

○ 芸人その世界 永六輔著 文芸春秋 昭和四十四年（一九六九）

○ 役者その世界 同 昭和四十六年（一九七一）

雑誌「話の特集」に連載されたもの。女相撲についてのコラムが二、三、上っている。



有名な大阪の桂南天老より永六輔氏に女力士の写真を贈られたことや、御存知「娘のふんどし」の句など。これは上方の戯語だが、あながち空想でこじつけたものでもあるまい。

前述の「万句合」の句などからすると、案外女相撲等に由来する実感のある江戸期語かもしれない。明治二十年、娘相撲とあるが出典不明。巻末の茫大な参考書目の中の一つか。

○（大正昭和）**艶本資料の探究** 斎藤夜居著 芳賀書店 昭和四十四年（一九六九）  
本誌に連載されたもの。平井氏らの文献が上っている。

昭和四十五年（一九七〇）、羽里昌二氏の写案についての「**秘本色ごよみ**」（双葉社）があるが、パロディとしての女力士がいろいろ登場する。むろん本当の女相撲ではない。

○ **見世物の歴史** 古河三樹著 雄山閣 昭和四十五年（一九七〇）

「あとがき」に、朝倉氏の本を踏台としたものとされているが、いろいろ面白いこともつけ加えてある。「江戸ばなし」「摂陽奇観」「青砥銭」「街談録」「芸界きくままの記」等。明治以後のことも出ている。「空音本調子」及び引札の図。

○ **日本艶本大集成** 艶本研究刊行会 魚住書店 昭和四十五年（一九七〇）

「風俗資料」「デカメロン」「好色見世物志」「見世物女角力志」「グロテスク」「見世物研究」等を列挙。

○ **江戸のデザイン・第十八「角力」** 草森紳一著 雑誌「デザイン」（美術出版社） 昭和四十五年（一九七〇）

これは江戸期以後の大相撲というものをエロティシズムの視角から論評したもので、その意味では日本人の通念にふれており、いろいろ面白い見解が盛られている。ただ、情事の「見立て」としての相撲は男同士でなくては不可とか、女相撲、男女相撲は本質的でない等、このような、捉え難い人間の深層に対して、あまり明快なパターンを求められすぎたような傾向もある。「女斗美」というものは、男女情事の見立てとしての相撲とは、いささか質的に異なると思うけれども、この著者は女斗美とは無縁の方であろうから、これはこれで一つの見識であろう。最近のSMブームとかいうもので、ロープしぼりは巷にハランしているが「女斗美」は分類に困って単なるエロだとか、グロだとか、扱いかねたり、又は全く黙殺という著者や書店が多いの

は尤もである。SでもMでもなくてもよろしいが、SでもMでもあってもよい。深層心理学は皆々苦手であるが、将来、誰方が研究してみられてもよい。

○ **佐伯俊男画集** アグレマン社 昭和四十五年（一九七〇）

最近、すっかり流行ッ児になってしまった同氏の処女作品集だが、この中に一枚、巨大かつ毛むくじゃらの男力士が、かよわくみえる色白？の女力士を抱きしめて土俵際に追いつめている絵がある。氏独特の単純な描法だが、女力士はのけぞって目を閉じ、苦悶の表情で、一種印象的な画面になっている。

○ **定本艶笑落語** 小島貞二・能見正比古編 立風書房 昭和四十六年（一九七一）

落語「さい投げ」を収録。これについても雪崎氏は口演を聞かれたらしい。似たような外題に「蚊帳相撲」がある。やはり夫婦で相撲を取って、蚊帳が外れるというものだが、かつてNHK新聞「落語ダイジェスト」にも出ていた。

○ **表裏源内蛙合戦**（脚本） 井上ひさし 作 新潮社 昭和四十六年（一九七一）

二幕もの。昭和四十五年七月十七日・八月五日テアトル・エコーのコケラ落とし公演。

第二幕第五場に、盲と女力士の相撲場面を出す。私、残念ながら、この舞台を見ていないので、どのように演出されたのか、知りたく思っている。

○ 大江戸講談意外史 城悠輔作 ルック  
社 昭和四十七年（一九七二）

この辺になると本題としては多少、ゲテ物めくが「幡随院長兵衛」の項、本来の講談ならば例の黒鷲、桜川の取組があり、勝った桜川が非業の死にあうのだがこれを意外史にもじってあるので、黒姫桜川という女力士が登場。この両者の勝負となるが、実際は花電車のようなタワケをやるのみで、われわれにはガッカリとなる。

○ SM博物館 蘭光生編 三崎書房  
昭和四十七年（一九七二）

本誌所載の海野、雪崎、室井、奮斗士の各氏の文章をダイジェストして、よせあつめたもの。雑誌「エロチカ」連載分の単行本化。

○ おんなすもう（見世物女角力志）  
平井通著 有光書房 昭和四十七年（一九七二）

平井氏は昨年夏、他界されたので、こ

れは遺作となる。有光書房主、坂本篤氏が十数年前に預けられた原稿を、追悼の意味で上梓されたという。内容は平井氏の他作と同様女体観賞のプロローグから近代までの概観であるが、最後の御作だけあって一番まとまっております、川柳等にも研究をすすめられたよう



歴代相撲風俗戯画  
元禄ごろの取組

で、本書によると上述した「川柳評万句合」の「ふんどしも女角力は」の句は宝暦十一年義印二、「ふんどしをくひ切りそふな」は明和三年梅印五、と考証されている。口絵として黄表紙「女角力濫觴」の画（これの右側、西方女力士が表紙の押絵にも使っている）、昭和二十六年東京興行の「石山女大相撲」のポスター、及び番附、同じく石山一行の立山の五人持、横綱姿の女力士「遠江灘」、「時津風」の女角力の丁、氏の遺影筆跡などがかがてあり、特製百部、並装三百部限定。特に特装などは美しい造本で、氏の友人であった坂本氏の追悼の心をこめたものであろう。女相撲単独文献として今後、長く珍重されるものと思う。氏の実兄、江戸川乱歩（平井太郎）氏も、新青年大正十五年九月号に浅草女相撲にふれられていることは、本誌で珍しく夜乃探郎氏の指摘があった。B七判、本文七十一ページ。なお本書に複製された「女角力濫觴」の插画（本書では「空音本調子」となっているようだが）は、わたくしの実見本とは別本である事が判るので、平井氏、あるいは氏の知己の所蔵される「女角力濫觴」があるのではないかと考えられる。序文の中で平井氏は、今後各地の風習として残っている



女相撲を調べる、と述べられているが、残念であった。

さて、列举して上古から現代に至ったが、以上の他に、戦後の茫大な出版洪水の中、カストリ雑誌にはじまり現代週刊誌に至る、数限りない消耗品的刊行物があって、それらの中に発表された女相撲ものは、文章、絵、グラビア、カラー等、相当の量に上っている。これらを、いちいち項を起し誌名をあげ、刊年を連記してあげてゆくことは、いささかわずらわしくもあり、又、私の手元の資料では不十分でもある。従って、これらについては便宜上、刊行誌の判型で分類しながら、内容について、かんたんにふれてみよう。

先ずB列6判の諸雑誌、誌名でいえば「怪奇雑誌」「奇抜雑誌」等、数多の名称で昭和三十年前後まで出版されたものの中から拾ってみる。はじめに土俵四股平氏のものでは、女斗美一般としての女の格闘ものなど多いが、それらは省略し、女相撲を扱ったものに限ると、前記「女体は土俵に暴れまわる」の他に（獵奇読物）女房相撲、女房相撲（其の二）嫩打の巻がある。本誌でも、かつて氏の作「嫩相撲」がそうであったが、「嫩」とい

う活字がないためか、「颯」（なぶり）と誤植になっている。「嫩（うわなり）」の字は歌舞伎十八番にもあり、女二人で男一人を争うという字義からすると颯では困る。挿図は前篇に前出相撲絵馬をうつしたカットと、禪がとけかけた土俵際のもつれた絵、後篇は六尺禪のような締込みの取組二図と、土俵氏の所蔵されたらしい女相撲人形の写真一枚。内容はスペインの女房たちの相撲、我国の花嫁相撲、に続いて、いわゆる「後妻打ち（うわなりうち）」として行なわれる先妻と後妻の相撲などについて、いろいろのべたもの。

土俵氏以外では（女相撲の性犯罪）女相撲の肉体 大越誠一作 港新平画 大関小色葉の女相撲一行の興行をみて惚れこんだ倉持藤吉という物持の若主人が、大金を積んで、ひそかに全裸禪なしの三番勝負を所望し、その後この女につきまとうので彼女は腹上位で男を殺してしまったという話。港新平氏の絵は、右下手投げと思われる取組図。（江戸秘録）好色大名行状記 荒間之馬作 田沼山城守意知の世上有名な奥女中相撲のことをのべたもので、エロティックな筆で太り獅子と茶臼山の一番。画家不明で寄り倒しの図一枚。（獵奇実話）女相撲土俵狼藉 加茂三千彦作

津田浩画 シャツ、猿又をつけた、平井氏のいわゆる第四期の女力士。京都山科にかかった高玉女相撲団の足羽川お春と富ヶ嶽お富が恋のもつれで死斗の取組のすえ、禪のゆるんだお富の猿又をお春がムリに破り、醜態のまま投げ倒したが、後日二人の間に刃傷沙汰が起ったという。やや性別のはっきりしない女力士の刃傷の図と、禪のとけたお富をお春が投げ倒すところの図。（怪奇愛慾）雪御殿の裸姫 秩父甚次郎作 小田利実画 上杉出羽守の息女、阿里姫と清姫が「雪御殿」での退屈をまぎらすために腰元（とはいわぬそうだが、原文のママ）達の相撲を見ている。玉楓と池の目の豪快な取組み。しかし、女相撲にも倦んだ姫たちは、男と男の相撲を所望し……。これには女相撲でなく男の相撲の絵がある。女力士の血は躍る 湯島光平作 小田利実画 「人情講談」誌。羽州の女相撲団について、いろいろ描写の後、若桜と勇駒の、これもおきまりの男のもつれから土俵上、血をみるケンカとなったが、実は桜川という女力士の、さしがねであった。左四ツ取組の図など二・三枚、雄大な女力士。（獵奇実話）女護ヶ村受難記 尾崎栄太郎作 里水諒二画 これは禪姿の女相撲ではないが、女護ヶ島へ

まぎれこんだ男「私」を取りあう女たちが、全裸の相撲で勝負をつけ、勝ちぬいた女たちが次々と押し寄せる。艶色女白浪群盗伝 裸

田宗介作 ピンク紙刷。南蛮わたりの女相撲女列鈴具と称して、禪をしめた女力士が土俵上で取組み合いをする（関屋陸児の絵）。それに皆見とれていゝスキに、ふところのモノをいただく。夏場所女相撲（四十八手の裏表） 関屋陸

児画 二色刷の二ページ口絵。これはマンガで、滑稽取組が、いくつか組み合わせてあり、ブラジャーをつけ禪をしめた女力士。

これらの雑誌では又、カットとして本文と関係なく女相撲を入れたところもある。

男と女の相撲では、（失恋）お

相撲お六 宗方 一作 面谷兵衛画 本題は女相撲ではないが、女俠お六の紹介文として「身の丈五尺七寸、体重二十貫もあった大女で云々、享保十年、城主の面前で五人抜をやった荒武者を投げとばし……」この場面の挿図がある。

本文の出典があれば、知りたいも

の。

さて次に、B列五判、つまり週刊誌判で、これも、昭和二十年代に発行された「奇譚クラブ」「千一夜」「奇抜雑誌」「怪奇雑誌」「猟奇」等々から拾う。すでに「禪をはずし



歴代相撲風俗戯画  
寛延三の化粧禪化した取組姿

た女相撲」をあげたが、この他、これも土俵四股平氏署名のものからはじめると、妖氣ただよう素人女の大相撲、腹櫓対乳張山 は氏独特のくだけた文体で、乳房相撲など取組のさまを描く。挿画はレスリングの様である。

女に跨がせる男（画も土俵四股平） はじめに「女斗美考現」のダイジェストがあり、雲珠京子（21）と岸瑠美子（18）の二人が黒緇子の禪をしめたのを、畳の上に寝て、その上で取組ませ、女斗美を下から見上げるという趣向。図は女力士が四本柱を抱いて相手を見すえるところと、土俵ぎわ腰投げのような極まり技の取組図。「女千人ズラリと並べ様で（？）角力がとらせたい」とある。欄外に加茂三千彦氏署名で「花櫓娘力士は唄う」というのがついていて「ムーヴへの要求 ファイトへのあこがれ……」とメトマールらしいところをみせ、「きけや！ 土俵に四股踏むひびき、見よや！ 爪紅 みなぎる闘志。黒の禪をきりりとしめて、女同士はこう仕切る」といった風に六番まである。これに続いて 見上ぐる寝業 ナイロン土俵に咲く相撲花 で前作の寝ころび土俵から進んで空中に透明ビニールの大布を張り、その上で禪なし素裸のメトマーズ、玉椿やちと八重衣うたの取組



むのを下から見上げて観戦するという趣向。

挿画一枚。火花散る女と女の格闘（女斗美礼讃）

は女斗美学を氏らしい語り調で、のべ

たものだが、カットの女相撲人形の写真は珍

しい。（華宵秘聞）相撲狂いのお姫さま 戸

山笑作画 はレズビアン的な内容のものだが

最後は縄ばしごの上での裸女の取組など、大

分、女斗美もソフィステイケートされた感じ

である。ズンドコ節替え唄（昭和女相撲）娘

関 「女相撲といわれても 土俵の相撲じゃ

負けやせぬ 可愛い男の飛入りを やっと残

した土俵際 オヤ ズンドコズンドコ」云々

五番まで。氏の筆で、例の女相撲絵馬のカッ

ト。

といったところだが、土俵四股平氏以外で

は（秘密シヨウ）恋の女相撲 崎井恵之助

作 は富農の娘が傾いた家運をたてなおすた

め、秘密シヨウの女相撲の力士となり、勝負

には大金が賭けられ、しかも勝ち力士の体を

買うことが出来るといったルールの中でのラ

ヴストーリーのようなもの。取組画一枚。歎

楽大博覧会第四会場 飛入女相撲（女体の妖

気） 一行五十名の女力士団。番附の一部が

のせてある。東横綱梅ヶ枝を、西前頭若竹が

大相撲のすえ、猛烈な一本背負いで土俵にた

たきつける。若い男の飛入り。これに強いのが

がいて、女力士を横綱までなぎ倒したが、小

結夕霧がセクシーテクニクで攻め男の力の

抜けた所を投げる。仕切りの美女力士の図。

この他、題名を逸したが御殿女中の相撲の

取組でトッタリの図を入れた一作があった。

口絵などにも女相撲はとりあげられていて、

古今見世物めぐり上 は多色刷の口絵で軽わ

ざ、大鮑（大板血）、大駱駝（おお楽だ）、

玉乗りなどと共に、赤禪で取組みあう（はな

はだ色気のない）女角力の絵があり、解説に

「時津風」の句などのせている。

又、男と女の相撲では 世の中にはこんな

強い女がいるとは知らなんだ 尾崎文甫作

は史上有名な高島大井子と佐伯氏長の出合い

の、古今著聞集の話であるが、これに近江海

津のかね女の話をあわせたものか、女の名は

お金になっっている。又原文では女は大女でも

なく相撲もしないが、これはそのお金が大女

で、赤い禪一本で氏長に息もつけぬ程、稽古

をする。夜、女の床にしのび込むと両股でし

めつけられて息もたえだえになるという話。

女の投げを懸命にこらえる男が、女の前袋を

握って引きつけているエロティックな挿画。

前後するが雑誌「風俗奇譚」は主として男

色、女装、マゾを扱い、女斗美は、あまりと

りあげないけれども、この誌面に似たものを

あげてみると、先ず鬼頭曉氏の画、又は画文

では、女斗美シリーズ 驚異の剣方峰、女相

撲娘土俵入り、それと女斗美女ずもうの三つ

がある。この他では、取組はないが金色女闘

記 百田章治作 に女力士が禪姿で登場、乳

房の中隊、前へ 枝川史郎作 田上恵子画

は、女たちの兵士に相撲をとらせるというも

の。未来から来た女角力ファン 有宮和夫作

もある。大体は、こんなところであろう。

現在も双葉社等から多数発行されている月

刊の大衆文芸雑誌から拾えば、（名君誕生）

越中の殿 池沢伸介作 木俣清史画 は、江

戸期のものにもかかわらず、考証不良とみえ

て「肉ジューパンを着て」いる女力士が出て来

て、挿画の木俣氏もやむをえず、多色口絵で

も、本文挿画でもそのように、かいている。

このカラー口絵の、土俵上にひっくりかえっ

ている赤い禪の女力士は中々色っぽい。若旦那

那捕物帳 女力士 宮本幹也作 今村恒美画

は女相撲の殺し事件の捕物で、彼女等の風俗

を軽く書いている。天保水滸伝「笹川繁蔵」

と女力士の交渉をかいいた「あすなる仁義」

中野蝶花作 矢島健二画 もある。これらの雑誌のカラムには、毎回、同じような文面、カットで女相撲を紹介しているものが多い。

「オール読物」四十六年十一月号に 女殺し座頭松 梶山季之作 奈良葉二画 これは先般、本誌に紹介があった。「SMマガジン」には 大奥の涙 ジャン・太田作 奈良崎正画 があり、因幡城の奥女中らが殿様の御前で紅白禪の相撲をとる。これはSM的にしてあって勝った者も、負けた者も責められる。

A5判の画報雑誌、古くは、「世界裸美術報」から「実話雑誌」「実話特報」等をへて今日の「実話とマンガ」等に至る系列には、先ず諸氏に有名な 女相撲 肉弾決定戦十五景 の折込写真があげられる。この写真のネタはその後、再三利用され、各所にあらわれた。中々面白いものなのだが、禪のしめ方などが、こういったナンセンス物独特のなげやりなやり方で、感興を大いに殺ぐ。最近にはドッキリヌード 女斗美 は超広角レンズを用いたナンセンス物。しかし白い六尺禪をキチンとしているのは、よろしい。仕切りの尻の大写しは思わず吹き出す。A5判では、「ピンキーパンチ」誌なども出ているが、すもうではじまる甘美な夜 これは後出のポケ

ット版物と同じネタで、レズビアンとしての女相撲。せっかく白の稽古禪を用いながら、何とも奇妙な、まきつけ方。

週刊誌の方をのぞいてみると「週刊新潮」に連載された 列侯深秘録 「色の道教えます」第十三話 十三あそび 五味康祐作 木下二介画 は、女中達の秘所をうかがうため全裸の相撲をとらせる趣向があり、「サンケイ」の新立川文庫劇画の 猿飛佐助 鈴木清順・岬一作 小島剛夕画 では珍しく小島氏が女相撲をかいていて、肥満大女ではあるが愛嬌があって憎めない力士達と佐助の交渉のナンセンス。漫画週刊誌では「土曜漫画」にグラマ夫人第十回 鈴村 寛 が現代風俗の奥さんの裸相撲。「漫画天国」に、これはよみもので 戦国サムライ無頼帖第九話 仇討ち女相撲 稲垣史生作 中込漢画 例の田沼山城守意知が女中相撲を見ていて、負け力士の大根足に、けりとばされ、それが刃傷される原因になったという話。「漫画エース」にカラーページ(グリーン)で 大江戸エロチカル見世物 女相撲。同じく「エース」に二色刷口絵で 女角力春場所 菊川英昌・吉田英一 これは横綱土俵入、見開きで突倒しの取組土俵全景。第三面は男と、たわむれる着

衣の女力士。「別冊週刊漫画タイムス」には 戦国意外史 女天と男地と 上杉謙信くの一 作戦の巻 村松駿吉作 市村章画 に、くのーたちの幻惑女相撲。「週刊情報」にはハーページ、鬼頭曉氏の絵で メトミに青春を謳歌する娘たち。「漫画Q」に歌川大雅氏の絵で多色刷の 女角力。これには珍しくスクリプトとして寺門静軒を引いている。「漫画パック」には 江戸力婦伝 ともよの初恋 松原晃作 白井一夫構成の劇画。「風来六部集」の「力婦伝」から、とっている。

もっとも「力婦伝」は風来山人、平賀源内作ではないことが、国文学界で有力となっている。ともよは相撲はとらなかったのだが、この劇画では禪姿で取組もあり、力持ちも女力士としての、ものにしてある。「漫画情報」に 柔肌の殺人ゲーム 大泉薫作 前田寿安画 イスタンブールの女たちに禪をさせて日本青年が相撲を教えたり、やつつけられたりするイラストストーリー。「漫画OK」には 剣と色気の時代コミック ボイン100両 井上哲也 のマンガの中に家臣を投げつけてグロッキーにする姫が、現われる。同じく「OK」には、例の東映「女系図」上映の直後に新版浮世絵草紙(江戸巷談百話) 女はみんな

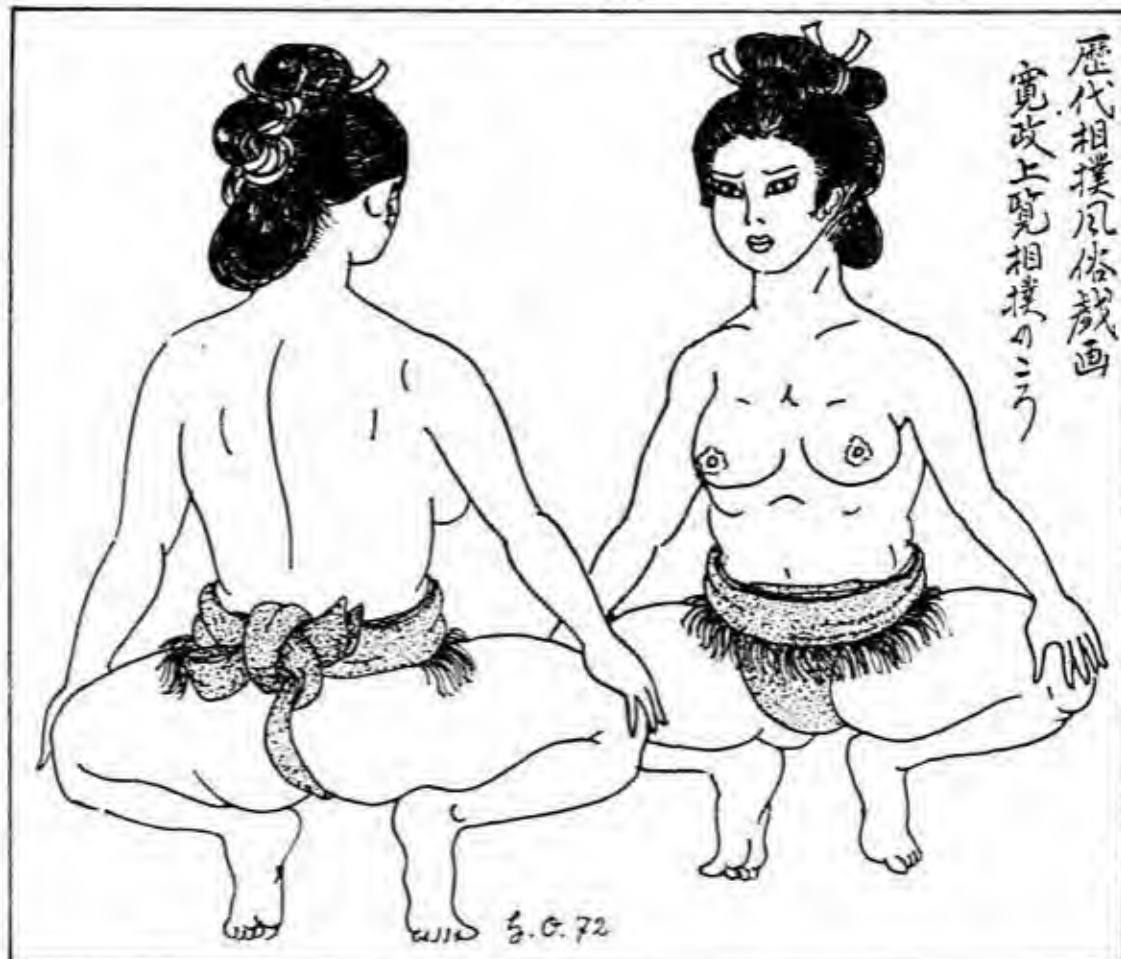


ワシのもの 菊川英昌作 これには新参舞いも、女相撲も、禪姿の騎馬戦もあって東映物ダイジェストの如くだが、絵柄が菊川氏のものでから楽しめる。今年になって「週刊特報」の冒頭カラーとグラビアに 初場所オンナ力士。かわいいモデルを使ってあるが、あまり相撲的な取組み方ではない。赤禪のしめ方も奇妙である。

さてグラビアに入った所で、前後するが、週刊誌のグラビアをとりあげると、前にのべた「金星、銀星、夢の星」が、ずばぬけた出来であるが、あとは昭和四十二年に東京のバーやナイトクラブで流行した水着姿に禪をしめたホステスたちの相撲取材したものが、かなり出ていた。これには「土曜漫画」「芸能と生活」などに文章ものっている。「サンデー毎日」にはNETアフタヌーンショウに出た温海と式見のおばさん達の女相撲の取材。「伊万里女相撲」の取組風景も二・三回、各誌に取材された事がある。日本テレビの「女相撲日本一決定戦」があらわ

歴代相撲風俗戯画

寛政上覧相撲のころ



れると、各週刊誌は一斉に出場者の身辺を取材、「週刊平凡」「週刊大衆」「ヤングレディ」に大同小異のルポが載った。

前後するがB5判誌「別冊笑の泉(大きい方)」の折込グラフに「臀下泰平蒙御免、グラマー大相撲」が掲載されたことがある。この

写真と同一ネタのものが先般、本誌上に増田トシロー氏によって、のせられている。

さて、かけ走のレヴィユウであるが、最後に、二・三年來、大流行して來て、現在には十指を屈する、いわゆるポケット判もの、「ピンキー」「Qt」「Men」「ポケットSM」「SMセレクト」「SMファン」等が案外、よく女相撲をとりあげる様である。残念ながら相撲禪を、きちんと締めさせたのは皆無であるが、一部は白の六尺禪を、きっちり締めたのがあり、これは、これで可愛くてよろしい。順序不同であるが、ハレンチ学園女子相撲部。白い裸に禪キリリ、ハレンチ花の大相撲。ピンキー学園お色気運動部(相撲部)の三つは同じネタと思われるが、いずれも白の六尺禪姿で、しめ方は正格である。カラー写真で、「ザ・ウーマン・スモウ」というのと女相撲だヨーン! 春場所 というの、これも同ネタで、正格の木綿稽古禪を用いているのに、腰のまわりは、まことに妙な巻きつけ方をしており、せっかくのカラーなのに残念なもの。その他、禪をしめないズボラ物にはレズビアン趣味としてオピンク酷技大すもうなどがあるが、禪もない全裸で抱き合っているだけでは、女相撲の名称は羊頭狗肉、ヤメ

テホシイ。読物では残酷さむらい異聞、女相撲喪神の女斗美 赤堤次郎丸作 辻村喬画がある。これも先般、本誌上に紹介された。

昭和四十五年十二月の日劇ミュージックホール公演に女相撲が出され、これも本誌に紹介されているが、これの写真も数誌に載った。

女相撲の人形については、土俵四股平氏が作られたものが多くあるといわれているが、西沢笛歌氏の「日本人形史」によると、男童と女童の取組んだ人形があり、形がかえられる。八代市日奈久の人形「板相撲」は郷土玩具として有名であるが、伊藤堅吉氏の「俗信芸術」ではこの板相撲に男女のものがある。はっきり判らぬが肌色を塗りわけてあり、白い方の髪が長いからこれが女であるのかもしれない。

マンガの単行本も江戸風俗ものが沢山出ているわりに、女相撲はない様に思われる。劇画にしても、女相撲をテーマにして女力士を主人公にすれば異色のあるものが出来ると思うのだが、そういうものはない。今東光氏のように、女角力を小説にしたのは俺だけだ、といった風にはゆかぬのか。上村一夫氏の、「江戸浮世絵師異聞アモン(1)」に田沼奥女中の女相撲場面がごく小さな一カットである

が出ている。

女相撲文献として残るところは各社の百科事典、その他、国語事典、民俗事典、風俗事典等ということになる。これらは比較的、誰にも閲覧しやすいものであるからレヴィユウも不要かもしれぬが、平凡社版世界大百科事典では、旧版タテ書きの分の記述は詳しく、「いちゃな節」という相撲甚句まで引用されていたが、新版横書きでは殆ど記述らしいものがなくなってしまった。むしろ小学館版の日本大百科事典では戸田道夫氏が二十一行の解説と、高玉組合の番附、及び化粧禪姿の女力士の集合写真をのせているし、同じく小学館版の原色日本大百科事典には図はないが、宮尾しげを氏の要領のよい十七行の解説がある。国語事典でも岩波広辞苑クラスには字句解が上っているし、各種風俗事典にも一応の項がある。話の大事典(昭和二十五年)、随筆事典第二巻雑芸楽篇(昭和三十五年)にも項がある。

以上、本稿整理中に、刊行物二―三の中に女相撲の記事が現われているが、又後日、まとめるときに、ゆずりたいと思う。平井通氏

の追悼文等が諸所にでているが、これも大体は諸氏の御目にふれていることと思うので省略させていただく。

この「雑考」の最後におくものとして、おそらく女相撲映画の空前絶後となるであろう東映映画徳川女系図に関係したものをとりあげておこう。この映画は昭和四十三年五月に封切られ大あたりをとった。同年四月ごろ、週刊誌や「風俗奇譚」が一せいに予告したがグラビアでとりあげたのは「週刊実話」四月一日号と「週刊サンケイ」四月一日号であった。「風俗奇譚」のものは他にないスチールを含む。その後、娯楽誌、週刊誌等、枚挙にいとまない程のものが、これを掲載しているが、アメリカの CAVALLADE, Vol. 7, No. 6, 1968が上記「サンケイ」と同じ写真を用い、DEADLIER THAN THE MALE という題で二ページの紹介文をのせ、この映画も大いに国際的になったものである。このタイトルは「男より勝色ありや」を英訳したものと思われる。中々おもしろい。「別冊近代映画」一九六八年六月等に、この映画の紹介はくわしく行なわれた。「週刊」影、成人映画猛烈特集「別冊マル秘、成人映画」もある。当



時の本誌にも各氏が寄せておられる。

## あとがき

玉石混淆という言葉もあり、燕石という語もある。上記長々と列挙し来たって、いささかその感なしとしないが、そもそも、われわれのとりあげた主題が「女相撲」なのであり、その中に貴族的な趣味を見ようが、庶民的な親しさを見ようが、各人の勝手である。女斗美そのものにしても、女の優しさと逞しさ、輝姿の凛々しさ、可憐さを見ようが、巨女に限定してマゾヒズムを感じようが、勝負の各瞬間に、彼我交錯するサディズムを感じようが、いずれも勝手である。ただ素裸に輝を、きりりと締めて、土俵上まなじりを決して挑み合う美女と美女の、分析し難い魅力というものとは共通しているであろう。このような主題に本来、玉も石もありはしない。

この雑考では主題に関連した、すべてをとりあげたので、筆者の女斗美の趣味が、どの辺にあるかで偏向的な運び方はしていない。従って筆者が女斗美に、もっとも嫌う要素、グロテスク、あるいは野卑といったものが入っている資料も、すべて同列に並べてある。これは書誌考であるからである。女斗美学そ

のものは、土俵四股平氏の論述もあり、本誌同好各位の所説もあることで、大体一定したクライテリオンがあるのではないかと思う。

筆者も、かつて「寒椿抄」と「高校女子相撲選手権大会」の中で、その一端にふれておい

## 筆者より編集部への通信

拙文「雑考」御掲載有難う存じます。送稿後「乗穂録」「江戸繁昌記口語訳」「檜重雑筆」「江戸座談会の美女?と醜女の角力」「岩手女子青年団の奉納相撲」「グロテスク」「愛奴・1(写真)」や事典類、北九州の祭礼資料などを追加して居りますが、又他日、紙面がございましたら補わせていただきます。明治期の新聞資料も重要で、詳記したかったのを、皆削ってしまいました。この方面の識者にお叱りをうけるかもしれませんが。大体、集めてありますので、これも他の折にいたし度。唯、ぜひ申しおくべきは、「はしがき」其他に全裸一本の興行が東京では明治二十三年十一月まで、としましたのは、平井蒼太氏らの明言されているお説に従ったのですが、これが実に誤りである事が、新聞資料実見により判明したことを御報告しておきます。「読売」が異例の紙面をさいて前後十回にわたり報道している中に、半股引に肉襦袢と明記しているのです。永六輔氏の明治二十年のもの

た。この雑考が、女相撲を愛する同好各位の深層不可思議な、分析しがたいイメージの飛躍の一端のお手伝いとなれば、望外の幸である。一九七二・五・〇五、端午の節句の日。

(完)

は「時事新報」十月十二日。「婦女の身にしておられもなき、観衆の前をも憚らず、男力士の如くに一条の厚き横鼻を締め込み、島田留の娘の打扮にて四つに取組み、大なる乳房を左右に振り分け力を角する杯とは……(越後高田)」これも全裸としたいが、この際、速断は慎みます。結局、全裸興行の下限は不明。「郵便報知」に八坂新地(京)の老妓達の相撲、十七年六月二十一日。さて、私の悪筆で、「雑考」植字、校正にお悩ませいたし、恐縮汗顔の至りです。二十個所ばかり散見する誤植は、大体意の通ずる所ですが、はしがき附記の「びづくし」は、「心づくし」母親容気の「白白」は「石臼」空音の「地尾」は「北尾」同「三味線もぶじ十二オ」は「三味線もぶじかえってめでたしという、十二オ」濫觴「なりかば」は「なりしかば」柳多留「折才」は「折オ」万句合「はればれとすする」は「はればれとする」(さかりなりけりけりも同じ)でございます。酷暑の折柄、編集スタッフ各位、女斗愛好各位の清栄を祈ります。(京都・雄松比良彦)

<告白>

女性の尻にひかれた男の

ささやかなMの体験

岩本

弘

カット・春川ナミオ



これから、私が書きますことは、嘘いつわりのない本当のことばかりですが、それだけに読まれる方にとっては、小説のように華やかな場面が出てくるわけではありませんのでひょっとしたら退屈されるのではないかと心配します。

私が本誌を知ったのは、今から約十五年も前のことです。ある日、一人で近くの池へ魚釣りに行った時の事です。ふと見ると、足もとの草むらの中に、一冊の古ぼけた本が落ちているではありませんか。

表紙はちぎってしまつて、なくなつていましたが、私には、なにかしら、直感的に、ピンとひかれるものがあつて拾ひあげ、胸を躍らせて頁を開いてみますと、外国の綺麗な女の人が、後手に縛られている写真がありました。

外国の女の人が縛られている事を奇妙に思いましたが、それより、私には女の人が、女の人の事が書いてある——それだけで充分だという気でした。

実は、それが奇譚クラブであつたわけですが、それ以来、古本屋へ行つては、奇クを求めに行ったものです。古本屋というのは、古いバックナンバーの奇クが欲しかった為で、



決してケチった訳ではありません。

もちろん、本屋などへ足を向けたのは、これが最初だったんです。残念ながら、今は、その本屋は、もうありません。お年寄が経営しておられ、とても買い易かったのですが、それに古い奇譚クラブが豊富にあったのにと残念ではありません。

その頃の私は、古本屋へ入って、奇譚クラブという雑誌の表紙が目に入ると、もう胸がドキドキしたものです。奇譚クラブ——という題字は、その内容のイメージを考えてみて何と素晴らしい綴りではありませんか。

話は前に戻りますが、相手の女性に対する好みというものは、最初のこの様な事が、大きく影響を及ぼしている様です。と言いますのは、私の好みは、最初奇クの口絵の写真で見た様な外人女性に強くひかれるからです。

しかし、女の人を縛ってやろう——という気持ちには全然なれません。むしろ逆に、女の人に縛られたいと思っています。つまりMなのです。最初、見た本の内容の中で、未だに強く印象に残っている告白文があります。

その内容といえますのは、ある保育所の保育士さんが職権を合法的に利用して、頭の少々おかしい女の子を、毎夜虐待するのです。

さし絵がのっけていて、シュミーズ一枚の保育士さんが、暴れる女の子の首を、太股でギュウギュウ絞めつけているのです。ただ、残念に思いましたのは、その保育士さんは、相手が女の子である事が、より優越感にひたれるとはつきり書いてある事です。

私は、その逆で、女性より、そのようにして、いじめられたいと思うのです。すでに、その頃から、私はMだったのでしょう。

結局、それから、もう奇譚クラブとは離れられないものとなっていたのです。つまり男の子である自分が、密室へ引っぱり込まれて、保母さんに太股で首を挟み込まれて、折檻されたらなあ——と思うのです。それは、私の強い願望でした。

それから、別のもう一つの告白文は、豊満な女将さんのいる老舗へ丁稚として少年、昔でいえば小僧さんが来ます。小僧さんは毎晩未亡人である女将さんに呼ばれて按摩をさせられます。

それも、さし絵があって、女将さんの大きなお尻の上へ小僧が立っているのです。なんて幸せな小僧だなあと思ったものです。

あとの一つは、終戦頃、高級車に乗った外国の女性、たぶんアメリカ女性といますが

車から通行人を呼び、道を聞き、車に男を乗せて、そして山手の方へ行き、静かな所へ車を止め、シートをベッドにして何時間も接吻されて唇が痛くなる程だったという。そして帰りには、何枚かのお金を呉れて返してくれたいと言う告白文です。

早い話が、アメリカ女性の浮気であり、遊び相手にされただけの話ですが、私には、その男の人が羨ましくてなりませんでした。

私は女性は大いの方が好きです。イタリア女優のソフィア・ローレンの様な女の人が好きです。考えて見れば、やっぱり、この本により大きな影響を受けておったのです。私の好みは、この本の登場人物と同じなのは、単なる偶然ではないと思います。

大体、以上が、今から十五年も前の奇譚クラブの内容です。

それ以来、ほとんど全部の奇クは見えております。その後、しばらく、九州の方へ仕事で行き(約三年)又、今の所へ帰っておりますが、もう以前あった古本屋はありませんでした。仕事で行った九州では、住込みで一部屋に三人も寝ていたので、ゆっくり奇譚クラブは部屋で読むわけにはいきませんでした。

しかしながら、私は奇クを愛読するには、

不自由はしておりません。と言いますのは、月に二日ほどの休みがありましたので、昼間は映画を見て時間をつぶし、夜は街の旅館に泊るのです。街の本屋で奇クを買って行くのですが、映画より、むしろ本の事が気になって、おちおち映画も見ておれません。

たまたま、映画館へ入る前に買っておいだ奇クをコートポケットから取り出し、映画館のトイレの中へ入り、それを見て自慰をした事もあります。楽しみは後で——なんて、辛抱出来ません。

以前は、奇クを買う時は、自分の好みの記事や絵、写真が有るか無いか、パラパラとめくって、本屋で物色して買ったものですが、今はもちろんの事、旅館へ泊って読む時も、新しい月の本だったら、内容も見ないで買い求めてしまいます。

私は女性のお尻に異常なほどに魅了されているのです。私はここに書くのでさえ恥かしく感じて顔が真赤になりそうなのですが、女性のお尻——とは、もちろん、ア—ヌスの事です。私はイラストを書くのが得意で、いつもM場面を小さな紙片に、エンピツかペンで書いて、一人で慰めています。旅館で奇クを読みながら自慰をすれば最高です。

ある日、私は素晴らしいの一言につきるほどの告白文を読みました。ある旅館での夜の事でした。それは、やはり私の様に、女性のお尻に非常な興味を持っている男の告白文で、それを読んで、私は女性のお尻以外は、もう考えられない程になってしまいました。

私の持っている女性へのイメージでは一番人に見せたくない部分といえば、それはア—ヌスです。逆の言い方をすれば、最も汚くて臭い部分なのです。そこをM男に舌舐めの奉仕をさせる事は、M男にとって屈辱の極致だと思っています。

女性にとって、そんなに一番、汚い部分を男性に舐めさせるということは、凡そ、女性というものの概念からして、どうしても考えられない程、不可解なものだけに、尚更アブノーマルに思うのです。

町を歩いている美女でも意識的にスカートのスソを隠します。水着であればパンティの下線まで肌が見えているものを——と思う時、スカートを隠す仕草が、益々妖しいまでに、私の官能を高ぶらせるのです。

特に和服姿で日本髪を結った女性を、より女らしく感じているだけに、その女性のア—ヌスを想像しますと、たまらない思いに胸を

ドキドキさせるのです。

“女”それは化粧の香りもさわやかで、そして、一方では、あのア—ヌスの排泄物独特の臭気が——と思うと、とても自分が幸せに思えるのです。いつも私の頭の中は女性のお尻の事で、いっぱいです。その矢先に、この告白文を読んで感銘を受けた次第です。その内容のあらましは、次の様です。

その男は、普段は女房に、それをして貰っているようですが、当然の事です。次第につまらなくなり、今では商売女に、それをして貰っているのです。

どういう事かと言いますと、その女のお尻の一番奥に、自分の顔を挟み込んで貰い、そして、女の手で頭の後をグツと押し込まれ、自分の口、鼻をピタッと女の肛門に密着させられるそうです。そして、時々股を開いて、更に強く頭をお尻の奥へ押し込まれ、グツと両股を絞めて貰います。

その度毎に興奮するとの事です。又、顔をお尻に挟まれたまま放屁して貰った事もあったそうです。そして、そのまま女が高軒をかいて寝込んでしまうと（この女は自分の顔を、お尻に挟んで寝た）満足すると書いてありました。そして、翌日の朝は、砂を噛むよ



うな空しい気持を抱いて帰って行きます。

自分の事を「女の股ぐらに閉じ込められた哀れな男」と書いていたのが、私の印象に強く残ってしまいました。その臭いを想像しますと、その男が羨ましい限りでした。

何年か前の読者通信で、ある女性が「私のお尻の臭いを、男性に嗅がせたら、と思うとゾクゾクしてくる」と書いていましたが、私はこれを読んで死ぬ程、嬉しく思いました。

私は女性のア・ヌスは汚いとは思いませんが、普通の男性にとっては、そんな事は考えられないでしょうね。やはり、汚いと思うでしょう。

商売女と遊んだ時、女がサツと身をひるがえして立とうとして、私の目の前に裾を開いたので、女の股間にそそがれていた私の目はその部分を見ましたが、敢えて、それをお願ひする事はしなかったのです。

お金は持っていたのですが、いや、それより、気の小さい自分の事ですから、とても恥かしくて、……させてほしいと頼めなかったのです。ただ、その時、嬉しかったのは、最初、街頭で誘われた時と交渉が終わるまでは優しかったのに、それが済んでしまうと、ガラリと女の態度が変わり、私がゴムをいじく

っていますと「かしな！」と蓮っ葉に言っ  
それを取りあげ、チリ紙に包んで捨ててしま  
いました。

目に見える程に、態度が横柄になってしま  
っているのです。私がおとなしい男だと見て  
とったからでしょうか。私は被虐的な喜びに  
浸れたのです。実の所、ノーマルな行為は成  
功しなかったのですが、初めての経験でもあ  
り、何だかわからないうちに、女はその場を  
去っていました。以来、ノーマルな行為は、  
一切する気がなくなりました。

それと共に、日に日に、私の女性のお尻に  
対する思いは、つのるばかりでした。

思う事は、常に自分が女の人のお尻を舐め  
ている——いや、舐めさせられている姿ばか  
りでした。女に奉仕がしたい……。それが、  
私の望みでした。

町を歩いている女性を見ますと、ついつい  
お尻の方へ目が移ってしまうのです。しかし  
思えば思うほど、現実としては、若いピチピ  
チした女性は、自分の対象外に思われてしま  
した。

もともと、私は、自分よりも十才位年上の  
女性に魅力を感じる方ですし、年をとる毎に  
二十才前後の女性は、子供っぽく見えてくる

のでした。最近の女性はドライで、より女っ  
ぽい四十才位の女性に強くひかれます。

以前、若い女性を口説き、大失敗した事が  
あります。自然に、私はもう女性であれば、  
中年の少々顔は悪くても——と思う様になり  
ました。先程の告白文の様に、なんとかして  
自分も女性から、あんな事をしてほしいと思  
うのです。

もう、この際、相手の年令や、好みなんか  
贅言言っていたら、いつまでたっても望みは  
叶えられないと思いました。それまでの異常  
なまでの欲求不満がつり、益々アブ的にな  
り、かなり年輩の女性のお尻にも、つい目が  
行ってしまう様になりました。

さっきも書きました様に、理想としては、  
ソフィア・ローレンの様な女性に、あんな御  
奉仕をさせられたら最高に思いますが、せめ  
て、肉感的なお尻の大きな、大柄の女性に奉  
仕したいと思ひます。

無理矢理、女性から、それを強いられるの  
が好ましいと思っていましたが、それも、今  
では贅沢に思えてきました。先程の告白文の  
様に、こちらから、お願いしてもいいじゃな  
いか——という気持になってきました。

常日頃、私は女王様を求める努力は、私な

ナミオM画廊

『悩ましき重量物』

春川 ナミオ



りにしたつもりです。そして無関心を表面では、よそおっていても、自分の身近に接する女性を、ひそかに、その可能性を物色していたのです。

そして逆に、それらしき女性に恵まれたの

です。その人は私と同じ職場にいる女工さんで未亡人でした。高校生の男の子と中学生の女の子の母親で、大分以前に主人をなくされたそうなのです。

とにかく、私はその人と二人っきりになら

なければ、と思いました。なかなか、職場では二人っきりになる機会はありません。それだけでなく相手は皆も知っている未亡人なのです。変に近寄る事は出来ません。普段、人と話などした事のない自分だけに、尚更、変に気をまわして容易に近づけません。

私は心の中で、つぶやきました。彼女がトイレへ行った時、私も知らんふりしてトイレへ行ってみよう。そして、そこで話を——と思って、彼女が席を立つのを、それとなしに待っていました。やがて彼女は、席を立ちました。その後を私も歩きました。幸い、人は誰もいませんでした。

「あ、あの、ちょっとすみません」

「はあ？」

私は胸が熱くなりカーッと頭が燃え、心の奥にある意識があるだけに、声が完全にうわずっていました。何を言っているものやら困ってしまいました。早く、人が来ないうちに言ってしまうなければ、と自分に言いかけますと、尚更、あわててしまうのです。

下心があるだけに、絶世の美女でもないのに、なんとした、みっともない事だろう——醜態であろう——と、まごつきました。

「あの、どこかで会ってほしいんですけど」



「はあ——？」

私の声が小さすぎて、聞きとれない様でした。それは自分自身にも、よくわかっていました。後になって、この人から聞いたところによりますと、私の顔は、この時、赤面していたそうです。

彼女は私のオドオドした態度で、自分に気がある事を悟っていました。彼女は、じれったそうでしたが、なかなか私が次の言葉を出さなかったので、彼女は機転をきかしてくれました。

「じゃ、この次、考えときましょ」

二人は何事もなかった様に、その場を去りました。ほんの少しの時間でしたが、私の心は、うきうきしてきました。私の意志は、すでに彼女に伝わっている——と、そう思うと仕事に手がつかない程でした。

あとは、もう一本道です。でも、どうしてあの事をお願いしたらいいものやら、商売女同様、なかなか言い出せるものではありません。私にとって、ノーマルな性行為は、全く駄目なのです。私は色々と考えました。

「先ず、体にキスさせて貰う。そして、おもむろに、あの場所へ。いやいや、それだけだったら、つまらない。自分としては、密室で

女王様に足舐めや按摩の奉仕をさせられ、思い通りに、こき使われ、女王様に「ふん、この男は、もう私の奴隷になりきっている。私の汚い足を舐めろ、と言えば素直に従うし、痰唾を吸い取れと命じれば従う。今度は、じっくり私のお尻を舐めさせてやるから」と言う氣に女王様からなあってほしいものだ」

しかし、現実には、やはり、こちらから、お願いしなくてはならないだろうと思いました。ま、とにかく、時間はかかるかも知れないけれど、自分は、あの女から、なるべく馬鹿な存在、なるべく扱い易い男、そして常に自分が、あの女にリードされる様に努力しなければと思いました。

彼女は四十三才で背が高かったけど、少し肉付きの悪い事が私の好みに合っていませんでした。でも氣が強い事と何よりも氣に入ったのは背が高いだけに骨盤も、かなり大きく彼女が前かがみになりますと、小柄な私から見ると圧倒される様でゾクゾクしてくるので、お尻も若い女性のコリコリ、プリプリといった魅力はありませんが、中年特有の、でっけりで色氣がありました。

遂に待ちに待ったデートの日が来ました。私達は車で一時間もかかり（私のマイカーに

て）京都の鴨川に着きました。ここは、前々からデートの場所に最適と目星をつけていたのです。人が全くいないといっても良い程でした。私達は草の生い茂った土手に腰を下ろしました。

土手に背をもたせて川の方を見ながら、意外と私は落着いていました。彼女は膝下までの黒い筒になったヒダのないスカートを穿いていました。

「あのおー、お願いがあるんですが……。聞いてくれますか？」

私は思いきって勇氣を出して言いました。もちろん、彼女の顔を直視するなど、とても出来ませんでした。

「なんやのん？」

彼女の言葉には親しみがこもっています。「奥さんの今穿いているパンティをほしいんです。その代りに新しいのを上げますから」

私はポケットにセロファンに包んだ真新しい婦人用下着を初めから用意していました。私はそのつもりで持ってきたのです。彼女はしばらく、私の顔を見つめていましたが、

「ええ、いいわ」

そう答えて、うなずくと、体を曲げて右手を下に入れました。

「あの、ちょっと、待って。脱ぐ前に、あそこん所へ、よくこすって！」

私の顔は真赤になり、心臓は、もう張り裂けんばかりでした。幸い附近に人影は見えませんが。

「ええッ？ あそこって？」

奥さんは、そう言いながら、こすっている様でした。

「あの、違うねん」

「違うって、何が？」

「あのう……後の方やねん」

私が、うつむいていいますと、奥さんは私の顔をのぞき込む様にして言いました。

「汚いよお、変なところ好きなんやねえ」

奥さんは、やや体を私の方に斜めにして向け、左股を上になる様にして、お尻の割目へ手を伸ばして、その部分を摩擦している様でした。

「五日ほど、風呂へ入ってないから、お尻がジメジメして気持ち悪いんや。そやけど、あんたも、変わってんのやねえ。変態と違う？」

フフフ、あんたみたいだな、初めてやわ」  
そう言うと、奥さんは汚れたパンティを差し出して呉れました。私はそれを受け取り、新しいのを手渡しました。私は汚れたパンティ

イを早速、裏返してみました。はっきりと、その部分を覆っていた箇所は黄色く汚れていました。特に奥さんが、その部分をこすってくれたからです。

私はその部分に顔を近づけました。まだ、かすかな体温が感じられ、同時にムツとする臭気が、鼻と口に迫ってきます。私は、うつ伏せになり、地面に顔をつける様にして、しばらく、お尻の臭気に陶醉していました。

奥さんは新しいパンティを包みから出して穿くまで、始終私のこの奇怪な行動を眺めていたそうです。やがて私は顔を上げました。「すみません。こんな私を軽蔑されますか。自分でも、とても恥かしいと思うんですが、どうしようもないんです。まるで、犬みたいでしょ」

実は、この言葉は、私の願望を、そのままこの奥さんへの間接的な哀願として訴えたものであったわけです。

この様な私の言動によって、何らかの刺激を与え、この奥さんに、加虐的な女王様になっくれる様、願ったのです。そして自分をより低く見せる事によって、哀れむというよりも、私の事を馬鹿扱いにして貰いたく思っただけです。

「私は奥さんに馬鹿にされたって、別になんとも思っていないせんよ。どうせ、私は人の上に立とうなんて夢にも考えていませんから。自分は人に、こき使われるのが、性に合っているんです。いいえ、その方が、ずっと楽しいんです」

「まあ、何も、そんなに馬鹿になんかしてへんよ。そやけど、あんた、いつも女の人になんなもの、貰うの？」

「そや、そやけど、それだけと違うねん。お尻、舐めさせて貰うんねん。そんでから、足なんかも舐めさせて貰うんねん」

「まあ、フフフ、お尻って、あんな汚くて臭いとこ、どうして好きなの？」

「どうしてって、言われへんけど、奥さんも自分の事を、犬やと思うてくれても、ええねんやで……」

「じゃあ、私のお尻、舐めてみる？」

奥さんは、私の顔を覗き込む様にして言いました。もうすでに、奥さんは私の事を十分に軽蔑していました。それは奥さんの目を見て、すぐにわかりました。

あたりは、ようやく薄暗くなってきましたので旅館へ向かいました。夕食が終わって落ち着きますと、奥さんは言いました。



「あんだ、齒をみがいいで——」

私は、いそいそと洗面所へ行きました。齒をみがきながら、へさあ、いよいよだなと心の中で思いました。

私が部屋へ戻ってみますと、床の上に腹這いになって新聞を見ていた奥さんは、

「ちょっと足揉んでくれへん。今日は、久しぶりに出かけたから疲れたわ」

片足で蒲団をめくり、脛を指さします。言葉つきが柔らかいだけに、尚更、私は屈辱を感じました。奥さんは浴衣をだらしなく着て長々と寝そべっているのです。一時間ぐらい揉んだでしょうか、私は嬉しくて嬉しくて、いつまでも揉んでいました。

「いつまで揉んでんの。こっちが黙ってたらいつまでもやってるんやなあ、あんだって。」

おとなしいから損やなあ。ウフフフ

「いいや、違ふねん。女の人に使われるのが好きやねん。言われることやったら、何でもする」

「そう」

奥さんは身体を向こうへむけたまま、顔だけ私の方を顧みて言いました。

「あんだ、さっき、私の尻、舐めると言うたわね。舐めてみる？」

「ハイ」

私は飛び上がる思いで返事をしました。両膝を揃えて正座して両手をついてから、

「お願いします」

奥さんは、おもむろに体を起こしてから浴衣の裾をまくってパンティを脱ぎました。

「そこに、横におなりッ」

私は素直に従いました。立ち上がった奥さんは、私の顔の上に仁王立ちになり、そして跨がった尻を、徐々に下げてきました。うす汚れた部分が私の顔に覆いかぶさってきました。

「ムッ」

甘酸っぱい様な、ほろ苦い臭気でした。

私は心ゆくまで臭いをかきました。

「何してんのん、早よう舐めんかいナ」

奥さんは、更にお尻を私の鼻と口に押し付けてきました。

私は奉仕を初めました。

私は舌に、モロモロと細かいオガ屑の様なものを感じた。アーンヌスのまわりに、こびりついていたりチリ紙の残渣であろうか。

私の目はふと、彼女の背中から彼女の後頭部にそそがれました。彼女は私にお尻を舐めさせ、両膝に肘をあてがい、あさっての方向に、物思いにふけっている様でした。

まるでトイレに入っている様に——。

——(おわり)——

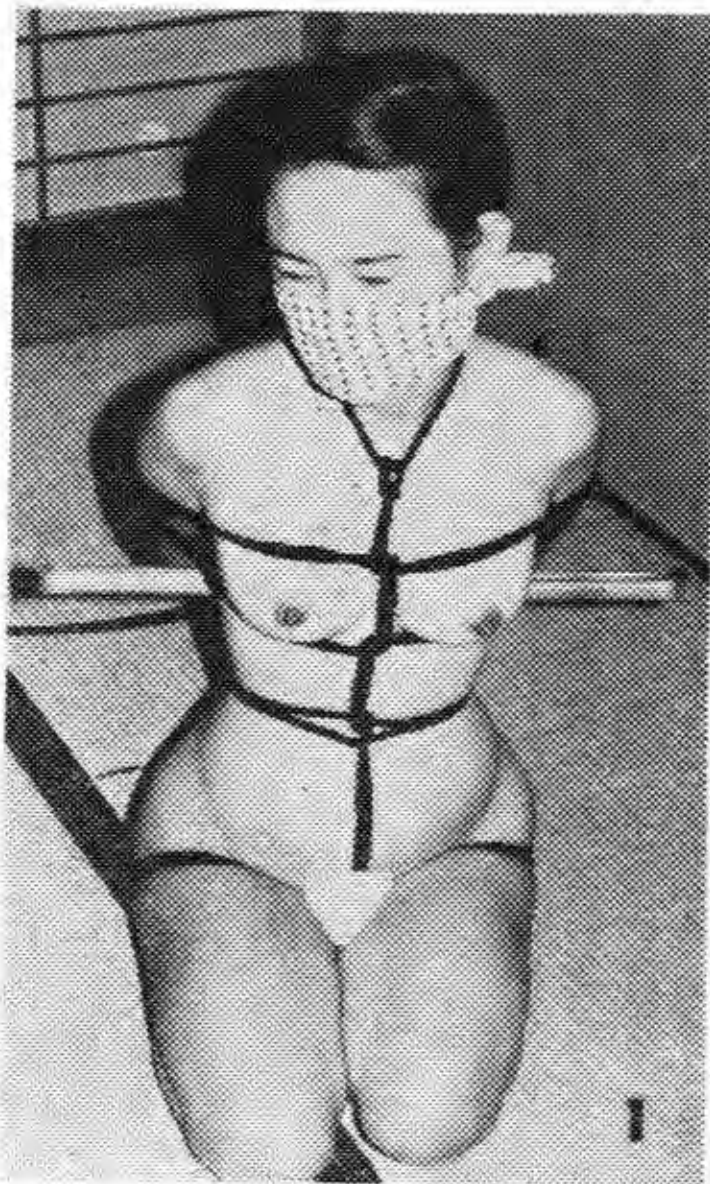
### 「伝言板」

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用は一割増)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してあります最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

△那津子哀悼▽

# 淡月梨花のうた



城 章 夫

故あって、ぼくと那津子は、別れることになった。

故あって？——そう、ぼくをこの世にひとり残し、那津子は青白い梨の落花にまぎれて、遠く西のほうへ旅立ってしまったのだ。桜の花はすでに散りつくし、春もようやく

おわろうとするある日、那津子は急に病に倒れ、そのまま都心の、さる病院にかつぎこまれたという病状は一進一退「面会謝絶」の札を付けて病室のドアは固く閉ざされているとの

こと。表立って見舞いに行くこともかなわぬぼくであるし、まして面会謝絶とあっては、どうしようもない。不安なおもいのうちに、むなしく日ばかりが過ぎていった。

そのころ、朝夕ぼくが通る道に梨の花が咲き始めた。梨は、ぼくの大好きな花のひとつ

である。だから、門構えのその家の古びた門柱のかたわらに立つ大きな梨の木は、前からよく知っていた。普通、果樹園などでは果実の採取に便ならしめるためであろう。木の丈を伸ばさず、枝を横に拡げる「棚作り」とでという栽培の仕方をするが、この梨の木は、もちろん果実が目的ではないから、伸び放題に伸びて高さ四―五メートルはあろうという大木になっている。それが花どきになると、まだ葉も出ない裸の枝に一斉に白い花をつける見事さといったらなかった。

毎年この花にめぐりあうのが楽しみだったが、ことしは那津子の病状を案じている最中だったので、しらじらと清らかな、そしてどこことなく淋しげな梨の花の風情が、ひとしお



身に泌みるのだった。そういえば、今までついぞ気づかなかったが、那津子と梨の花とはふしぎと感じが、よく似ている。

白くて、ほっそりとして、それでいてシンが強く——。梨の花も同じバラ科に属していながら、桜とちがって、いちど花を開くと容易なことでは散らない。少しくらい雨が降っても風が吹いても、その姿に似ず、しっかりと枝にしがみついて、十日やそこらは咲き続けている。そんなところは那津子に、そっくりのような気がする。

間接に伝わってくる那津子の病状を不安な思いで聞きながら、春の初めに逢ったきり、その後、見る事もできない那津子のおもかげをしのんで、ぼくは毎日、朝夕、梨の花の下を通った。すると、遠いむかしに愛誦した詩が、自然と口によみがえってくる——。

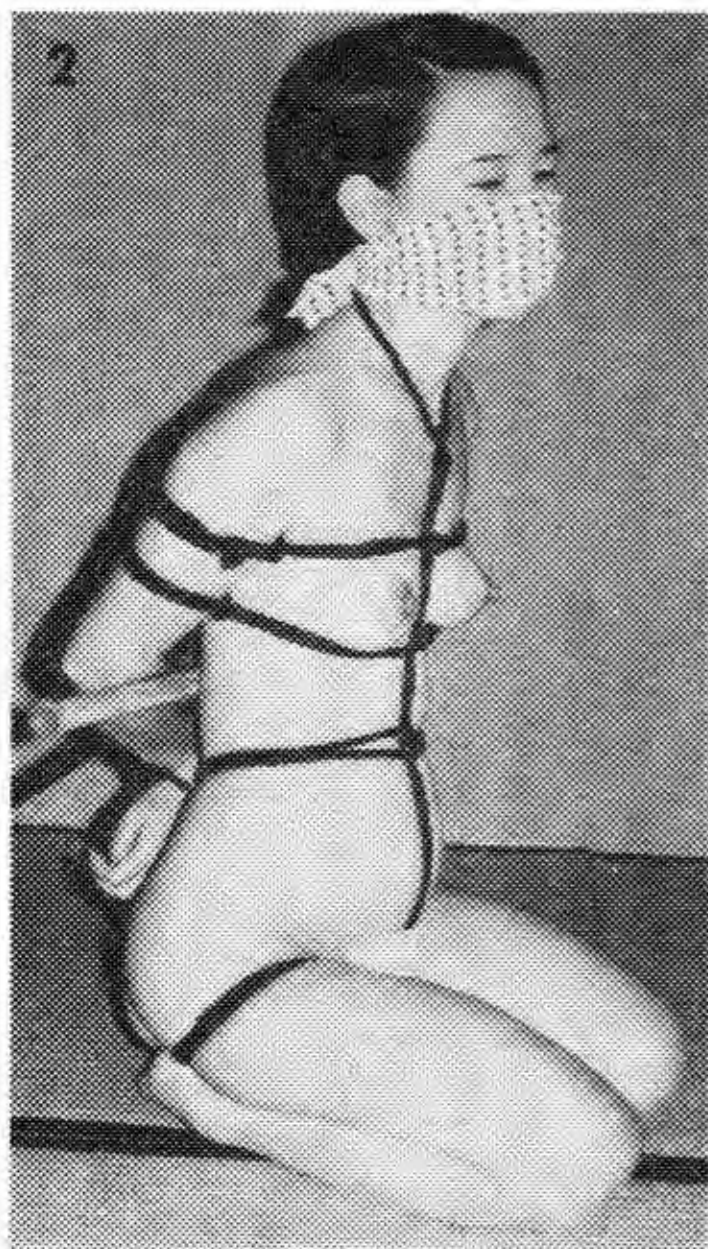
○

悲しく 白く 美しく

わが心こそ すずろなれ

○

夕月淡き梨花にして  
汝が立てるこそ 切なけれ



# △淡月梨花のうた△

佐藤 春夫

○

とりわけ、この詩のように、淡い夕月がさしのぼるころ咲き静もる花の下を歩いてゆくと、詩にうたわれたイメージと那津子のおもかげとは、まるで一枚の写真の陰画と陽画のようにピッタリと重なり合うのである。ああ那津子よ、おまえは今ごろ何を考え何をしているのだ？ それとも、面会謝絶の札を下げて固くドアを閉ざした病室のベッドの上で、昏々とねむっているのだろうか？ 様子が、はっきり判らぬままに、ぼくの不安は、つ

るばかりだった。

日は容赦なく流れさり、梨の花には微妙な変化があらわれ始めた。まっ白な花が次第に青味を帯びてくる——いや、そうではなく、実は花のあいだに緑の若葉が萌えだし、それが次第に大きくなり拡がって、少し離れて見ると、まるで花そのものの色が日々に青味をましてゆくように思われるのだ。その微妙な変化は、ゆっくりと、しかし正確に進み、ふと気がついてみると、いつのまにか花は姿を消し、跡には青々と葉ばかりが茂っている。

そして、どこへともなく消えた花のように、那津子もまた、ひっそりと、ぼくの前から立ち去り、無明の闇の中へ永遠に吸いこまれていってしまった。

\*\*\*

いま、ぼくのテーブルの上に、黒い縄で縛められて白い裸身をくねらせている那津子の写真が、数十葉ひろげられている。その時はこれが最後になるうなどとは夢にも思わなかった、四月初めの撮影行の成果である。



それらの写真を見てみると、那津子がもうこの世にいないのだとは、どうしても思えない。いつのまにか、ぼくの前からフツと消えてしまった那津子。しかし、またいつか、同じようにフツと姿をあらわしそうな那津子。ぼくは無量のおもいをこめて、その最後の撮影の記録を書いている――。

\*\*\*

今度の行く先は東京から北へ二時間。火の山那須の中腹の温泉である。土曜の午後、上野をたつて、まだ明るいうちに宿に着く。茶臼岳から朝日岳へと続く那須連峰には、まだ

ところどころ白く雪が残っているが、山腹の湯の町には、もう春の気配が、ほのかに、たゆたっていた。いや、それも白く温かくあたり立ちこめている、湯煙のせいかもしれない。実のところ、起伏豊かなこの高原は「花の春」というには、まだ少々早すぎる感じがする。だが外は、どうあろうとも、滾々と溢れる出で湯に身をひたし、スチームのきいた部屋にいるかぎり、ここは常春の国だ。食事が終わり、さて撮影の前に、もうひと風呂浴びようと立ちあがる頃、もう窓の外はすっかり暗くなり、那須の山々は、その闇の

中に姿を没していた。ただ、ここよりも、もっと上のほうにも温泉宿が散在しているらしく、あちこちにポツンポツンと灯がとまり、何やら人なつかしげに、またたいている。ぼくらの部屋についている浴室は小じんまりとしているが、二人ではいるぶんには、そう狭くもない。そこで、ぼくらが行なった聖なる儀式の第一幕「洗礼の場」については、すでに書いたことだから、ここでは繰り返すまい。

部屋へもどると、まだあったかくて湯気の立ちそうな那津子のからだに、キリキリと縄







を掛ける。まず最初はキの字縛り。乳房の上と下、そして胸のくびれた部分に水平に走る三条の縄を、首にかけた二条の縄で、ひとつひとつ縦に縫ってゆく。

那津子の乳房は、あまり豊かとはいえないのだが、それでも上と下とを縄で締めあげられて、ピョコンと前につきでている。股間を縛り、太腿のつけ根を二巻き括り、さらに足

首をおよそ一〇糎幅に連結すると、ぼくの前正座させる。これから、神聖なる儀式の第二幕『手拭い、くわえの場』の上演となるわけだが、前回のルポにも書いたように、本来これが持つべき意義——自分の口に、はめられる猿轡用のハンカチと手拭いを、後ろ手に縛りあげられた不自由なからだで、我と我から、くわえて持つてこさせられるというシチ

ュエーションが生むべきはずの効果——が、マンネリ化のために殆ど失われてしまっている。その本来の意義を取り戻すために、今夜は一定の時間内にくわえてこなければ罰を与えることにしよう。遅れたら、ぼくの前に跪いて、ぼくの足にキスさせることも考えてみたが、どうもこれは、それほど効果がないような気がする。やっぱり痛い目にあわせなくては駄目だ。暴力忌避という年来の持論にはそむくけれども、ここはやはり鞭打ちの罰を与えることにしよう。

そこで、ぼくは前に正座している那津子に言い渡す。

「今夜は、時間を決めておくから、一生懸命歩いて、その時間内に、くわえて持ってくるんだよ。一秒遅れたら鞭ひとつだ。モタモタしていると、それだけ鞭が多くなるぞ」

那津子は黙ってコックリと、うなづく。ぼくは茶卓の上から腕時計を取りあげ、その秒針を見ながら、ゆっくり立ちあがり、手拭いとハンカチが置かれている部屋の片隅に向かって、なるべく小股に歩いてゆき、また引き返して那津子の前にドカリと、あぐらをかく所要時間は、きっかり二十秒だった。

「那津子、ちょうど二十秒かったよ。お前



は縛られていて、からだの動きが不自由だから、少しまけて二十五秒やろう。ぼくが行け！ といったら行くんだ。いいか」

ぼくは、なるべく、いかめしそうな顔をして時計を見つめる。

「よしっ、行け！」

那津子は後ろ手に括られた、からだをよじりながら立ちあがり、部屋の隅に向かって、ヨチヨチと歩きます。ぼくの目は時計から離れて、那津子のからだの動きを追う。部屋の隅まで行くと、那津子はそこに跪き、まずハンカチを、くわえ上げる。そして十糧幅に連結された足を精一杯にひろげながら、一生懸

命こっちへ戻ってくる。ぼくの前に正座する。

ぼくの手の内へハンカチを落とす。

「三十一秒！

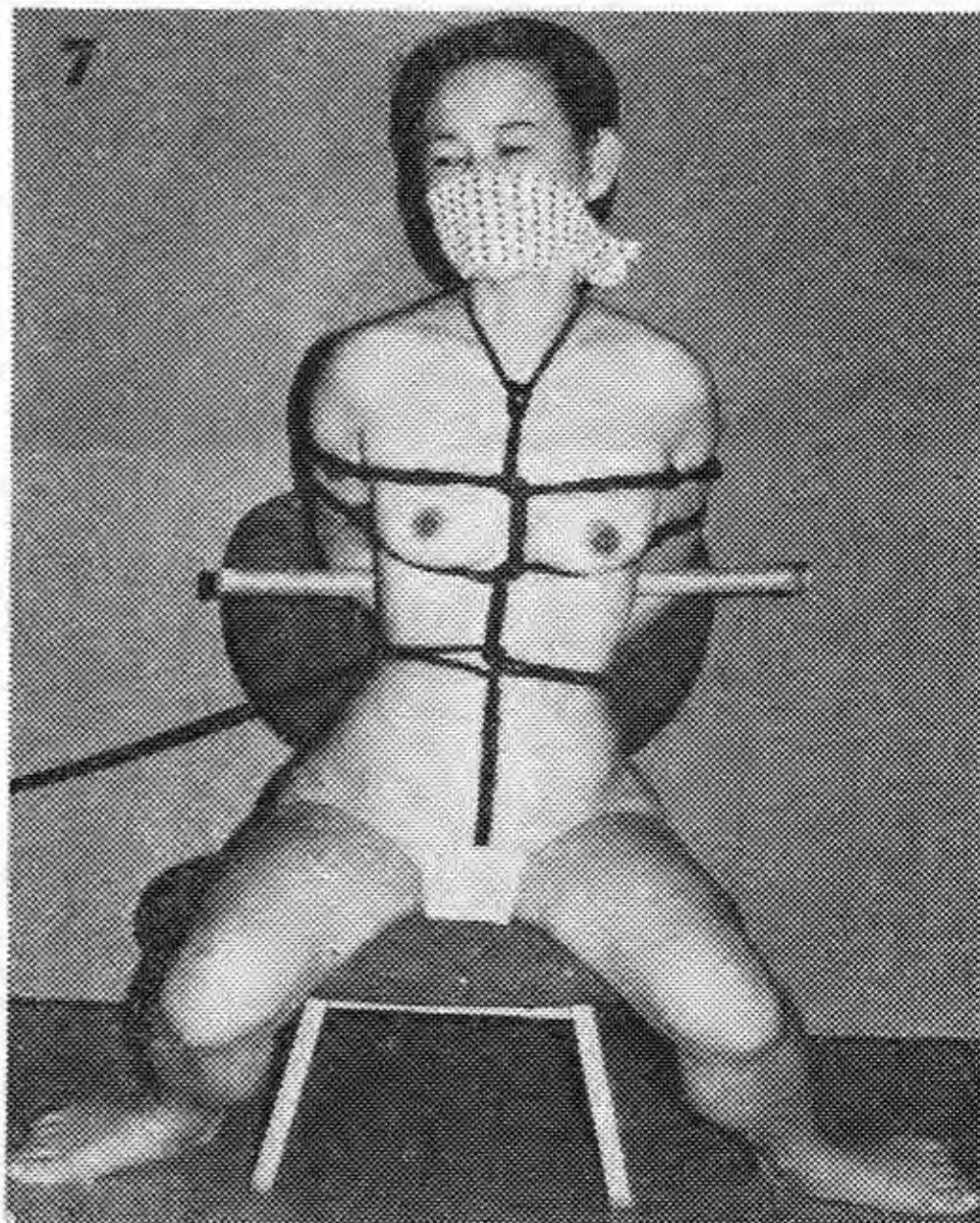
六秒、超過したぞ」

ぼくは、ろくに時計も見ずに叫ぶ。実は時計など見る必要はないのだ。鞭打ちた

いその数だけを、所定の二十五秒につけ加えればいいのだ。例え二十五秒以内に

戻ってきても、ぼくは好きなだけ那津子を鞭打つことができる。そして多分、那津子も内心では、それを知っている。ああ、これはなんという刺激的な遊びだろう。

「さあ、こんどは手拭いだ。もっと



スピードを上げないと、それだけ痛いおもいをしなくちゃならないぞ。よしっ、行け！」

再び那津子は立ちあがり、哀れなからだをぼくの目の前にさらしながら、手拭いをくわえて戻ってくる。

「うん、こんどは少し早かった。二十九秒だえーと、合計十秒超過だな。じゃ、罰として鞭十本だ」



そういうながら、ぼくは、那津子の口にガツチリと猿轡をはめる。それから立て膝をさせ、那津子の上体を前に押し倒す。畳におしつけた顔で上体を支えた那津子は、まろやかな尻の双丘をピョンと押し立てて、ぼくの鞭を待つ。

ぼくはズボンからベルトを抜き取り、その尻めがけて勢いよく——いや、実はおそろおそろ、鞭を振りおろす。鞭打ちなどというのは、ぼくにとって初めての経験なのだ。それに、何といっても那津子のからだを痛めつけるのが目的ではないという気が

持があるから、鞭を振りおろすのが『おそろおそろ』ということになるのも、止むを得ぬ仕儀だったといえよう。那津子の尻に当たった鞭は、ほんの軽い手応えをぼくの手に伝えただけだが、それでも那津子はピクンと、からだを動かした。

ぼくはそれには構わず「ひとつ」と数える。そして第二打目。こんどは、もう少し強く打ってやろうと鞭を振り

おろすと、力あまって狙いが外れ、那津子の腰骨のあたりでピシリッと音をたてる。

「あっ、痛い！」とでもいうように、那津子は猿轡の下で、くぐもった声で悲鳴をあげ、顔をしかめる。

「ごめん、ごめん。狙いが外れちゃった。こんどは、うまくお尻を打ってやるよ」

（ああ、なんと情ない鞭打ち執行人であることよ！）

ぼくは、高く持ち上げられた、まるい尻にしっかり狙いをつけて、しかし、こんどは少

し力を入れて第三打目の鞭を振りおろす。狙

いはあやまたず、鞭は尻のまんなかに炸裂しピシッという音とともに、快い手応えが電流のように、ぼくの手に伝わる。つづいて第四打、第五打と鞭を振りおろしながら、ぼくはいつのまにか激しい興奮にとらえられていった。（なるほど、これが鞭打ちというものなのか。ぼくの手に伝わる、この官能的で刺激的な快感は、どうだろう！）

白く艶やかな尻の上で鳴る小気味よい音。そのたびにピクッと、うごめく豊かな肉塊。

猿轡の下からもれるかすかな悲鳴。いままで暴力否定を信条としていたことなどは、どこへやら、ぼくはもう数えることすらも忘れて、ピシリ、ピシリと鞭を鳴らせ続けた。

ふっと我にかえって、ぼくはベルトの鞭を投げすてる。おそろく十五、六は打っただろう。那津子の尻には薄桃色の鞭のあとが幾筋も走っている。ぼくは少々あわて気味に那津子を抱きおこした。しかし案に相違して那津子は、そ







れほど痛そうな顔もしていない。やはり、尻は人間の体の中で最も感覚の鈍い部分なのだろう。尻さえ外さなければ鞭打ちも、それほど痛くはないらしい。ぼくはホッと安心したが、それでも一応きいてみる。

「痛かったかい？」

ううんというように、那津子は首を横にふる。

「時間超過の罰は、これでおしまいだ」

那津子が、与えられた時間を超過したのな

ら、こっちも定めた鞭打ちの回数をオーバーしたのだが、それは知らぬ顔の半兵衛をきめこんで、那津子の足首の縄をときながら、

「じゃあ、撮影にかかろう」

那津子を追い立てて、壁から一米ほど離れた撮影位置に正座させる。背中に竹の棒を通すと二の腕が後ろに、ぐっと引かれ、緊縛感が、もりあがる。そのポーズの正面から、やや見おろし気味にレンズを向ける。カメラから顔をそむけるようにして、太腿をかたく合

わせたままキチンと正座した那津子の姿にはあふれるような被虐感が、ただよっている。首から胸、胸から腹へと降りる縦縄は、下腹部とピッタリ合わせた太腿が、つくりだす深い谷間へ消えてゆく。その縄の味を味わうかのように、那津子は目を伏せて、ひっそりと坐っているのだった（第一図）。

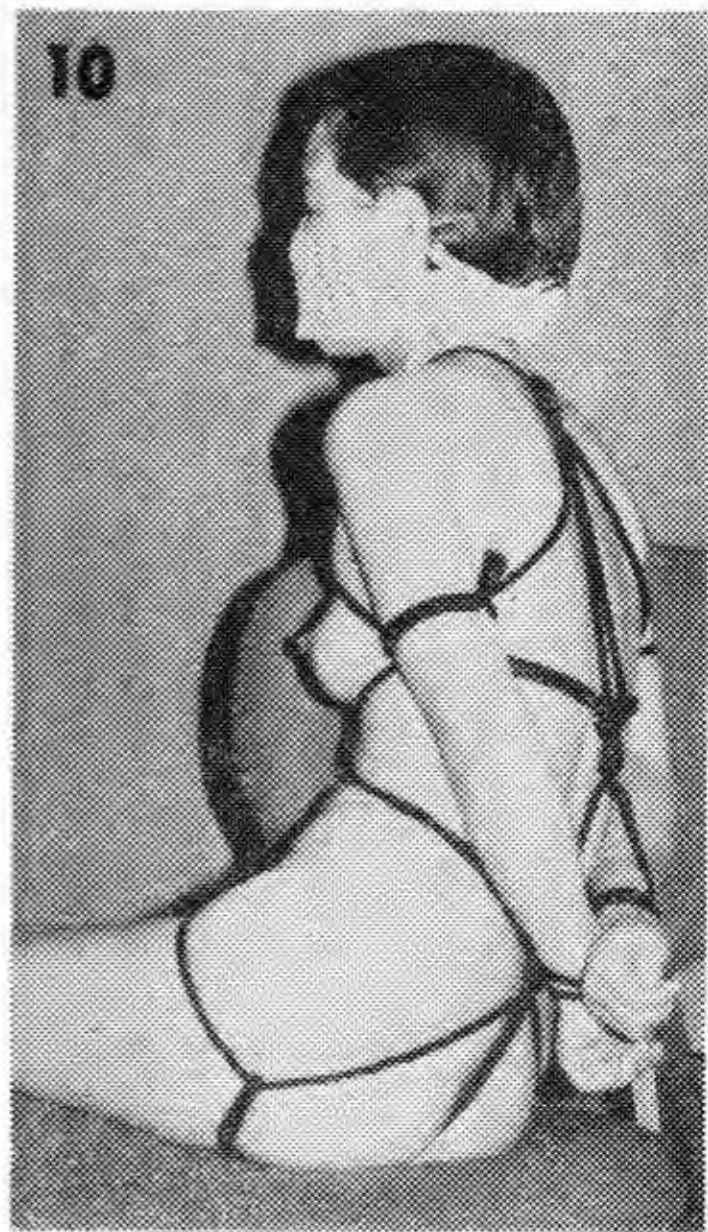
つづいてカメラは斜め前から横にまわり、さらにうしろへと那津子のからだを、さまざまな角度から舐めまわす（第二、三、四図）。ところで、これらの写真の中で、那津子のお腹がプクプリ膨らんでいるのに、お気づきの読者もあると思う。実は、これが常態なのである。夕飯を、たっぷり喰べた直ぐそのあとなのだから、このくらいお腹が、ふくれるのも当たり前だろう。しかし美的見地からいえば女の腹は、きゅっと緊まっている方がいいのは、これまた、当たり前だろう。そこでこれまでの撮影の場合、ぼくがファインダーをのぞきながら、「もっと、お腹をひっこめて！」と注文をつけるまでもなく、那津子はすっかり心得ていて、「とるよ！」という、ぼくの合図に応じてグッと息をつめて、お腹をひっこませるようにしていたのだ。ところが那津子にいわせると、これがどうして仲々



つかれるのだそうである。一枚撮影するたびに、息をつめて下腹の筋肉を、きゅっと引き締め、それをフィルム一本分、三十回以上も繰り返すのは、なるほど、しんどいに相違ない。そこで今夜は何事も自然のままの状態で行こうということになったのだが、これらの写真を見ると、やはり『美しい』緊縛写真をとるためには、モデルに多少の努力はしてもらわなければならないようだ。

乳房と尻が豊かに張り出すのは大いに結構だが、腹はかたく引き緊まってほしいというのが、ぼくの好み。そういう意味では、これらの写真は、やや意に満たないし、また、念には念を入れて縄を掛けたつもりだったのにどうしたのか、首から縦に走り下りる縄が三番目の横縄と交叉するあたり、縄の描く線が少々乱れてしまっている。

さもあらばあれ、伏し目がちの那津子の表情には、如何にも捕われの女らしい哀切な影が漂い、縄にせかれて、とびだした乳房の様子といい、尻に掛けられた縄の喰い込み具合といい、はたまた、むっと息づまるばかりに



口を覆った猿轡といい、これらの写真は、ぼくにしては、まあまあ出来栄といえようか。(いや、どうも自画自讃の度がすぎたようだ。読者諸賢よ幸いにして寛恕されたい)

いままでの撮影行では、物語めいた連想を誘発するような道具立て、あるいは背景を極力、避けるという、自称『純粹表現主義』の建て前から、小道具の類を使うということは全くしなかったのだが、それではあまりにポーズに変化がなさすぎるので、今夜は椅子を使ってみることにする。部屋続きのベランダから運んできた椅子を撮影位置に捉え、そこに那津子を腰かけさせる。慎ましく両足を揃

えて腰かけたポーズを、正面から(第五図)横から(第六図)カメラに収める。

続いて、那津子に両足を思いきり拡げるように言いつける。いわれるとおり、素直に両足を拡げた那津子は、切なげに視線をカメラから、そらせている(第七図)。

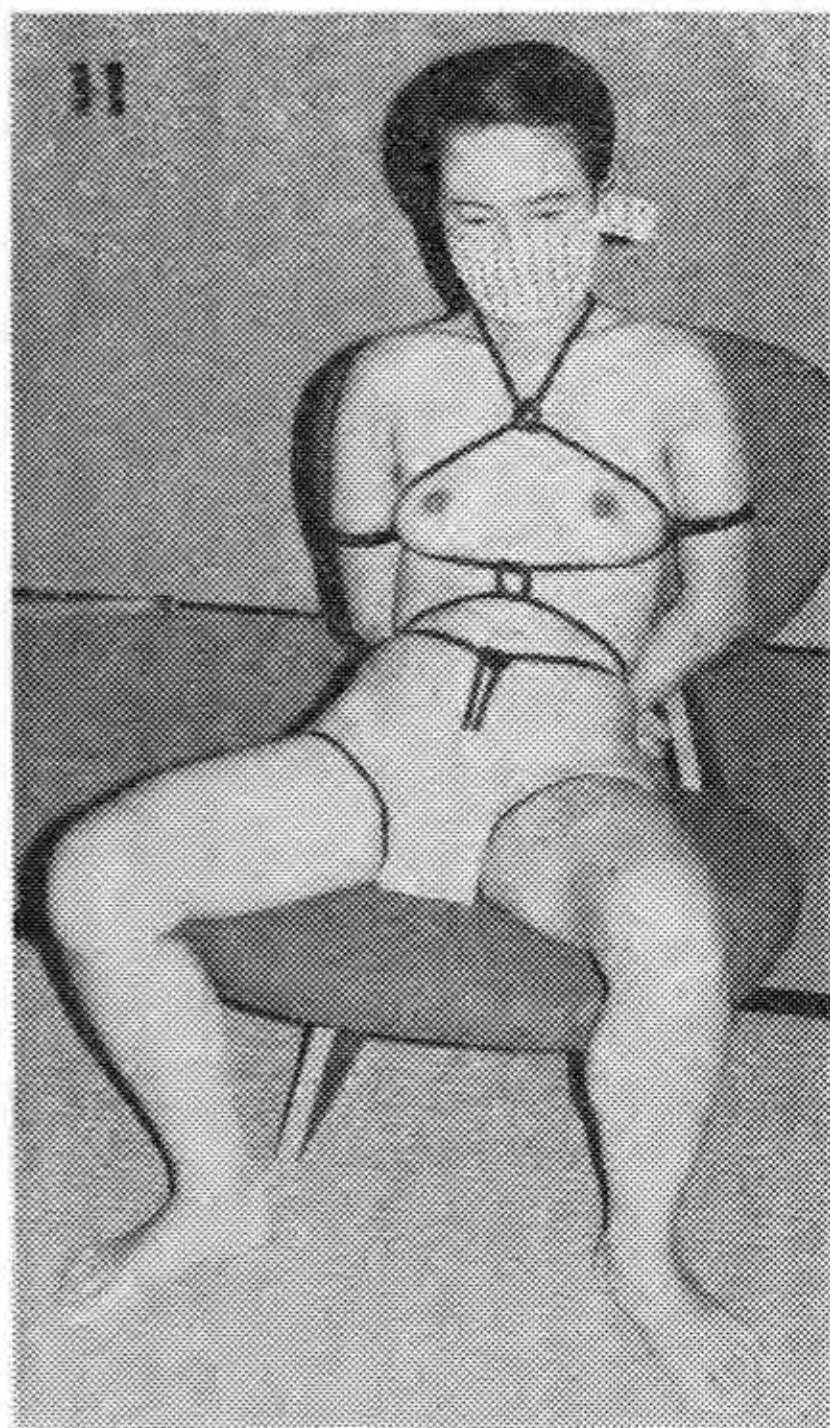
ところで、このポーズは不自然だろうか。素裸に剥かれて固く縛められた女が、両足を思い切り開いて腰かけているというのは？これがたとえ、足首を縄で引っぱられて無理矢理そうさせられているとか、あるいは棒で否定なしに固定されているなら判るけれども、上半身こそ緊縛されているとはいえ、下半身は全く自由な状態でいながら、このように足を押し開いているのは、常識的にみれば確かにおかしいといえよう。だが、実はそこに、この写真の狙いがあるのだ。閉じようと思えば閉じることできる。自分の本心からすれば、すぐにも閉じたい。そう思いながらも「足を開け」と命じられ、その命令のままに両足を押し開き、秘めるべき所を人目にさ



らしていなければなら  
ない——そういう情況  
のほうで、よっぽどサ  
ディスチックで、刺激  
的ではないだろうか。

(いや、こんなことを  
いっていると、ぼくの  
即物的な『純粹表現主  
義』論も、あやしくな  
ってきたぞ。それとい  
うのも、椅子なんぞを  
使い始めたから、いけ  
ないんだなどと、頭の  
中で埒もない考えを追  
いながら、開股を強制された那津子の哀れな  
姿態に向かって、ぼくは次々とシャッターを  
押してゆく)

さてこれで、もう一本のフィルムの半分以  
上、パチパチと撮ってしまった。今夜は一枚  
写すたびに下腹を引き締めるといふ筋肉労働  
を免除されているとはいえ、坐ったり腰かけ  
たり、あっちこっちと向きを変えさせられた  
りで、那津子も少々疲れたようだし、アシス  
タントなしで動きまわる、ぼくに至っては、  
いかに好きな道とはいっても、一と息入れた



くなる。このへんでお茶にしようと、那津子  
の猿轡だけを外し、縄つきのまま、それも背  
中に竹の棒を、しよわたさまま、茶卓の前に  
正座させる。お茶を、ひと口、飲ませ、お菓  
子を割って口に入れてやり、そのあい間あい  
間に、ぼくも飲んだり喰べたりという、例に  
よって、ぼくにとっては甚だ、せわしないテ  
ィータイムだが、その上、こんどは、どんな  
縛り方で行こうかと次の撮影プランまで練ら  
なければならぬ。コンテも用意していない  
ので、まず思いつく縛りといえ、やはり手

慣れた『胸部菱形・腹部逆三  
角形』型というところ。

よし、それで行こうと心を  
決め、手早く那津子の縄をと  
き「さあ、後半戦だ、頑張ろ  
う」と促すと「チョット待っ  
て」という。

「縛られる前に、猿轡は、あ  
たしが自分で、やるわ」

「どうして？」と聞くと、那  
津子は答えて曰く。「手拭い  
を、あまりきつく締めると、  
鼻はつぶれるし目はひきつる  
しで、表情が醜くなってしま

う。そうかといって緩すぎれば手拭いがすぐ  
外れてしまうから、自分で、ほどよい締め具  
合になるように……と。

「なるほど、それもそうだな。じゃ、自分で  
やってごらんよ。ともかく先ず口を開けて。  
ハンカチを、つめるから」

いままでの小一時間にわたる撮影のあいだ  
に、唾液を吸ってグッシヨリ濡れたハンカチ  
を那津子の口に押し込むと、豆絞りの手拭い  
を、たてに四つ折りに畳んで渡す。那津子は  
その手拭いで自分の口を覆い、締め具合を調



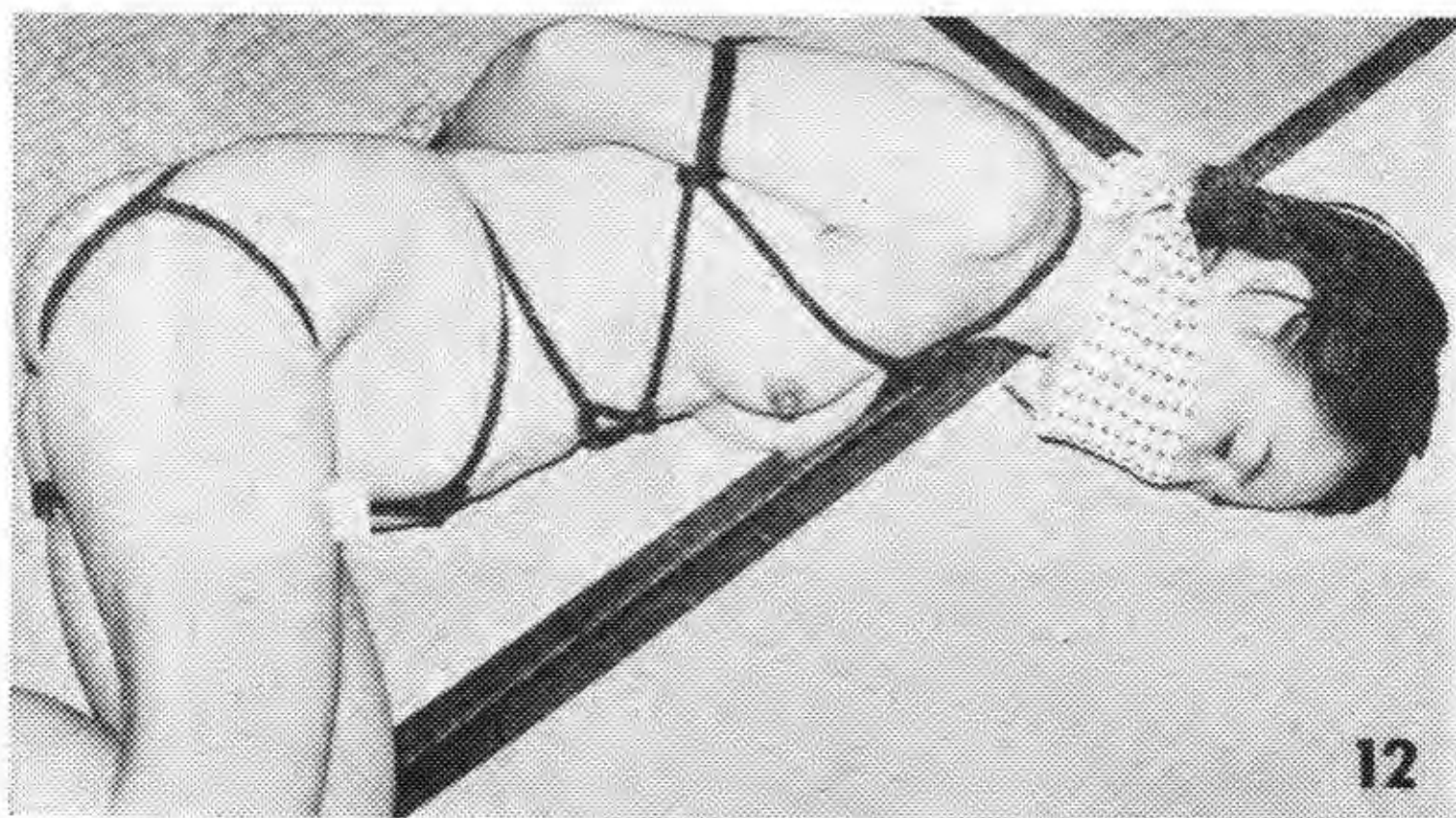
整しながら、みずから猿轡をする。それが済むと、クルツとぼくに背をむけて両手をうしろに交叉させ、ぼくの縄を待つ。たちまちその手に黒い縄がからみつき、ふたたび那津子の自由を奪ってゆく。手慣れたスタイルの縛り方のこととて、縄さばきもスムーズに、首から胸、胸から腹へと縄を掛け、さっきの椅子に腰かけさせる。

腰を浅くかけさせたため那津子は腹をやや突き出したような格好になって、そこに掛けられた逆三角形の縄が歪んで横長の菱形に変形し、その真中で、お臍がポコンと凹んでいる。腋の下から腋毛がチョッピリはみだしているのが、何となく艶っぽい（第八図）。

こんどは椅子に横向きにかけさせ、やや前かがみに坐った那津子の斜め左前からカメラを構える。腰に深く縄が喰いこみ、臍の下、逆三角形の頂点から降りてゆく二条の縦縄がふっくらとした下腹部にクッキリ鮮かな線を描く（第九図）。

カメラは、そのまま那津子のうしろのほうへ回り、尻にピッタリとかけられた縄にピントを合わせる（第一〇図）。

それからまたまた、開股のポーズをとらせる。こういうポーズを命令しても、那津子は



12

決して厭がらない。言われたとおり素直にポーズをとる。しかし、恥ずかしいには違いない。カメラをむけると、いつも伏し目になったり、視線をそらしたりしている。そこがまた何とも、いじらしいのだ。しかもこんどは、第七図のときと違って、椅子に浅く腰かけさせたから、下腹を上突き出すような格好になり、足をひろげると、縦縄の様子がすっかりさらけ出されてしまう（第一二図）。

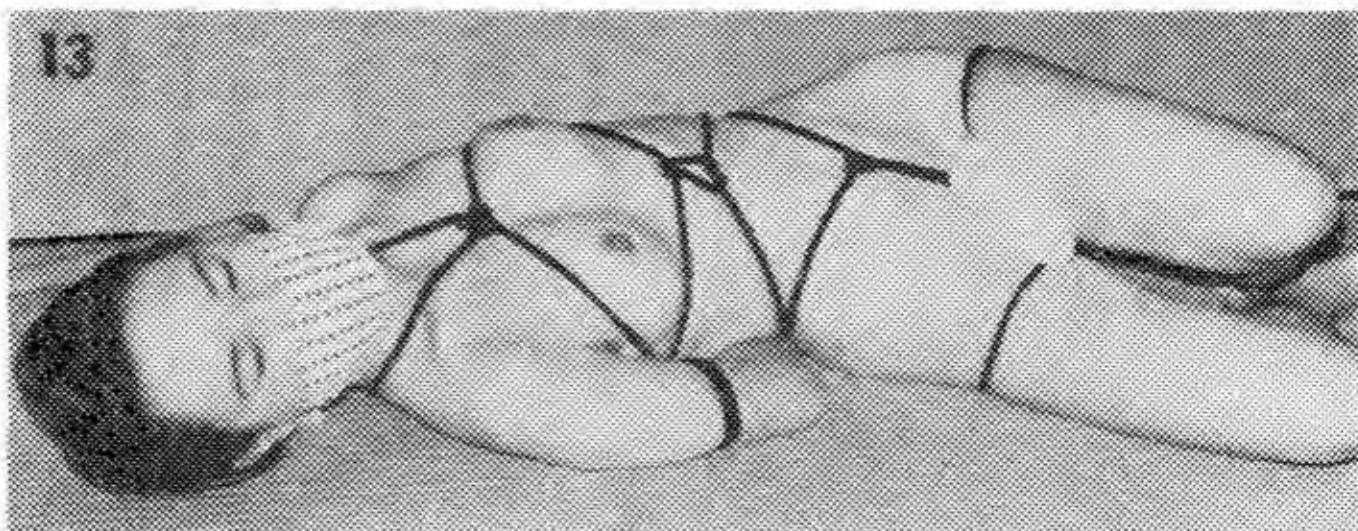
ついで那津子を椅子からおろし、畳の上にごろりと寝させる。那津子は両足をちぢめるようにして横たわる。ぷっくり膨んだ下腹は美的見地からいうと、あまり好ましくないかもしれないが、そのふくらみの中に埋まるように喰い込み、そして白く艶やかな尻と太腿を緊め上げる。黒い縄は嗜虐的な男ごころを、いやが上にも、そるようだ（第一二図）。

那津子を抱きかかえて、仰向けに寝かせてやると、後ろ手に縛られた手首に体重がかかって痛いと思え、からだをひねり気味にして、自分の重みが、もろにかかるのを避けようとする。その僅かに横にひねった、からだの線が、なかなか



美しく、すかさず、  
ぼくはシャッターを  
押す（第一三図）。

ついで、荷物でも  
ころがすように、那  
津子のからだをころ  
がして向こう向きに  
させる。もう大分、  
疲れたとみえ、され  
るがままに、ごろん  
ところがつて、壁の  
方を向いたきり、身  
動きもしない。それ  
がまた、縛られて責  
められて、あきらめ  
きった女といった情  
趣をただよわせてい  
るようだ。そんな感  
じが表現できたらと  
頭の方へまわったり  
足の方へまわったり  
いろいろな角度・視  
点からストロボの閃  
光を浴びせかけてみる。  
（第一四図、第一五  
図）。



こうして、一本のフィルムを撮り終  
わると、ホッとすると同時に、今まで  
夢中になっていて、ともすれば忘れが  
ちであった疲れが、いっ  
ぺんに噴きだしてくる。

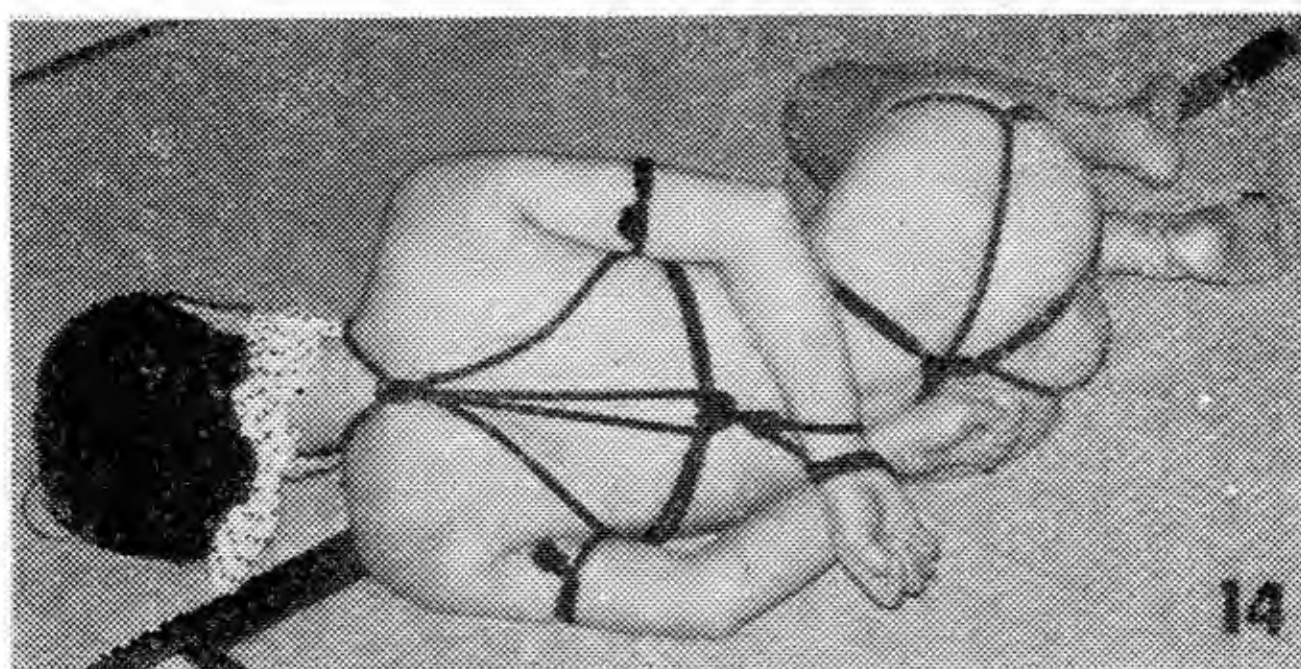
カメラを茶卓におくと、  
猿轡をされたまま畳にこ  
ろがっている那津子のか  
たわらへ、ぼくも長々と  
身を横たえる。

「つかれたね。もう今夜  
は、このまんま、寝ちゃ  
おうか。お湯に入るのも  
おっくうだしね」

『いいわ』と、いうよう  
に、猿轡の那津子が、う  
なづく。そこで、ぼくは  
ニヤツと笑う。

「このまんまというのは  
縄も猿轡もとかないで、  
そのままと、いうことだ  
よ」

那津子は目を大きく見  
開いて、とんでもないとばかり  
顔を畳から少し持ちあげて、激



しく横に振る。ぼくは、なおも、からかうの  
をやめずに、

「じゃあ、猿轡だけは勘弁してやろう」

相変わらず寝そ

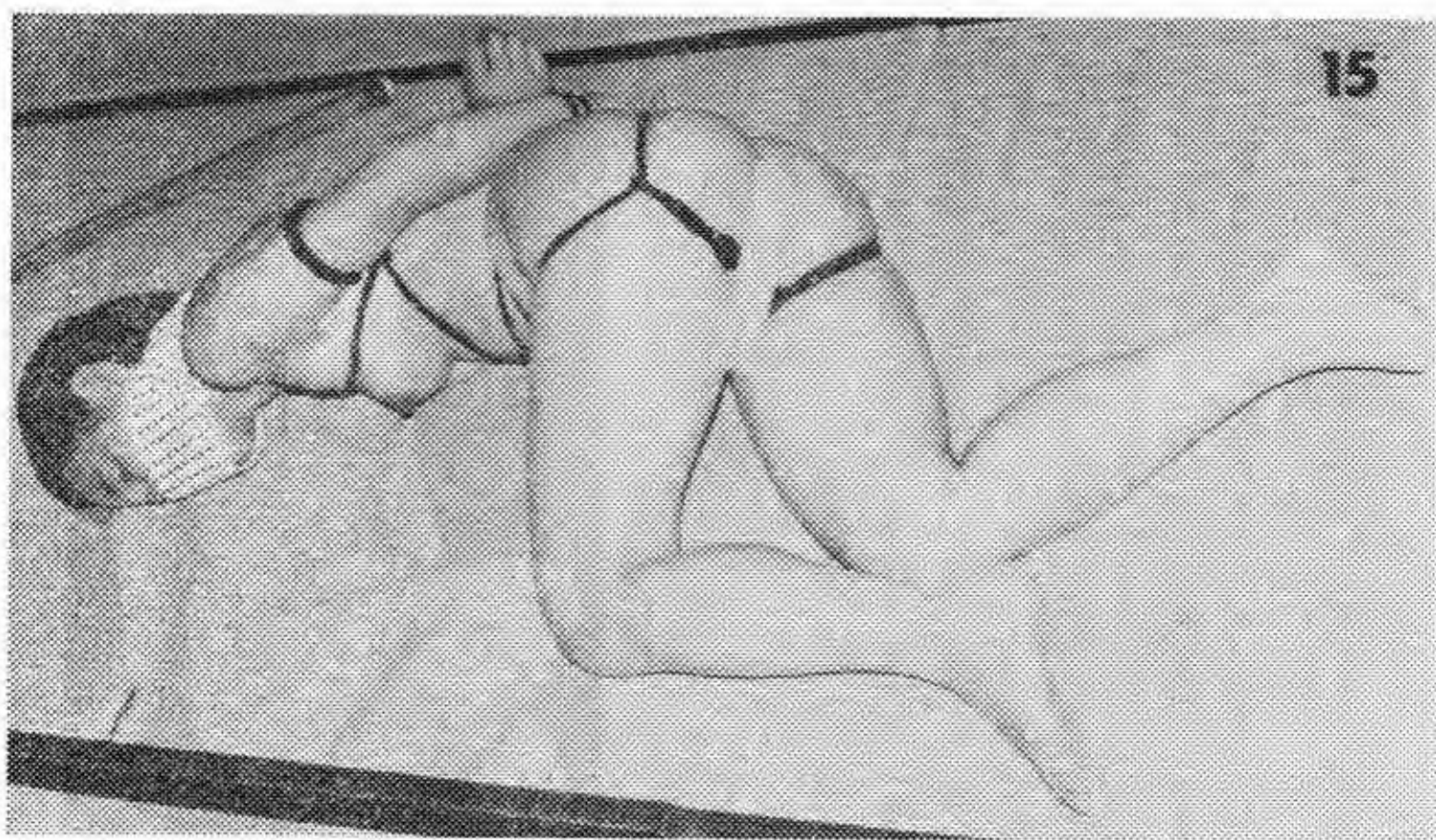
べったまま、ぼく  
は手を伸ばして、  
那津子の口を覆っ  
ている手拭いを解  
き、唾液でぐっし  
より濡れたハンカ  
チを引っぱり出し  
てやる。口が自由  
になるのを待ちか  
ねたように、那津  
子は喋りだした。

「縄もといて頂戴  
よ。もう手が、し  
びれかかっている  
のよ。一と晩中、  
縛られていたら、  
どうにかなっちゃ  
うわ」

「どれどれ、見せ  
てごらん」

二の腕にかけら





15

れた縄をつまみ上げてみると、なるほど、白い肌に赤くクッキリと縄の跡がついている。

「なるほど、だいぶ、喰いこんでいるね。このままじゃあ、明日になっても縄の跡が消えないよ。やっぱりお湯に入って、よくマッサージしておいた方が、いいかもね」

そういいながら、ぼくは那津子のからだを引き起こし、縄尻を引いて浴室の方へと追い立てるのだった。

\*\*\*

最後のその夜から数えてみれば、もう四カ月もたってしまった。那津子は梨の花とともに散ってしまい、いま、ぼくの手元には数十葉の写真だけが残された。寝苦しい夏の宵、それらの写真をとりだして、ひとつひとつを眺めてゆくと、那津子とともにした、長からぬ時間の一駒々々が、鮮かに臉のうらに蘇ってくる。

考えてみると、縄と猿轡を、なかだちとしての、ぼくらの戯れは、まだ、ほんの初歩の、手習い段階にあったにすぎない。

むろん、ぼくらは、ぼくらなりの努力をかさね、アイデアを練ってはきた。縄を黒く染めてみたり、縄掛けのパターンを様々に工夫してみたり『洗礼の場』や『手拭いくわえの場』などという儀式によって心理的な被虐ムードを盛り上げようと計ったり……。

そうした挙句、ふと試みたのが、最後の夜の鞭打ちだった。この試みは、結局ぼくらの趣味に合わぬまま、須臾にして、はかなく凋んでしまう徒花だったのか、それとも、やがては妖しく深い倒錯の淵に咲きこぼれるはずの花だったのか。

那津子が去った今となっては、それを解きえぬ永遠の謎となってしまった。

那津子よ。梨の花のように淡く咲き、梨の花のように、ひっそりと散った、いとしいな津子よ。

お前を失ったことの本当の意味——その当時は、いつかは何らかの形で別れねばならなかった、ぼくらなのだからなどと、努めて軽く思いなそうとしていた、その意味——は月日の流れるにつれて、しだいに重みを増してくるようだ。

カット・よみじどり



## 美女対決

一寸刻み五分試しに、ふたたび元の丸裸に剥かれてしまった静子夫人と小夜子は、互いに顔をそむけあったまま自由な両手で乳房と下腹を押さえ、肩で息をついている。

静子夫人の滑らかに光った肩は、脂肪がすっかり乗って丸く、鎖骨の線も、ゆるく盛り上がっているだけだ。くびれた腰から臀部にいたる曲線は、もしミルク色のオットセイがいるとすれば、こんな風な、なだらかな曲線なのではなからうかと思われる。その肌は、静子夫人の場合、海水で濡れるのではなく、

パロディ

花

と

蛇

連載・S大河小説

山光

純

羞恥のあまり軀中からにじみだしてくる汗にしっかりと、うるおっているのである。

千代が主人格であることを意識して見せたがっているのに気づいた銀子が、ご機嫌をとるように小夜子の傍に行き、秘匿しようと押さえている両手を邪剣に引き剥がし、

「千代さん、いつものように後手に縛ってしまおうか。こんなふうにかくされると、皆さんも殊更、かくしたところが見たくなるんじゃないかしら」

「まあ、またそんなことを言いだして。不良ね。ふふふ、さて、静子奥さま、どうしたものかね。あんたなら、どうなさりたい？」

静子夫人は、女優とも見紛う眉目を、しば

たたかせたが、すっかり観念したのか、煙のような声で、

「あたくしは、千代さんのお気に召すようにいたしましてよ……でも、よろしければ、小夜ちゃんも、縛ったりしてあげないで下さればいいんですけれど……」

「じゃあ、お客さまの前だから特にわがままを許してあげることにするけれど、いつもはこんな風にはゆかないのよ。わかっているわね。その代り、奥さま……」

と、千代は静子夫人の耳元に唇を、もってゆき、囁きはじめる。静子は客たちに、くまなく肉体を觀賞させるために、いつしか固く押えていた両腕をほどいて、掌を豊かな尻に



回す。そして、たわわに張った胸の隆起を上向きに、ぐっと、突き出すようにするのだった。

千代が何を吹込んでいるのか分からない客人たちは、脂のキラキラ浮いた獣めいた形相で、フィルムの中を妖しくのたうち廻った美女が、今こそ目の前にいることに感激しながら、その裸身を凝視し続ける。夫人は漆黒の髪を、ときどき揺すり、身悶えつつも千代の言葉を聞き洩らすまいとしている。時々「ああ……そんな……」と生々しい嘆声をあげ双臀をモジモジさせる。千代の言い草は、あたかも裸身にまといつく鞭のように夫人を苛む様子である。とうとう千代の耳打ちが終わって、小さくうなづく静子夫人の頬に、幾筋もの涙が伝わっているのを一座は、ひとしく見た。

「さあて、随分お待たせしちゃって……」千代は、金壺眼を糸のように細くして座を見廻す。「内輪のお恥かしいところをお見せしちゃって。これから、奥さまと小夜子がエロ・スターの女王の座をかける勝負をみせてくれるというのよ。わたしは、みっともないからお止しなさいっていつてるのに……さあ静子奥さま。勝負のやり方を一通り皆さんに、ご

説明するんだらう」

千代の色々の謎めいた言い廻しにイライラしながらも、特に三人の客は静子の全身から目を離せない。いかにもクッションのよさそうな臀部、胸の谷間はもとよりだが、それらより、もっと蠱惑的な部分、まるで春光の薬のような淡い影を懸命に、のぞき見ている。そして酒の酔いなどではない眩暈に、くらくらとして、聞くに耐えない卑語を呟くのであった。仇っぱい、類稀な美体の性奴隷は、この三人のたぎる視線の中で、幾たび奔放に犯されたことか……今、目の前にいる女たちはフィルムのように光の幻覚が作りだしたものではなかった。

やがて、静子夫人は柔らかく甘い声で、驚くような大胆なことを言いだして、彼らをよろこばせる。

「静子は、皆さまのお遊びになることの、すべてをして差し上げることが務めのオンナですの……殿方のおもちゃになって……そうですわ、あたくしに恥かしいポーズを取らせたければ、そのようにおっしゃればいいし、あたくしを虐めてお心が晴れるのでしたら、それもよろしくてよ。……ええ、もしおのぞみでしたら、セックスだって……あたくしにで

きますことは、そんなことしか、ありませんの。それで、殿方は静子が、名器の持主だとおっしゃって下さいます……ああ……」

「じれったいね、そんなシナばかりをつくって。一体、何を言いたいのか、皆さんには、さっぱり分からないじゃないか」

と、千代は突慥貪に静子夫人を、せつつく。

「ご、ごめんなさい。静子、羞かしくて何が何だかわからなくなったの……」

言いながら、またしても、こらえきれない噁り泣きを洩らしてしまうのである。

「何という女だろう。あれだけ説教したのにきき入れようとしない。もういいわよ。後でしこたま、お仕置きをして上げるから覚えておきき！」

「まあまあ、そんなに、いきり立たなくたっていいじゃないか」

事の成り行きを興味深げに見ていた狒々會長が助け舟を出した。それで静子夫人は、すがりつくように、

「ありがとうございます。でも静子が、いけなかったのですわ……」

と、禿頭の好色漢の方にチラリと感謝の流し目を送り、健気にも彼女は号泣する寸前の

自分を立て直すのだった。涙の筋を白い指で拭い、わずかに皓い齒をみせて微笑んでみせる。そして、綿でくるんだような物柔らかな声で、

「あたくしのは名器だと、ほめて頂けますけれど、小夜子さんの同じように、ご立派なのですって……」夫人はブルブル慄えながら必死になって続ける。「ところで、あたくしたち二人のどちらが、よりよく出来ているのか、どなたにも確かなことが、お分かりにならないくて……それで、新鮮な目をもっていらっしゃるお客さまに、審判や介添えになっていただいて……どちらの方がいいのかを、おっしゃっていただくのです……つまり、より殿方をお喜ばせできるカラダをしているのは小夜子さんか、あたくしかを、皆さまで、おきめになっていただくわけ。ぎ、銀子さん。静子と小夜子さんのお道具はありまして？」前もって用意されていた桐箱が差し出されると、座はたちまち興奮の色をみせて、ざわめき立つのであった。

千代と鬼源の指図する、女の勝負のつけ方は、いかにも彼らしい発想の、淫靡なものであった。

二人の美女に思うさま両脚を開かせて向かい合わせ、それぞれに別製のお道具を与え二つを細紐で、しっかりと結び合わせ、ピンと張る。準備は、それだけである――

実に、まわりくどく、蚊の鳴くような声で細々と説明してみせる静子にじれて、千代は三角の眼付きで叱咤したあげく、ズバリと補足説明をする。

「つまり、勝負は合図によって綱引きの要領で引っ張りっこするわけよ。ふふふ……手を使ったりするのは論外、腿をせばめることも反則だから、お二人とも、ご注意あそばせ」お道具を相手によって引きずり出された方が負けになることは言うまでもあるまい。

このゲームで、二人の女が頼みにできるのは、自らの括約筋だけなのだ……

懊悶の果てに全身を桜いろに染めて、わなないている美しい女たちは、頭を落として、あたかも神の裁きを待っているかのようにだった。その心の中が、どのような哀しみで充たされているのかは、座の無慈悲な連中の目にも、はっきりとわかる程である。嵩にかかって言いつのる醜女と、一言の反抗もできず、ただ宣告を待つだけの佳人との取りあわせはおよそ女というものが、どれほど姦悪たり得

ぎやくに、どれほど従順たり得るかの見本にほかならなかった。いずれにせよ、千代はセックス奴隷にとって、あまりにも高圧的な存在でありすぎ、抗議をするにも女主人は、あまりにも、いたわりの心をもっていなかったのだ。

かねてから噂されているように村瀬小夜子は、そのいかにもお嬢さんらしい楚々とした風情にもかかわらず、おぞましい肉の調教をくりかえし受けたあげく、まったく予期した以上に驚くばかりの魅力を発揮するにいたっているのだ。しかも骨身を惜しまず、例えクタクタに疲れていようと最後までその柔らかない全身を捧げて奉仕しつくす態度は、賞めてやらなくてはならない。悲しみと羞恥におしひしがれながらも、嫌悪の気持を面にみせない心根も見上げたものである。その哀れな純情さにほだされ、同時に、その肉体にしばれた男どもの何人かが、いたく小夜子に目をつけているのだ。

狒々会長は血走った目を大きく見開いて、唇のはしに唾をため、

「そ、それで勝負の結着がつけば、どうなるんだ――」

千代はケラケラと大笑いし、



「まあ、そんなに慌てないで、先のお楽しみに。でも、いい質問ですこと。負けた方にはもちろん、きびしいお仕置が待っている訳だから、この二人の別嬪さんは、罰をうけないためには、お互いのことなど構っておれないはずよ。ホホホ……ちよっとオ、お前たち。ずい分、お澄ましのようにだけれど、覚悟はできてるんだろうね」

負けた方に加えられる、きびしい体罰！

千代は、わざと客たちをじらしており、またその体罰が、どのように鳥肌のたつ、恐ろしいものであるかを予感できない生贄の麗人たちではなかった。

すっかり動揺して、赤らんだ顔を静子の方に向けた小夜子は、

「静子お姉さま！ もうこうなった以上、お姉さまに死にものぐるいで、ぶつかってゆくしかありませんわ。小夜子だって、色々のことはできるのよ。だから、むざむざ負けたりはしないつもりよ。よろしくってね！」

「いいわよ、小夜ちゃん。かあいそうな小夜ちゃん。ほんとに、もう仕方がないのね」

氣負ったような若い娘にハスキーな低い声で、やさしく答えてやる静子夫人の美貌は、まるで、うすいヴェールをかむったように滲

んでいた。

悲しむべきことに、この邸の現実には、西欧中世の詩人が謳ったような純愛の貴夫人をたたえるロマンチックな詩句は登場しない。薦たけた貴夫人の物語は、ほこりにまみれ虫喰いだらけになって、古書店の隅で朽ちるのを待っているだけだ。ついでに言えば、かの吟遊詩人たちよりも、はるかに透徹した目をもっていたのは、古代中国の史家ではないだろうか。紂・桀によって代表される暴君たちは、生きながら美姫を怪亀に啖わしめたというが、今日もなお、ちよどこの邸の現実がしめしているように、史書は躍動しつづけているというべきである……

この種の器具を、じゅうぶんに受け入れさせるためには、例によって然るべき準備がなくてはならない。千代は、かねて企んだ通り三人の客を、それぞれ介添役と審判に推薦した。名指された客人の満足はもとより、いうまでもない。ただ公平をはかるために、役割をジャンケンで定めることになり、狒々会長・ガマ院長は、やたらに力を入れて拳を振りあげるのであった。

「ああ、俺の勝ちだ。お二人には悪いが、年

増の方をとらせて貰うぜ」と、ホクホク顔の狒々が二人を等分に見くらべながら、あざ笑うようにいう。

次に勝ったのは、年若の高利貸だ。彼は顔を伏せている小夜子の髪を掴んで引きあげて一瞥をくれ、キザな手付きで乳房のあたりをさす。唇をひんまげたまま一言もいわない。

一番負けのガマ院長は、好機を逸した無念さで、大声をあげてやり直しを唱えたが受け入れられるはずのものでもなかった。考えてみれば、この取り合わせは理想的であるというべきで、狒々会長は狙っていた静子夫人を手に入れるし、若い者は若い者同志、又、院長は女の構造を誰よりもよく知っていて、ゴマカシがないのを確認する審判役には最適なのは言をまたないであろう。

いってみれば、博徒のような無頼の輩と親交をむすぶほどの、いかがわしい趣味の客人たちである。功を遂げて人生の快楽にのめりこんでゆく遊びのなかで、それ相応にだが滑稽で退屈でないものは、あまりなかった。いま、怪奇な勝負を始めようとしているオンナどもも上べは充分に見られるが、いずれ最下等の醜業で身を立てなくてはならない事情はあるに違いない。事情といっても、そんなじょ

## イメージギャラリー .....『新妻の驚愕』..... 岡 たかし



そこらに転がっている、みじめったらしい話にきまっている。金が欲しいのか身を持ち崩したのかの、どちらかだろう。女が若くて美

しければ、これ以上、何の詮策をすることもない。こちらはこちらで、できる限り面白おかしければ、それでいいのだ。

だが、一筋縄でゆかないその彼等ですら、静子をはじめとする佳人たちの身の上に関する想像では、まったく甘いといわなくてはならない。いずれは徐々に分かってくるだろうが、その時の彼らの狂喜する様子が手にとるようである。

それぞれの役割が、きまったのをしおに、これまでおとなしくしていた和服姿の鬼源が立って、五人を円座に集める。有頂天になっている千代が司会役を続けると、座はどこまで脱線してゆくか知れたものではなく、少なくとも客人がいる以上はプロの調教師が取り仕切る必要があった。

鬼源が登場してくると、静子と小夜子の表情にはピンと緊張したものが現われた。千代に対しても別に甘えがある訳ではないのだがこの道一筋で裏街道ばかりを渡ってきたエロ事師の、彼女らに対する接し方には、おぞ毛を慄いたたせる恐ろしさがあるのだ。静子にしても、鬼源の遊び相手をする時、彼が仕事を離れ、役得で楽しもうとしているのが分かっていながら、ただ夢中で仕えてしまうのが常である。

「お前たち——」と彼はドスをきかせた、しわがれ声で言いだした。「今日の客人は、組



にとって大事なお方だ。四の五の言わねえから、しめし合わせた通り、一生懸命にやるんだ。もし俺に恥をかかせたりしたら、分かってるな」

と星のような、きらめきを宿した二人の女の瞳を睨みすえる。

静子夫人は、とうてい正視できず、かすかにうなずきながら、気弱に長い睫毛を、しばたたく。まして、小夜子に反抗する気力をもとめるのは再び丸裸をさらしている以上、無理というものだろう。

「お聞きの通りで、客人がた。ではお役に從って、それぞれにやっていただきやしょう」と新派風に言い、一歩退って絞りの帯に手をかけ、くるくるとほどこき、たちまち袷の着物で脱ぎすてる。たったの一動作で赤禪一つになった鮮かさには、したたかの年期が入っている。

「なあに、ご心配なく。女どものほうから、どうしていただきてえのか、旦那方をお願いいたしやすよ」

もはや猶予はなくなったのを知った静子夫人は、首筋から胸元までを、すっかり紅潮させながら、

「さあ、あなた……静子にやさしくしていた

だけませんか？」

と、やわらかく弾んでいる実り豊かな裸身を猊々会長の胸に寄せてゆくのである。

酒が入り、エロ・サービスへの期待満々の会長であるが、いきなり鬼瓦のような調教師が現われ、しかも笑いさんざめいている満座の中で女に触れるというのは、あまり経験がないようだ。

「ええ？　ここですかい。こんな所では何だから、別の部屋にでも行つて一汗、流そうじゃないか。いいんだらう？　鬼源さんとやら」

赤禪をきりりと締めあげ、木の根のように筋くれだった鬼源の軀は、そのどす黒い肌の色合いとあいまって、異様な威圧感がある。

「そういいなさるのも無理はねえが、旦那。何しろ女どもは素っ裸でサービスしてるんですぜ。もちろん、あつしが抱かれろと言いや一ぺんに転ぶように仕込んでありやすが何しろ化粧代や贅沢な食い物代など、色々と金も掛かっておりやす。まあ、お望みのことは、後のご相談まかせ、成り行きまかせで、ここは一つ、千代さんや、あつしの顔を立えていただきてえんで」

と、メリハリのきいた口調で言うのだ。

「……………」

「さあさあ、女ども。客人方が戸惑っていないさるじゃねえか。そんなことで、お前たちの稼業がやってゆけると思ふのかよ！」

しばかれたようにビクリと肩を慄わせた静子夫人は、皺ばみかけた会長の手を取り、熟れた女の匂いが、むんとくる柔肌に押し頂くようにする。そして、ピンク色の濡れた唇を耳元にもってゆき、

「あなた、静子がお気に召しまして？　もしおよろしければ、静子を、やさしく虐めていただきたいの……」

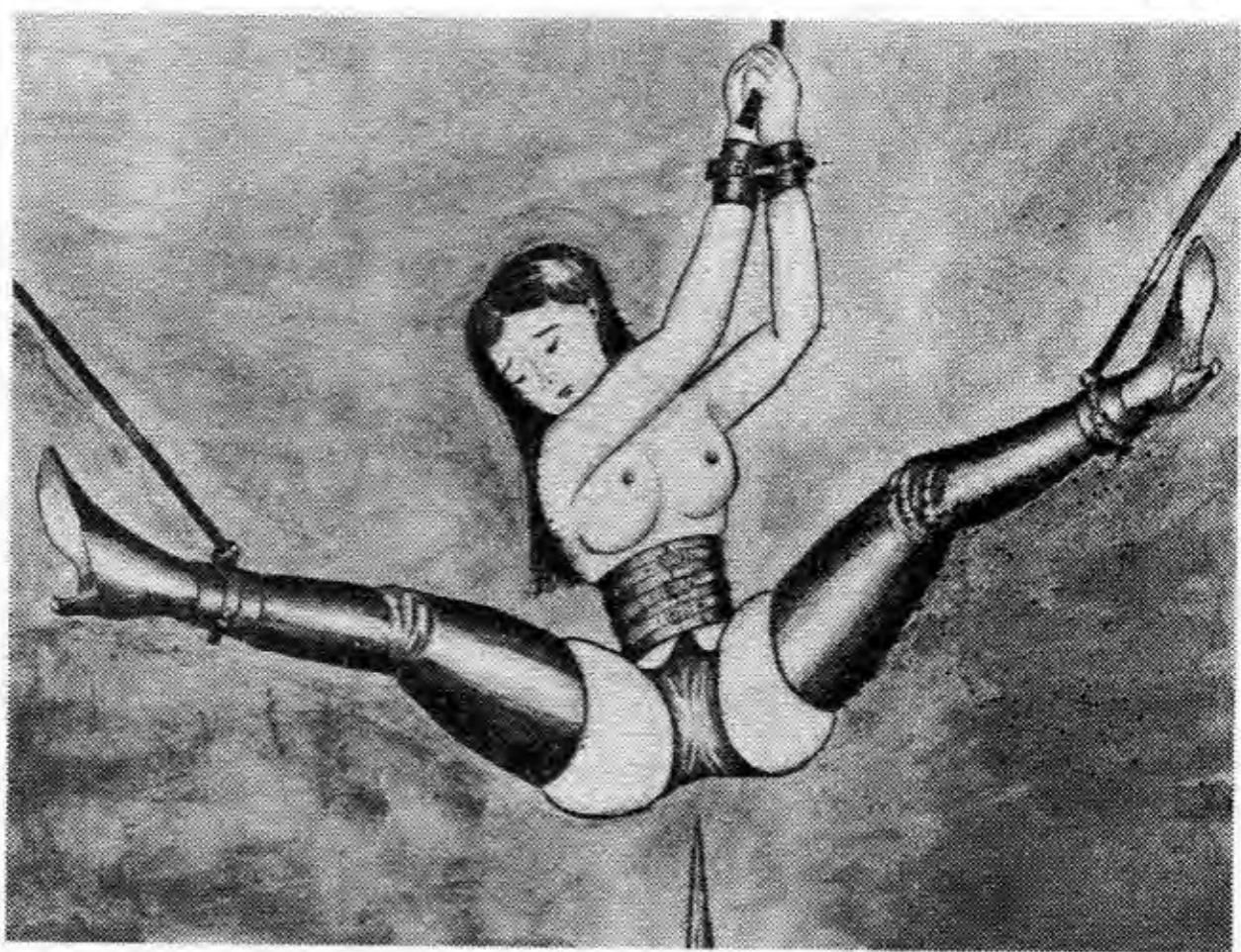
といいながら尚もにじり寄り、男のすぐ前で右脚を立膝にし、内腿をあらわにのぞかせるのだ。女がこれほどの美貌でなければ、破廉恥な好色老人の動悸も少しは、おさまったであろうが、この場合、われにもあらず、うろたえをみせた様子で、すぐに手出しをせず下腹部のやわらかく弾んでいる辺りや、ポツチリと可愛い臍に視線をさまよわせ、また元に戻ってゆくという具合で目の保養を娛しむのだ。すると静子は、鼻にかかった声で、

「イヤ。そんなに、ご覧になるだけじゃあ。

ねえ、あなた。あたくしの一番、弱いところをごぞんじ？……」

「そうだな、お前のような美人だと、特別の

## イメージギャラリー ----- 『放すべからず』 ----- 絹川 美代子



ところでもあるのかな。どこかを押すと、チユッと、いい声飛びだすが、普通だと仲々みつからない……」と、やおら掌をひろげ、

て、瓶に入った自慢の塗り薬を、そっと手渡し、  
「旦那。これを使えばこの女、たちまち声を

静子のくびれた腰や臍のあたりを撫であげながら赤らんだ顔を、くずしている。「いいや、そんな特別のところはないようすだ。すると、やっぱりこの辺りと……」  
すうっと触れてくる指の感覚に、一瞬ぶるっと身を慄わせたが、いつしか、静子夫人は男のあぐらをかいた膝にポツテリとした双臀を乗せ、両腕をのぼして客の首にまきつけている。しっとりとした汗ばみ、乳頭を中心にクナクナと柔らかく揉みほぐされてゆく静子の素肌から、むうんと濃いコクのある体臭が、たちこめはじめる。

鬼源は頃合いをはかっ

たてますぜ」

そのすぐ隣では、若い高利貸が、小夜子の攻略にかかっていた。

こちらの方は、なんとも珍妙なコンビであった。

モミアゲを長くし、大きなサングラスをかけたままの若い男は、徐々に酒の酔いもさめたか、あるいは、ことさら冷酷さをよそおっているのか、きっちりネクタイを結んだままで、背広のボタン一つ、はずしていない。一方の令嬢は身をおおう一糸もなく、しかも男の肩に右足を高く掲げて乗せ、左足を横一文字にした極端なポーズなのだ。

無礼な男は、余裕をみせるように唇の端に煙草をくわえ、ライターを鳴らすと、さてとばかり、明眸を伏せて痛々しくあえいでいる令嬢の攻略にとりかかる。もとより憐愍の情はなく、この生ける玩具を、どのような汚濁に叩きこむか、だけが目的である。

「アッ！」

一瞬、白い喉をのけぞらせた小夜子。

ややあって、とうとうガマ病院長の出番であった。彼は紳士面を完全に、かなぐり捨てて仏頂面の会長から引きはがすようにした静子



の軀を調べにかかる。いかにも自惚れが強そうな尊大な態度の彼は、病院長として診察をしている時とは、まったく違って、底知れぬサディスティックな光を、飛びだした両眼にたたえている。

紅いろの乳暈に囲まれた静子夫人の乳首はピンと上向き、これから先の不安におびえてムズムズと蠢きださんばかりだ。男が、巨大な巴旦杏はたんきょうのようなバストを下から撫であげると、頂上のポッチリは掌にさからって聳立しつづけるのである。

彼は、呼吸につれてやわらかく上下している静子の腹部のあたりに親指をめぐりこませ、切なげに首を振る表情を楽しんだのち「ふふ……」と喉で嗤って、とても職業的とはいえない顔付きで女の反応を見やりながら、結局は目的の検査をするのだ。

寝室で二人きりの場合ならいざ知らず、満目の集まっている中で、このような扱いを受けるのは、死にまさる屈辱という他はない。生きた性玩具にまで陥してまれた静子夫人はその絶望的な気持から強く皓齒をかみ合わせ凄絶なまでに妖艶な色を軀中にみなぎらせるのだった。そして、「あっ、そ、そんなこと……ひ、ひどい」と、きれぎれにあられもな

い声をあげ、乱れた黒髪を振ってイヤイヤをする。一刀彫りのように見事な小鼻が、ピクピクと、こまかく慄え、大波のように生暖かい吐息をつく。鬼源が、たぷりと使うようにすすめた秘薬が、暴力的な効果を現わしだしているのだ。

押し上げられている内腿の、ごく柔らかな皮膚が、こらえきれずにビクッビクッと痙攣し、院長の好奇にみちた視線を、まともに受ける。

「お前さんは、ずい分、好きなようだな。すこし減らさないと、綺麗なカラダも、しばらくじまうぜ。ものには、程度ってものがあるんだ」などと、からかいながら、満ち張った双臀に、ぴしゃりと平手打ちをくれ、「よろしい。準備は、じゅうぶんなようだ」

一方、若い痛々しいばかりの小夜子は、喉の奥で「くくく……」と、何度も鳥のように含み鳴きをしなから、喉元をのけぞらしている。彼女の肉体は先天的に、きわめて敏感であることは、すでに知られている通りだが、静子に続くスターに擬せられているのは、色責めに合うと、たちまち紅潮し、哀れなまでに、ひたむきになるという、その素質にあるのだ。この箱入り娘は、もしこの邸の淫虐な

調教に合わなければ、このように艶冶な素質は開花せず、その真白な肌の奥ふかくに眠りつづけたにちがいない。

院長が例によって、いたずらをしかけるとあたかも瘡かさに罹ったように、全身をふるわせる。相手の男に、かなり多量の媚薬を盛られたあげく、ペッティングを全身にうけては、慣らされた被虐感が燃え上がるのも当然であろう。

こうして前準備は終わった。あとは黒白をつける対決が待っているばかりである。

客人たちが女体を、いたぶっている間に、作法通りに片膝を立てて、後ろに控えていた赤禪の鬼源が両手に一つずつ、紫の袈紗に包んだ物をもって進みでる。

「客人がた。こいつに、種や仕掛けがあるとかわれちゃ、われわれの不名誉。念のために一寸、手にとって、お改めをいただきやす」と、それぞれの介添人に手渡す。

それを受けた両人は袈紗を取るのも、もどかしく、しげしげと、うちながめ、まるで驚嘆しきったかのように、縦にし横にし、はては、その重さや硬さを計るように指先で、はじいてみたりするのだった。

「ご冗談を。——では、審判の旦那。お改めなさって」

ガマ院長は待つてましたとばかり、それをひたたくような勢いで受けとり、二本を斜め上に向けて揃えて、つくづくと出来栄を觀賞する。こうして、二つのそれを較べてみると、それぞれの特長が、よくわかり、興味津々たるものがある。

一つは、もう一つのものより太く、弓のように遅しくそりがたっており、極めて写実的な細かい細工が施されている。鬼源と親交のある細工師が、こしらえあげた快心の出来だという。ことに先端の方は、ずんぐりとした円錐型に作られており、これ以上、理想的な特製品はあるまいと思われるほどだ。

ガマは、じっくりと觀賞し、鬼源に返すよう催促されるまで、その手触りに呆れるていだ。

「さて、お改めの通りタネも仕掛けもありやせん。では、作法に従って薬をつけさして頂きやす」

鬼源は手品師もどきに言つて、左手に二本の責具をもち、右掌にすくった薬を器用に塗りつけはじめた。

よく見ていると、静子夫人用のほうに殊更

多量のクリームをなすりつけている。千代や森田などの主だった連中は、その理由に、たちまち合点がゆき、鬼源の、さきさきを見こした周到さに目を見る思いである。

——邸に飼育中のエロ・スターたちは多いが何といつてもNO・1が静子夫人であることは微動だにしない。その肉体の濃質に於いてツボを心得た多彩なテクニックに於いて、周囲をさまようものをキンチャクのように吸いつける力に於いて……

なかんずく、これから行なわれようとしている競技は、その敗者に対して酸鼻な罰が加えられようとしている。向かい合う二人の美女の武器は、ただ括約筋しか許されないのは前述の通りである。

小夜子が来るべき、いつの日にか静子夫人の後を受け継ぐことは予想されても、たった今の時点で、どれほど死力をつくしても静子夫人に打ち克つことは、きわめて難かしいといわねばなるまい。

斗う前から、勝敗が決していれば、それはもはや対決することにはならない。どんな勝負も白熱するところにしか意義はない。ではこの場合は？

そこが鬼源の周到さである。静子夫人用に

は小夜子のそれより格段のクスリを配する。粘液のドロドロしたクスリは体温によって更に滑りよくなる。おまけにこの秘薬は、何度繰返し用いても決して免疫になることはなく狂おしいほどの痒感をあたえるのである。

静子夫人用に、より多くのクスリを配合することによって、鬼源は彼女にハンディキャップをあたえているのだ。——

静子へのハンディは、まだある。

それは、彼女の生来的な優しい、いたわりの心である。この貴夫人はこれまで、かりそめにも人を陥れたり、相手を傷つけたりしたことはなかった。彼女は桂子を守るために自ら下等な男の餌食になり、美沙江をかばうためには同時に、二人の男の鬨りものにもなった。若い娘たちを獣欲の犠からまぬがれさせる為には、もう自分はどうなってもかまわない——その静子夫人のなかに、真の大和撫子の哀れなばかりの一途な気持が秘められている。

鬼源は、その純情さを逆手にとった。つまり、静子夫人が小夜子と対決する時、小夜子を負かせれば恐ろしい刑罰を自らの手で与えてしまうということになるわけだ。かといつて、夜を日につぐこの性地獄で今以上の責め



## イメージギャラリー .....『ハナとヘビ』..... 虹 妖 三



が行なわれることを暗示されると、最早、絶望のあまり目先が暗くなってしまっているにちがいない。この越えがたいジレンマが、静子に与えられる二つ目のハンディである。

こうした重荷をせおった静子夫人は、「むざむざ負けたりはしないつもりよ」と叫ぶ小夜子に、勝つのであろうか? いや、勝てるのであろうか?

千代と鬼源の強制と、有頂天に騒ぎたてる周囲の連中の術中に否応なく、はまりこんでしまった二人は、ながい睫毛を慄かせながらもどうしようもない覚悟をきめなければならなかった。

鬼源は、見事な肢体の彼女らを等分にみてその鼻先に、ネットリと光っている貴具をつきつける。

「さあ、自分たちで気に入るようにしな。客人たちによく見えるようにやるんだぜ」

静子は、濡れきった瞳をあげて哀願する。

「でも、せめてあたくしたちを、がんじがらめに縛りあげてから……お好きなように弄んでください。……ねえ、鬼村先生、せめて、そうして……お願い……」

それは、この享樂の人身御供にされている美女の、ギリギリに追いつめられた哀切な望みであった。

全身をきびしく縛りあげられ、四肢の自由を完全に奪われてしまえば、肉体はもう心とは切りはなされてしまい、どのような凌辱の嵐がやってこようともう抵抗ができないのだから、仕方がないVと諦めることもできるのである。

懇願する静子夫人の心境を、たちまち見抜

いた鬼源は、ニべもなく責具を、それぞれの掌に押しつける。

そこで一言、声をはりあげる。

「さあて、お前たち、ポーズを取って！」

座は水を打ったように静かになった。

今は互いに競い合う相手となった二人の裸女は、泪のきらめく眸を向けあった。それはまことの一瞬だけであった。狼狽したように瞳をそむけた静子夫人は、ついに、ぴったりと合わせていた腿を、ゆっくりと割ってゆき上体を、ぐっと、そらせたのだ。

身を灼く羞恥と汚辱に上気しきった静子夫人は、もうろうとなった視線を、あてのない方に、さまよわせている。

小夜子の方に、同じ姿勢をとらせるのは時間がかかった。かねて、そんなこともあるかと待機していた若い者二人が、遠慮会釈もなくスベスベした真裸に平手打ちをくれ、耳元で口汚く、ののしりながら、静子夫人と同じスタイルをとらせてしまう。

ぞっとするような険しい目付きで、小夜子の方を睨んでいた鬼源は、用意よしとばかり「そうら、お前たち。思いきりやんな！」

「夜と霧」の例をひくまでもなく、異常な境遇のなかに深くはまりこんだ女性は、異常な

行動をとってこそ正常なのだといえる。

いま、かつて美貌と才智を誇った二人の女は、調教師による鶴の一声に火の玉のようになって自らを徹底的に辱かしめる所作にとりかかったのだ。

こうしたやり方を身体に叩きこまれた静子夫人は、名匠の手で彫りあげられたように見事な裸身を深々と後ろへそらして、絶え入るばかりの啜り泣きを洩らした。

一匹の美しい雌。文字による描写の中ではあやまった受け取られ方をされるにちがいない、その雌の所業には、不思議なことに、どんな醜さもなかった。

そこには野卑な男女の口を思わず閉ざさせるほどの懸命さがあり、ただ一途な忍従だけがあった。

布切れ一つつけていない女の体の、そこかしこから、虹のようなものが、たちのぼっていた。耳を澄ますと、寛を打つ清澄な水の音が、きこえたかもしれない。すべてを幻覚であるといい、幻聴であるということもできよう。……しかし、妖美にのたうつ女体は、まさにそこにいたのだ。

準備が、ついに整ったところで、千代の出番である。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る  
団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めにお申し込み是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号。出版株式会社へ。  
略号『花』 定価五〇〇円(送共)

「さあ、二人とも向かいあって。さあさあ、早くするんだよ……」

すばやく身体を動かかせというのが、だいたは無理な注文というものである。

静子夫人は、いざ知らず、小夜子は、ほとんど這うようにしか身動きできない様子である。

眼尻をつるしあげた千代は、顔もあげられない寶石店令嬢を追いたてるのだ。

ついに二人が向かいあって尻を落としたとき、大向こうからの掛け声がかかる。

「さあ、ぐずぐずせずに、一気に勝負をつけさせちまえ！」

誰の目にも、はっきりとブルブル美肌を慄わせているのがわかる二人の美女は、今から死ぬのだという絶望感に打ちひしがれているにちがいない。  
(つづく)



## 作 鬼 団



## 決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 署号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円(送200円)●

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

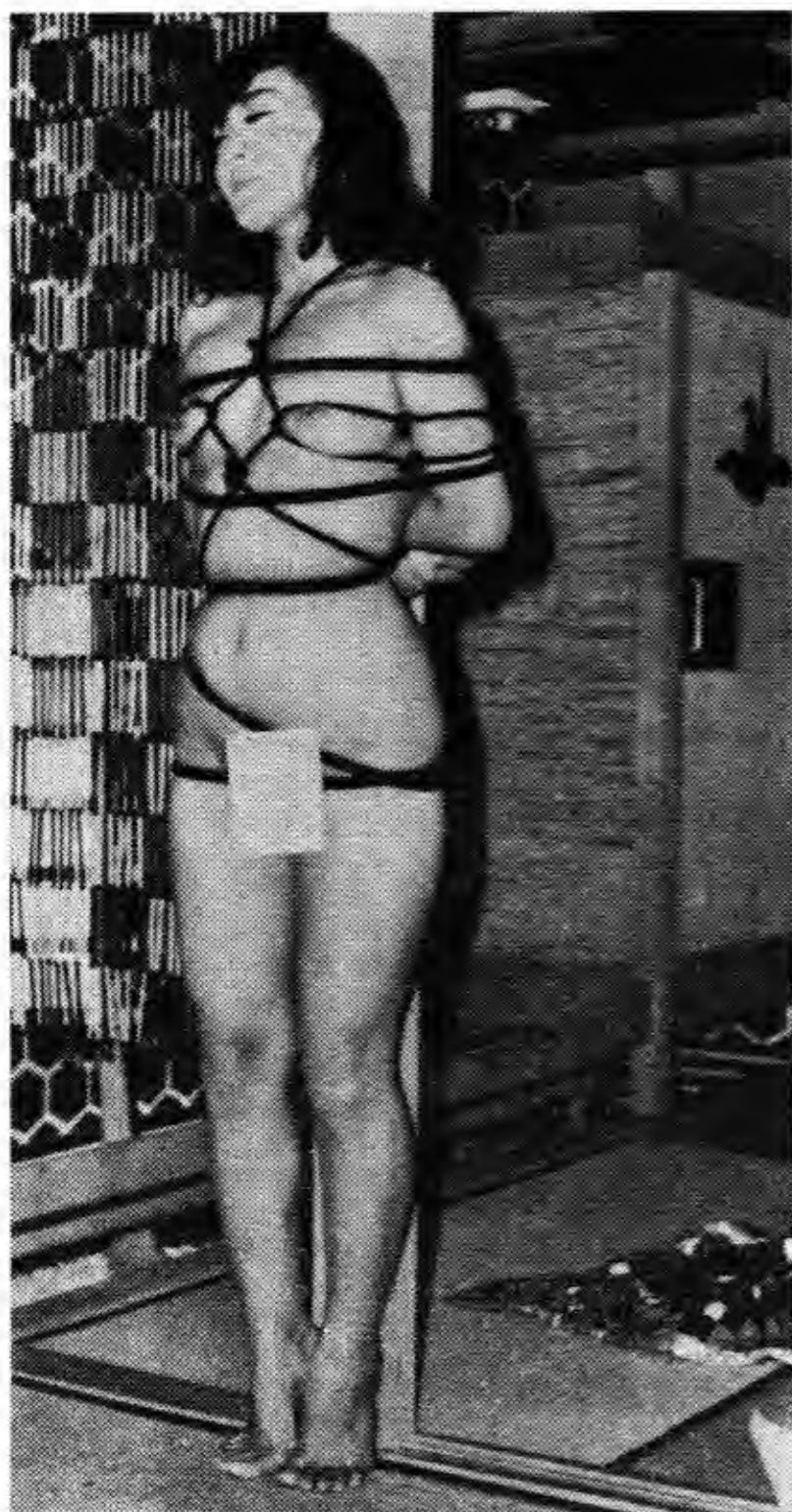
△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発狂の美少年 第二章 美少年の脱走 第三章 脱走の秘密 第四章 秘密の脱走 第五章 脱走の秘密 第六章 秘密の脱走 第七章 脱走の秘密 第八章 秘密の脱走 第九章 脱走の秘密 第十章 秘密の脱走 第十一章 脱走の秘密 第十二章 秘密の脱走 第十三章 脱走の秘密 第十四章 秘密の脱走 第十五章 脱走の秘密 第十六章 秘密の脱走 第十七章 脱走の秘密 第十八章 秘密の脱走 第十九章 脱走の秘密 第二十章 秘密の脱走 第二十一章 脱走の秘密 第二十二章 秘密の脱走 第二十三章 脱走の秘密 第二十四章 秘密の脱走 第二十五章 脱走の秘密 第二十六章 秘密の脱走 第二十七章 脱走の秘密 第二十八章 秘密の脱走 第二十九章 脱走の秘密 第三十章 秘密の脱走 第三十一章 脱走の秘密 第三十二章 秘密の脱走 第三十三章 脱走の秘密 第三十四章 秘密の脱走 第三十五章 脱走の秘密 第三十六章 秘密の脱走 第三十七章 脱走の秘密 第三十八章 秘密の脱走 第三十九章 秘密の脱走 第四十章 秘密の脱走 第四十一章 秘密の脱走 第四十二章 秘密の脱走 第四十三章 秘密の脱走 第四十四章 秘密の脱走 第四十五章 秘密の脱走 第四十六章 秘密の脱走 第四十七章 秘密の脱走 第四十八章 秘密の脱走 第四十九章 秘密の脱走 第五十章 秘密の脱走 第五十一章 秘密の脱走 第五十二章 秘密の脱走 第五十三章 秘密の脱走 第五十四章 秘密の脱走 第五十五章 秘密の脱走 第五十六章 秘密の脱走 第五十七章 秘密の脱走 第五十八章 秘密の脱走 第五十九章 秘密の脱走 第六十章 秘密の脱走 第六十一章 秘密の脱走 第六十二章 秘密の脱走 第六十三章 秘密の脱走 第六十四章 秘密の脱走 第六十五章 秘密の脱走 第六十六章 秘密の脱走 第六十七章 秘密の脱走 第六十八章 秘密の脱走 第六十九章 秘密の脱走 第七十章 秘密の脱走 第七十一章 秘密の脱走 第七十二章 秘密の脱走 第七十三章 秘密の脱走 第七十四章 秘密の脱走 第七十五章 秘密の脱走 第七十六章 秘密の脱走 第七十七章 秘密の脱走 第七十八章 秘密の脱走 第七十九章 秘密の脱走 第八十章 秘密の脱走 第八十一章 秘密の脱走 第八十二章 秘密の脱走 第八十三章 秘密の脱走 第八十四章 秘密の脱走 第八十五章 秘密の脱走 第八十六章 秘密の脱走 第八十七章 秘密の脱走 第八十八章 秘密の脱走 第八十九章 秘密の脱走 第九十章 秘密の脱走 第九十一章 秘密の脱走 第九十二章 秘密の脱走 第九十三章 秘密の脱走 第九十四章 秘密の脱走 第九十五章 秘密の脱走 第九十六章 秘密の脱走 第九十七章 秘密の脱走 第九十八章 秘密の脱走 第九十九章 秘密の脱走 第一百章 秘密の脱走

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 運命の逆転 第二十四章 奇妙な三々九度 第二十五章 飼育される白い動物 第二十六章 悪魔と悪女の悪業 第二十七章 屈辱の地獄 第二十八章 逃走の恐怖と失敗の結末 第二十九章 悪鬼達の残忍な所業 第三十章 淫らな美女の調教 第三十一章 汚水にまみれた宝石 第三十二章 華々しき美女の屈伏 第三十三章 対峙する美女と美女 第三十四章 あくどい隙 第三十五章 羞恥の絵の展開 第三十六章 清純な令嬢の屈服 第三十七章 人身御供の令夫人 第三十八章 深夜の美少女とズベ公 第三十九章 小夜子への執拗な調教 第四十章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇シヨ 第五十三章 華々しきシヨの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の泣き 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。T558 暁出版株式会社宛



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

筐<sup>きよう</sup>底<sup>てい</sup>のネガに見<sup>み</sup>たM<sup>エム</sup>女<sup>じょ</sup>の生<sup>せい</sup>態<sup>たい</sup>

塚<sup>つか</sup>

本<sup>もと</sup>

鉄<sup>てつ</sup>

三<sup>ぞう</sup>

なつかしい二人の女性

七月に入って、私は期せずして二人の女性から電話をもらった。それは、九月号のカメラ・ルポの「霖雨余情」の終わりの方で中河恵子と川路むら子のことを少し書いたが、いち早く、それを読んでくれて、なつかしうに電話をしてくれたのだった。

二人とも、私にとっては、忘れることの出来ない緊縛女性の佳人であって、その思い出は尽きることがなかったので、いずれも遠く数百キロ離れた地点から長距離電話をかけてくれたのにも拘らず、ほん、目の前にいるような錯覚を起こしたほどであった。



甘ったるく鼻にかかった中河恵子の声は、私が以前、テープに沢山とっていたので、忘れる筈はないのだが、

「私よ。ねえ、誰だか、わかる？」

と、咄嗟に言われたときは、私は可愛い彼女の顔は浮かんでいたのだが、本名の方は口について直ぐには出てこなかった。

「お久しぶり。よく雨が降りますけど、お元氣ですか？」

はきはきとした弾んだ声。しかも、すぐ目の前で向かいあって、直接に話しているような明瞭な声。

「ええ、お蔭さまで丈夫で暮していますが、貴女は、今、大阪から？」

「いいえ、長野県からよ。ウフフフ」

「ああ、わかった。〇〇さんでしょ」

私は、やっと中河恵子の本名を思い出していた。それからは、なつかしさ一杯で、いろいろな話を交わした。

「ここに子供がいてるのよ」

電話を通して、元気な子供の声がした。幸福そうな家庭の匂いがした。

「是非一度、お逢いしたいものですな」

彼女と一週間おき毎ぐらいに逢っていた頃のことか思い出されて、なつかしかった。

「ええ、今月中には、用があって、そちらへ行けると思いますわ。そうしたら、そのときは、私もお逢いしたいと思って……」

「じゃあ、来られたら、是非、お電話下さいね。お待ちしております」

「ええ、その節はよろしく……」

電話料が、かさむことを恐れて、私は電話を早くすませたいと思ったが、中河恵子は、

なかなか切りたがらない風であった。二人の仲だけで通ずる秘密が、心と心とを蔓のようにならませていた。共通の秘密を持つということが、これほどまでに心を密着させてしまうものなのだろうか。

電話が切れたあとも、私の胸のなかには、中河恵子の甘酸っぱい体臭のようなものが、やるせなく、いつまでも残っていた。





もし、次に逢う機会があったなら、あれもやりたい——これもやりたい——と、彼女好みの責めのアイデアが次々と浮かんできて、私は、しばし、ぼーっと放心状態であった。

電話を掛けてきただけでも、凄く興奮させられる女。ポートレートを、定期入れの間にでも、そっと忍ばせておきたい女。中河恵子は、そんな女であった。

淑かな女性のように見えて、それでいて、ひとたび燃えあがれば火のように、奔放になる女であった。いつも逢っていて、放したくない妖しい魅力に溢れていた。

平常、逢って話し合っていると、きには、至って控え目で、おとなしいのに、いざ、SMプレイに入ってしまうと、これが、あの彼女かと、驚くほど豹変してしまうのであった。

責めのムードのなかに没入してしまおうと淑女変じて忽ちマゾの妖婦と化してしまうのであった。

うねうねと蛇のように全身をくねらすさまは、全くMの権化ごんけのようで、私は中河恵子を責めているうちに、人女ひとめというものは、こうして責めるものなのかVというコツとかツボというようなものを、次第次第に、会得してゆくように思えた。

恵子は、私に対して、「責めることが、お上手なのネ」と、感に耐えぬように言っていたが、実は、賢明な彼女は、知らず知らずのうちに、私を自分の好む責め方の方へと、誘導していったのである。

だが、それは決して、あからさまに要求するのではなくて、私が、いやでも、そういう風にしなくてはならないように、態度で、それとなく暗示したり、言葉に出して婉曲に哀願したりするのであった。

「ねえ、わたし、お願いがあるんだけど」  
責めの最中に、甘い声で、そう言われたらS男子であつたら、誰でも、ぞくぞくした好奇心にかられて、やさしく

「なんだね、言ってごらん」

と、言ってしまう。けれども、恵子は、そこで、興ざめな言葉を口から出して、折角のムードをこわしてしまうようなことは、決してしない。身体をくねらせて、羞かしさに満



ち満ちた態度を溢れさせて、なかなか、その  
へお願いVというヤツを言い出さない。

私にしたなら、なんだろう——という期待と  
不安で、早く言えと促す。

「そんな恥かしいことは言えないワ」

いきりたった私を益々じらすようにする。

さんざん、ジラシ抜いたうえ、私がじりじ  
りしたところで、彼女がそっと私に寄り添っ  
て身体を密着させてくる。

「なんだ、こいつ、そんなことか……」

私の心の奥底まで、見抜いたような、その  
恵子の動作が、また恵子の最高の望みであっ  
たとは……。開いた口がふさがらなかった。

私は、いじらしさと、いとしさの余り、狂  
ったように、無茶苦茶に、彼女を責めていっ  
た。くすぶりつづけていた木が、いっぺんに  
燃えあがったように、激しく火花を散らして  
火の手は、いやが上にも盛んであった。

中河恵子の声が、また素晴しかった。

歯切れのよい、上品な標準語で、泣き、呻  
き、喘ぐ——そんな声に混じって、セリフの  
ような言葉を口走った。

それは、ときには、台本に書いたセリフを  
喋るように、彼女の可愛い口から迸り出る  
のだった。責める男にとって、これほど、た

まらない妙なる伴奏はなかった。

豊富な語彙で、次から次へと飛び出  
す世迷言は、さすがに、昭和三十年頃  
までの奇クを古本屋で買い漁って読み  
耽ったというだけあって、下手な小説  
以上であった。

私は、ひそかにテープレコーダーを  
持ち込み、マイクを左手の掌のなかに  
忍ばせておいて、電源のスイッチを入  
れさえすれば、すぐ作動するようにセ  
ットしておいた。

こうして私は、合計して、えんえん  
数時間分にも相当する彼女の泣き声を  
テープに収録することが出来た。これ  
はフォトと共に、貴重な責めの記録と  
して手元に残っているが、残念ながら  
公開できるような内容ではなく、当時  
の責めを偲ぶようすがとして保存するよ  
り仕方がない代物である。ただ、収録  
した本人の私でさえ、これを再成する  
と、血沸き肉躍るほどの濃厚さなので  
中河恵子の巧まざる演技も相当なもの  
だと思う。

川路むら子もまた中河恵子と同じく  
私の大好きなタイプで、プレイ以外で



つきあっているときは、無口とさえ思われるほど控え目であるが、ひとたびプレイの渦中に入ってしまうと、ただならぬ燃え上がり方を示す点は、理想的なM女といってよいだろう。

服装などが地味なところから、辻村氏は最初誤解して、川路むら子（むらこ）の真のよさを評価されなかったようであるが、しつとりと落ち着いた若奥様風でありながら、一旦、素裸にひんむいてしまうと、肢体のあちらこちらから娘らしさが、ムンムンと漂ってくるのだ。

はにかむと、可愛い片えくぼが頬に出てくるところなんかは、私が彼女を八片えくぼのマリアVとして、そのM女ぶりを高く評価する所以である。共にいて、心が温かく、なごんでくるMの佳人だと私は考える。

私は始めて川路むら子に会ったとき、『この女なら、心おきなく責めることが出来る』という、心と心が触れあうものを感じた。

そして、彼女の裸身を麻縄でぎりぎりに縛りあげていって、更に、その念を深くすると共に、次のプレイの約束、即ち、一泊か二泊で、ゆっくりと落ちていく連続の責めをしたという私の気持が、また、そのものずばり彼女の方も、泊りがけでいじめられたいと

いう希望だったので、意見が一致した。

全裸になった川路むら子は、自分の肉体を私の前にさらけだして、その特徴について、いろいろと語りかけてくるのであった。

その仕草が、いかにも純情で、娘らしい感じを私に与え、私は一層、むら子を、むごたらしくいじめ抜きたい気持ちにかられた。

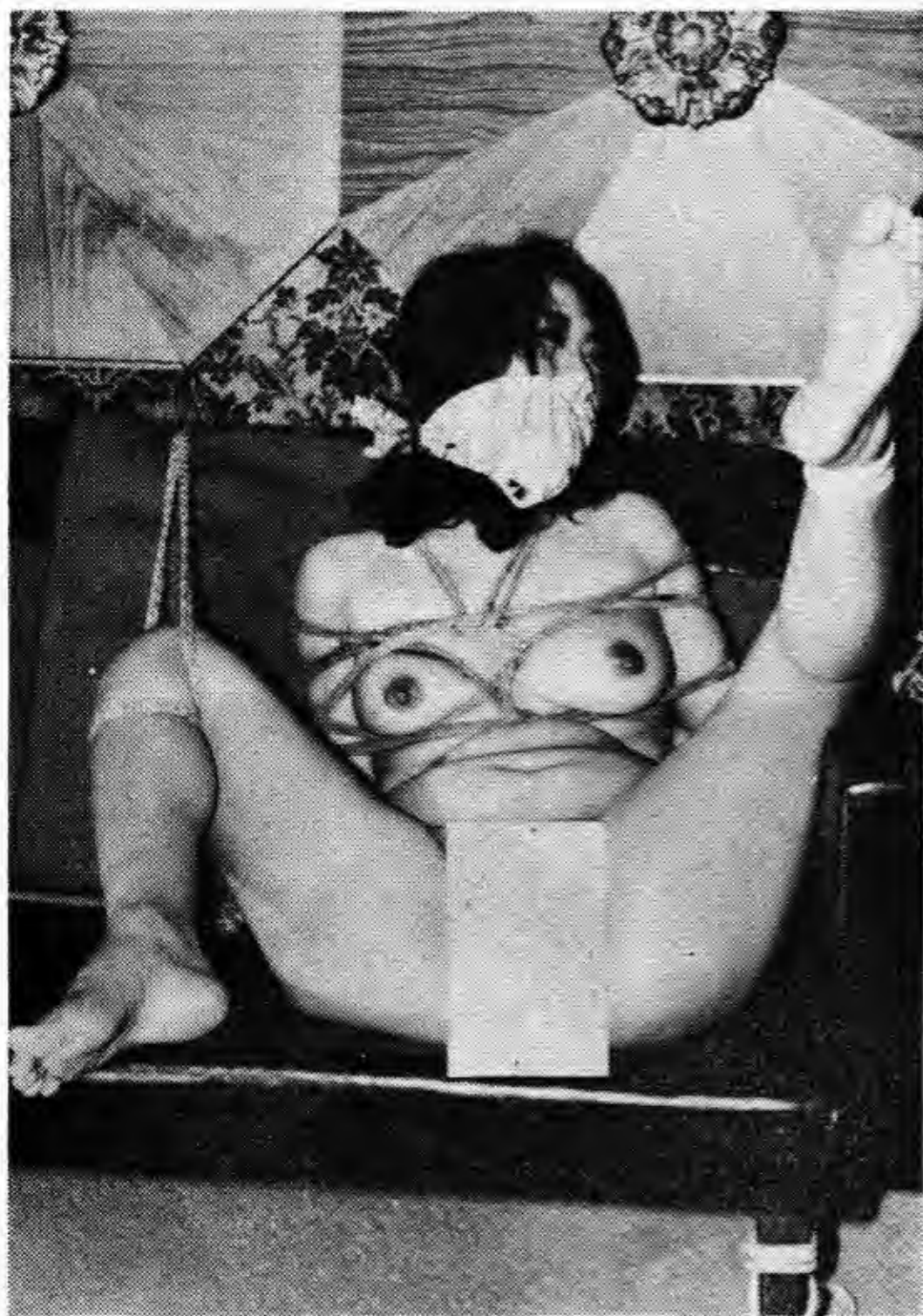
この純情可憐な、娘時代から、そのまま抜け出てきたような若妻むら子を、どのように責めてやろうか——と、考えるとその手段を見つけた。すなわち、私はいらいらした。

なにしろ、彼女に対する予備知識といったら皆無なのであるから、手がかりになるようなものは掴めない。Mに敏感な女性であつたら、責め手側の心の動き



は、す早く、心のなかに伝わるものである。当惑とか、逡巡とか、ためらい——といったものは禁物である。最高に精神力を充実さ





せて、躊躇することなく、行動に移らなければならぬ。責める側に立つ者は、責められる者よりも、何倍かの行動に対する意志の力を発揮して燃え上がらせねばならない。

私は、むしゃぶりつくように、川路むら子に対して、体当たりの行動に出ている。

普通考えれば、それは無茶な暴挙のように

見えたかもしれない。しかし、機を見て対者を、そのムードに引きずり込むためには、こうした突飛な行動も、また必要である。

水は方円の器に従う——という。ましてや順応性に富んだM女むら子のことである。私の一見、強引に見える型破りの責めに対して、がっかりとこれを受けとめて、忽ちにし

て、最高に燃えあがってきた。

粘着性のある、その餅肌は、ねっとりとして私にまとわりついて密着して離れない。私は十分に、湿潤しきった女体を、手元に引き寄せておいてから、突き放し、突き放したかと思うと、再び手元へ呼び戻した。

波間に浮かぶ小舟のように翻弄されたむら子の女体は、いつの間にか、私の掌中に入り込み、自家薬籠中のものとなっていた。

一旦、そうした状態になってしまってから、初対面とはいえ、まことに御し易いものであった。私のペースにはめ込むことに成功したうえは、既定の軌道の上を、ただ、まっしぐらに走らすだけだった。

川路むら子のマゾの開花は、まことに素晴らしいものであった。私は、彼女自身の筆になる告白を読みたいものと思った。それで、帰途の車中、そのことを、それとなく話してみた。彼女は快く承諾して、暇があったら書いてみよう——と約束してくれた。しかし、未だに、それは実現していない。

彼女からの手紙を見せてもらったことがあるが、いかにも書き慣れたといった、女らしい柔らかな感じの達筆であった。「私、文章を書くことは嫌いじゃないのよ」と言ってい

たむら子の言葉通り、書けば、きっとM女の心の神秘を、さらけだして呉れるような気がするのだが、その起爆剤になるようなチャンスは私には与えられぬものかと考えている。

川路むら子が、泊りがけで行く——という連絡を呉れたとき、私は、チェック・イン、アウト12時というビジネスホテルに閉じ込めておいて、二十四時間の連続責めのプランを樹てていた。その間は、彼女は完全な私の奴隷の生活を強いられるのである。

完全にエヤコンのきいた、その三間つづきのバス、トイレ、調理台、ベランダ付きの特別室は、主人と奴隷が住む部屋としては、最高ではないにしても、中の上くらいの便利さで満足することが出来た。

由来、SM主義、或はSMプレイ信奉者としては、男女同権という思想ほど面白くないものはない。やはり徹底した男尊女卑の世界でない、男、若しくは女にとっても、SとMの気持を満足させることは出来ない。

例えば、SMプレイをやっている間だけでも、主人（絶対的な権力を持つ暴君）と奴隷（生殺与奪の権を主人に握られた従順な僕）といった関係が、完全に保たれなければならぬ。この際、男性と女性との間に、そうし



た関係があることを、是か非か——ということとを論じているわけではない。

男女同権という思想には、それなりの理由も正当性もあるだろうけれど、少なくともSMプレイの世界に於いては前時代的な男尊女卑、若しくは女尊男卑の思想が二人の間に徹底しないことには興味は起こらない。いわば

△亭主関白△か、△嬖天下△かである。

川路むら子を迎えた私は、ホテルの食堂で食事をした後、地下のショッピング街と一緒に散策した。あと何分か後には、完全な奴隷の地位に転落する彼女も、今の段階に於いては、女王に変身していてもいいわけである。奴隷としての生活がみじめであればあるほ



ど、現在の奴隷以前の生活が楽しいものである方が、確かに効果的であるようだ。

## 夥しいネガの中で

私は、中河恵子から、写真を送ってほしいという依頼を受けて、保存してあるネガを見る機会を持った。平素は仕事に追われていて

ついぞ、そうしたチャンスはなかったのだけれど、半日ほどの時間を潰して、夥しい数のネガを点検しながら、虫干しをやった。

その結果、ネガ現像をしたまま、印画紙に焼付けずに放っておいたものが、案外、多いということを見つけた。それとカラーネガは一枚宛プリントはしてあったが、そのまま積み重ねてあったり、口絵に使うからということ、コダックのエクタクロームで撮ったりバーサルフィルムが、案外多く出てきた。

ネガ袋に一枚一枚入れて



モデルの名前を書きつけてあるのなんかは、いいのだが、ネガを裸のまま重ねて、物の下敷きになっていたのなんかは、折柄の梅雨の湿気で、びったりと一枚板のように、ひっついてしまっ、剥がすことが出来ないものなんかも出てきた。

一枚一枚、また一枚と、透視してみると、

まことに懐かしい美女、佳人たちの緊縛姿態が妖しく眼前に躍り出してくる。

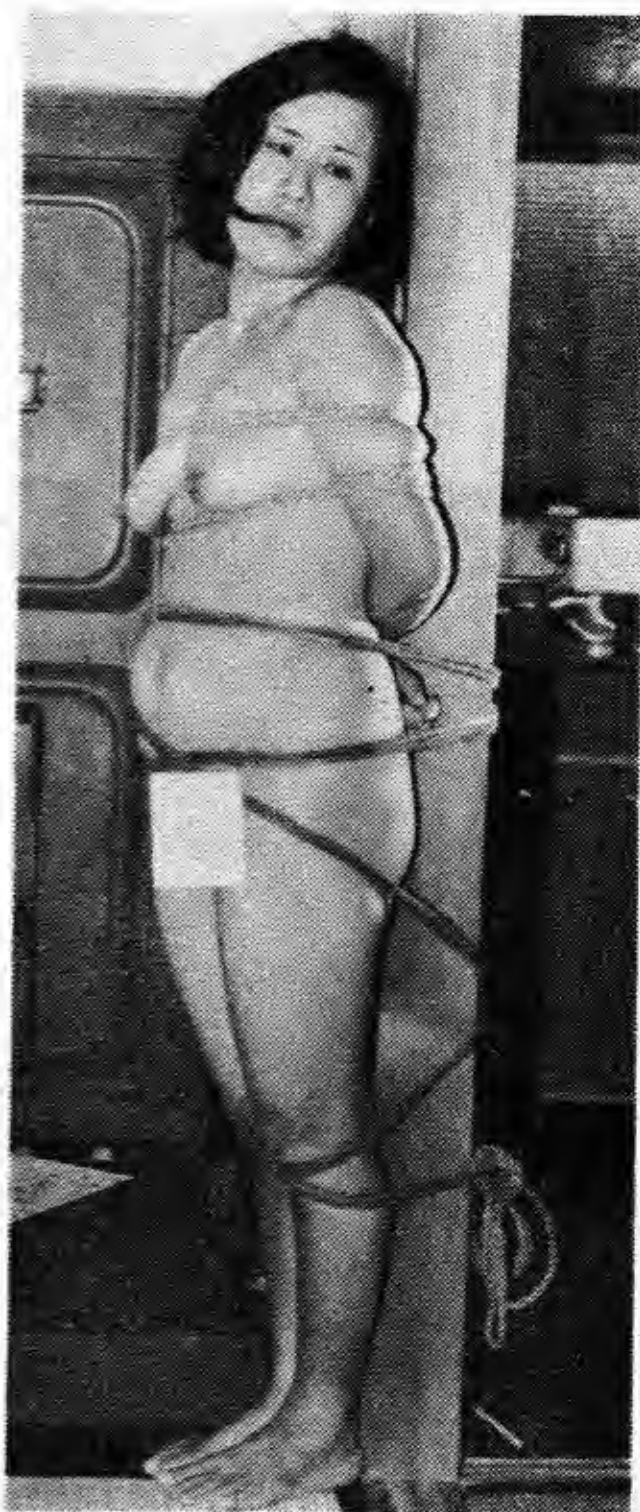
ムチ打ちの女王と言われた関谷富佐子、万年処女の感のある大塚啓子、華麗な刺青を背中一面に施した山原清子、妖艶な肢体を誇る絹川文代、若さに溢れボインの物凄い長野良子、ノーブルなフェイスで人気のあった梨花

悠紀子。カリプソと呼んだ乳房の豊かな愛川悦子……。その他、ネガを見ただけでは急に、名前を思い出せない数多くの女性達――。

読者通信に便りを寄せた人で、私のカメラの前に立って呉れた長井葉津子、稚妻の金原奈加子、白人女性のシーラ・ケニー、沖縄美人の座間明子、それに佐々木真弓に、左近麻里子、渡部好美に三浦純子の二夫人。

そうしたネガのなかに埋れて、私はしばし過去の思い出の瞑想に耽っていた。

そうした人達の中には、今でも時折、忘れずに電話を呉



れる大塚啓子や山原清子。美しい文字の水茎のあともし麗しい手紙を寄せて呉れる関谷富佐子。私は夥しい数のネガを整理しながら、焼付けする分を区別けしていったが、ネガ袋の表に書いてある名前を拾っただけでも、相当の数になる。

ずっと以前、そう、もう二十年も以前になるだろうか。その頃のネガも残っている。

中富綾子。川端多奈子。須川令子。加賀利江子。藤田節子。萩千恵子。杉美美。並川トミ。高瀬忍。坂口利子。村田那美子。川辺砂登子。四方清美。雲井久子。岩井知子。浅野末乃。大井小夜子。伊吹真佐子。春日ルミ。などといった名前が見える。

更に、少し新しくなって、益田房子。田中

芳代。村井知可子。田原美佐子。花坂道子。前本妙子。熱海容子。花本京子。柳初子。若原明子。美木乃々子。山路ミヨ子。遠藤百合子。館典子。平野笑子。田代悠子。佐賀美智子。横尾峯子。栗本ミチ。刑部典子。水本茂美。中塚文子。津川路子。浜千代子。木田雅子。厚狭春江——といった顔がある。

比較的、誌上で馴染みのある名前としては東浦ひかる。愛川悦子に桜井葉子。それに木村洋子と加茂良子。大島照代、安井喜久子の二人のベテランに一宮百合子の若い肢体——そうした諸々のネガが、机の上に堆高く積み上げられた。まだ焼付けしていないような形

跡の川越美佐子にローズ秋山。竹野ひろ子。妊婦としては金原奈加子の他には、双胎の増田みゆき。安原さゆり。木戸悦子。それに稚妻妊婦の富田由美子。浜本喜美と三木敬子のコンビ。コンビといえば松山真樹子と小池喜美のネガも混じっている。

最近撮影した分としては、江口淑子。高村浩子。深田菊子。松本たえ。笠井奈保子。前田真知子。荒尾慶子。福井桃子。鈴木千鶴子——など。それらは、大体、主なものの焼付けは完了している。

なかには、撮影したネガのまま、未発表で名前も判っきりしないのが混じっている。いずれ焼付けた上で整理してみたいものだ。

折角、未発表のネガを選び出して焼付けたのだから、それらのフォトを誌上で紹介しながら、少しばかり雑談してみたいと思う。というのは、それらの中には、非常に強い印象に残っているながら緊縛写真撮影だけに終わってしまっているものが、案外、多く出てきたからである。

## ボイン自慢の踊子

女を責めたいと願うS性男子を大別して、二つの傾向があると思う。



一つは、自分の楽しみのためにのみ女を責めたいといったタイプで、相手の女性が痛がろうが嫌がろうが、そんなことなどは一切考えていないといった型である。いわば真性サジスト型というべきSで、責められて喜ぶM女性なんか、いじめたって面白くない。泣き喚き、恐れ、嫌悪するノーマルな女を責めてこそ、責め甲斐があるという考えに立つ者である。

もう一つは、フェミニスト型ともいうべきか、羞恥責め型ともいうべきか。相手の女性を痛がらせたり、肌に傷つけたりすることは好まず、責められることによって、むしろ歓喜にむせぶ様態を眺めて楽しむというプレイ思向のタイプである。本誌の読者の中のS人士は、殆ど、こういった傾向の人だと思う。

徒らに、女性を痛めつけたり、疼痛を与えたり、血を流したり肌に傷を残したりするとは好まないSといえ、読者通信なんかにも、よくそういった文章が見えているが、本誌の読者のなかで、そうしたフェミニスト型ともいうべきS傾向の方が殆どではないかと考える。

Sだというから、(サディストという概念から考えて)どんな乱暴をしたり、暴力を揮

うのかと思ったら、案外、フェミニストが多いのである。一見して、△女性を責める▽という態度もゼスチュアである場合が多いように見受けられる。

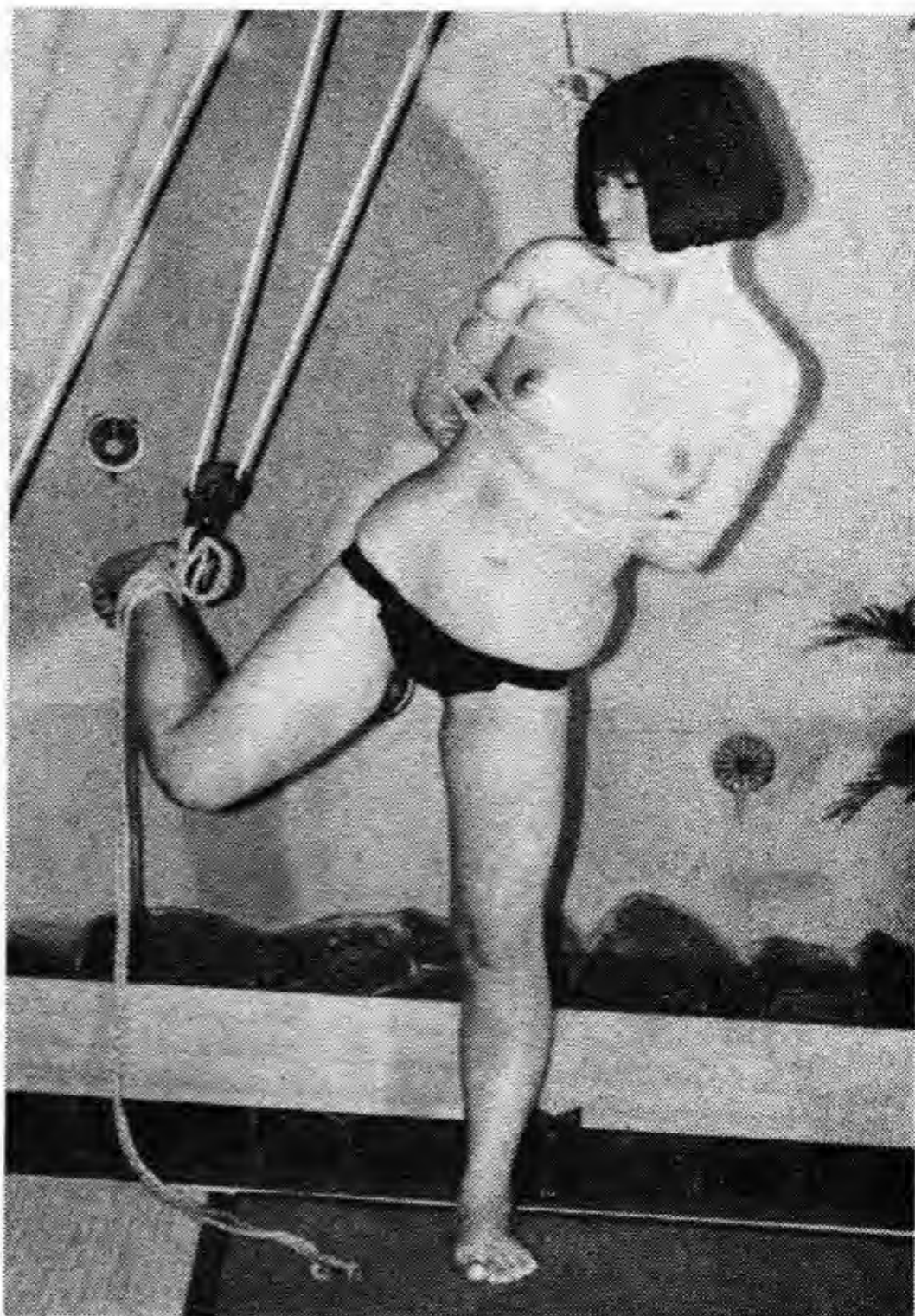
一方、また責められる側の方の立場から見れば、気違いのように相手のことは一切構わず、自分の楽しみだけで、無茶とも思える暴

力を揮われるのであったら、如何にM傾向の女性であったとしても、それは恐怖と嫌悪以外の何物でもないだろう。

やはり、そこには人間としての△愛情▽とか、△いたわり▽があつてこそ、愉快的SMプレイが展開されるのである。SMプレイで「責める」のは、私刑りんちや刑罰でもないし、ま







してや報復なんかの手段ではない。いわば、  
△愛情表現Vの一つの手段として、用いられ  
るといってよいのではなからうか。

私が、今まで「縛ったり」「責めたり」し  
てきた女性の多くは、本誌の愛読者であつた  
り、SMのなんたるかを理解したM傾向の女  
性であつたが、中には、いささか趣きの変わ

った女性も、いなくはなかつた。

もう、ねっからのM女性として、接してい  
るだけで、こちらの方が誘発されて、責めた  
くなってしまう女性としては、ちょっと思い  
だしただけでも、最近では、高村浩子、前田  
真知子、荒尾慶子などが挙げられるし、鈴木  
千鶴子なんかも、その部類に入るだろう。

以前の人では、関谷富佐子、川路むら子、  
中河恵子、梨花悠紀子——といったメンバー  
が、指を屈することが出来る。

だが、私が見て少し毛色が変わった人たち  
もいた。それは絹川文代と長野良子の二人で  
ある。偶然に、二人共、踊子の経験があつて  
いささか、露出症気味のあるところが、私の  
気に入ったところであるが、いずれも本誌の  
読者ではなくて、SMとは何かということも  
知らなかつたし、奇譚クラブという雑誌も、  
最初のうちは知らなかつた。

だから、この二人は、純然たるM女(自分  
からマゾだと自称してきた関谷富佐子、中河  
恵子、梨花悠紀子、高村浩子といった人達)  
とは違って、絹川文代なんかは男達をいじめ  
ることに興味を持っていたし、長野良子も  
僅かの間しか接していなかつたので、男性を  
責めさせるチャンスはなかつたが、その言動  
からして、十分あり得たことと思う。

二人に共通していることは、自己顕示欲が  
激しくて、モデルとして使うのには、いわば  
扱いよい女性であつた。しかし、自分の裸身  
が縛られるということについては、最初のう  
ちは、一向に関心がなかつたのである。

長野良子は、自称十八才と言っていたが、



色が白くて肌がきれいで、素晴らしいボインの持主であった。あどけない表情からは、まだ完全に女になりきっていない、幼さ——というものが感じられた。

東大阪市のある場末のストリップ小屋で踊っているのを見て、私はいっぺんに惚れ込んでしまった。色が白くて、ぽちゃぽちゃとした肉づきのよさは、私好みでもあったわけである。こんなところで踊らせておくのには、惜しい若さと美があった。

私は早速、長野良子を近くの喫茶店へ呼びだして話を聞いてみると、

「東京から大阪へ遊びに来ただけど、金が足りなくなったら、ここで踊ってんの。踊るのは楽しいけどギャラが少ないの。で三度の食事代も出ないのよ。だから、旅費が出来たら、東京へ帰ろうと思ってるわ」

如何にも腰掛けで、この小屋の専属をしているような口振りだったので、私は、

「だったら、一つ、旅費づくり

に、写真のモデルでもやってみるか」

と、誘ってみたところ、オウム返しに

「ええ、やってみるわ」

と、返事してきたので、私は人縛りVのこ

とを説明する機会を失ってしまった。写真のモデルといえば、裸で写真を撮るぐらいに思っていたのだろう。



事実、私が長野良子と、ホテルの一室へ入った途端、全裸になった彼女は音楽のメロディを口ずさみながら踊りだしたのである。

素晴らしい脚線美。その長い脚を頭上高く挙げて、私の目の前で自分の肉体を誇示して見せた。格好のよい素足の爪先に力がこもって踵のところに手を添えて、暫く、そのままの位置で立っていた。

「ねえ、早く撮ってエー」

長野良子は、自分の太股から顔をのぞかせて、私の方へ甘い流し目を送った。私はつられるようにして、シャッターを切った。洋梨のようなボインを、ぶるんぶるんとふるわせて、彼女は踊り、私にカメラを向けるように、せがんだ。正面に股を開いて、両股の間をのぞかせるようなポーズもしてみせた。

そのときの写真は、今でもネガのまま、保存してあるが、私は立て続けに、二本ほどのフィルムを彼女

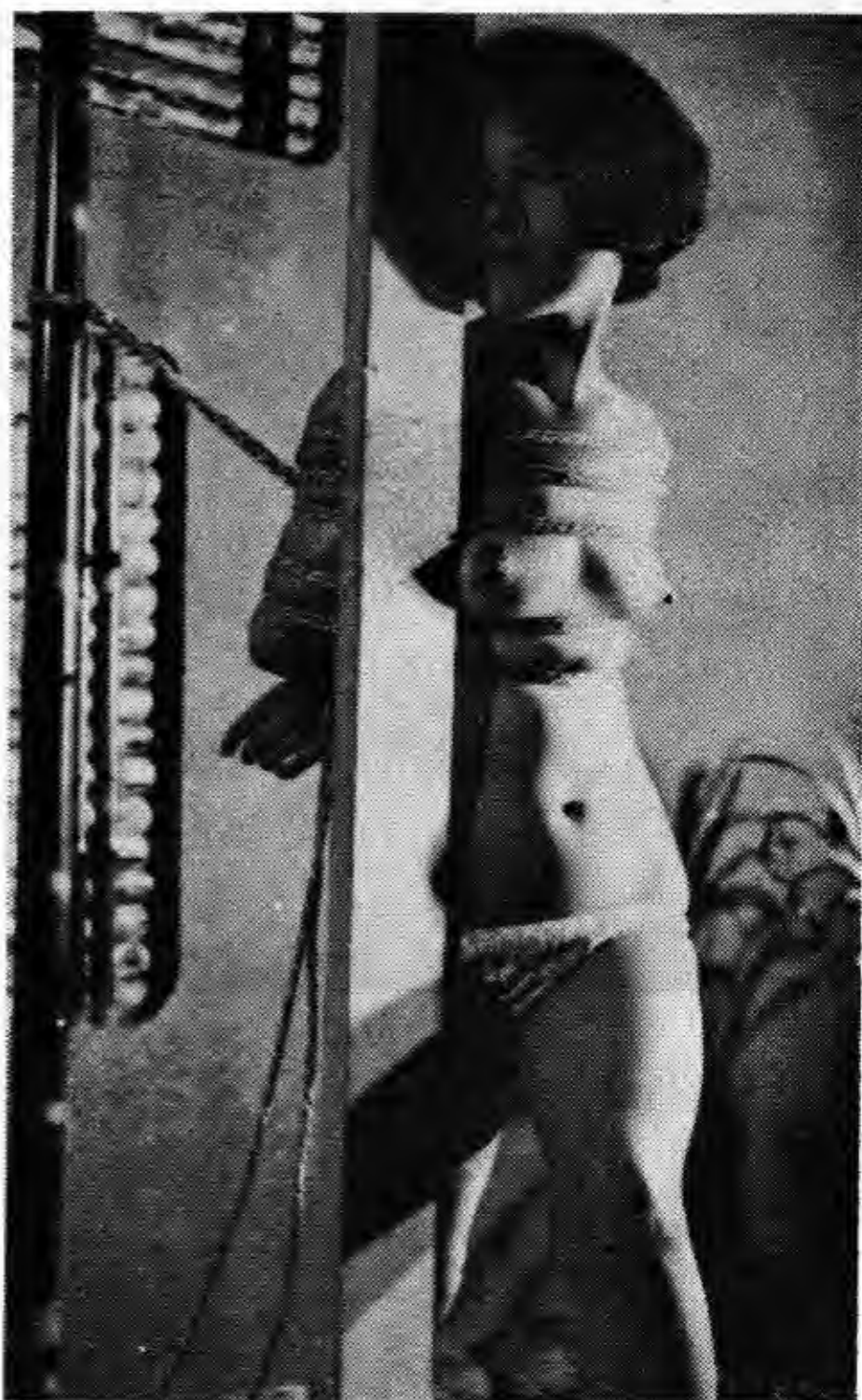
自演の煽情的なポーズで、消費してしまっていた。

両手をお尻の下で支えて、パツと正面きって、両脚を左右に一直線に開ききったポーズをしたときなど、私が中心部にピントを合わせて早くシャッターを切らなかつたものだから、逆に彼女に叱られたほだった。

カメラの前に、自分の肉体を展げて写すことをせがむ長野良子は、たしかに露出趣味の濃厚な女性であったが、東京の良家の家庭を飛び出して、大阪の場末のストリップ小屋で踊っているというのも、そうした性癖が、知らず知らずのうちに、彼女をそうさせていたのかも、知れない。

とにかく、身体のだの部分をとても若々しくて瑞々しく、もぎたての白蜜桃のように新鮮であった。その点、撮っている私も、思わずフィルムを余分に使ってしまうようになる程、美しい女体であった。真白い肌が、うっすらと汗ばんで金色に輝くウブ毛が逆光に浮かんで見えたとき、ライトがファインダーの中に飛び込んでくるのも構わず、私はシャッターを切っていた。

カメラの前で、どのように大胆、且、奔放なポーズをとって見せる彼女も、まだ自分の



裸身を縄で縛られるという事は知らないようだった。私一人を観客として、御開帳するごとに彼女は酔っていた。そのうち、興にのつて、ねっとりとした両足首で、私の首を挟みつけるようにして挑発してきた。

こんな女に、SMのことを説明したって、所詮無駄だろうと思って、彼女が自分の身体を私にからませてきたのを機会に、私は背後にかくし持っていた縄を巧みに捌いて、長野

良子の後手を、す早く縛っていた。

「あらッ、なにをするのよ」

良子は、口ではそう言ったが、その豊かな胸を私にもたせかけて、うっとり目を閉じていた。顔全体が、うっすらと微笑を浮かべているようで、自分の裸身を、どうでもせよと、まかせきった風情であった。

それからの私は、幾様にも縛り直して、良子の女体をカメラに収めていったが、彼女は





縄を使うことによって、自分の裸身がより露出的になることに満足している風であった。その翌日のことである。私は再び長野良子を誘った。

私は、もう大っぴらに縄の束を両手にぶらさげて、彼女に近づいていった。

手首をとろうとして、かがんだとき、私の

伸ばした手を、するりとかわした彼女の両腕は、私の首に蛇のようにからんできた。

あっ——と、私が不意をつかれて息をのむところへ、彼女の肉の厚い唇が襲ってきた。

ふりほどこうにも、両腕が、がっちりと首に巻きついていたので自然とディープキッスをしてしまう格好となった。持っていた縄の

束を投げ捨てた私は、忽ち応戦態勢を整えて肉づきのよい彼女の背中を抱え込むように、両腕を回していた。

結局は、彼女の巧妙な呼び込み作戦に引っかかってしまった。昨日は問答無用で縛り上げに成功して、何枚もの緊縛写真を撮ることが出来たが、今日は、縛ることも写真を一枚も撮ることなしに、彼女の術中にはまってベッドインということになってしまった。

彼女の言動からして、一度、私はマゾ男を責めさせてみたら——と考えたことがあったが、そのチャンスもないまま、旅費を手にした長野良子は東京へ帰っていった。

同じく踊子であった絹川文代の方は、マゾ男を責めさせる機会が何度もあったSM両方を理解する女性であった。自己顕示欲と露出欲は、やはり強い方であったけれど、良子のように、直截的ではなかったように思う。

道頓堀劇場でナンバーワンのダンサーとして踊っていた絹川文代と知り合った、いきさつについては既に詳しく書いた筈であるが、何度も撮影をくり返しているうちに、ツンパの脇から毛が出て困るので、剃ってくれと、私に頼むくらい親しくなってきた。

顔も綺麗だったし、プロポーションも抜群



によく、ポーズをつけるのもうまかった。S Mを理解していたことは相当なもので、自分の性癖についても、閨房の機微にわたってまで、よく喋ってくれた。

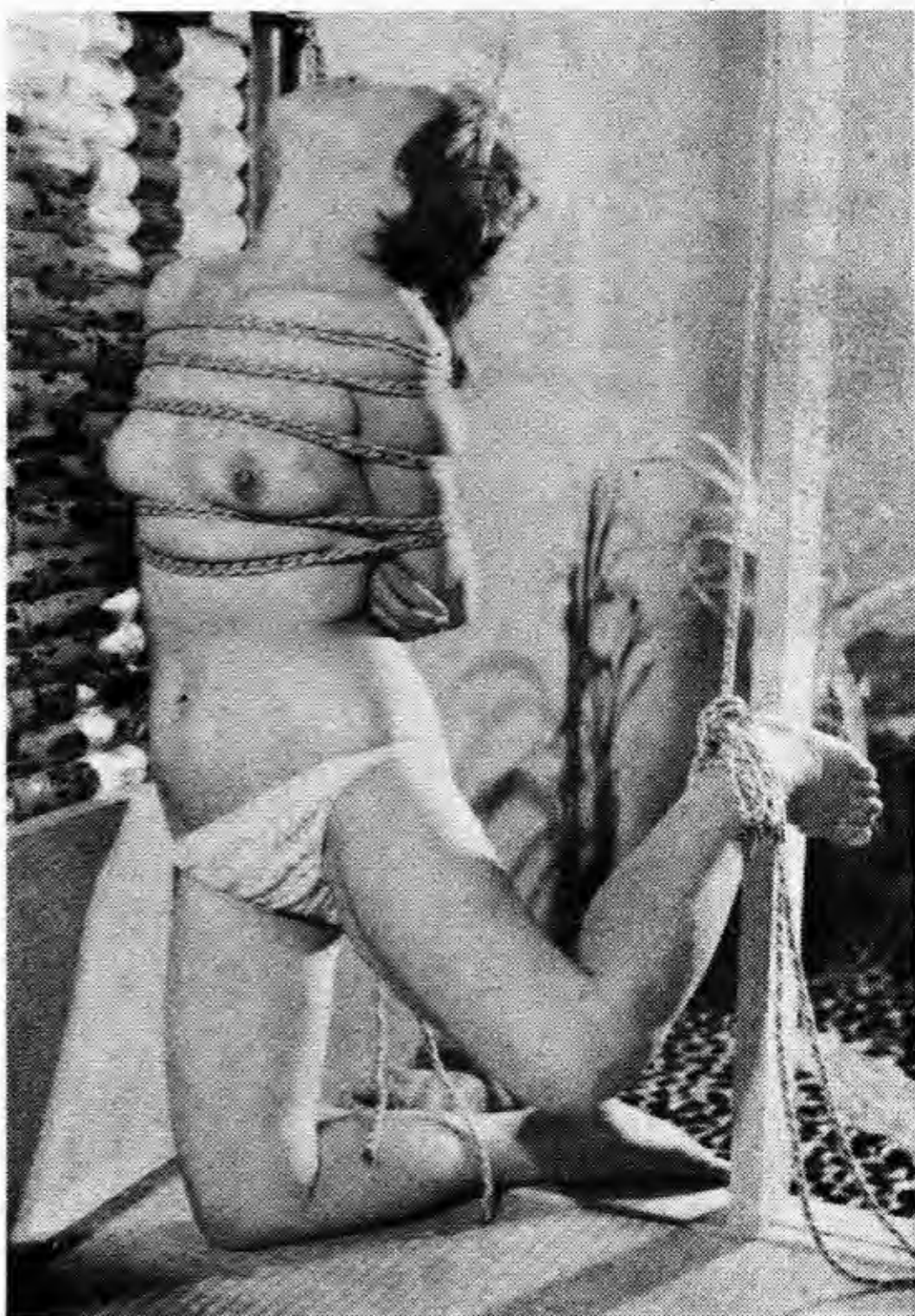
積極的に男性を責めるのもうまく、それは自分が責められたいという希望を、そのまま男性にぶつけている風であった。大塚啓子を妹分として、責めたり、時には連縛されたりしていたが、普通のノーマルなセックスでは飽き足りない彼女の性格が、S Mの面でもこのように多様性を発揮しているのだと私は思っている。

東京の踊子——鈴木千鶴子もまたショーダンサーで、自己顕示欲の強い女性だが、S Mに対する理解度は、絹川文代に対して、勝るとも劣らぬものを持っていると思う。その点では私も大いに期待しているのだが、男性をいじめたいというような多面性は持っていないように思う。

## 万年処女の大塚啓子

今回のネガの整理で、私は印画紙に焼付けることを忘れていた大塚啓子のフォトを数十枚、見つけた。

テレビでS Mに関する番組があるときは、



忘れずに電話してきて呉れる大塚啓子は、未だに往年の若さを失わぬ新鮮さで、S Mについて意欲を燃やし続けているようである。

彼女が、始めて私のカメラの前に立ったときは、たしか芳紀まさに十七才であったが、あれから、もう何年経ったであろうか。私は事情さえ許せば、再び大塚啓子の肢体を誌上

に紹介したいという気持ちにかられる。

奇譚クラブをはじめS M雑誌には広く目を通していたので、その方の知識や理解は相当なものがあった。撮影回数や枚数にしても、相当な数になっていながら、私は大塚啓子の詳細なルポを書く機会を持たなかった。

今度、現像しっぱなしのネガが出てきたの





を、約七十枚ばかり引き伸ばしてみると、いじめていじめて、子猫をいたぶるように可愛がった頃の啓子の肢体が、いきいきとして、印画紙の上に再現された。

大塚啓子というのは不思議な女性で、一時バーのホステスをしていたことがあって、私も二、三度、飲みに行ったことがあったが、

そうした水商売に入っている、決して精神的にも肉体的にも水商売の垢に染まってしまうのではないのである。相変わらず、どこから見ても、OLか花嫁修業の娘さんか、わからない初々しさを保っていた。これは彼女の大きな長所ではないかと、私は思っている。

責めにしても、相当激しい縛り方や責め方

を連続的に行ない、それを継続して日を重ねていっても、決してそれに溺れきってしまったわけではないのである。だから私は、そんなポーカーフェイスの大塚啓子を、責めて責めて、責め抜き、自分の思う通りの型に嵌め込んでやろうと思った。

房々とした丈なす黒髪は、よく手入れされていて、白い肌に対して美しいコントラストを見せていた。シミ一つない綺麗な肌は、適度の皮下脂肪によって、しっとりとした湿りを帯び、じかに眺めていると、思わず何か悪戯をしたくなるような魅力を持っていた。

夏を迎える頃、彼女は、暑いのと手入れをするのが大変なので、黒髪を切りたいと言いだした。髪を切る切る——と、以前から言っていたのを、私は写真を撮る際に必要だからといって、思い止まらせていたのだが、もう辛抱出来ないというのである。

私は、何年もかかって、それだけ立派に腰から下まで垂れるように伸ばした黒髪を、今切るのは勿体ないから——と止めたのだが、次は大塚啓子に逢ったときは、おかつぱに断髪してしまっ、見事に変身していた。

私は、あっと驚くと共に、何かしら、今までの大塚啓子とは違う、別人を縛っているよ



うな気がした。もともと、年齢よりは、うんと若く見える彼女であったが、髪を短く切ってしまうと、また一段と若く見えた。

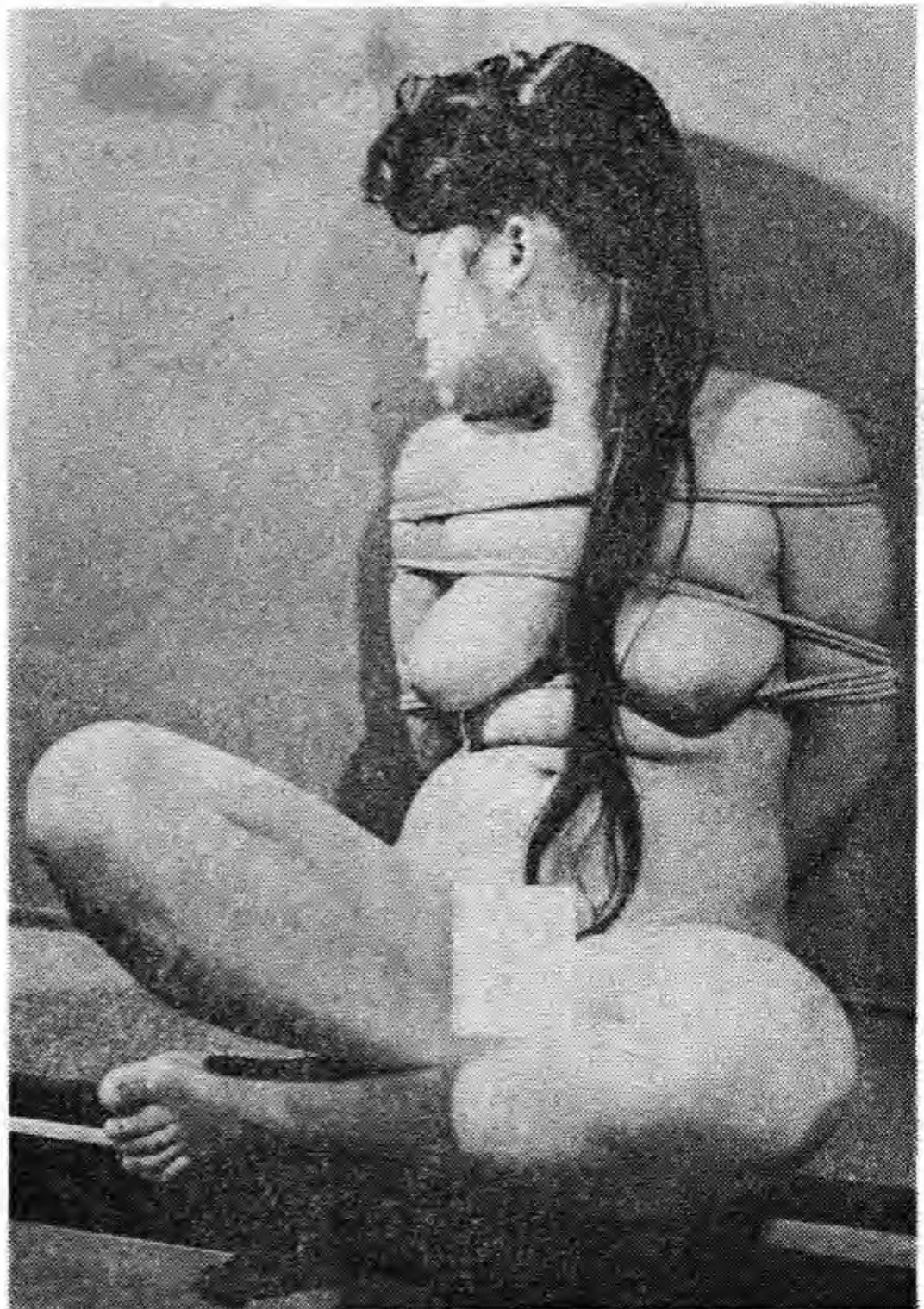
私は新しい彼女を発見したように、新鮮な意欲を燃やして、責めたてた。読者からの要望によって、あらゆる趣向やアイデアを駆使して、相当極端なことまでやったが、彼女は無表情のように、これに耐え、こんなことをしたら、もう二度と来ようと言わないかも知れないと思ったりしたが、別れぎわには、「次は、いつ来たら、いいんですの？」

と、真顔で尋ねるのであった。

いくら責めても、身体の線がくずれるどころか、ますます肌の艶を増し、プロポーションも良くなってゆく感じである。

他の女性の縛りフォトを見たり、或は責められている女性の泣き声をテープにとったのを聞いたりするのが好きで、そういう材料を持ってきてくれと、よくせがんだ。

大塚啓子に責める前に、テープを聞かせ、写真を見せてから責めに入ると、非常にスムーズにゆくことに私は気がついた。それで、私はつとめて、そうした材料を準備していったのだが、そのうち、彼女は、他の女性が責められているところを見たいと言いだした。



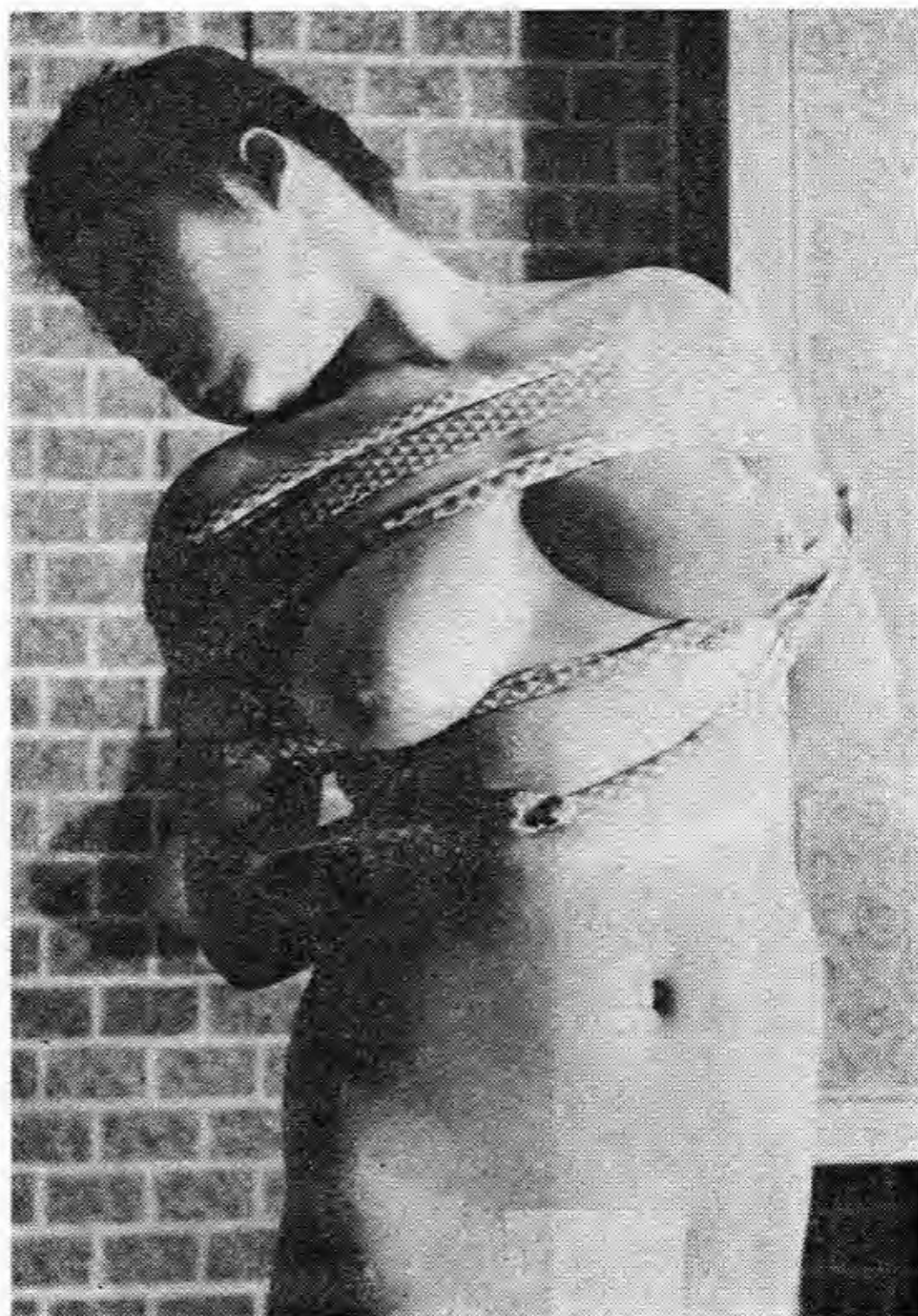
それは相手の女性が承知しないことには、出来ない相談だから——と、返事したのだが世の中はうまくしたもので、自分が責められているところを他人に見てほしいという女性がいるものである。東浦ひかる、木村洋子の二人がそうであった。

木村洋子は、自分の最も女性らしいところ

を、あからさまに責められている場面を見られたい——といていたし、東浦ひかるは、見物の女性に、擦り責めや抓り責めを加えてほしいと希望していた。

先ず、私が木村洋子を責めているところを大塚啓子に見させた。彼女が前もって、見たいと言っていた責め方をした。洋子が被虐に





悶えている様を眺めて<sup>さま</sup>いるだけで啓子は、明らかに興奮していた。洋子もまた、自分の責められている哀れな姿を同性に見られることに対して、普通より以上の激しい反応を示した。その双方を眺めながら、責める立場にある私も、常とは違った興味を感じた。

東浦ひかるを縛り上げたときは、大塚啓子

は、私と協力して、ひかるの脇腹や内股をくすぐり、全身を海老のように曲げて苦悶に耐えて、果ては感極まるところがり回ると、啓子は操っていた指先に力をこめて、肌の柔らかい個所を抓りまくった。

中河恵子と同じように、平常は至極、大人しい東浦ひかるだが、責められて感極まっ

くると、激しく泣き喚き、声を立てるのであった。私は、そんな声を刻明にテープに収めていった。啓子の責めは、そんなとき、執拗を、きわめた。ねばっこい尽きることを知らないしつこさは、女性特有のものに思えた。

東浦ひかると木村洋子の二人を揃えて責めたことがあったが、そのとき、私は大塚啓子の手助けを借りて、二人を徹底的に責めた。

責めの終局は、いずれの場合も凌辱というシーンで完結することを、東浦ひかるも木村洋子も望んでいたし、大塚啓子は、そうした場面に早く到達するように、せきたてた。そして、そんな場面になると、目をらんらんと輝かせて、最も見易い個所に乗り出して顔を近づけてきた。

山原清子が登場してくるに及んで、このSM乱交プレイは、更に一層華麗さを加えてきた。山原清子と大塚啓子を責める方の役に、東浦ひかると木村洋子を責められる側に立てて、私はこの四人を自由に操った。

山原清子は、SM両刀使いというのか、責められることも好きだったが、好めることもまた大好き、しかも、その相手としては、男性、女性を問わないようだった。能動的な彼女は、いつも四人の中の中心になって積極的

に行動した。

私は四人の若い女性を相手に爛れたようなSMプレイに耽り、この四人の一人一人を完全に性的に満足させることが出来たときは、男冥利に尽きると思った。普通だったら、とても太刀打ち出来ない筈だったが、私は別の秘法を用いて疲れを知らぬ飽くことのない満足感を味わったのである。何時間か経って、私はまだ勇気凛々としていたが、四人の女性は討死したように伸びてしまっていた。

山原清子が案外、早くダウンし、一番タフなのは東浦ひかるだった。

そのときのSMプレイが余程楽しかったと見えて、東浦ひかるは、それからも四人揃ってのプレイを望んでいたが、四人共、都合のよいという日がなくて二度と出来なかった。

その代り、大塚、東浦、木村のトリオ。山原、大塚、東浦のトリオ。その他、幾通りもの組合わせでSMプレイをやった。

登場する女性が、二人、三人、四人——と数が多くなると、ともすれば写真撮る立場から逸脱して私自身もプレイの渦中にはまり込み、果てはミイラ取りがミイラになってしまうのであった。



## 刺青の女王山原清子

四人プレイに山原清子が登場したので、彼女のことを少し述べてみよう。本誌に登場した女性には、各人の好みによって、それぞれのファンがあるものだが、山原清子に対しては刺青愛好のファンが彼女を讃美したのは当然

である。彼女の出席を求めて二回の奇ク主催の座談会を開いたことがあったが、その出席者の中には、多くの純然たる刺青ファンがあった。

山原清子がハ刺青に彩られて——Vと題して編集部に寄せられた告白文を見せて貰ったことがあるが、私はいたく興味を持って読ん





だったので、ここに引用させて頂く。

〔名古屋まで、わざわざ編集長と辻村さんが見えられて、初めて喫茶店で、お逢いしたとき、私は「もう奇譚クラブを十年余り、愛読していました」と言うと、とたんに箕田さんは、不思議そうな顔をされた。どう見ても、二十才を出るか出ないくらいの私が、十年余りも愛読しているといったので、それから逆

算すれば、十才ぐらいの時から愛読しているということになる。

辻村さんは、自分の書いた『奇譚三十九夜物語』のストーリーを旧号の中から、とり出しては訊問するような口調で言われる。

いくら私でも、そんな以前の小説の筋まですっかり覚えてはいない。それでも彼の話にアイツチを打つくらいには覚えていた。

グラビヤに掲載されていたモデルの名前を絹川文代さん、大塚啓子さん、愛川悦子さんの三人を挙げて、記憶に残っていたポーズを喋ると、はじめて、二人は、私のはったりでないことを信じたらしい。

とにかく、私も心臓では、人に負けない方だが、二人も静かな喫茶店の中で、コーヒ一杯を前にしながら、縛るとか、サドとかマゾとか、ハダカにするとかいった言葉を大声で話し合っているのには、ちょっと驚いた。

結局、私のモデル志望は合格したのだが、問われるままに、私は現在までの身の上話を聞き出し上手の誘いにかかって、いろいろと話してしまった。この人達にだったら、私の気持も、また話の内容も、きっと理解してもらえる……といった開放的な気分になられていたのも事実である。

背中一面に刺青を彫ってある自分としては街のお風呂へは決して行けないし、家族風呂でも、たった一人で入らなければならない肩身の狭さ。そんな自分の気持をあからさまに喋れるのは、この人達ではないかという気持が一層、私を饒舌にしていた。

でも、二人とも表面は、興味深そうに聞いていたが、早く撮影しようという気持が、或

は、この私が雑誌として利用価値があるか、どうかを、早く知りたいと思っていたのか、そわそわとして落着かなかった。勿論、芸妓をしている私としては、夜のお座敷がはじまるまでしか、身体があいていないのだし、彼等にしても、大阪まで帰らなければならないので、気もせいしているのだろう。

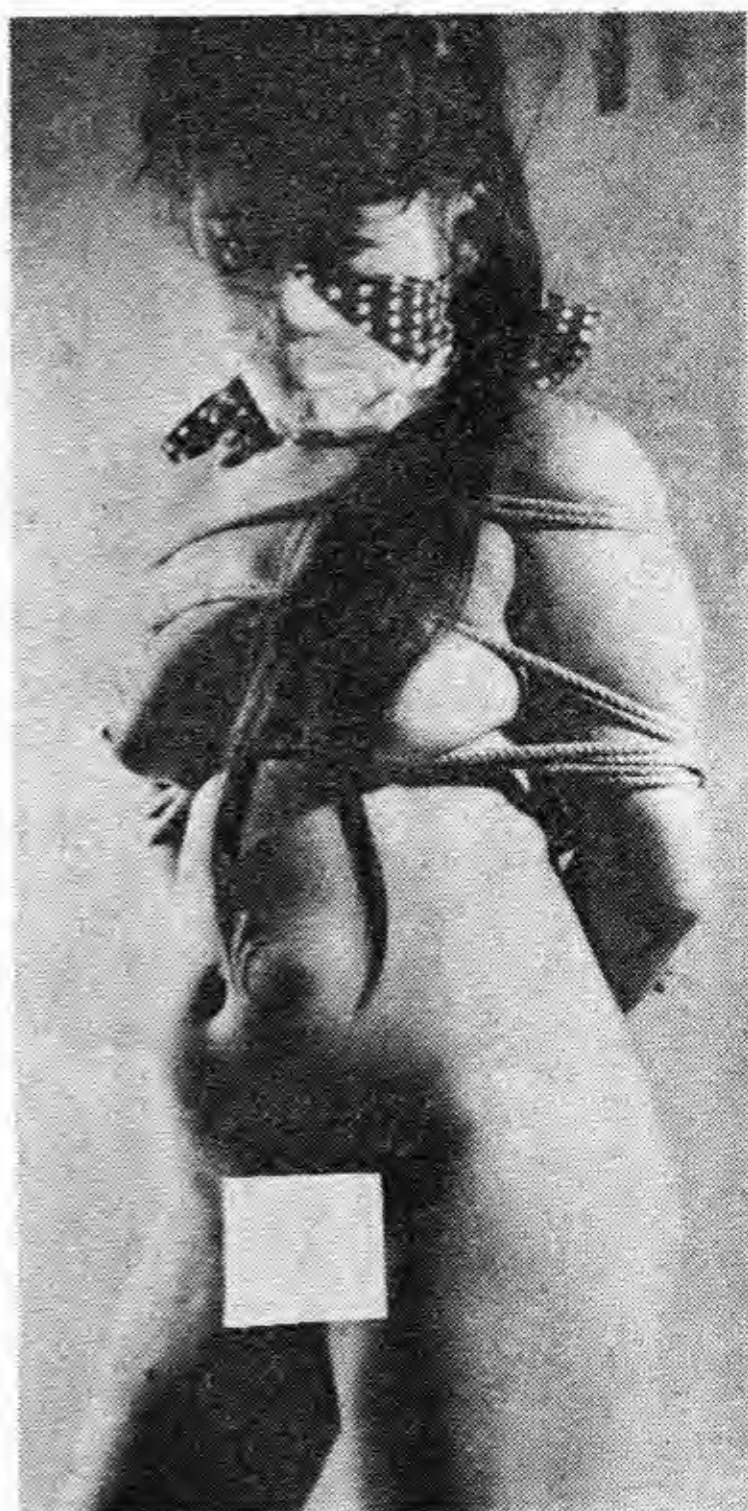
しかし、そのときの私は、なんだか自分でもわからない位に、むしろように身の上話がしたくて仕方がなかった。時間をかせぐために、お腹がすいているといって食事をするように誘った。

とめてあった車で、近くのすし屋へ行ってにぎりを食べた。余り食欲はなかったのに、ここの、にぎりは美味しかった」

私の手元にある彼女の原稿は、すっかり赤茶けた色に変色してしまっていて、これから以下は、ちぎれてしまっている。

読んで見てくれと預ったまま、誌上に発表されることもなく、徒らに、物の間に挟まって埃にまみれていたのだが、山原清子という一女性の偽りのない気持がよく表われていると思ったので引用させて貰った。

山原清子の刺青に対する評価や刺青に対する狂崇、或は讃美については、彼女が登場し



た当時、刺青マニアの方々から誌上で大いに論議されたものである。私はそれに対しての知識もまた関心も持ち合わせていないので、省かせて頂くが、それを抜きにしても彼女のSMについての造詣や態度だけで、高く評価してよいと思う。

責められることが大好きで、責めて責めて責め抜かれても、決して音をあげない女。そして、一旦、男性でも女性でも、相手を責めはじめたら、徹底的に責めて容赦しない女。山原清子というのは、こんな素晴らしい、SMを生まれつき兼ね備えた女性であった。

しかも、女性としての感度が、すこぶる鋭敏であって、殊の外、ドライブが好きで、車に乗って走っているだけで、エンジンが始動し、遂に発電してしまうという始末であるから、男性にとっては、まさに垂涎万丈といった女体の持主であった。

責めてよし、責められてよし、そして、また女性としての機能も抜群だというのだから、奇クが山原清子を開発したことによって、雑誌としての重量感を格段に増したのは、事実である。日本髪のヌード緊縛という変わったフォトを撮影したのも彼女であった。





私は山原清子の撮影行を書きたいと何度も思いながら、その都度いろんな事情で果たさなかったが、今になって、その思い出を追体験してみると、いろいろな事が頭の中に浮かんてくる。普通、M女性というのは、こちらの要求に対しては素直に応ずるけれども、積極さという点では欠けている者が多い。その

点、山原清子は積極さという点では、誰よりも、ずば抜けて、すぐれていた。

山原清子が身の廻り品を提げて名古屋から大阪へ出てきたとき、電話を貰った私は天王寺駅へ迎えに行った。駅頭で逢って、一緒に食事を済ませたら、あとは何も言わなくてもSMプレイを演ずるべく、二人で小橋のホテ

ルへ向かった。市内でありながら閑静な屋敷街にあるこのホテルは、石を敷いた植込みのなかを歩いて入口まで行く、奥まったところに玄関があった。

その日は泊まる場所がないので山原清子は、当然、このホテルに宿泊することになるのであるから、徹夜で責めてもよいという落着いた気持でプレイに入った。

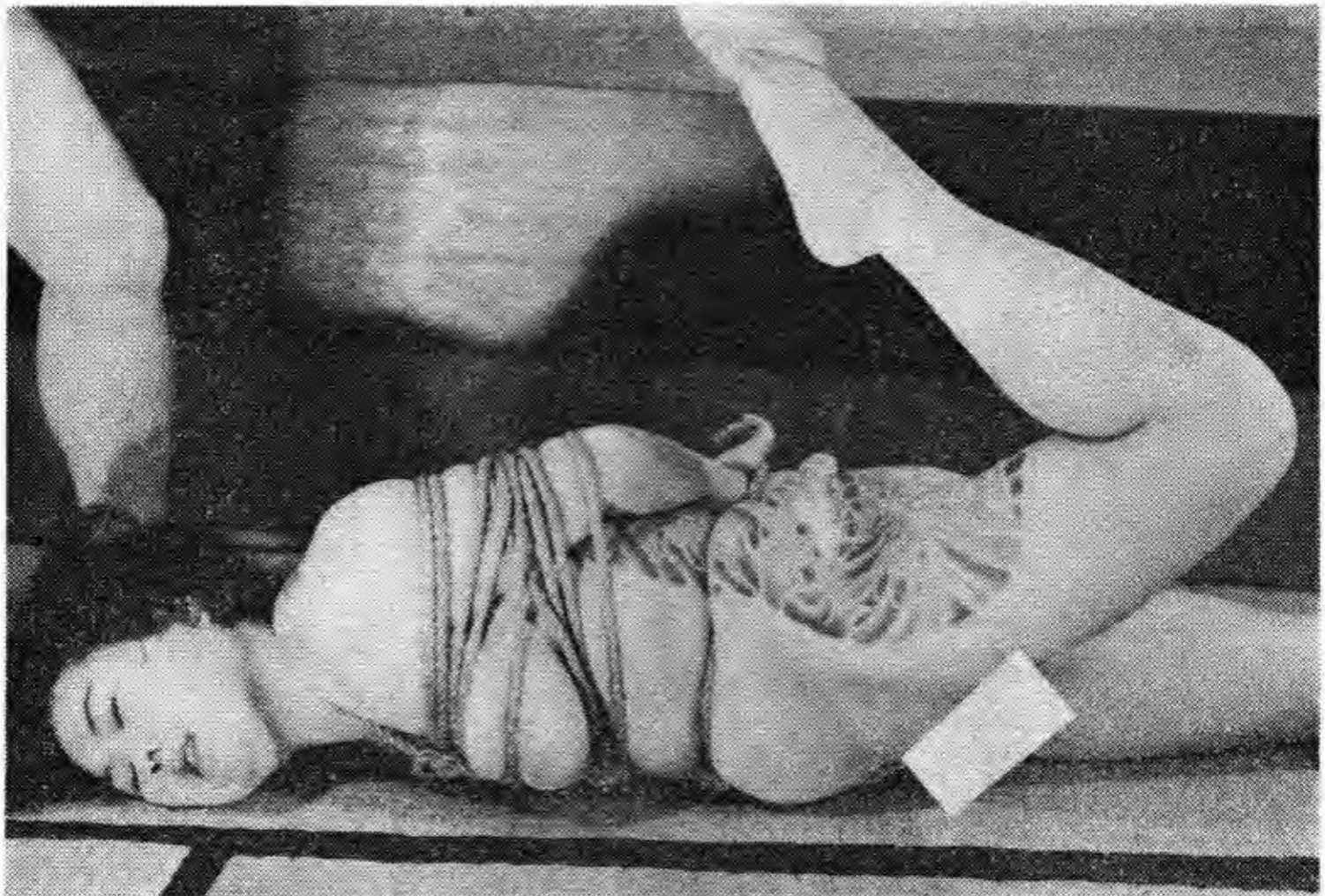
全裸に剥いた彼女を敲しい高手小手に縛って足下に転がした時、私は何か、人間ではない、動物的なもの——ある種の生き物を縛ったという感じがした。真白い背中の肌一面に彫った刺青が、一般の女とは違った特異な感情を抱かせたのだらう。

当然、私は凄惨な責めを山原清子の女体の上に加えていった。

細い麻縄が柔肌をくびって、血がにじんできて、彼女は弱音を吐かなかった。これでもか、これでもかと、私は容赦のない、いたぶりを執拗に続けていた。すでに日は暮れて薄暗くなった部屋の電灯もつけずに、私は写真を撮ることも忘れて、縄尻を持ったまま、山原清子を追い廻した。

両膝で部屋の中を、いざって這いまわっていた清子の尻を爪先で蹴りまくっていた私は





八帖ほどの部屋を一周させたところで背中に馬乗りになった。まるで動物を犯しているような奇妙な感じであった。

縛ったままで浴室へ引っぱってゆき、浴槽の中へ浸けておいて、ライトを全部パウンスさせて、カメラを持って私も入って行った。

今までカメラを使っておらなかったから、浴室の中ではローアングルからハイアングルまで、フィルム三本分を費消した。湯気に当てられて顔を真赤にほてらしながらも、山原清子はカメラの前で必死になって、いろいろのポーズをとった。

茹で章魚のようになった山原清子の身体を縛っていた縄は湯に濡れて固く締まり、解こうとしても結び目はなかなか解けない。私はナイフで縄をバラバラに切り放って、びしょ濡れのままの裸身を蒲団

の上へ誘った。

縄を解かれた猛獣のように、俄然、山原清子は私に襲いかかってきた。ぬめぬめと濡れて光る裸身を妖蛇のように私にからませてきたばかりか、彼女は自分のS性を私に対して発揮しだしてきた。

言いなりに責められているばかりでなく、ひとたび、S性に目覚めると、噛み、抓る、引っ搔く——と、ところ構わず猛然と狂い出して来るのだから、私も驚いた。噛むといっても軽く歯を当てるといったものではない。

がぶっと、大口を開いて力いっぱい噛みついてくるのだから、私は太股の肉を噛み切られたのではないかと思ったほどの疼痛を感じた。それから、組んずほぐれつの乱戦状態となったが、私が近くに放ってあった縄の束を手元に引き寄せて、縄を掛けようとする彼女が巧みに、私の腋の下を抓って、虎口を脱してしまう。

内股の柔らかいところを、ひねるように抓られると、飛び上がるほど痛い。私は彼女の口を警戒しつつ、背後へ回って両腕をうしろへ捻じあげて、やっと手首に縄を掛けた。

両手首を揃えて縛り、腕の自由を奪ってしまおうと、途端に山原清子は大人しくなった。



飽くなき深い責めを求めるM性に立ち返った彼女は、神妙なくらい素直に、厳しく肌を締めつけ、そして、区切り区切りで固い結び目を作る縛り方に身をまかせていた。

私は、少し行き過ぎではないかと思うくらい、きつく縛ったが、痛さに対しては我慢強い清子のことであるから、一向に気にしている風もなく、逆に、私が真剣に責めだしたところによって、一層、Mの昂進度を増してきたようであった。

彼女に噛まれたあとの膚が、動くたびに、ひりひりと痛みだすと、私は更に力をこめて清子をいたぶり、いじめた。息をするのも苦しいくらい全身が二つ折りになるよう海老縛りにしておいて、露出した肌という肌を手先で擦った。

顎の近くまで引き寄せられて、揃えて縛った両足首には、縄が恐ろしいほど喰い込み、二つの拇指が、ピンと、そり返っている。

全身が緊張しているので、擦っている私の指先に感ずる彼女の肌は、ナメシ皮のように強靱に思えた。私

は擦っているだけでは、飽き足りなくなってしまうが、力いっぱい抓っていた。

「う、う、う、ううう」

呻きながら、身体をゆさぶって、痛さをこ

らえている風であったが、許して、とも、やめて——とも決して言わなかった。

私は指がだるくなるくらい、清子の肌の柔らかい個所を狙っては抓りまくった。

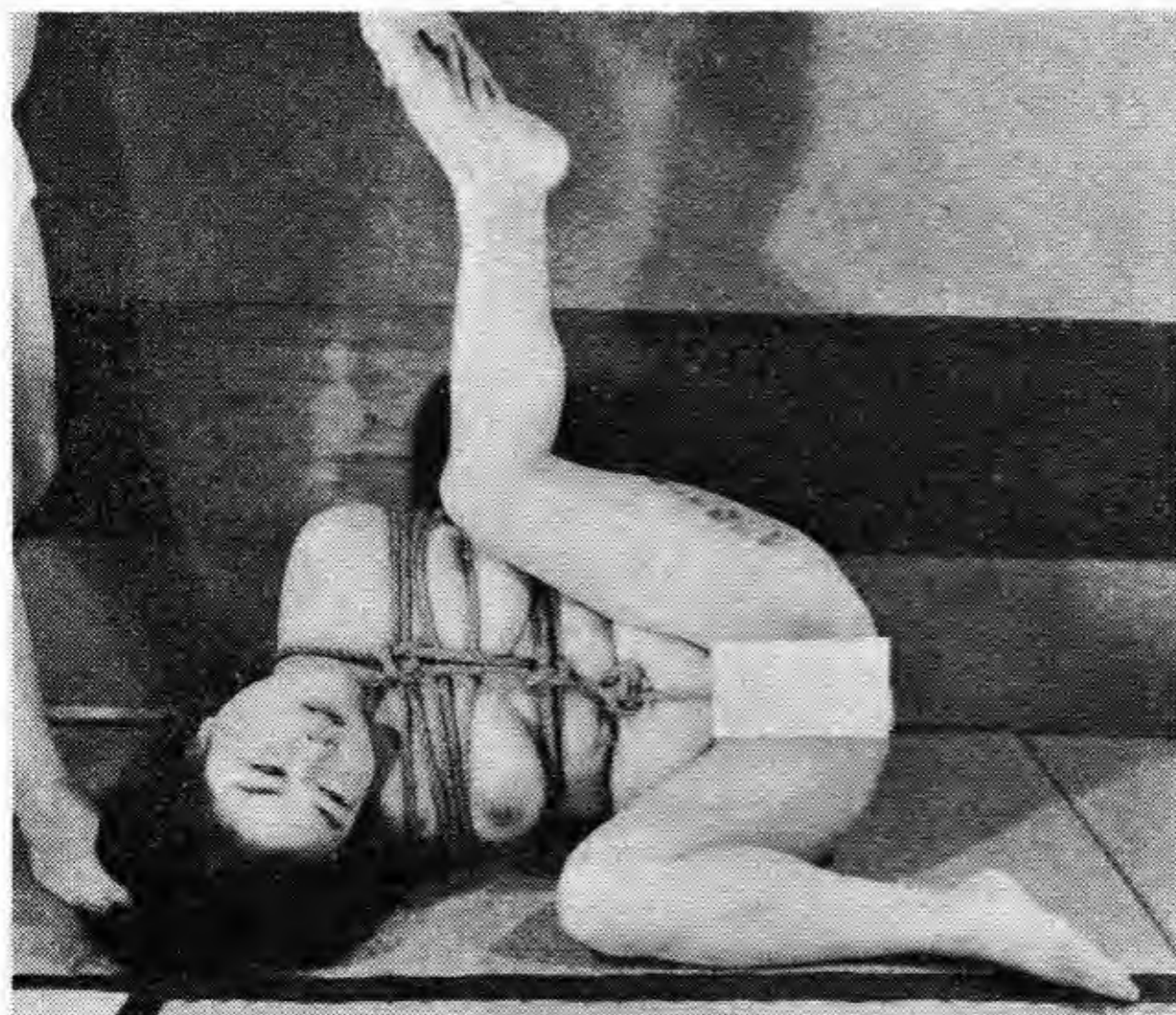
彼女が悶えれば悶えるほど、激しい嗜虐心にかられて抓りに抓った。余りに力を入れすぎて、噛み合わせた犬歯で唇の両端を噛み切ってしまった。血がたらたらと流れた。

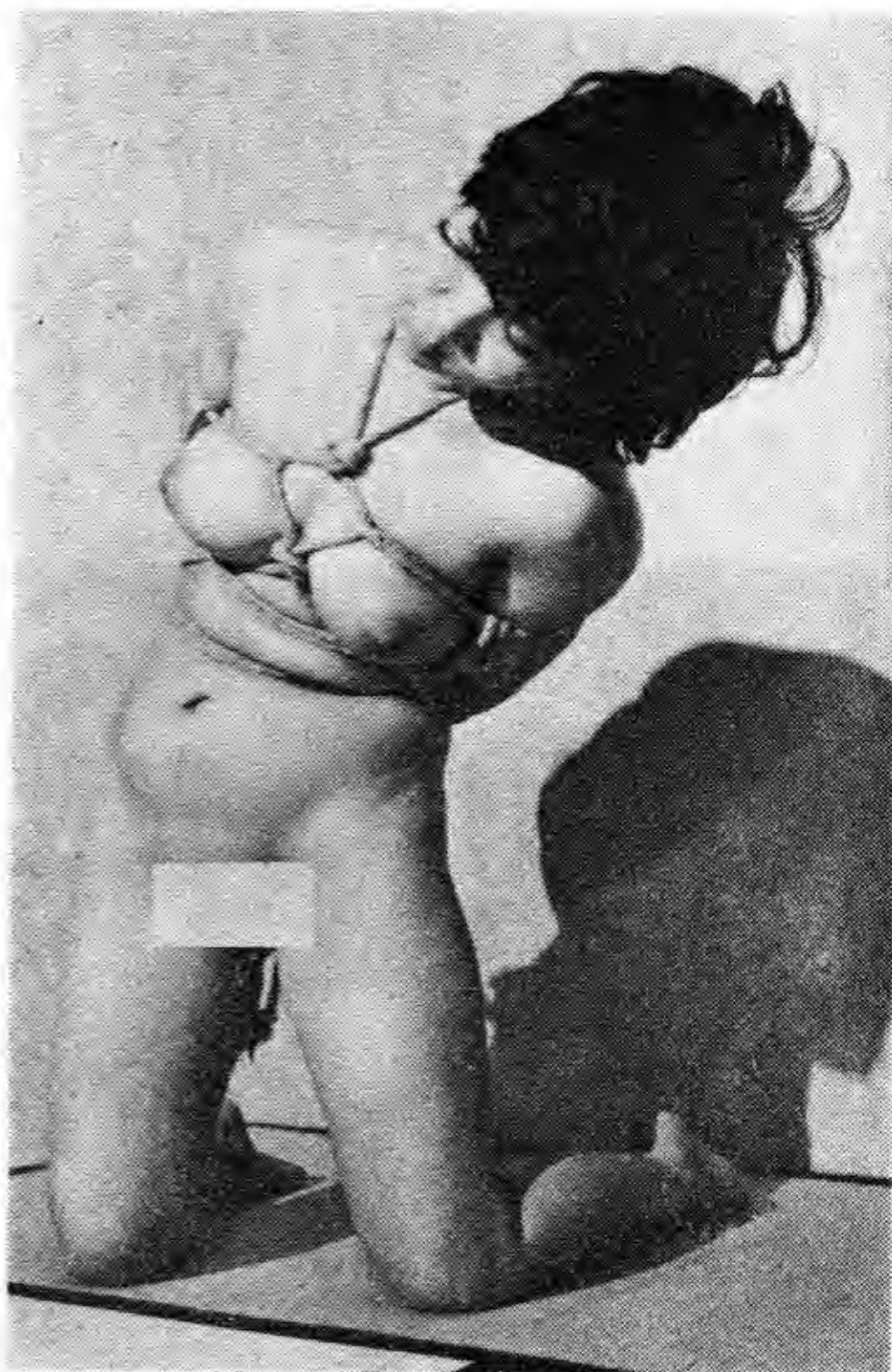
そこで私は、抓る手を止めて、目の前に突き出したような格好で開陳されている、彼女の最も女らしい部分に視線をやった。

——責められることが、これ程好きなのか。

ひよっとしたら、さき程のS性を発揮しての挑戦も、私が真剣になつて責めるための無言の誘導であったのかもしれないと思った。

私は、抓る手を止めて、次は、清子が狂いまわって、泣き喚く責めへと、移行していった。タフな彼女の肉体が、私の執拗きわまりない責めに対して、どこまで耐え得るであろうか。私は多大の興味を以て、大筆





を手にしたのであった。

最近の山原清子からの電話によれば、もう一度、縛られてみたいというような意向を洩らしていた。その後の変貌し、爛熟した女体を再び縄の祭壇に捧げることが出来たら——どのように楽しいだろうと考えると、知らず知らず、胸がわくわくしてくるのだった。

## 麗人、荒尾慶子

筐底から出てきたネガによって、私は思わず過去の思い出に耽りすぎたようだ。

極く最近、いや、この八月に入ってからでも、東京からは鈴木千鶴子、前田真知子の二嬢が来訪を約束して呉れているし、笠井奈保子、深田菊子、高村浩子なんかは、地元なの

で、いつでもOKしてくれることになっている。松山の松本たえからは、休みがとれたら直ぐ電話するから——と七月の末に連絡があったが、この方はその後、便りはない。

沖縄の女性からは、私がなかなか行かないため、九月には本土へ行きたいので、一度、逢ってほしいと言ってきた。来島されたら、野外で撮影するよい場所が沢山あるのだが、と、非常に残念そうであった。

二十一才という、この沖縄女性は、どのような人であるのか。逢う事が出来たら、一も二もなく、ルポ記事を書きたい、と思っている。あてにせず待っていてほしいものだ。

ここまで書いて、私が最も心をひかれた女性からの暑中見舞を貰ったので、急に、その方のことを書きたくなってきた。

それは奇巧の昨年十一月号に「行く川の流れ」という流暢な告白文を書かれて以来、筆を断わっておられる荒尾慶子である。

昨年の奇巧は、結婚後間もなく最愛の主人を交通事故で亡くされた彼女の悲しくも美しい告白文と、初々しい二十三才の女体を縄の暴虐のもとに晒した麗わしい緊縛肢体によって、支えられたといってもよいだろう。

私は荒尾慶子の緊縛と撮影を担当した者と

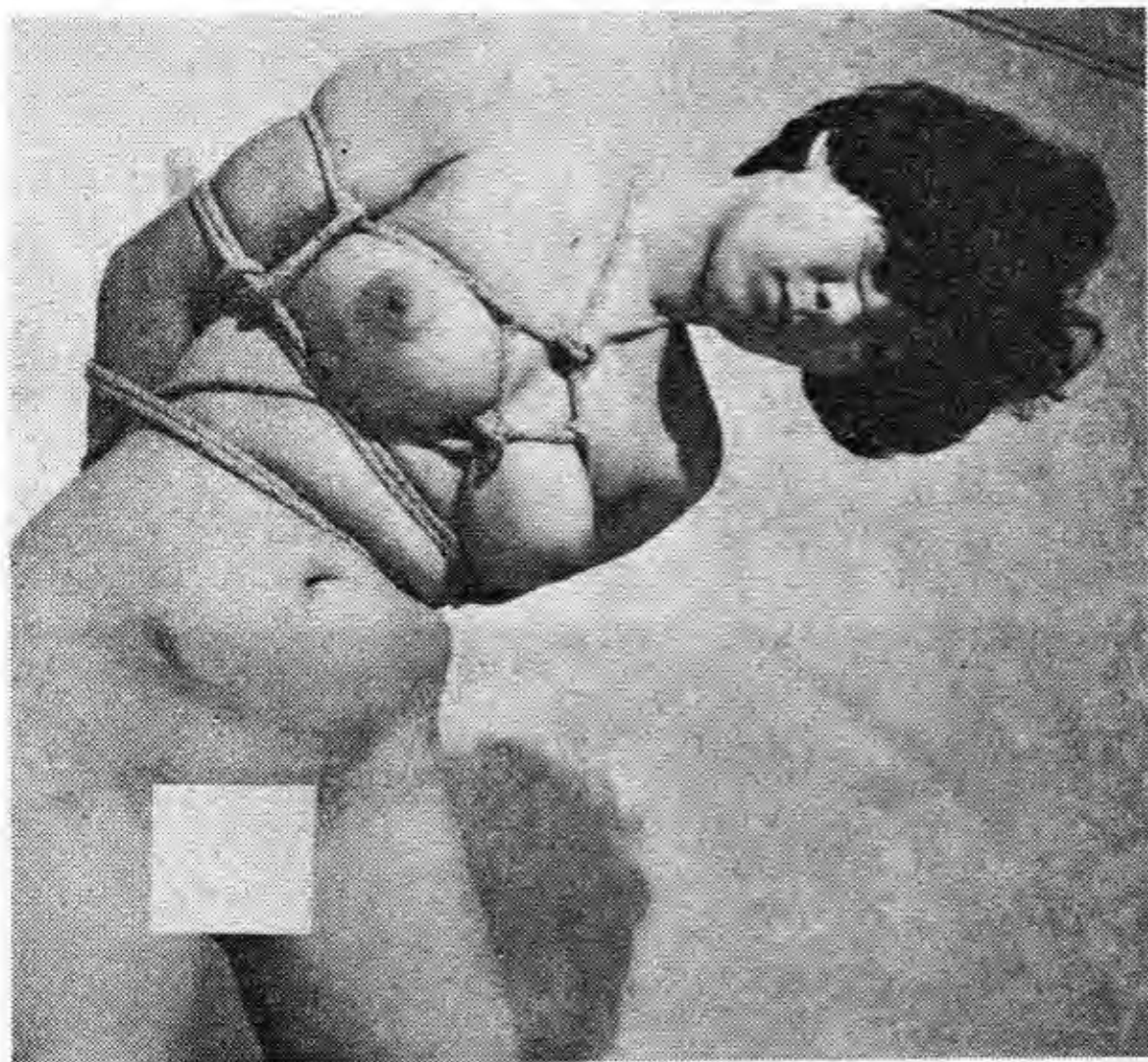


して、彼女のルポ記事を書きたい気持が、しきりに起こったのであるが、彼女がまことに詩情あふれる文章で、身に迫る告白を書いておられたので、私の出る幕はなかった。

荒尾慶子の告白文の載った奇クを、ちよ

と挙げてみると、先ず彼女の文章が始めて誌上に出たのは、昨年七月号の告白『流れる雲に身を托して』という一文であった。その次は一月おいて、九月号には、七月号の続篇ともいふべき『地平線の彼方に』という文章が載った。そして、最後にはやはり一月おいて、十一月号に『行く川の流れ』という抒情的な告白文が載ったのである。

その記事の中に掲載した彼女の緊縛写真は、すべて、私が撮影したものであるが、未発表の写真としては雑踏の中で人にもまれて歩いている彼女をスナップしたポートレートがあるが、これは彼女の美しい姿を偲ぶよすがとして、私は大切に保存している。フラッシュに映えた端麗な荒尾慶子の真白い横顔は、いついまでも印象に強く残っている。



若し、妻に娶<sup>めと</sup>るならば、なんとしても、このような女性を——と、誰でもきつと思うだろうという、よさを持っているのが荒尾慶子である。しかし、今度の彼女からの便りによれば、一身上の都合によって当分、SMプレ

イは出来ないとのことであった。

それで私は、ここに彼女のことを書きたいと思った。もし、一身上の都合というのが、

再婚というのでなかったら、或は、近き将来荒尾慶子は、私のカメラの前に再び立って呉れることがあるかもしれない。その機会のあることを願いつつ、私はペンを走らせる。

荒尾慶子のこと、私が一番感激したのは彼女の望みによって、自分の手で剃毛を施すことが出来たことである。

勿論、最初のうちのフィルム数本は、ありのままの全裸緊縛で撮影したのであったが、途中で、彼女の望む、剃毛の儀式をとり行なったのである。

純白のシートを敷いたシングルベッドの上に荒尾慶子を仰向けに寝かせておいて私は、やおら剃毛の道具を取り上げた。

可愛い乙女のように、ぽってりとふくらんだ双球。程よく皮下脂肪のついた腹部の中心に微笑むお臍。それらが斜光線に照らしだされて浮

かび上るような陰翳を見せているのである。初対面だというのに、荒尾慶子は、全身を私にゆだねて、ゆったりと目を閉じている。

そのすべてを任せきった態度は、私には、なにかしら神々しいようなものを感じた。息をするたびに、胸から腹にかけて微かに起伏するだけであって、手も足も、すらりと伸ばしきって、力を抜いたままで仰臥している。

私は充電式の電気カミソリを手にして、観念したように仰向けになっっている荒尾慶子の下半身へ近づいていった。

ブーン——という軽い振動音がしたかと思うと、柔らかな繊毛が忽ち、白い敷布の上に飛散していった。

僅か数分の、そのひとときが、私に対してえも言われぬ感激と衝動とを与えた。

美しく仕上ってゆく肌を眺めながら、私は口のなかで唾液でいっぱいになっていった。

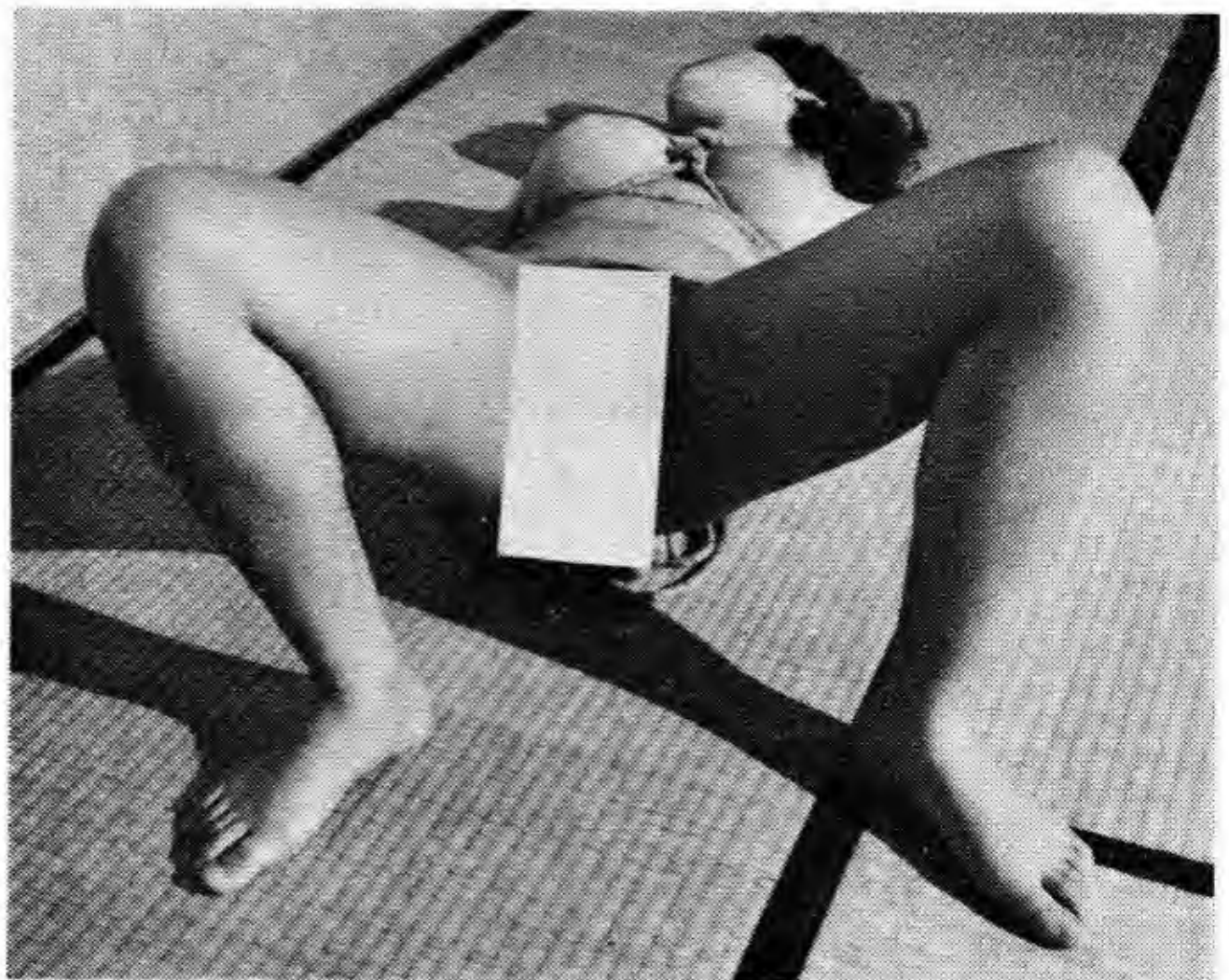
それからの責めは、私も彼女も、全く息が合ってしまったって、これが始めて逢った二人なのかと驚くほど親し味のあるプレイを展開することが出来たが、これは一にかかって、荒尾慶子の円満な性格のしからしむところだと、私は思っている。彼女は謙遜して、いつも自分は、そんな人間ではない——と言って

いるが、直接彼女に接してSMプレイをやった私としては、彼女の素晴らしく良い面が、時が経つにつれて、ひしひしと身に伝ってくるように思えて仕方がない。

あっという間に、丸坊主にしてしまった私の剃毛の手際に対して、荒尾慶子は驚きの目を輝かせながらも希望通りになったことに満足した表情であった。

それからは、もう、彼女の剃毛した部分を中心にして、そこを強調したようなポーズを殊更選んで写真撮影を続行していった。淑やかで上品な女性に対して、そんな、あからさまなポーズを強要することに、私はしびれるような快さを覚えた。

ツインベッドの上を利用したり、日本間を活用したり、或はカーペット敷きの廊下に誘ったりして、さまざまに縛っては写真撮影し



た、そのときのネガが、DK20現像によって微粒子処理され、ぼうと霞がかかったような軟調な仕上がりを見せている。これだったら





四つ切りや全紙に引き伸ばしたって、鋭いピントには、いささかの狂いもないだろう。

私は、それら未焼き付けのネガを選びだし、引き伸ばした上で、読者ファンの方々の

お目にかけたいと思う。徒らに机の抽出しの奥で埃をかぶらせておいても仕方がないのだ。

私は荒尾慶子という、全く縛りのモデルとしては最高の被写体を前にして、その美しさ良さを、縄を用いることによって最大限に発揮したいと思った。そして更に、その美しさを写真的にも一番良い条件で、仕上げたいと努力した。その成果が今、私の手元にネガとして残っている。それらの写真を見るにつけ、私はもう一度、このような素晴らしい被写体によって、緊縛写真を作成したいものだと願わずにはおられなかった。

そして、荒尾慶子の詩

情あふれる文章の記事中に挿入される写真として、それが利用されたら、これに過ぐる幸せはないと思う。その後の彼女の境遇の変化については、私は何も知らされてはいないが如何なる変化があったとしても、誌上に告白文を発表してほしいものである。

今回、出てきたネガの中で、まだ書きたい人々は沢山あるが、そのなかでも、読者通信や告白を寄せられた長井葉津子は、食指の動く随一の女性である。

彼女もまた、私の前に普通の裸身を晒して縛られたばかりでなく、完全に剃毛された姿態を見せて、緊縛ポーズをカメラの前に悶えさせたのであったが、枚数が大分過ぎたようなので、また次の機会に譲りたいと考える。

それから、十月号の懸賞「告白、手記、体験」に入選の『ローソク責めの魅力と快味』を書かれた村田恭子さん取材出来るかもしれないという連絡を編集部から受けた。

彼女は自分の書いた原稿が誌上に載ったことで、大いに執筆意欲を燃やして、次の告白を書くと言っておられるそうなので、その記事に私の撮影した彼女の責写真が載るということになれば、これはまた、大変楽しいことだと思っている。